福島県文化財調査報告書第480集

常磐自動車道遺跡調査報告67

南萱倉遺跡
払 川 遺 跡
赤柴前遺跡　（２次調査）
大 槻 遺 跡

２０１１年

福 島 県 教 育 委 員 会
財団法人 福島県文化振興事業団
東日本高速道路株式会社

常磐自動車道遺跡調査報告67

南萱倉遺跡（みなみかやくら）
払川遺跡（はらいがわ）
赤柴前遺跡（２次調査）（あかしばまえ）
大槻遺跡（おおつき）

口絵１　南萱倉遺跡１号建物跡貼床面全景（南から）

口絵２　南萱倉遺跡１号建物跡全景（南から）

口絵３　大槻遺跡２号住居跡複式炉（東から）

口絵４　大槻遺跡５号土坑断面（東から）

序　　文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は，昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間，平成11年にいわき中央～いわき四倉間，平成14年にはいわき四倉～広野間，平成16年には広野～常磐富岡間が開通しました。残念なことに本年３月11日に起きました東日本大震災とそれに伴う原子力災害により現在は一部が不通になっておりますが，南相馬～宮城県山元間で工事が再開され，急ピッチで建設が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には，先人が残した貴重な文化遺産が所在しており，周知の埋蔵文化財包蔵地を含め，数多くの遺跡等を確認しております。

埋蔵文化財は，それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に，我が国の歴史・文化等の正しい理解と，将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では，常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について，開発関係機関と協議を重ね，平成５年度以降，埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い，その結果をもとに，平成６年度から，現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし，発掘調査を実施してきました。

本報告書は，平成22年度に行った相馬市の南萱倉遺跡及び払川遺跡，新地町の赤柴前遺跡及び大槻遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。この報告書が，文化財に対する御理解を深め，地域の歴史を解明するための基礎資料となり，さらには生涯学習等の資料として広く県民の皆様に御活用していただければ幸いに存じます。

最後に，発掘調査から報告書の作成にあたり，御協力いただいた東日本高速道路株式会社，相馬市教育委員会，新地町教育委員会，財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し，感謝の意を表するものであります。

平成23年12月

福島県教育委員会
教育長　　遠　藤　俊　博

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託により，県内の大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査業務を行っております。

常磐自動車道建設にかかる埋蔵文化財の調査は，平成６年度にいわき市四倉町に所在する遺跡から開始し，平成23年度は新地町に所在する遺跡の調査を実施しております。

本報告書は，平成22年度に発掘調査を実施した相馬市の南萱倉遺跡と払川遺跡および新地町の赤柴前遺跡と大槻遺跡の４遺跡の成果をまとめたものです。

南萱倉遺跡は，平安時代の掘立柱建物跡と竪穴住居跡からなる集落跡であり，払川遺跡は平安時代から中世にかけての製炭跡であります。赤柴前遺跡からは，縄文時代の狩場跡と平安時代の製炭跡が発見され，大槻遺跡では，縄文時代と平安時代の集落跡，および近世の祭祀関連の遺構などが見つかりました。

今後，これらの調査成果を，歴史研究の基礎資料として，あるいは地域社会の歴史解明の一助として，生涯学習の場等で幅広く活用していただければ幸いです。

終わりに，この調査に御協力いただきました東日本高速道路株式会社，相馬市，新地町，ならびにそれぞれの地域住民の皆様に，深く感謝申し上げますとともに，当事業団の事業の推進につきまして，今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年12月

財団法人　福島県文化振興事業団
理事長　　富　田　孝　志

緒　　言

1　本書は，平成21・22年度に実施した常磐自動車道(相馬工区)遺跡調査の発掘調査報告書である。

2　本書には以下に記す遺跡調査成果を収録した。

南萱倉遺跡	福島県相馬市初野字南萱倉	埋蔵文化財番号　20900100
払 川 遺 跡	福島県相馬市初野字払川・羽黒	埋蔵文化財番号　20900155
赤柴前遺跡	福島県相馬郡新地町駒ヶ嶺字赤柴前	埋蔵文化財番号　20900096
大 槻 遺 跡	福島県相馬郡新地町杉野目字大槻	埋蔵文化財番号　20900118

3　本事業は，福島県教育委員会が東日本高速道路株式会社の委託を受けて実施し，調査に係る費用は東日本高速道路株式会社が負担した。

4　福島県教育委員会は，発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。

5　財団法人福島県文化振興事業団では，遺跡調査部遺跡調査課の下記の職員を配して調査および報告書作成にあたった。

平成21年度

副　主　幹　吉田秀享　　文化財副主査　笠井崇吉　　嘱　　託　水野一夫

嘱　　託　髙橋　岳

平成22年度

副　主　幹　吉田秀享　　文化財主査　大波紀子　　文化財副主査　門脇秀典

文化財副主査　笠井崇吉　　嘱　　託　西澤正和

このほか，以下の職員の協力を得た。

嘱　　託　本田拓基

6　本書の執筆にあたっては，調査を担当した調査員が分担して行った。執筆分担は章・節末または文末に示した。

7　本書に掲載した自然科学分析は，次の機関に委託し，各編にその結果と考察を掲載している。

出土炭化材の樹種同定・出土種子の同定：古代の森研究舎

放射性炭素年代測定：株式会社パレオ・ラボ　　株式会社加速器分析研究所

8　引用・参考文献は執筆者の敬称を略し，編・章ごとにまとめて掲載した。

9　本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

10　発掘調査および報告書作成にあたり，次の諸機関からご協力いただいた。

相馬市教育委員会　　新地町教育委員会　　東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所

用　　例

1　本書における遺構図版の用例は，以下のとおりである。

(1) 方　　位　遺構図・地形図の方位は世界測地系で設定した座標北を示す。表記がない遺構図はすべて図の真上を座標北とした。

(2) 標　　高　水準点を基にした海抜標高で示した。

(3) 縮　　尺　各挿図中に縮小率を示した。

(4) 土　　層　基本土層はアルファベット大文字Ｌとローマ数字を組み合わせ，遺構内の堆積土はアルファベット小文字 ℓ と算用数字を組み合わせて表記した。
（例）基本層位－ＬⅠ・ＬⅡ…，遺構内堆積土－ℓ１・ℓ２…
なお，挿図の土層注記で使用した土色名は，『新版標準土色帖22版』(小山正忠・竹原秀雄編著　1999　日本色研事業株式会社発行)に基づく。

(5) ケ　　バ　遺構内の傾斜面は「 ⅏ 」で表現したが，相対的に緩傾斜の部分には「 ⅏ 」で表している。また，「 ⅏ 」は後世の撹乱が明らかである場合に使用した。

(6) 網 か け　挿図中の網かけの用例は，同図中に表示した。

2　本書における遺物図版の用例は，以下のとおりである。

(1) 縮　　尺　各挿図中に縮小率を示した。

(2) 番　　号　遺物は挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は，例えば図１の１番の遺物を「図１－１」とし，写真図版中では「１－１」と示した。

(3) 注　　記　出土グリッド，出土層位などは遺物番号の右脇に示した。

(4) 土器断面　須恵器の断面は黒塗りとした。粘土積み上げ痕を一点鎖線で表記し，胎土中に繊維が混和されたものには▲を付した。

(5) 遺物計測値　(　) 内の数値は推定値，[　] 内の数値は遺存値を示す。

(6) 網　　点　挿図中の網点の用例は黒色処理を示し，それ以外は図中に示した。

3　本書で使用した略号は，次のとおりである。

相馬市：ＳＭ	新地町：ＳＴ	南萱倉遺跡：ＭＫＫ	払川遺跡：ＨＲＧ
赤柴前遺跡：ＡＳＭ	大槻遺跡：ＯＴＫ	竪穴住居跡：ＳＩ	掘立柱建物跡：ＳＢ
土　坑：ＳＫ	溝　跡：ＳＤ	特殊遺構・性格不明遺構：ＳＸ	
井戸跡：ＳＥ	柱列跡：ＳＡ	小穴・ピット：Ｐ	グリッド：Ｇ
遺物包含層：ＳＨ			

目　　次

序　章

第１節　調査に至る経緯……1
第２節　遺跡の位置と地理的環境……5
第３節　遺跡周辺の歴史的環境……8
第４節　調査方法……13

第１編　南萱倉遺跡

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形……17
第２節　調査経過……17

第２章　遺構と遺物

第１節　遺構の分布と基本土層……20
第２節　竪穴住居跡……24
１号住居跡(24)　２号住居跡(30)
第３節　掘立柱建物跡……33
１号建物跡(33)　２号建物跡(37)　３号建物跡(41)
第４節　土　　坑……43
１号土坑(44)　２号土坑(44)　３号土坑(44)　４号土坑(46)
第５節　溝　　跡……46
１号溝跡(48)　２号溝跡(49)　３号溝跡(50)　４号溝跡(50)　５号溝跡(52)
第６節　特殊遺構……52
１号特殊遺構(52)　２号特殊遺構(54)　３号特殊遺構(55)
第７節　その他の遺構……57
１号井戸跡(58)　１号柱列跡(60)　グリッドピット(63)
第８節　遺物包含層と遺構外出土遺物……63
１号遺物包含層(65)　遺構外出土遺物(66)

第３章　自然科学分析

第１節　出土炭化材の樹種同定……68
第２節　放射性炭素年代測定……70

第４章　ま　と　め……73

概要(73)　弥生時代以前の遺構と遺物(73)　平安時代の遺構と遺物(74)　近世の遺構と遺物(78)

第２編　払川遺跡

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形……81

第２節　調査経過……81

第２章　遺構と遺物

第１節　遺跡の分布と基本土層……84

第２節　土　　坑……86

１号土坑(86)　２号土坑(86)　３号土坑(87)　４号土坑(87)

第３節　遺　　物……90

第３章　自然科学分析

第１節　出土炭化材の樹種同定……91

第２節　放射性炭素年代測定……93

第４章　ま　と　め……96

第３編　赤柴前遺跡（２次調査）

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形……99

第２節　調査経過……99

第２章　遺構と遺物

第１節　遺構の分布と基本土層……102

第２節　土　　坑……105

６号土坑(105)　７号土坑(105)　８号土坑(106)　９号土坑(106)

10号土坑(108)　11号土坑(108)

第３節　遺構外出土遺物……110

羽　　口(110)

第３章　自然科学分析

第１節　出土炭化材の樹種同定……111

第２節　放射性炭素年代測定……113

第４章　ま　と　め……116

第４編　大槻遺跡

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形……119

第２節　調査経過……119

第２章　遺構と遺物
第１節　遺構の分布と基本土層……123
第２節　竪穴住居跡……124
１号住居跡(124)　２号住居跡(128)
第３節　土　　坑……134
１号土坑(134)　２号土坑(134)　３号土坑(136)　４号土坑(138)
５号土坑(139)
第４節　その他の遺構……139
１号性格不明遺構(139)　１号溝跡(143)　１号グリッドピット(144)
第５節　遺構外出土遺物……145
縄文土器(145)　土 師 器(150)　石　　器(150)　金属製品(150)
第３章　自然科学分析
第１節　出土種子同定……151
第２節　放射性炭素年代測定……152
第４章　ま　と　め……156
縄文時代(156)　平安時代(157)　近世以前(157)

挿図・表・写真目次

序　章

［挿図］

図１　常磐自動車道位置図……1
図２　表層地質図……6
図３　周辺の遺跡位置図……10

［ 表 ］

表１　四倉ＩＣ以北常磐自動車道関連市町村別発掘調査遺跡数……2
表２　平成22年度刊行の常磐道自動車道遺跡調査報告(浪江～相馬)……4
表３　南萱倉・払川・赤柴前・大槻遺跡の周辺遺跡……11

第１編　南萱倉遺跡

［挿図］

図１　調査区位置図……18
図２　グリッド配置図……20
図３　遺構配置図……22
図４　基本土層……23
図５　１号住居跡(１)……25
図６　１号住居跡(２)……26
図７　１号住居跡カマド・焼土化範囲……27
図８　１号住居跡出土遺物……29

図９　２号住居跡……31
図10　２号住居跡カマド，出土遺物……32
図11　１号建物跡（１）……34
図12　１号建物跡（２）……35
図13　１号建物跡炉，出土遺物……36
図14　２号建物跡（１）……38
図15　２号建物跡（２）……39
図16　２号建物跡炉，出土遺物……40
図17　３号建物跡……42
図18　３号建物跡Ｐ６遺物出土状況，出土遺物…43
図19　１～４号土坑……45
図20　１号溝跡……47
図21　１号溝跡出土遺物……48
図22　２号溝跡……49
図23　３～５号溝跡，５号溝跡出土遺物……51
図24　１号特殊遺構……53
図25　２号特殊遺構，出土遺物……55
図26　３号特殊遺構，出土遺物……56
図27　１号井戸跡，出土遺物（１）……59
図28　１号井戸跡出土遺物（２）……60
図29　１号柱列跡，出土遺物……61
図30　グリッドピット……62
図31　１号遺物包含層……64
図32　１号遺物包含層出土遺物……65
図33　遺構外出土遺物……67
図34　出土炭化材の樹種および顕微鏡写真……69

［ 表 ］

表１　測定試料および処理……71
表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果……71

［写真］

1　調査区全景……163
2　調査区遠景……164
3　調査区遠景……164
4　調査区遠景……165
5　基本土層……165
6　１号住居跡全景……166
7　１号住居跡炭化材出土状況……166
8　１号住居跡細部……167
9　２号住居跡全景……168
10　２号住居跡カマド全景……168
11　１号建物跡全景……169
12　１号建物跡全景……169
13　１号建物跡貼床面全景……170
14　１号建物跡細部……170
15　２・３号建物跡全景……171
16　２・３号建物跡全景……171
17　２号建物跡全景……172
18　２号建物跡細部……172
19　３号建物跡全景……173
20　３号建物跡細部……173
21　４号土坑全景……174
22　１～４号土坑……174
23　１号溝跡全景……175
24　２号溝跡全景……175
25　３・４号溝跡全景……176
26　５号溝跡全景……176
27　１・２号特殊遺構全景……177
28　１・２号特殊遺構細部……177
29　３号特殊遺構全景……178
30　３号特殊遺構細部……178
31　１号井戸跡全景……179
32　１号柱列跡……179
33　１号遺物包含層全景……180
34　グリッドピット……180
35　１号住居跡出土遺物……181
36　１～３号建物跡出土遺物……181
37　溝跡・特殊遺構・グリッドピット出土遺物……182
38　１号遺物包含層・遺構外出土遺物……182
39　１号井戸跡出土木製品……183
40　作業風景……184

第２編　払川遺跡

［挿図］

図１　調査区位置図……82
図２　遺構配置図，基本土層……85
図３　１・２・４号土坑……88
図４　３号土坑……89
図５　出土炭化材の樹種および顕微鏡写真……92

［ 表 ］

表１　測定試料および処理……94
表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果……94

［写真］

１　調査区全景……187
２　調査区遠景……187
３　調査区全景……188
４　基本土層，谷地堆積……188
５　３号土坑木炭層検出……189
６　３号土坑……189
７　１・２・４号土坑，作業風景……190

第３編　赤柴前遺跡（２次調査）

［挿図］

図１　調査区位置図……100
図２　グリッド配置図……103
図３　遺構配置図，基本土層……104
図４　６・７号土坑……106
図５　８・９号土坑……107
図６　10・11号土坑……109
図７　遺構外出土遺物……110
図８　出土炭化材の樹種および顕微鏡写真……112

［ 表 ］

表１　測定試料および処理……113
表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果……114

［写真］

１　調査区遠景……193
２　調査区遠景……193
３　調査区全景……194
４　ＡＦ６グリッド周辺基本土層……194
５　６・７号土坑……195
６　８・９号土坑……195
７　10・11号土坑……196
８　遺構外出土遺物……196
９　作業風景……196

第４編　大槻遺跡

［挿図］

図１　調査区位置図……120
図２　遺構配置図，基本土層（１）……122
図３　基本土層（２）……123
図４　１号住居跡，出土遺物（１）……125
図５　１号住居跡出土遺物（２）……127
図６　２号住居跡……129
図７　２号住居跡炉（１）……130
図８　２号住居跡炉（２），出土遺物（１）……131
図９　２号住居跡出土遺物（２）……133
図10　１～５号土坑……135
図11　１・２・４・５号土坑出土遺物……136
図12　３号土坑出土遺物……137

図13　１号性格不明遺構（１）……140
図14　１号性格不明遺構（２），出土遺物（１）…141
図15　１号性格不明遺構出土遺物（２）……142
図16　１号溝跡，１号グリッドピット……144
図17　遺構外出土遺物（１）……146
図18　遺構外出土遺物（２）……148
図19　遺構外出土遺物（３）……149
図20　出土エゴノキ内果皮の顕微鏡写真……151
図21　磐城国宇多郡杉目村地籍復元図……159
図22　磐城国宇多郡杉目村「大槻」地籍復元図…160

［ 表 ］

表１　放射性炭素年代測定結果……154
表２　暦年較正年代……154

［写真］

１　遺跡遠景……199
２　調査区遠景……200
３　遺跡遠景……200
４　遺跡周辺……201
５　丘陵北側基本土層……202
６　丘陵南側基本土層……202
７　１号住居跡全景……203
８　１号住居跡細部……203
９　２号住居跡全景……204
10　２号住居跡細部……204
11　２号住居跡複式炉……205
12　２号住居跡複式炉細部……205
13　１・２号土坑……206
14　３・４号土坑……206
15　５号土坑……207
16　１号溝跡，１号グリッドピット……207
17　１号性格不明遺構全景……208
18　１号性格不明遺構細部……208
19　１号住居跡出土遺物……209
20　２号住居跡出土遺物……210
21　土坑出土遺物……211
22　１号性格不明遺構出土遺物……211
23　遺構外出土土器……212
24　遺構外出土石器……212
25　遺構外出土近世遺物……212

序　　章

第１節　調査に至る経緯

１．事業概要と平成21年度までの事業経緯

常磐自動車道は，埼玉県三郷市の三郷インターチェンジ(以下ＩＣと略す)を起点とし，千葉県から茨城県，そして福島県の浜通り地方を通って，宮城県亘理郡亘理町の亘理ＩＣを終点とする高速自動車道である。このうち，三郷ＩＣ～いわき市のいわき中央ＩＣまでは昭和63年３月に供用が開始され，平成11年３月には，いわき中央ＩＣ～いわき四倉ＩＣまで，平成14年３月には，いわき四倉ＩＣ～広野ＩＣまで，平成16年４月には広野ＩＣ～富岡ＩＣまでの供用が開始されている。さらに，平成21年９月には，宮城県側の亘理ＩＣ～山元ＩＣまでの11.5㎞が開通し，残りは富岡ＩＣ～山元ＩＣまでの47㎞の区間となった。

これらの区間内に所在する埋蔵文化財については，茨城県境からいわき中央ＩＣまでの４遺跡を昭和59・60年度に，いわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して，発掘調査を実施した。また，いわき中央ＩＣ～いわき四倉ＩＣ間の埋蔵文化財に関しても，平成６年度から平成９年度にかけて好間～平赤井・平窪地区の10遺跡の発掘調査を，いわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して実施した。これ以外の四倉町大野地区10遺跡の発掘調査は，福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター(現，財団法人福島県文化振興事業団)に委託して実施した。

いわき四倉ＩＣ以北の路線内の埋蔵文化財については，平成９年度から福島県教育委員会が財団

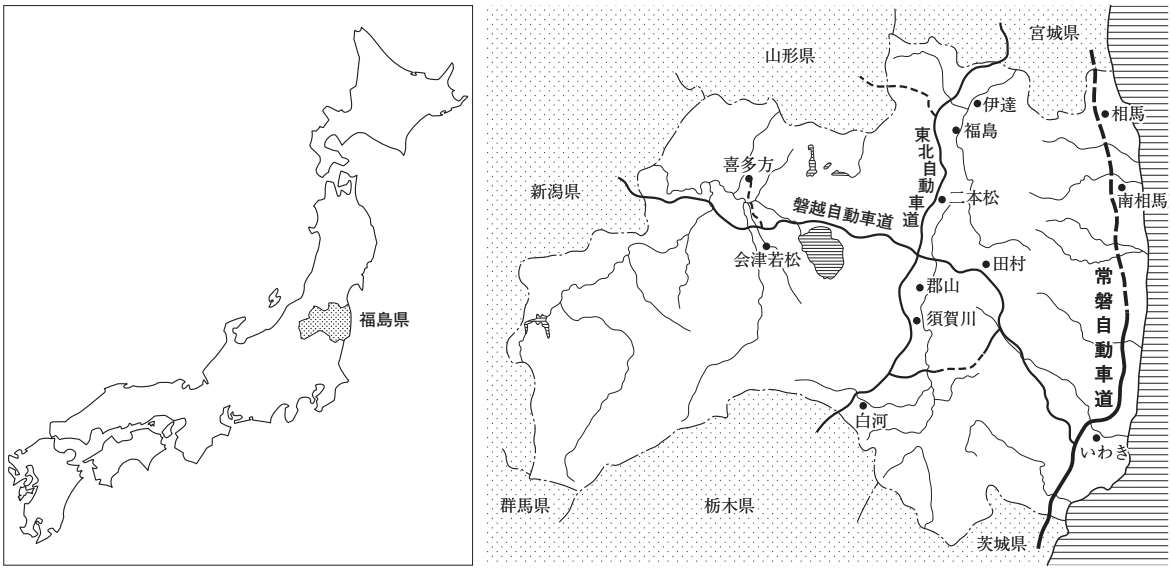


図１　常磐自動車道位置図

表１　四倉ＩＣ以北常磐自動車道関連市町村別発掘調査遺跡数

調査年度	市町村名											
	いわき市	広野町	楢葉町	富岡町	大熊町	双葉町	浪江町	南相馬市 小高区	南相馬市 原町区	南相馬市 鹿島区	相馬市	新地町
Ｈ９	5	1										
Ｈ10	4	3	3	2								
Ｈ11		4	5									
Ｈ12		1	7	5								
Ｈ13			1	5								
Ｈ14				1	2							
Ｈ15							2				2	
Ｈ16					3				2		1	
Ｈ17					3	2	2	3	1	1	1	
Ｈ18					1		6	4	4	1	2	
Ｈ19							4	6	7			
Ｈ20			1				7	5	3		1	
Ｈ21					1			1	3	1	1	3
Ｈ22			1								2	3

法人福島県文化センターに調査を委託して実施した。平成９年度以降の市町村別発掘調査数については，表１に示したとおりである。

なお富岡ＩＣまでは，当初，日本道路公団東北支社（現，東日本高速道路株式会社東北支社）いわき工事事務所，富岡ＩＣ以北については相馬工事事務所がそれぞれ管轄していたが，平成14年７月より富岡ＩＣ～浪江町までの区間についても，いわき工事事務所が管轄することとなり，相馬工事事務所は南相馬市～新地町までの区間となった。

２．平成22年度の調査経過

平成22年度の常磐自動車道（いわき～浪江・浪江～相馬）建設予定地に関わる遺跡発掘調査は，福島県教育委員会との委託契約に基づき，財団法人福島県文化振興事業団の遺跡調査部の職員５名を配置して実施した。当初計画では，いわき工事事務所関連で調査員１名，相馬工事事務所関連で４名とし，楢葉町１遺跡（大谷上ノ原遺跡），相馬市１遺跡（南萱倉遺跡），新地町３遺跡（北狼沢Ａ遺跡・赤柴遺跡・赤柴前遺跡）の合計５遺跡，総調査面積12,800㎡が予定された。事業の進展に伴い要保存範囲が拡張したり，新たに要保存範囲が提示されたり，条件整備が整ったため急遽調査可能となった箇所などがあり，最終的には，楢葉町に所在する大谷上ノ原遺跡，相馬市に所在する南萱倉遺跡・払川遺跡，新地町に所在する北狼沢Ａ遺跡・大槻遺跡・赤柴前遺跡の計６遺跡を対象に発掘調査を実施した。調査面積は，いわき工事事務所関連で1,800㎡，相馬工事事務所関連で9,100㎡，総計で10,900㎡である。

当年度の調査は，東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所および相馬工事事務所との事前協議を受けて，相馬市南萱倉遺跡（1,000㎡）の調査といわき工事事務所関連の大谷上ノ原遺跡（４次調査）の調査から開始した。４月中旬には表土剝ぎが終了し，作業員を導入して遺構の検出作業に移行した。同時期には，当年度刊行予定の５冊の遺跡調査報告書（予定頁数2,700頁）のうち，１冊目の報告書の編集作業も平行して実施されていたため，いわき工事事務所関連で調査員２名，

相馬工事事務所関連でも同２名の計４名でのスタートとなった。

５月上旬には，南萱倉遺跡から平安時代の竪穴住居跡や土坑・溝跡が検出され，近世の木製品が出土した井戸跡などが検出された。中旬から下旬にかけては，これらの遺構の調査に従事したが，５月末に調査区の西側端部から遺構が確認され，調査区がさらに西側に広がることが予測された。このほか，当年度１冊目の報告書の入札が行われた。

６月上旬には，関係機関の協議を経て南萱倉遺跡の調査区が拡張となり，新たに1,000㎡が追加となったため，南萱倉遺跡の調査面積は2,000㎡となった。また，いわき工事事務所関連の大谷上ノ原遺跡の調査も収束に向かい，新たに新地町の赤柴前遺跡（2,500㎡）の調査を開始した。中旬には，南萱倉遺跡の拡張範囲から掘立柱建物跡や竪穴状遺構，土坑などが確認され，赤柴前遺跡の表土剝ぎも終了した。下旬には新地町で作業員募集説明会を行い，赤柴前遺跡の調査準備が整った。

７月上旬には赤柴前遺跡に作業員を導入し，本格的な調査が開始されるとともに，南萱倉遺跡の拡張範囲で検出した遺構の調査に追われた。また，当年度の試掘調査の結果，新たに新地町大槻遺跡で要保存範囲1,000㎡が確定し，この遺跡の調査も行うこととなった。さらに，条件整備が整わず，発掘調査が不可能であった相馬市の払川遺跡（800㎡）が，再確認の結果調査可能となり，逆に新地町北狼沢Ａ遺跡（3,500㎡）は，調査区南側に隣接する未買収地への侵入が不可能となり，調査方法の検討が迫られた。７月中旬から下旬にかけては，例年にない猛暑であり，作業の進捗は遅々であったが，７月末には南萱倉遺跡の遺構の調査が収束に向かい，赤柴前遺跡では縄文時代や平安時代の土坑の調査が行われた。また，昨年度調査を実施した新地町の鴻ノ巣遺跡で，調査区外の道路法面に木炭窯跡が１基確認され，急遽これの記録作成を行った。

８月に入ると，南萱倉遺跡・赤柴前遺跡のほか，払川遺跡の調査が開始され，３遺跡が同時進行で調査を行うこととなり，調査班は３班体制となった。お盆明け後，南萱倉遺跡の調査がようやく終了し，払川遺跡の調査に移行した。８月末には南萱倉遺跡で調査区の引渡しが行われ，払川遺跡では検出した木炭焼成土坑の調査が行われた。また，赤柴前遺跡の調査も終盤を迎え，新たに新地町大槻遺跡の調査準備に追われた。

９月上旬には，大槻遺跡の表土剝ぎが開始され，赤柴前遺跡や払川遺跡では，調査も終盤を迎えた。この頃から当年度刊行予定の残り４冊の遺跡調査報告書の編集作業がピークを迎え，さらに，先に入札した報告書の校正作業や，いわき工事事務所関連の大谷上ノ原遺跡の報告書刊行も行われた。９月末には赤柴前遺跡や払川遺跡で調査区の引渡しが予定され，10月初頭に引渡し，大槻遺跡では，遺構の検出作業が継続された。

また，当年度事業の見直しが行われ，この段階で本発掘調査面積は6,300㎡であり，当初予定面積との差は4,700㎡であったため，新地町の北狼沢Ａ遺跡（3,500㎡）の調査が計画された。ただ，北狼沢Ａ遺跡は調査区に隣接して未買収地があり，この部分の進入が不可能であったため，これの西側にある立木を伐採して，土砂運搬用道路や，作業用道路を確保して本発掘調査を行うこととなった。このため，伐採作業終了後に調査に移行することとなった。

10月になると，大槻遺跡の遺構検出作業は丘陵頂部から斜面部に移り，丘陵頂部からは祭壇跡と思われる礫敷きの遺構や，平安時代の竪穴住居跡などが確認された。10月中旬から下旬にかけては，天候にも恵まれ，作業は進展した。10月末には空中写真撮影も行われた。北狼沢Ａ遺跡の伐採作業は進展せず，調査の実施が危ぶまれたが，未買収地の一部侵入が承諾され，ここを通っての調査の実施が可能となった。

11月初頭には，北狼沢Ａ遺跡で現地協議が行われ，未買収地への侵入路上には鉄板を敷き詰め通行することや，未買収地の境界を明確にするための境界杭を設置することなどが話し合われた。さらに，調査中に伐採作業が行われる可能性があるため，伐木搬出用の作業道路部分および未買収地の隣接地を除いた2,800㎡を調査することとなった。ただ，11月に入ってからの発掘調査であるため，調査範囲のすべてが終了できる確証はなく，表土剝ぎ後に遺構検出作業を行い，調査遺構を確定してから，収束方法を検討することとなった。中旬から下旬には，大槻遺跡であらたに縄文時代中期末の竪穴住居跡が確認され，当該地方特有の複式炉を有する住居跡であることが判明した。北狼沢Ａ遺跡では，表土剝ぎが終了し，プレハブ等の環境整備も整い，12月初頭から作業員を導入した本格的調査の準備が整った。

報告書刊行作業では，当年度刊行予定の最後の２冊の報告書入札が行われ，すでに入札が終了した３冊の校正作業に忙殺された。さらに，当年度の当初予定面積との差は，後年度発行分であった調査報告書の刊行で充足することとなり，６冊目の報告書の入札準備にも追われることとなった。

12月上旬には，大槻遺跡で遺構の断ち割り作業や器材の搬出作業が行われ，作業員は北狼沢Ａ遺跡に移動した。そして，中旬には大槻遺跡の調査区引渡しを行った。当年度最後に残った北狼沢Ａ遺跡では，連日遺構の検出作業が行われ，縄文時代早期の竪穴住居跡や土坑，平安時代の木炭焼成土坑の調査が実施された。さらに，当年度の調査の収束が再検討され，年明けの１月中旬まで本遺跡の調査期間を延長すれば，当初予定の2,800㎡の調査が終了する目処が立ったため，年明けも２週間ほど調査を実施することとなった。

年が明けた１月上旬からは作業を再開し，縄文時代早期の土坑の調査や倒木痕の掘り込みが行われた。地形測量なども終え，次年度の調査のための養生作業等も終了し，中旬に調査区の引渡しを行った。これにより当年度のすべての発掘調査作業が終了し，調査遺跡５遺跡，調査面積9,100㎡

表２　平成22年度刊行の常磐自動車道遺跡調査報告（浪江～相馬）

書　　名	シリーズ名	シリーズ番号	所収遺跡名（所在地）	発行年月日	頁 数
常磐自動車道遺跡調査報告60	福島県文化財調査報告書	第469集	横大道遺跡（南相馬市小高区）	平成22年９月24日	857頁
常磐自動車道遺跡調査報告61	福島県文化財調査報告書	第470集	中山Ｃ遺跡（南相馬市原町区） 西内遺跡（南相馬市原町区） 菖蒲沢遺跡（南相馬市原町区） 椴木沢Ｂ遺跡（南相馬市鹿島区）	平成23年１月28日	406頁
常磐自動車道遺跡調査報告64	福島県文化財調査報告書	第473集	西原遺跡（相馬市） 宿仙木Ａ遺跡（２次調査）（相馬市）	平成22年12月22日	201頁

が確定した。報告書の刊行では，１月末までに２冊の報告書が納本され，２月から３月上旬には，残り３冊の校正作業を実施した。この３冊の報告書については，３月11日に起こった東北地方太平洋沖地震の影響により次年度納本となった。

今年度刊行した報告書は，平成18年度から平成21年度の４カ年にかけて調査を実施した７遺跡であり，刊行した報告書名や収録遺跡名などは表２に示したとおりである。（吉　田）

第２節　遺跡の位置と地理的環境

各遺跡の位置

福島県は東北地方の南端，太平洋側に位置する。県土の総面積は13,782㎢で，北海道，岩手県に続き全国３番目の面積を有する。県土の約８割は山地で占められ，西端の越後山脈，中央の奥羽山脈，東部の阿武隈高地が平行して南北に連なり，地理的に県土を３地域に区分している。一般に奥羽山脈以西を「会津地方」，奥羽山脈と阿武隈高地に挟まれた阿武隈川流域を「中通り地方」，太平洋に面した海岸地帯を「浜通り地方」と呼んでいる。このうち，本書に掲載した南萱倉遺跡・払川遺跡・赤柴前遺跡・大槻遺跡は，浜通り地方北部の相馬市から相馬郡新地町にかけて所在する。行政区分では南萱倉遺跡が相馬市初野字南萱倉地内，払川遺跡が相馬市初野字払川・羽黒地内，赤柴前遺跡が新地町駒ヶ嶺字赤柴前地内，大槻遺跡が新地町杉野目字大槻地内にそれぞれ位置する。

遺跡周辺の気候

浜通り地方北部の気候は，夏涼しく冬暖かい太平洋沿岸気候であり，気象的には海の影響を受けやすい。梅雨時期には「やませ」と呼ばれる北東風が吹き込むと日照時間が減り，低温気候が長く続くことが多い。四季を通じて晴天の日が多く，しばしば水不足となる。そのため，旧相馬藩域では二宮仕法による溜池が江戸時代より造られ，丘陵の谷頭に多く認められる。

遺跡周辺の地形

浜通り地方の地形は，大きく阿武隈高地，河岸段丘を含む丘陵地帯，海岸低地帯の３つに区分される。阿武隈高地は，東西50㎞，南北200㎞の規模を有し，標高500～700ｍのなだらかな平坦面を残す隆起準平原と考えられている。阿武隈山地の東縁には双葉断層が北北西から南南東方向に縦走しており，浜通り地方中・南部では，阿武隈高地と丘陵地帯との境界となっている。浜通り地方北部では，双葉断層が西側の大谷断層と東側の相馬断層へと分岐し，本報告の遺跡周辺では相馬断層が阿武隈高地と丘陵地帯との境界をなしている。相馬断層の西側には，北から，地蔵森(348ｍ)，五社壇(346ｍ)，鹿狼山(430ｍ)，荷鞍山(300ｍ)，羽黒山(346ｍ)，羽山(275m)，天明山(488ｍ)といった標高300～400ｍの山々が形成され，分水嶺となっている。

丘陵地帯は，相双丘陵と呼ばれる山麓丘陵で，阿武隈高地との境界から北東方向へ緩やかに傾斜しながら東方の海岸地帯にまで達する。この丘陵は，山麓付近では約200ｍの標高があるが，新地町付近の海岸では10～15ｍほどの崖となる。この相双地域において確認される段立面は，最高位

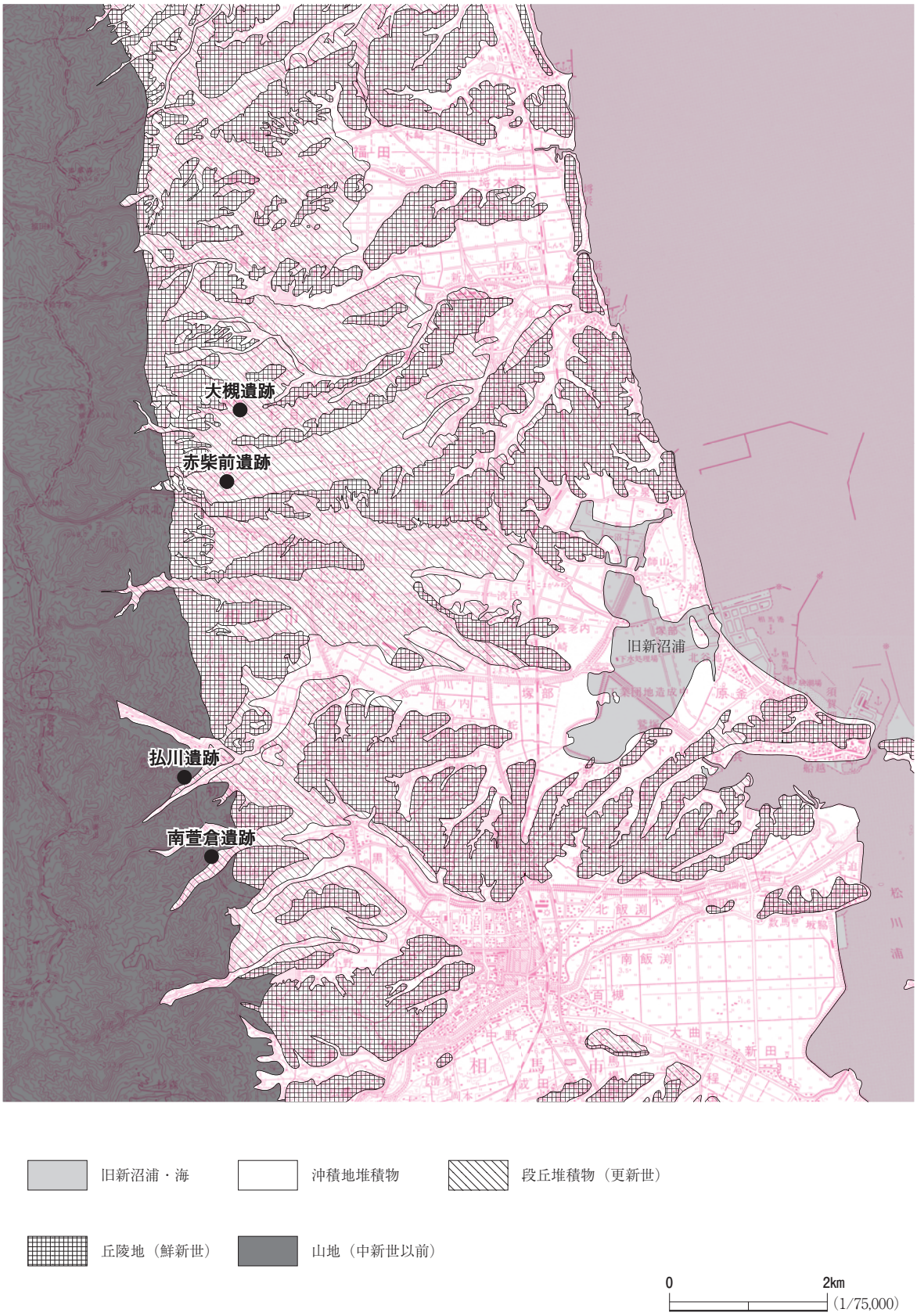

大槻遺跡
赤柴前遺跡
旧新沼浦
払川遺跡
南萱倉遺跡
旧新沼浦・海
沖積地堆積物
段丘堆積物（更新世）
丘陵地（鮮新世）
山地（中新世以前）
0
2km
(1/75,000)

図２　表層地質図

段丘・中位段丘・低位段丘上段・低位段丘下段・最低位段丘の５つである。最高位段丘は，阿武隈高地との境や丘陵頂部に断片的に認められるのみであり，また低位段丘下段や最低位段丘も丘陵の縁辺部に僅かに認められるのみである。相馬市北部においては広い範囲にわたって，中位段丘から低位段丘上段が発達しているのが確認される。いずれも，更新世以降に河川の開析を受け，羊歯状の複雑な地形を形成する。

低地帯は，砂子田川・立田川・地蔵川・小泉川といった，阿武隈高地に水源を発し，太平洋へ向けて東流する河川の両岸に発達している。各河川の中・下流域では比較的面積の広い平野を形成するほか，海浜部では砂州・浜堤と後背湿地が点在する。立田川と地蔵川の河口部には，1920～1935年にかけての干拓事業で消滅した新沼浦と呼ばれる潟湖が存在した。新沼浦は，明治41年に大日本帝国陸地測量部が測図した５万分の１地形図によると，南北３㎞，東西1.5㎞の規模があり，新地町駒ヶ嶺字今神地区で太平洋と通じていた。

遺跡周辺の地質

相馬市域の地質構造は双葉断層を中心に大きく異なる。阿武隈高地域では中新世以前の固結堆積物，火山性堆積物，深成岩，変成岩等によって構成されるが，東側を北沢層・粟津層・山上層・栃窪層・中ノ沢層等が東へ傾きながら覆う。割山層・粟津層等の中生代(6,500万年前以前)に形成された黒色頁岩・粘板岩・変成岩類・花崗岩類等を基盤とする岩盤が，阿武隈高地東縁の地塁を形成している。

丘陵は，下部層として，阿武隈高地との境付近に新第三紀中新世(2,380万～530万年前)の海成堆積物である細粒砂岩・シルト岩で構成される初野層および，新第三紀鮮新世(530万～180万年前)の陸水成堆積物である粗粒砂岩を主体とし，亜炭層を含む久保間層が分布する。久保間層の上部には，鮮新世の海成堆積物である軟質細粒砂岩・シルト岩を主体とする山下層が広く分布し，海岸付近では地表に露出している。山下層の上部には第四紀更新世(180万～１万年前)から完新世(１万年前以降)前半の海水準変動により形成された段丘堆積物が認められる。また，相双丘陵の段丘は，形成時期の古いものから，最高位段丘・高位段丘・中位段丘・低位段丘上段・低位段丘下段・最低位段丘に区分されているが，新地町から相馬市北部にかけた地域では最高位・高位の段丘堆積物はほとんど認められず，低位～最低位段丘堆積物が河川の中・上流域を中心に分布し，中位段丘堆積物は丘陵頂部付近に僅かに遺存するのみである。

低地帯に堆積する沖積地堆積物は，更新世以降の堆積物であり，泥・砂・礫を主体とし，一部に火山灰層や泥炭層を含む。縄文時代以降の地層はほぼこの堆積物で構成される。

本書掲載の４遺跡のうち，山地に立地するものは払川遺跡のみである。払川遺跡は阿武隈高地から連なる羽山の裾で，栃窪層を基盤とすると考えられる。南萱倉遺跡は阿武隈高地から連なる，山下層を基盤とすると考えられる丘陵上に位置している。赤柴前遺跡の２次調査区は，低位段丘上段堆積物の上に位置している。大槻遺跡は，残丘状の丘陵上に位置しており，山下層を基盤とする丘陵の名残であると考えられる。　（西　澤）

第３節　遺跡周辺の歴史的環境

本報告書の扱う遺跡が立地する地域は旧宇多郡に属し，古くは『和名類聚抄』に「宇太郡」と記載が残る地域である。現在の相馬市域は，鎌倉時代から明治維新まで約500年間に及ぶ相馬氏による統治が続いた地域であり，国替えもなく，江戸時代には相馬中村藩の城下町として栄えてきた。このような環境が，無形民俗文化財に登録された「相馬野馬追」や現在においても継承されている古式武術等が繁栄する礎となっている。一方で，新地町域は福島県内において唯一，仙台藩領に属しており，方言など文化的には仙台との関連が深い地域である。

戦後の各種機関による発掘調査のほか，『相馬市史』の編集や『福島県遺跡地図』作成，近年は相馬地域開発や一般国道６号相馬バイパス・一般国道113号バイパス・相馬第二用水・阿武隈東道路・常磐自動車道などの建設に伴う発掘調査が実施され，遺跡を通して当地における人々の営みがおぼろげながら見え始めた地域である。図３のＡ～Ｄが今回報告する遺跡の位置である。１～７の遺跡は，常磐自動車道の建設に関連して調査・報告がなされた遺跡，もしくは予定されている遺跡である。以下，時代ごとに当該地域の歴史的環境を概観していく。

旧石器時代

当該地域で最古の遺跡は，旧石器時代の遺跡で，北原遺跡(26)でナイフ形石器，段ノ原Ａ遺跡(35)・段ノ原Ｂ遺跡(36)でナイフ形石器や細石刃核，三貫地遺跡(29)では剝片や石核が10,000点以上出土しており，中には石刃技法を用いた接合資料も認められた。この時代の遺跡は，まだ調査例が少なく，段丘上に点在して分布している。

縄文時代

当該地域における人々の営みは，縄文時代早期後葉から認められる。早期後葉～前期初頭の住居跡と遺物包含層が検出された師山遺跡(24)や，遺物包含層が検出された山中Ｂ遺跡(22)など，旧新沼浦周辺でこうした時期の資料が見つかっている。平成23年度以降に報告予定の北狼沢Ａ遺跡（７）においては，早期後葉の住居跡が調査されている。

続く前期前葉では，段ノ原Ａ遺跡・段ノ原Ｂ遺跡・山田Ｂ遺跡(39)・猪倉Ｂ遺跡(38)で集落跡が調査された。平成21年度に調査した宿仙木Ａ遺跡（３）においても当該時期の土坑が見つかっている。この時期の遺跡は丘陵地帯の西部に分布する傾向がある。前期中葉～中期前葉にかけては，師山遺跡・宿仙木Ａ遺跡・武井Ｅ遺跡(17)・山中Ｂ遺跡・双子遺跡(25)などから，当該時期の包含層や遺物が確認されるが，集落に関しては不明である。

続く中期中葉でも，師山遺跡で住居跡が認められるものの，集落形成は不明である。中期末葉になると，山海道遺跡(12)・川窪遺跡(13)・高田遺跡(30)・三貫地遺跡・馬見塚遺跡(41)などで，複式炉をもつ住居跡が見つかり，大規模な集落跡が確認できる。本報告の大槻遺跡（Ｄ）においても当該時期の住居跡が確認された。

後期～晩期では，国指定史跡で，後期後葉の土器型式である新地式の標識遺跡である新地貝塚(14)，埋葬人骨が多数見つかった三貫地貝塚(27)が知られている。大森Ａ遺跡(34)では，後期前葉の櫂状木製品と晩期の丸木弓や，双子遺跡では後期中葉の丸木舟などの木質遺物が出土している。

そのほか，鷲塚遺跡(45)・師山遺跡などで晩期の土器が見つかっており，沖積地に面した低い段丘上に小規模な集落が営まれていた様子がうかがえる。

弥生時代

当該地域で最も古い弥生時代の遺跡は藤堂塚遺跡(53)で，前期から中期初頭の再葬墓が確認されている。続く中期後葉では，柴廻Ａ遺跡(46)で桜井式期の集落跡，武井Ｄ遺跡(16)･向田Ｅ遺跡(18)で住居跡が調査されており，武井Ｅ遺跡･向田Ｇ遺跡(15)では土器棺墓が検出された。聖遺跡(31)･境Ｂ遺跡(32)･善光寺遺跡(33)などでも，当該時期の土器や石器が出土している。また，双子遺跡･師山遺跡では後期の天王山式の包含層が見つかっており，この時期も小規模な集落が丘陵地上に点在していたようである。なお，本報告の南萱倉遺跡(Ａ)においてもアメリカ式石鏃が出土しており，近隣に当該時期の集落が形成されていた可能性がある。

古墳・飛鳥時代

古墳時代前期の遺跡としては山中遺跡(21)があり，塩釜式期の土師器が集中して出土し，祭祀跡であることが指摘されている。砂子田遺跡(11)では４～６世紀の土器が出土し，７世紀には集落が営まれている。古川尻Ａ遺跡(43)では６世紀とみられる埋没住居の存在が確認され，大森Ａ遺跡では６～９世紀にかけての水田関連遺構ともに，馬鍬等の木製農機具が出土している。このほか，川窪遺跡・三貫地遺跡・山中Ｂ遺跡・宿仙木Ａ遺跡などで，この時期の集落跡が調査されている。

高塚古墳は，人物・馬形・円筒埴輪を伴う丸塚古墳(54)や金銅製雲珠や承盤付椀が出土した高松１号墳(56)が著名であるほか，柴廻古墳群(47)・本笑和田横穴墓群(48)，金銅製双龍環頭大刀柄頭が出土している福廻横穴墓群(55)・西山横穴墓群(50)などの宇多川流域で横穴墓が多数認められている。

奈良・平安時代

古代の代表的な遺跡としては，宇多郡衙または寺院に比定されている黒木田遺跡(51)がある。遺跡からは，単弁八葉蓮華文軒丸瓦や複弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している。これら瓦の主な供給源としては，善光寺遺跡があり，10基の瓦陶兼用窯跡を確認している。また，製鉄関連遺跡では，７～10世紀にかけて大規模な製鉄遺跡群が認められた武井地区遺跡群(向田Ｅ遺跡，向田Ｇ遺跡，武井Ｄ遺跡，武井Ｅ遺跡，洞山田遺跡)のほか，丘陵地西部の山田Ａ遺跡(40)・猪倉Ｂ遺跡等でも確認されている。これらの製鉄遺跡では，製鉄炉・木炭窯・鍛冶炉・木炭焼成土坑・鋳造遺構等が調査された。本報告の払川遺跡(Ｂ)や赤柴前遺跡(Ｃ)を含め，近隣で確認される木炭焼成土坑の多くは当該時期の所産である可能性が高い。

古代の集落跡としては，明神遺跡(１)や三貫地遺跡原口地区・北原遺跡・宿仙木Ａ遺跡で，竪穴住居跡や掘立柱建物跡等が確認されている。本報告の南萱倉遺跡や大槻遺跡からも，当該時期の住

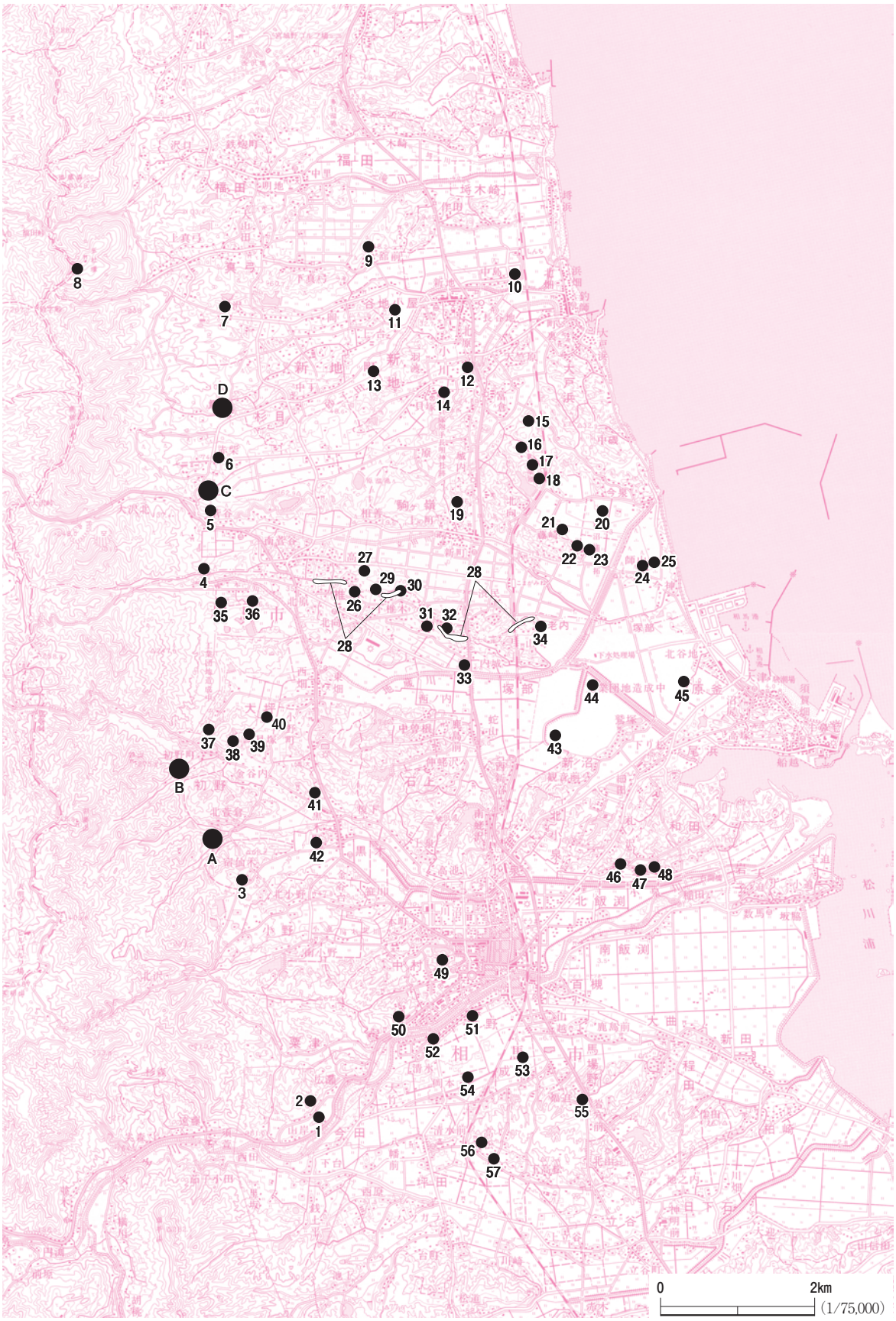


図３　周辺の遺跡位置図

表３　南萱倉・払川・赤柴前・大槻遺跡の周辺遺跡

番号	遺　跡　名	所　在　地	種　別	時　代
A	**南萱倉**	相馬市初野字南萱倉	集落跡	弥生・平安・近世
B	**払川遺跡**	相馬市初野字払川・羽黒	集落跡	縄文・平安・中世
C	**赤柴前**	新地町駒ヶ嶺字赤柴前	集落跡・製炭跡	縄文・平安
D	**大槻**	新地町杉野目字大槻	集落跡	縄文・平安・近世
1	明神	相馬市山上字明神・広瀬	集落跡	縄文・古代
2	山岸硝庫跡	相馬市山上字山岸	硝庫跡	古代・近世
3	宿仙木Ａ	相馬市黒木字宿仙木	集落跡・散布地	縄文・古墳・平安
4	白子下Ｃ	新地町駒ヶ嶺字白子下	集落跡	縄文・平安・近世
5	鴻ノ巣	新地町駒ヶ嶺字鴻ノ巣	集落跡・製炭跡	縄文・平安・中世
6	赤柴	新地町駒ヶ嶺字赤柴前	散布地	古代
7	北狼Ａ	新地町真弓字北狼沢	集落跡	縄文
8	五社壇	新地町真弓字原畑・ 宮城県伊具郡丸森町大内五社壇	墳墓	古代
9	新地城跡	新地町谷地小屋字舘前	城館跡	中世
10	観海堂	新地町谷地小屋字桝形	その他	近代
11	砂子田	新地町谷地小屋字砂子田	集落跡	縄文・古墳～平安
12	山海道	新地町小川字山海道	集落跡	縄文
13	川窪	新地町杉目字川窪	集落跡	縄文・古墳
14	新地貝塚	新地町小川字貝塚西	貝塚	縄文
15	向田Ｇ	新地町駒ヶ嶺字向田	製鉄跡・散布地	弥生・古代
16	武井Ｄ	新地町今泉字武井他	製鉄跡・散布地	弥生・平安・近世
17	武井Ｅ	新地町今泉字武井	製鉄跡・散布地	縄文・弥生・平安
18	向田Ｅ	新地町駒ヶ嶺字向田	製鉄跡	縄文・弥生・奈良・平安
19	駒ヶ嶺城跡	新地町駒ヶ嶺字館	城館跡	中世
20	唐崎釜屋群	新地町今泉字唐崎	製塩跡	近世
21	山中	新地町駒ヶ嶺字山中	散布地	古墳～平安
22	山中Ｂ	新地町駒ヶ嶺字山中	集落跡・散布地	縄文・古墳・平安・近世
23	南川尻Ｂ	新地町駒ヶ嶺字南川尻	製塩跡	縄文・近世
24	師山	新地町駒ヶ嶺字師山	散布地	縄文・弥生
25	双子	新地町駒ヶ嶺字双子	製塩跡・散布地	縄文・弥生・近世
26	北原	相馬市椎木字北原	集落跡・散布地	旧石器・縄文・奈良・平安
27	三貫地貝塚	新地町駒ヶ嶺字田丁場	貝塚	縄文
28	藩境土塁	相馬市椎木字北原他	土塁	中世
29	三貫地	新地町駒ヶ嶺字三貫地西	集落跡・散布地	旧石器・縄文・古墳・平安
30	高田	新地町駒ヶ嶺字白薄	集落跡・古墳	縄文・古墳～平安
31	聖	相馬市塚部字聖	散布地	弥生・奈良・平安
32	境Ｂ	新地町駒ヶ嶺字境	散布地	縄文・弥生・平安
33	善光寺	相馬市塚部字善光寺	窯跡	弥生・奈良・平安
34	大森Ａ	相馬市長老内字大森	水田跡	古墳～近世
35	段ノ原Ａ	相馬市椎木字段ノ原	集落跡	旧石器・縄文
36	段ノ原Ｂ	相馬市椎木字段ノ原	集落跡	旧石器・縄文・古代
37	猪倉Ａ	相馬市初野字猪倉	製鉄跡	古代
38	猪倉Ｂ	相馬市初野字猪倉	集落跡・製鉄跡	縄文・古代
39	山田Ｂ	相馬市大坪字山田	集落跡・製鉄跡	縄文・古代
40	山田Ａ	相馬市大坪字山田	製鉄跡	古代
41	馬見塚	相馬市黒木字薬師堂	集落跡	縄文
42	黒木城跡	相馬市黒木字西館他	城館跡	中世
43	古川尻Ａ	相馬市塚部字古川尻	散布地	古墳
44	古川尻Ｂ	相馬市塚部字古川尻	散布地	古墳
45	鷲塚	相馬市新沼字広須賀	製塩跡・散布地	縄文・近世・近代
46	柴廻Ａ遺跡	相馬市和田字柴廻	集落跡・製鉄跡	弥生・古墳・平安
47	柴廻古墳群	相馬市和田字柴廻	古墳	古墳
48	本笑和田横穴墓群	相馬市本笑和田字馬場添	古墳	古墳
49	相馬中村城跡	相馬市中村字北町	城館跡	中世・近世
50	西山横穴墓群	相馬市西山字西山	古墳	古墳
51	黒木田	相馬市中村明神前	郡衛関連	古代
52	熊野堂館跡	相馬市中村字堂ノ前	城館跡	中世
53	藤堂塚	相馬市成田字藤堂塚	散布地	縄文・弥生
54	丸塚古墳	相馬市成田字船橋	古墳	古墳
55	福廻横穴墓群	相馬市馬場野字福廻	古墳	古墳
56	高松１号墳	相馬市坪田字高松	古墳	古墳
57	高松横穴墓群	相馬市坪田字高松	古墳	古墳

居跡や建物跡が確認された。

新地町から宮城県伊具郡丸森町にわたって位置する五社壇遺跡（８）では，奈良から平安時代にかけての墳墓跡が確認され，当時の人々の信仰の対象であったことがうかがえる。山上地区の山岸硝庫跡（２）では，丘陵頂部から９世紀後半から10世紀前半頃の土師器杯が出土したことから，同様に信仰に関連すると考えられる。

中世・近世・近代

中世から近世まで，宇多郡の大部分は相馬氏の支配下に置かれた。下総国相馬郡の千葉氏（後の相馬氏）が文治５（1189）年の源頼朝の「奥州征伐」の功により，所領として拝領した。南北朝から戦国時代には戦が続く不安定な情勢であり，各地に城館が造られるようになる。黒木城（42）や熊野堂館跡（52）が南朝方の拠点である霊山城の搦手として築城された。さらに相馬市域の西側山間部では，多くの館跡が認められる。伊達氏との争乱が続いた16世紀中頃（永禄年間）に入ると，相馬氏により新地（蓑首・谷地小屋）城（９）や駒ヶ嶺（臥牛）城（19）を築城するも，天正17（1589）年に伊達政宗により攻略され，以後は伊達氏の要害として機能していく。天正18（1590）年には小田原の役の功績により，相馬藩は宇多・行方・標葉の３郡を安堵されている。相馬藩は，慶長５（1600）年の関ヶ原の戦いに不参したことで一旦は改易の憂き目に会うものの，最終的には本領が安堵されることとなった。

近世初頭に仙台藩と相馬藩の境界が確定すると，境界に沿って藩境土塁（28）が構築され出入口には番所が設けられた。この境界はほぼ現在の行政区境と一致し，仙台藩側が新地町，相馬藩側が相馬市となっている。相馬藩は慶長16（1611）年，中世以来の居城であった南相馬市の小高城から中村城（49）へと居を移し，城下の整備を開始する。以後中村城は相馬６万石，13代ににわたる260余年の居城となった。

中村城は一部に石垣を有するものの，土塁と枡形，水堀を利用した環郭式平山城である。城下では藩の御用窯で相馬駒焼が，陶工田代清治右衛門により操業され，現在まで残っている。民窯としては，館の下焼・小野相馬焼が製作されている。

南川尻Ｂ遺跡（23）や唐崎釜屋群（20）では，多数の灌水槽が設けられ，入浜式製塩による製塩業が盛んであったことが判明している。塩は通称「塩の道」と呼ばれる街道を抜け，二本松藩や会津藩などに運ばれ消費されていた。宇多川北の丘陵に穴を穿ち造られた山岸硝庫跡は，中村藩の火薬庫として『奥相誌』にも記述が残る。幕末においては，駒ヶ嶺城跡が仙台藩領の南端の拠点となり，これを巡って周辺の山野は新政府軍と仙台藩軍の激戦の場となった。白子下Ｃ遺跡の東側の尾根上に位置する堡塁跡はこの時に造られたと考えられる。

明治維新後，現在の相馬市から新地町域は廃藩置県後に中村県へ，その後に平県（後の磐前県）へと合併を繰り返し，明治９（1876）年には福島県へと合併した。観海堂（10）は，学生公布前に造られた福島県初の共立学校として，県指定史跡に指定されていたが，東日本大震災にともなう大津波で失われてしまった。

（西　澤）

第４節　調 査 方 法

今回の調査で用いた測量座標は，世界測地系に基づく国土座標Ⅸ系の座標である。本報告書ではこの座標をメートル単位の座標値として表記した。現地においては測量会社に委託して，既知点から算出したメッシュ測量点の打設および簡易水準点の移動を行い，調査区内の測量基準点とした。また，調査区内における遺構・遺物のおおまかな位置を示すために，調査範囲の北西隅を原点とする５ｍ単位の方眼をグリッドとして設定した。なお，先述のメッシュ測量点はこのグリッドに一致させた形で設定している。グリッドの呼称には，原則として北から南に１・２…と算用数字を，西から東にＡ・Ｂ…とアルファベットを用い，これを組み合わせてＡ１・Ｂ２と呼称するのを基本とし，調査区の拡張などで原則があてはまらない場合には，遺跡ごとに個別の呼称を付けた。各遺跡のグリッドの設定状況は以下のとおりである。

南萱倉遺跡では，調査途中でグリッド原点の北西側に調査区が拡張し，グリッド呼称の原則が当てはまらなくなった。このため，グリット原点の北側に０，西側にｘ・ｙ・ｚのグリッドを新たに増設し，北西隅のｘ０グリッドから南東隅のＰ11グリッドまで設定した(第１編図２参照)。払川遺跡では，グリット呼称の原則に従い，北西隅のＡ１グリッドから南東隅のＨ７グリッドまで設定した(第２編図２参照)。赤柴前遺跡(２次調査)では，南方へ200ｍほど離れた１次調査時のグリッド呼称と区別するために，独自のグリッド呼称を用い，平成23年度以降調査が予測される３次調査区も含めた範囲に新たに設定し直した。グリッド原点は，２次調査区の北側に隣接する３次調査予定範囲の北西隅に設定した。この原点から南へは従来のグリッド呼称と同様に１・２…と算用数字を使用し，東へはＡＡ・ＡＢ・ＡＣ…とアルファベットを２つ用いて表現した。このうち，２次調査に関わるグリッドは，北西隅のＡＨ14グリッドから南東隅のＡＳ20グリッドまでである(第３編図２・３参照)。大槻遺跡では，グリッド呼称の原則に従い，北西隅のＡ１グリッドから南東隅のＨ13グリッドまで設定した(第４編図２参照)。

調査区内堆積土の掘削は，現表土には重機を用いた。それ以外の堆積土および遺構内堆積土の掘削は基本的に人力により，唐鍬・草削り・移植ゴテ・剣先スコップ等を用いて行った。ただし，土量が多い堆積土につては，遺構・遺物がないことを確認した後，調査員立会いのもと，重機による慎重な掘削を行った。遺構の掘り込みにあたっては，調査区内の基本土層とどのような関係にあるかに留意し，可能な限り断面図に記録した。

竪穴住居跡などの大型遺構は土層観察用土手を残した４分割法を基本とし，遺存状態の悪いものは２分割法を用いた。土坑は半截２分割法，溝跡は適宜土層観察用土手を残して調査した。

遺物は，遺構およびグリッド単位で採り上げを行い，出土層位を記録した。遺構の記録は，平面図と土層断面図の作成を原則とし，平面図については，先述したメッシュ測量点を基点としたトータルステーションを使用して測量し，現場で結線した。断面図については，遺構内に移動した簡易

水準点を基に作図した。各遺構および土層の図化に際しては1/20の縮尺を原則とし，遺構の規模・性格に合わせて1/10の縮尺も適宜使用した。また，遺跡基底面の地形図は，原則として1/200の縮尺で作成し，調査区の狭い払川遺跡のみ1/100の縮尺で作成した。

土層の記載方法は，基本土層についてはローマ数字Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを用い，さらに細分が必要な場合はアルファベットの小文字ａ・ｂ・ｃを付して区分し，遺構内堆積土については基本土層と区別するため算用数字１・２・３で表記した。

写真は35㎜判のモノクロームとリバーサルフィルムを使用するとともに，補助的にデジタルカメラを用い，同一被写体で撮影を行った。

これらの調査記録および出土遺物については，報告書刊行後に当事業団の定める基準に従って整理を行い，福島県教育委員会へ移管した後，福島県文化財センター白河館（まほろん）に収蔵される予定である。　（笠　井）

引用・参考文献

北村　信・中川久夫　1988「各論Ⅱ　表層地質図」『土地分類基本調査　角田』宮城県企画部土地対策課
鈴木敬治・吉田　義・堀内俊秀・白瀬美智男　1989「各論Ⅱ　表層地質図」『土地分類基本調査　相馬中村』福島県農地林務部農地計画課
新地町教育委員会　1981『新地町の文化財』
新地町教育委員会　1993『新地町史　自然・民俗編』
(財)福島県文化センター編　1989『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅰ』
(財)福島県文化センター編　1990『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅱ』
(財)福島県文化センター編　1995『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅲ』
(財)福島県文化センター編　1996『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅳ』
(財)福島県文化振興事業団編　2007『一般国道６号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅵ』
鈴木穀彦・小荒井衛　1989「福島県相馬郡鹿島町における双葉断層（大谷断層）の断層露頭と最近の活動に関する一考察」『活断層研究』６

第１編　南萱倉（みなみかやくら）遺跡

遺跡記号	ＳＭ－ＭＫＫ
所在地	相馬市初野字南萱倉
時代・種類	弥生時代の狩場，平安時代の集落跡 近世の宅地
調査期間	平成22年４月13日～８月20日
調査員	吉田秀享・笠井崇吉・西澤正和

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形

南萱倉遺跡は，相馬市初野字南萱倉に所在する（図１，写真１～４）。遺跡の所在する初野地区は，相馬市の中心地である中村地区の北西部に位置し，地区の東方には旧国道113号線（現，県道228号線）が南北に走り，地区の中央を県道大内・黒木線が東西に走っている。

初野地区の地形は，西側が阿武隈高地東縁の山地であり，東側は山地から連なる丘陵地である。丘陵地は概ね東流する複数の小河川により開析を受け，小河川沿いの細長い谷底低地と東西方向に延びる丘陵による起伏に富んだ景観を呈している。

南萱倉遺跡は，小泉川の上流部にあたる丘陵地に位置し，河川沿いの細長い沖積地に面した東西方向に延びる舌状丘陵の東端部に近い南向き斜面に立地する。遺跡の北西側に100ｍほどいった小高い丘の上には権現神社が鎮座する。遺跡南側に位置する宿仙木の丘陵の北縁を東流する小泉川は，遺跡の東側で本遺跡が立地する丘陵の北側を東流してきた菅倉沢川と合流し，両岸に幅の狭い沖積地を形成しながら東方の黒木宿の集落へと流れていく。

今回の調査区は遺跡の西部にあたり，調査区内の標高は52～70ｍを測る。全体的に南方向へ緩やかに下る傾斜地であり，南部の斜面裾部が細長い平坦な地形となる。調査前の現況は宅地および果樹園・畑地であり，宅地および果樹園の部分は地形の改変が顕著であった。　（笠　井）

第２節　調　査　経　過

南萱倉遺跡は，平成10年度に福島県教育委員会が実施した常磐自動車道建設工事に関わる埋蔵文化財包蔵地の表面調査で，近世陶器が表面採集されたことから近世の散布地として登録された遺跡である（『福島県内遺跡分布調査報告５』）。

平成19・20年度に試掘調査が実施され，常磐自動車道工事区内の1,000㎡の範囲について保存が必要とされた（『福島県内遺跡分布調査報告14・15』）。常磐自動車道建設工事の進捗に伴い，保存範囲の発掘調査が必要となり，平成22年４月１日付で福島県教育委員会から財団法人福島県文化振興事業団へ，保存対象となった1,000㎡に対し発掘調査の指示があり，事業団側は当初２名の調査員をあてて発掘調査を開始することとなった。

現地調査は４月13日から開始した。南萱倉遺跡の調査区は，周囲の道路から重機の搬入が困難な場所にあったため，重機の進入路造成から作業を開始した。これと平行して翌14日にかけては，遺跡の南側に現地連絡所および作業員休憩所のプレハブ，仮設トイレを設営した。15日からは，重機の進入路および排土置き場の整備が完了し，調査区の東部から西方へ表土除去作業を開始した。ま

図１　調査区位置図

た，この日から作業員を導入し，器材の整理とプレハブ周りの環境整備を行うとともに，表土除去作業の終了した部分から遺構検出作業を開始した。19日からは調査員１名が増員され，表土除去作業を追いかけるように東から西へ遺構検出作業を進めた。４月の後半は雨天が続いたため，たびたび作業が中断されたが，27日には表土除去作業が終了し，作業の主体は遺構検出作業に移った。

５月に入ると，遺構検出により存在が確認された溝跡（ＳＤ１）や竪穴住居跡（ＳＩ１）の精査が本格化した。13日には測量会社による測量基準杭の打設が完了し，出土した遺物の採り上げと遺構の図化作業が可能になった。５月の中旬から下旬にかけては，遺構検出と遺構精査を進め，調査指示範囲における作業の目処がついたため，25日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。空中写真撮影終了後，発掘作業の収束へ向け，遺構精査を進めていたところ，調査区北西境で焼土化範囲を伴う貼床を検出した。後に掘立柱建物跡（ＳＢ１）に伴う施設であることが判明した。これらの遺構は，この時点で調査区のさらに北側へ続いていることが明らかとなり，調査区の拡張が必要となった。このため，福島県教育庁文化財課と協議がもたれ，遺構の範囲に限定して調査区を北側へ拡張することが決定した。

６月上旬は，当初の調査区では遺構の精査（ＳＩ１・２，ＳＤ１～４，ＳＫ１）が終盤を迎え，図面・写真等の記録を進めた。新たに調査区を拡張した部分では，重機による表土除去作業とそれに続く遺構検出を実施した。拡張した調査区では，掘立柱建物跡（ＳＢ１）の全貌が明らかとなるとともに，その北側に溝跡（ＳＤ２）が続き，西側には新たな貼床（ＳＸ１）の存在が明らかとなったため，この段階までの拡張範囲が不十分であると判断できた。このため，東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所と福島県教育庁文化財課の間で再度協議がもたれ，調査区の北側と西側で試掘調査を実施することとなり，16・17日の２日間に試掘調査を実施した。試掘調査の結果，これまでの調査区の北西側に木炭を伴う大型土坑（ＳＫ４）の存在や多数の土師器片が散布する状況を確認したため，新たに1,000㎡の範囲を調査区に追加し，24日には発掘作業の指示が福島県教育庁文化財課から出された。これを受けて直ちに重機による表土除去作業と遺構検出作業にとりかかった。

６月下旬から７月上旬にかけては，新たに追加された北西側の調査区で，掘立柱建物跡（ＳＢ１・２）や作業場と考えられる特殊遺構（ＳＸ３），土坑（ＳＫ２・３），溝跡（ＳＤ５）が検出され，順次精査に着手した。

７・８月は例年にない酷暑で，作業の進捗は遅れがちであったが，検出した遺構群の精査と図面・写真等の記録を進め，８月上旬には，遺構に関する調査を終了した。８月５・６日には地形測量を実施し，お盆明けの18日には作業員と発掘器材を次の調査対象である払川遺跡に移した。

８月20日には，福島県教育庁文化財課・財団法人福島県文化振興事業団から東日本高速道路東北支社相馬工事事務所へ発掘調査現場の引渡しが行われ，南萱倉遺跡の調査を終了した。　（笠　井）

第２章　遺構と遺物

第１節　遺構の分布と基本土層

１．遺構の分布（図２・３，写真１）

南萱倉遺跡の検出遺構は，竪穴住居跡２軒，掘立柱建物跡３棟，土坑４基，溝跡５条，特殊遺構３基，井戸跡１基，柱列跡１列，グリッドピット11基，遺物包含層１カ所である。遺構の分布は，大きく調査区南東部の丘陵南向き斜面中位～下位にかけてと，調査区北西部の丘陵南向き斜面上位～中位にかけての２つの部分に分かれる。

調査区南東部では，丘陵南向き斜面中位に住居跡（ＳＩ１・２）・建物跡（ＳＢ１）・柱列跡（ＳＡ１）・遺物包含層（ＳＨ１）が東西方向に並び，そのすぐ北側に溝跡（ＳＤ２～４）・特殊遺構（ＳＸ１・２）が並ぶ。また，この範囲の西側にはグリッドピットが分布する。南向き斜面下位には，東西に延びる溝跡（ＳＤ１）と井戸跡（ＳＥ１），土坑（ＳＫ１）が展開する。

調査区北西部では，丘陵南向き斜面上位に建物跡（ＳＢ２・３）・特殊遺構（ＳＸ３）・土坑（ＳＫ２）が東西方向に並び，丘陵南向き斜面中位には土坑（ＳＫ３・４）・溝跡（ＳＤ５）が分布する。

出土遺物は，土師器片801点，須恵器片41点，陶磁器片503点，石器15点，木製品10点，鉄製品３点，焼成粘土塊５点，土製品４点が出土した。土師器・須恵器は，その大半が平安時代の遺構と，遺構の周辺から出土したものである。陶磁器は，調査区南東部の南向き斜面中位の宅地造成地

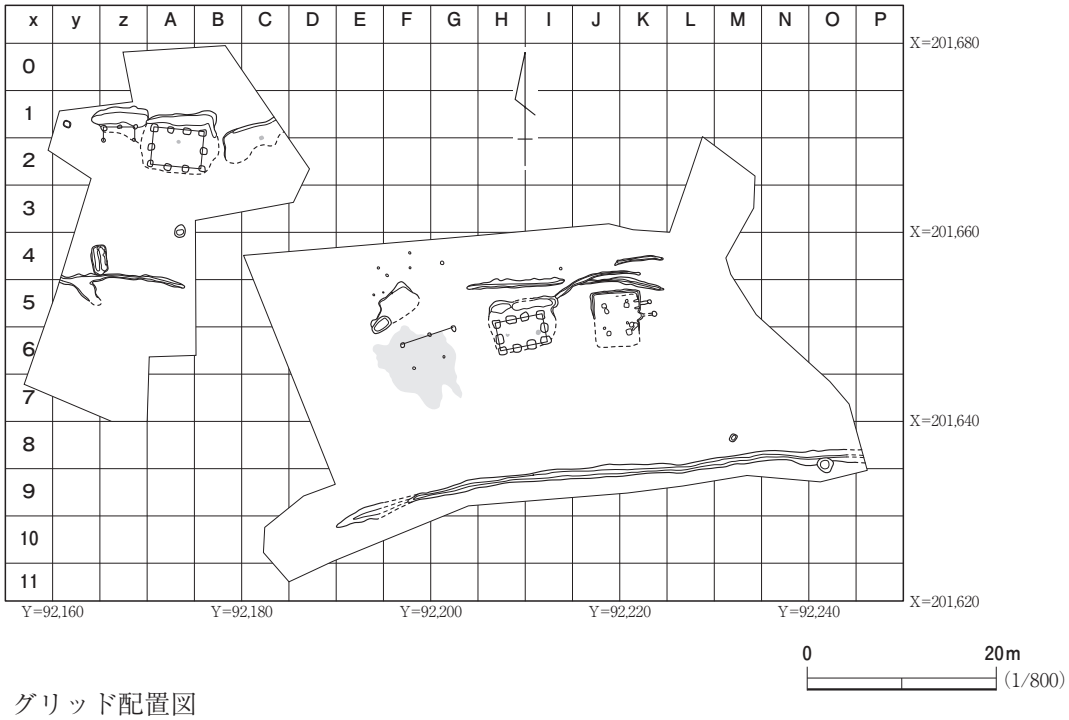


図２　グリッド配置図

付近で多く出土した。また，木製品はすべて井戸跡（ＳＥ１）から出土したものである。

２．基本土層（図４，写真５）

南萱倉遺跡の調査前の現況は中心部分が宅地であったため，後世の地形改変が顕著であり，遺跡の主体となる平安時代の堆積土は残存する範囲が非常に狭い。調査区内の土層観察にあたっては，調査区南東部と北西部に調査区を南北に縦断する土層観察用畦２本と，補助的な短めの土層観察用畦１本を設定し，各層の連続性を確認した。以下，各層の特徴や遺構・遺物の関係について述べていく。

ＬⅠは表土層で，近代以降の盛土を含む。調査区の全域に堆積しており，厚さは15～180㎝である。調査区北西部ではＬⅣ塊を多量に含む明黄褐色土を主体としており，調査区南東部では砂・礫・炭化物・焼土粒を含む暗褐色土と灰黄褐色土が複雑に堆積している。

ＬⅡは色調および土質の違いから，ＬⅡａ・ＬⅡｂ・ＬⅡｃの３層に細分した。

ＬⅡａは，調査区南東部東側の南東向き斜面中位を中心に堆積するにぶい黄褐色土層である。厚さは10～30㎝を測り，近世陶磁器を包含する。

ＬⅡｂは，調査区南東部中央の南向き斜面中位を中心に堆積する褐色土層である。厚さは５～30㎝を測り，ＬⅡａ同様に近世陶磁器を包含する。

ＬⅡｃは，南向き斜面の中位～下位にかけて堆積する黒褐色土層である。厚さは10～40㎝を測り，土師器・須恵器を包含する。調査区北西部と南東部で若干色調が異なり，調査区北西部ではやや明るめの色調である。

ＬⅢは遺跡の基盤となる土層で，色調および土質の違いからＬⅢａ・ＬⅢｂの２層に細分した。

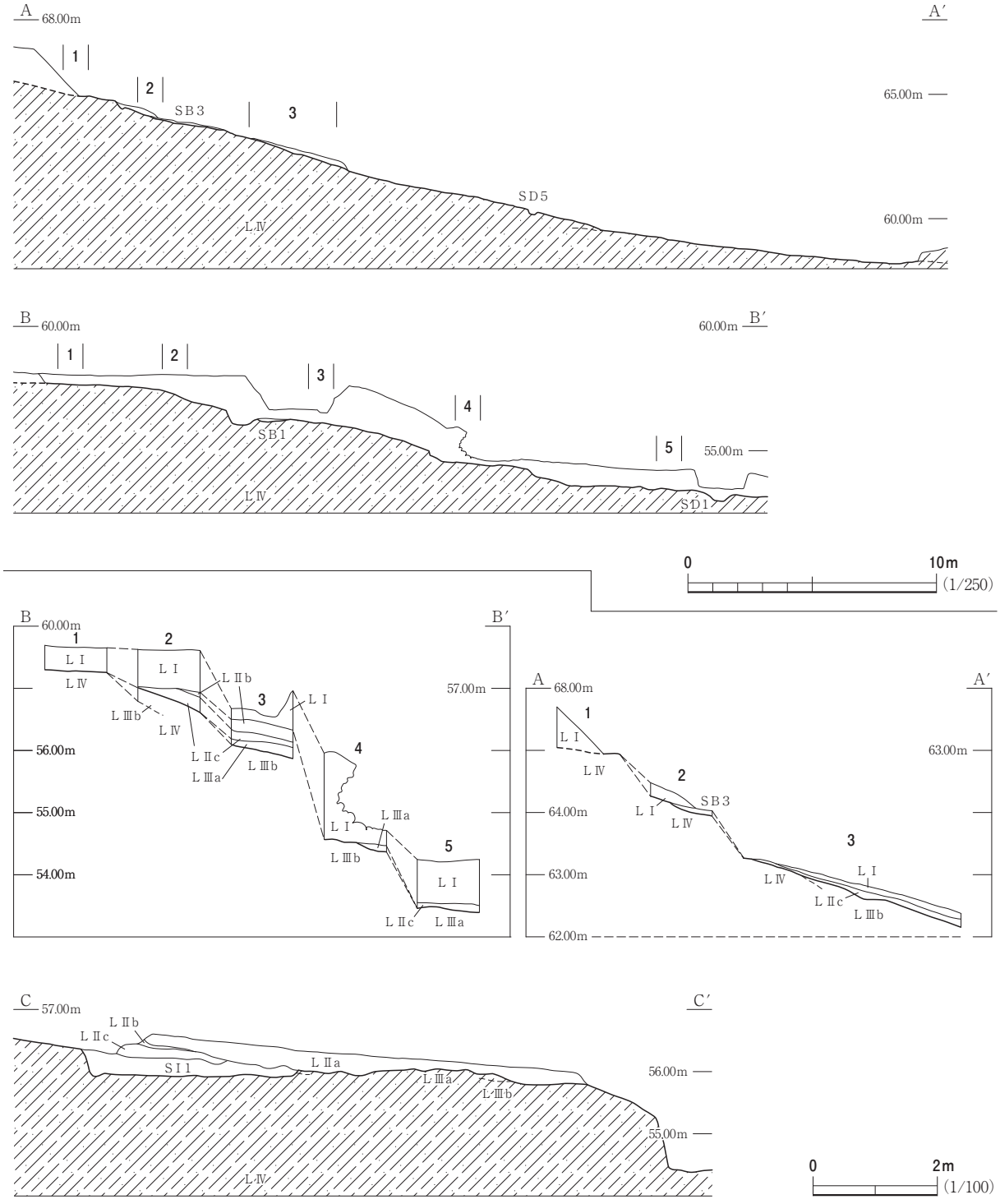
ＬⅢａは調査区南東部の南向き斜面中位を中心に堆積する褐色土層で，厚さは５～30㎝を測る。１号住居跡，１号建物跡，１号柱列跡，１・２・５号溝跡が，この層を掘り込んで形成されていることから，平安時代以前の基盤層と考えられる。

ＬⅢｂは，南向き斜面の中位～上位に露出する黄褐色土のローム層である。

ＬⅣは，調査区北西部の斜面上位や掘立柱建物跡の柱掘形などの，深い遺構の底面付近に認められる浅黄橙色土層である。軟質の岩盤塊を多量に包含する。（笠　井）

遺物包含層
10m
(1/400)
0
SK1
SE1
SD1
SD2
SD3
SD4
SD5
SI1
SI2
SB1
SB2
SB3
SA1
SH1
SX1
SX2
SX3
SK2
SK3
SK4
削平
A
A′
B
B′
C
C′
Y=92,240
Y=92,220
Y=92,200
Y=92,180
X=201,680
X=201,660
X=201,640
53.0m
54.0m
55.0m
56.0m
57.0m
58.0m
59.0m
60.0m
61.0m
62.0m
63.0m
64.0m
65.0m

図３　遺構配置図



基本土層

ＬⅠ　暗褐色土　10YR3/3・灰黄褐色土　10YR4/2・明黄褐色土　10YR7/6（表土・盛土層）
ＬⅡa　にぶい黄褐色土　10YR4/3（ＬⅢb粒・砂多量，ＬⅢb塊・小礫少量，炭化物粒微量）
ＬⅡb　褐色土　10YR4/6（ＬⅢb塊・ＬⅢb粒多量，焼土粒・小礫・炭化物粒少量）
ＬⅡc　黒褐色土　10YR3/2（ＬⅢb粒少量，焼土粒・炭化物粒・砂微量）
ＬⅢa　褐色土　7.5YR4/4（砂・小礫微量）
ＬⅢb　黄褐色土　10YR5/6（ローム層）
ＬⅣ　浅黄橙色土　10YR8/3（岩盤塊多量）

図４　基本土層

第２節　竪穴住居跡

南萱倉遺跡の今回の調査では，２軒の竪穴住居跡を検出した。両住居跡はほぼ同じ場所で重複しており，遺構の主軸方位も近いことから，造り替えの可能性がある。これらの住居跡は出土遺物から平安時代の所産と考えられ，調査区南東部の丘陵南向き斜面中位に立地する。新しい住居跡を１号住居跡，古い住居跡を２号住居跡として報告する。

１号住居跡　ＳＩ１

遺　　構（図５～７，写真６～８）

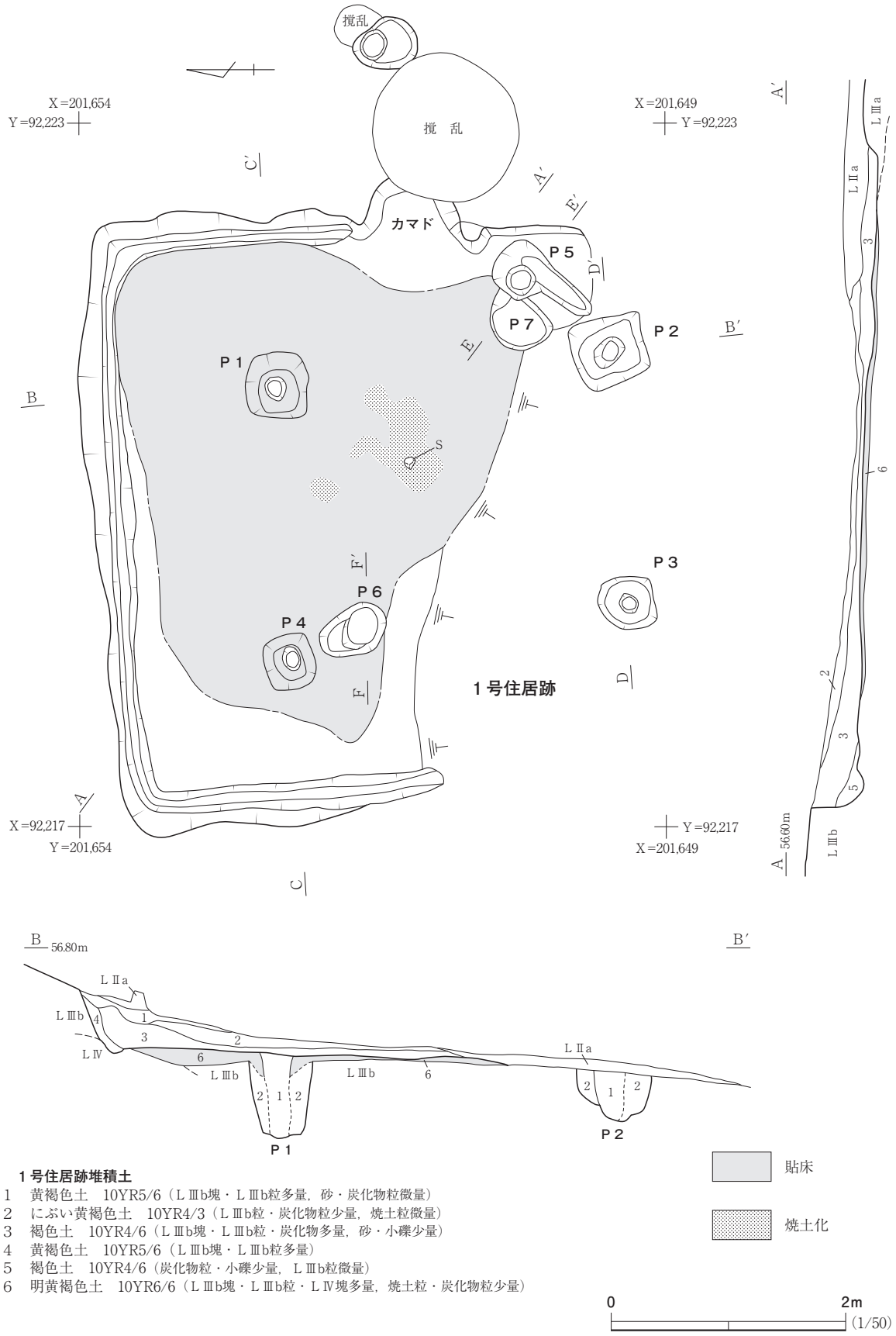
本住居跡は，調査区東部のＪ５・６，Ｋ５・６グリッドに位置する。周囲の地形は，丘陵南向き斜面の中位である。遺構検出面はＬⅢｂ上面であり，遺構内堆積土の色調と近いため検出は困難であった。２号住居跡の真上に構築されており，これよりも新しい。西側４ｍに１号建物跡，北側１～２ｍに２・３号溝跡が所在する。遺構は斜面下方の３分の１ほどが流出して失われている。

遺構内堆積土は６層に分かれた。ℓ１はＬⅢｂ塊・ＬⅢｂ粒を多量に含む黄褐色土で，人為的な埋土と考えられる。ℓ２は包含物の均質なにぶい黄褐色土で，斜面上方からの流れ込みを示す状況から流入土の自然堆積と考えられる。ℓ３はＬⅢｂ塊・ＬⅢｂ粒・炭化物を多量に含む褐色土である。炭化物は建築部材と推定される棒状の塊からなり，樹種同定によるとコナラ属コナラ節の材であることが判明している。ℓ３に混在する炭化物は，床面中央付近に分布しており，住居の焼失に関連するものと考えられる。ℓ４はほぼＬⅢｂ塊・ＬⅢｂ粒で構成される黄褐色土で，東壁沿いに堆積することから周壁の崩落土と考えられる。ℓ５は包含物の均質な褐色土で，壁際からの流れ込みを示す状況から流入土の自然堆積と考えられる。ℓ６は貼床の構築土である。このため，本住居跡は，１次流入土が堆積する以前に火災にあった可能性がある。

平面形は，遺存部分から類推して南北方向に長軸をもつ長方形を呈していたと考えられる。規模は，東西が524㎝，南北が遺存値で430㎝を測るが，柱穴と周壁の位置関係から南北方向は600㎝程度あったと推定できる。遺構の方位は，カマドの位置から東西方向を主軸とし，Ｅ３°Ｎを示す。周壁は北壁が幾分外傾して70°の角度で立ち上がり，東壁・西壁はほぼ垂直に立ち上がる。周壁の遺存高は最も残りの良い北壁で52㎝を測り，東壁・西壁は南に向かって次第に高さを減じる。南壁は遺存していない。床面はＬⅢｂ・ＬⅣ上にℓ６で貼床され，ほぼ水平かつ平坦である。

住居内施設は，カマド１基，焼土化範囲１カ所，柱穴４基，小穴３基，壁周溝を検出した。

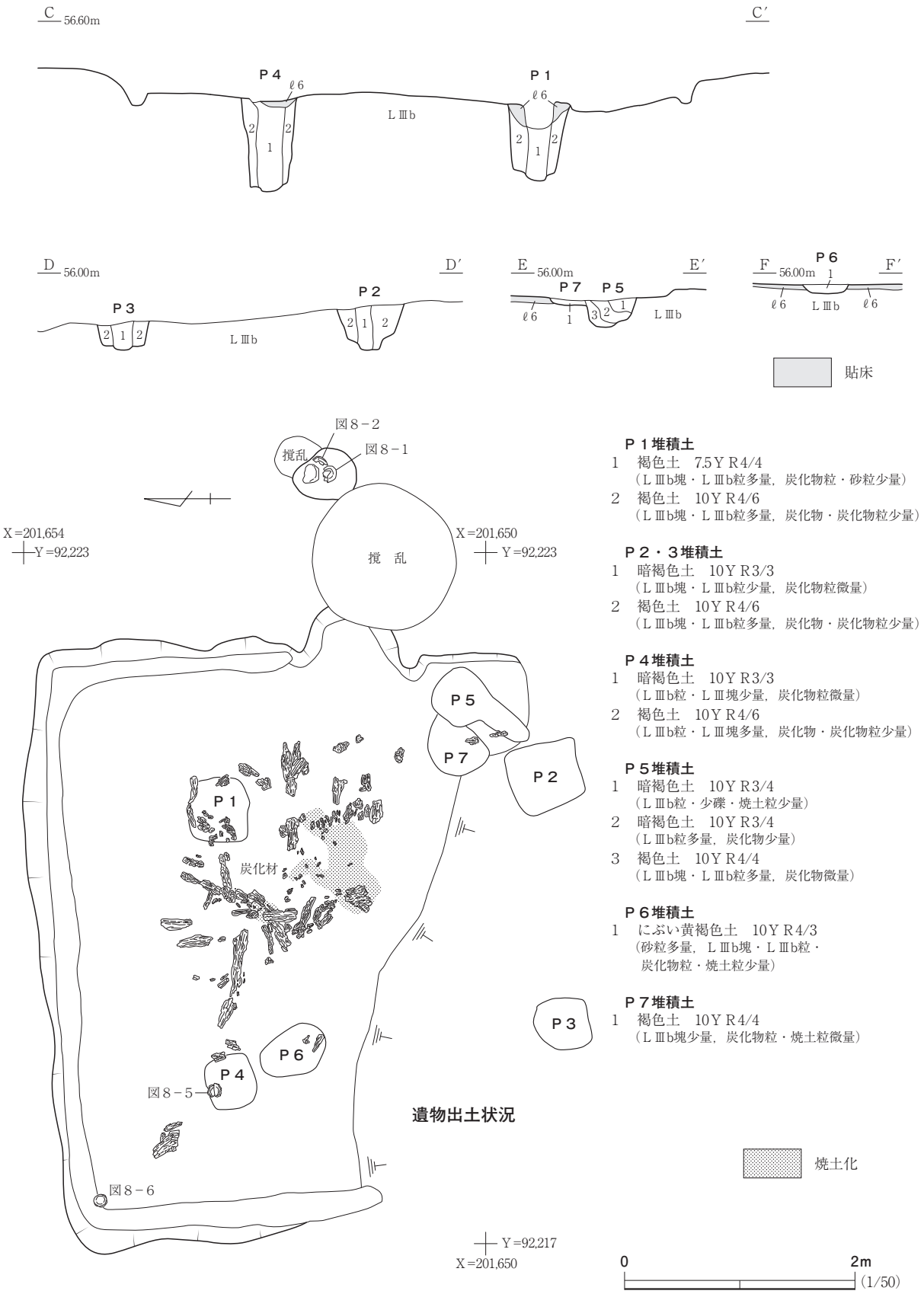
カマドは東壁の中央南寄りに構築され，燃焼室と煙出し穴を確認した。カマドの堆積土は３層に分かれた。堆積と包含物の状況から，ℓ１は燃焼室の天井崩落土，ℓ２は煙出し穴への流入土，ℓ３はカマド袖部の構築土である。カマドの規模は遺存値で，全長200㎝，幅126㎝で，各細部の詳細は次のとおりである。燃焼室は遺存値で奥行き64㎝，焚口幅58㎝を測る。袖部の遺存状況は悪く，



１号住居跡堆積土

1　黄褐色土　10YR5/6（L Ⅲb塊・L Ⅲb粒多量，砂・炭化物粒微量）
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3（L Ⅲb粒・炭化物粒少量，焼土粒微量）
3　褐色土　10YR4/6（L Ⅲb塊・L Ⅲb粒・炭化物多量，砂・小礫少量）
4　黄褐色土　10YR5/6（L Ⅲb塊・L Ⅲb粒多量）
5　褐色土　10YR4/6（炭化物粒・小礫少量，L Ⅲb粒微量）
6　明黄褐色土　10YR6/6（L Ⅲb塊・L Ⅲb粒・L Ⅳ塊多量，焼土粒・炭化物粒少量）

図５　１号住居跡（１）



Ｐ１堆積土
1　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
（ⅠⅢb塊・ⅠⅢb粒多量，炭化物粒・砂粒少量）
2　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6
（ⅠⅢb塊・ⅠⅢb粒多量，炭化物・炭化物粒少量）

Ｐ２・３堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3
（ⅠⅢb塊・ⅠⅢb粒少量，炭化物粒微量）
2　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6
（ⅠⅢb塊・ⅠⅢb粒多量，炭化物・炭化物粒少量）

Ｐ４堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3
（ⅠⅢb粒・ⅠⅢ塊少量，炭化物粒微量）
2　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6
（ⅠⅢb粒・ⅠⅢ塊多量，炭化物・炭化物粒少量）

Ｐ５堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4
（ⅠⅢb粒・少礫・焼土粒少量）
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4
（ⅠⅢb粒多量，炭化物少量）
3　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4
（ⅠⅢb塊・ⅠⅢb粒多量，炭化物微量）

Ｐ６堆積土
1　にぶい黄褐色土　10Ｙ Ｒ4/3
（砂粒多量，ⅠⅢb塊・ⅠⅢb粒・
炭化物粒・焼土粒少量）

Ｐ７堆積土
1　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4
（ⅠⅢb塊少量，炭化物粒・焼土粒微量）

図６　１号住居跡（２）

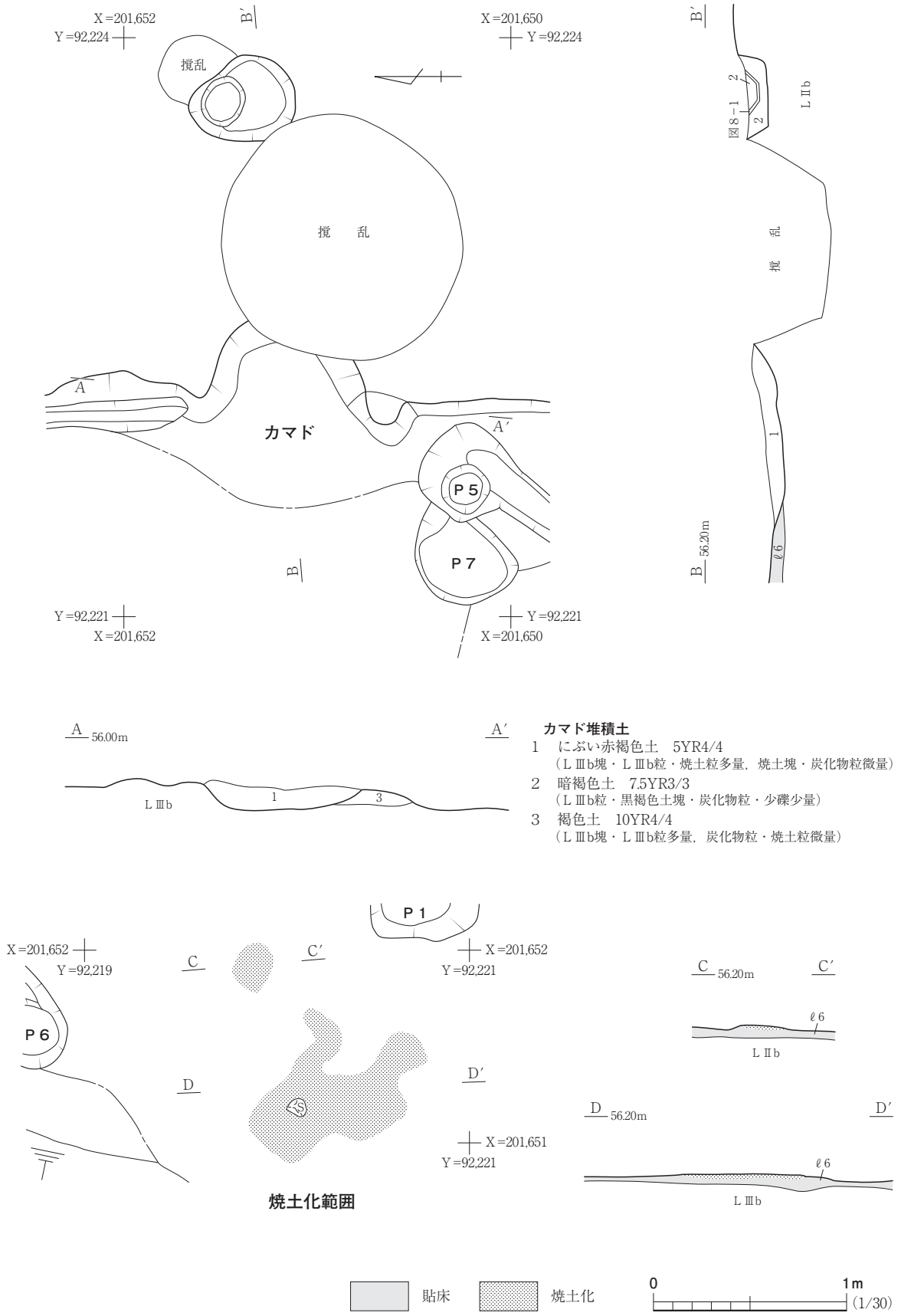


図７　１号住居跡カマド・焼土化範囲

北袖は基部の痕跡が残るのみであり，南袖は長さ26㎝，幅36㎝で，高さは８㎝とかろうじて残存しているのみである。北袖では確認できなかったが，南袖はＬⅢｂ塊・ＬⅢｂ粒からなる褐色土で構築されていた。燃焼室には被熱の痕跡は認められない。煙道は近代の撹乱により壊されていた。煙出し穴は近代の撹乱の東側で確認できた。南北56㎝，東西46㎝の不整楕円形をしており，検出面からの深さは15㎝を測る。底面の北寄りに直径22㎝のくぼみが認められる。煙出し穴内からは，２個体の土師器杯(図８－１・２)と自然礫が出土した。煙出し穴も燃焼室同様に被熱の痕跡は認められなかった。

焼土化範囲はカマドの正面にあたる床面中央の東寄りに位置する。南北80㎝，東西94㎝のアメーバ状に貼床面が焼土化している。焼土化した厚さは２㎝程度である。地床炉の可能性もあるが，本住居跡が火災に遭っているため焼土化範囲とした。

柱穴は方形に配置された４基を検出した。北東のものから時計回りにＰ１～４とした。いずれも方形の掘形をもち，中央に直径20㎝程度の柱痕跡(Ｐ１～Ｐ４ℓ１)が認められ，柱痕跡の周囲に掘形埋土(Ｐ１～Ｐ４ℓ２)を充填し，柱を固定していた。住居跡の貼床は柱掘形上では確認できるが，柱痕跡上では概ね認められないことから，柱を据えた後に貼床を敷設したようである。各柱掘形の規模は，Ｐ１が南北54㎝，東西56㎝，深さ72㎝，Ｐ２が南北62㎝，東西60㎝，深さ42㎝，Ｐ３が南北49㎝，東西45㎝，深さ24㎝，Ｐ４が南北43㎝，東西46㎝，深さ78㎝を測る。柱掘形の深さは不均一であるが，これは床面が南方向へ大きく削られているためで，掘形底面の標高は55.2～55.3ｍにそろっている。

小穴はカマド南西側にＰ５・７が所在し，床面中央西寄りにＰ６が所在する。Ｐ５はＰ７と重複する小穴で，Ｐ７よりも新しい。隅丸方形の本体部から，南西方向へ溝状部が延びる形状である。本体は一辺45㎝，深さ21㎝を測る。底面は西側が最も深く，内湾気味に立ち上がり周壁はほぼ直立する。溝状部分は本体部の南東壁を共有し長さ89㎝，幅20㎝，深さ11㎝を測る。断面形状は逆台形である。堆積土は３層に分けられた。包含物の状況からいずれも人為的な埋土と考えられる。Ｐ６は楕円形の浅い小穴で，北西－南東方向に長軸をもつ。長軸長60㎝，短軸長42㎝，深さ10㎝を測る。底面は平坦で，周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土には砂粒・ＬⅢｂ塊・ＬⅢｂ粒・焼土粒等が混入しており，人為的な埋土と判断した。Ｐ７は不整楕円形の浅い小穴で，北東－南西方向に長軸をとる。長軸長56㎝，短軸長44㎝，深さ４㎝を測る。底面は平坦で，周壁がわずかに立ち上がる。包含物の状況から人為的な埋土と判断した。

壁周溝は遺構北側の周壁沿いに「コ」字状に認められる。断面は「Ｕ」字状で，幅12～30㎝，床面からの深さ５～10㎝を測る。

遺　　物（図８，写真35）

出土遺物は，土師器片95点，須恵器片７点が出土しており，このうち，土師器８点と須恵器３点を図８に図化した。１～５はロクロ成形による土師器杯である。いずれも内面にはヘラミガキと黒色処理が施されている。１～４は底部から内湾気味に立ち上がる器形で，外面の体部下端に手持ち

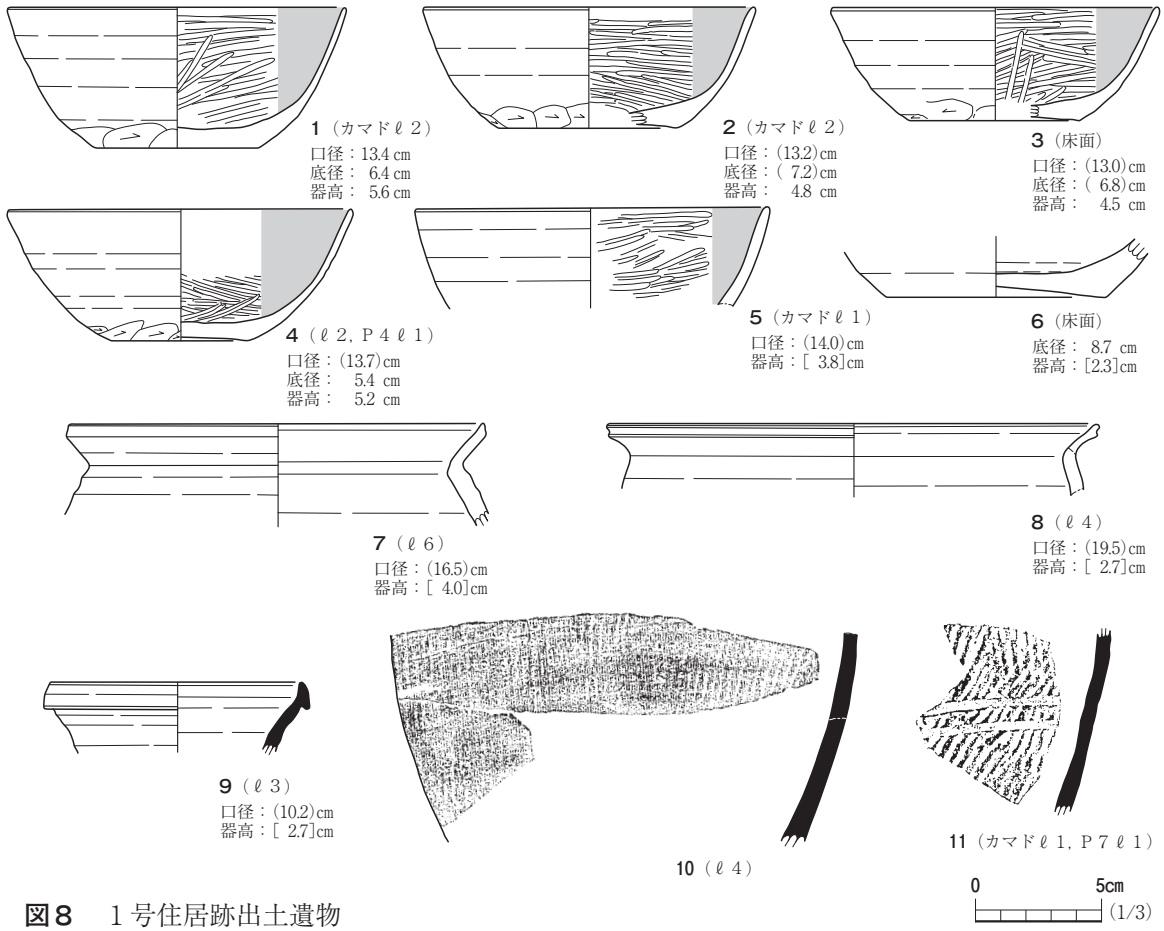


図８　１号住居跡出土遺物

ヘラケズリ再調整が認められる。底面には１・２で手持ちヘラケズリ，４では回転ヘラ切り痕が認められる。３は摩滅して不明である。５は口縁部付近の資料で，１～４同様に内面にヘラミガキと黒色処理が認められる。６は土師器甕の底部付近の資料である。ロクロ成形されており，内外面にロクロ目が認められる。底面には回転糸切り痕が認められ，中央がくぼんでいる。７・８はロクロ成形の土師器甕で，口縁部から肩部にかけての資料である。頸部が「く」字形に屈曲して直線的な口縁部が外傾する器形で，口唇部が上方へ摘み上げられている。９は須恵器瓶の口縁部から頸部の資料である。ロクロ成形で頸部が外反し，口縁部が直立する器形である。口縁部には粘土帯を貼り付けて折返し状に仕上げている。10・11は須恵器甕の胴部資料である。外面に平行タタキ目が認められ，11では横位の平行沈線が施されている。

ま と め

本遺構は平面形が長方形と推定され，東壁にカマドをもつ住居跡である。建築部材と推定される炭化物の存在から，焼失家屋と考えられる。方形で深い柱掘形をもち，貼床を施している。２号住居跡の直上に構築されていることから，建て替えが行われた可能性が高い。

本住居跡の所属時期は，伴出した土師器の年代観から９世紀中葉頃と判断した。なお，出土炭化材の放射性炭素年代測定値は1220 ± 15yrBP であり，暦年較正年代では８世紀前半～９世紀後半の年代が出ている。

（笠　井）

２号住居跡　ＳＩ２

遺　　構（図９・10，写真９・10）

本住居跡は，調査区東部のＪ５・６，Ｋ５・６グリッドに位置する。周囲の地形は丘陵南向き斜面の中位である。遺構検出面はＬⅢｂ上面および１号住居跡床面である。１号住居跡の真下に構築されており，これよりも古い。西側４ｍに１号建物跡，北側１～２ｍに２・３号溝跡が所在する。遺構は１号住居跡の構築により周壁を失っており，カマド付近と３基の柱穴が遺存していた。

遺構内堆積土は１層のみで，カマド近くにかろうじて確認できた。ℓ１はＬⅢｂ粒を多量に含む褐色土で，柱穴とみられるＰ１がこの層を掘り込んでいることから，掘形の埋土と考えられる。

遺構の平面形および規模は，周壁が失われていることから不明であるが，柱穴およびカマドとの位置関係から，一辺400～450㎝程度の方形であったと想定される。床面はＬⅣ上に形成され，ほぼ水平かつ平坦である。

住居内施設は，カマド１基と柱穴３基を検出した。カマドは１号住居跡の東壁北寄りに煙道から煙出し穴の部分が遺存し，その西側に燃焼室の基底部を確認した。柱穴や１号住居跡周壁の位置関係から，カマドは住居跡の北東隅に設けられていたと推定される。カマド堆積土は９層に分かれた。堆積と包含物の状況から，ℓ１・２は燃焼室の天井崩落土，ℓ３は燃焼室内への流入土，ℓ４は煙突の構築材の崩落土，ℓ５～７は煙道の天井崩落土，ℓ８は煙出し穴への流入土と判断した。ℓ９はカマド袖部の構築土である。カマドの規模は，遺存値で全長188㎝，幅104㎝を測る。各細部の詳細は以下のとおりである。燃焼室は遺存値で奥行き42㎝，焚口幅56㎝を測り，底面は平坦であるが，燃焼面は認められなかった。袖部は基底部が遺存していた。北袖は長さ40㎝，幅28㎝，高さ９㎝を測る。南袖は長さ38㎝，幅30㎝，高さ８㎝を測る。袖部はＬⅢｂ塊・ＬⅣ塊からなる明褐色土で構築されていた。煙道は長さ94㎝，幅35㎝，深さ６～28㎝を測る。天井は遺存せず，断面逆台形の溝状を呈する。煙出し穴は煙道の先端に位置し，南北方向に長軸方位をとる平面長方形の穴で，長軸長40㎝，短軸長32㎝，深さ42㎝を測る。両袖部の先端付近，燃焼室奥壁中央の一部，煙道・煙出し穴の側面には被熱して焼土化した範囲が認められる。焼土化した厚さは最も厚い煙道北壁で６㎝を測る。また，カマドの正面にあたるＰ１南東側の床面にも南北23㎝，東西24㎝，厚さ５㎝の方形状の焼土化範囲が認められる。

柱穴は３基を確認した。住居跡床面の北東，南東，南西側に約２ｍ間隔で逆「Ｌ」字状に配置されていた。北西側にもう１基あり，方形に配置されていた可能性が高いが，その推定位置には１号住居跡Ｐ４があり，この掘形に壊されてしまったものと考えられる。北東側から時計回りにＰ１～３とした。Ｐ１は上端の平面形が三角形，下端の平面形が円形をしている。南北50㎝，東西54㎝，深さ15㎝を測る。堆積土は２層に分かれ，ＬⅢｂ塊を混在する褐色土で，堆積状況から人為的埋土と判断した。Ｐ２・３は円形で，Ｐ２が直径25㎝，深さ10㎝，Ｐ３が直径30㎝，深さ６㎝を測る。堆積土はともにＰ１ℓ２に近似する褐色土で，堆積状況から人為的埋土と判断した。

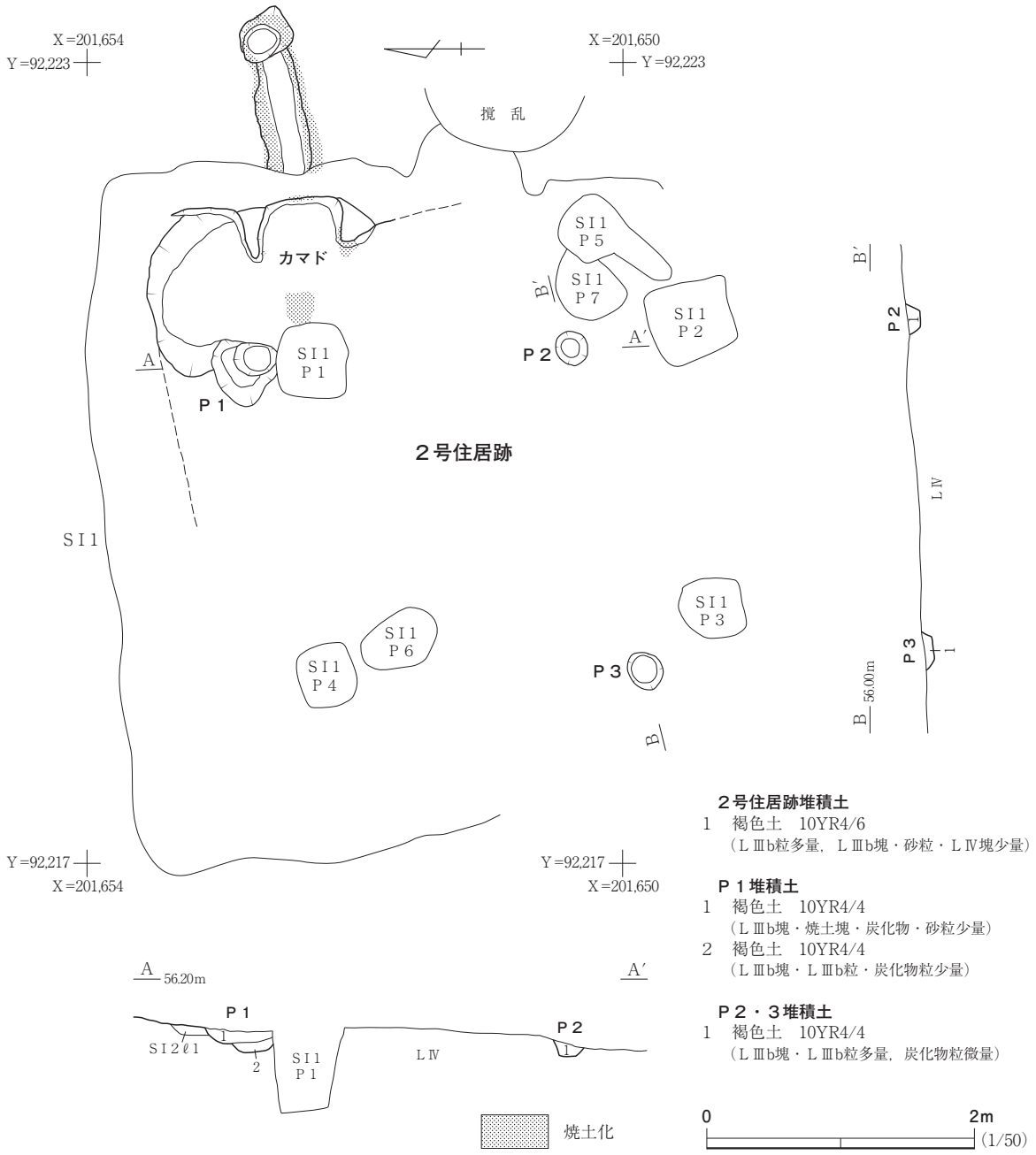


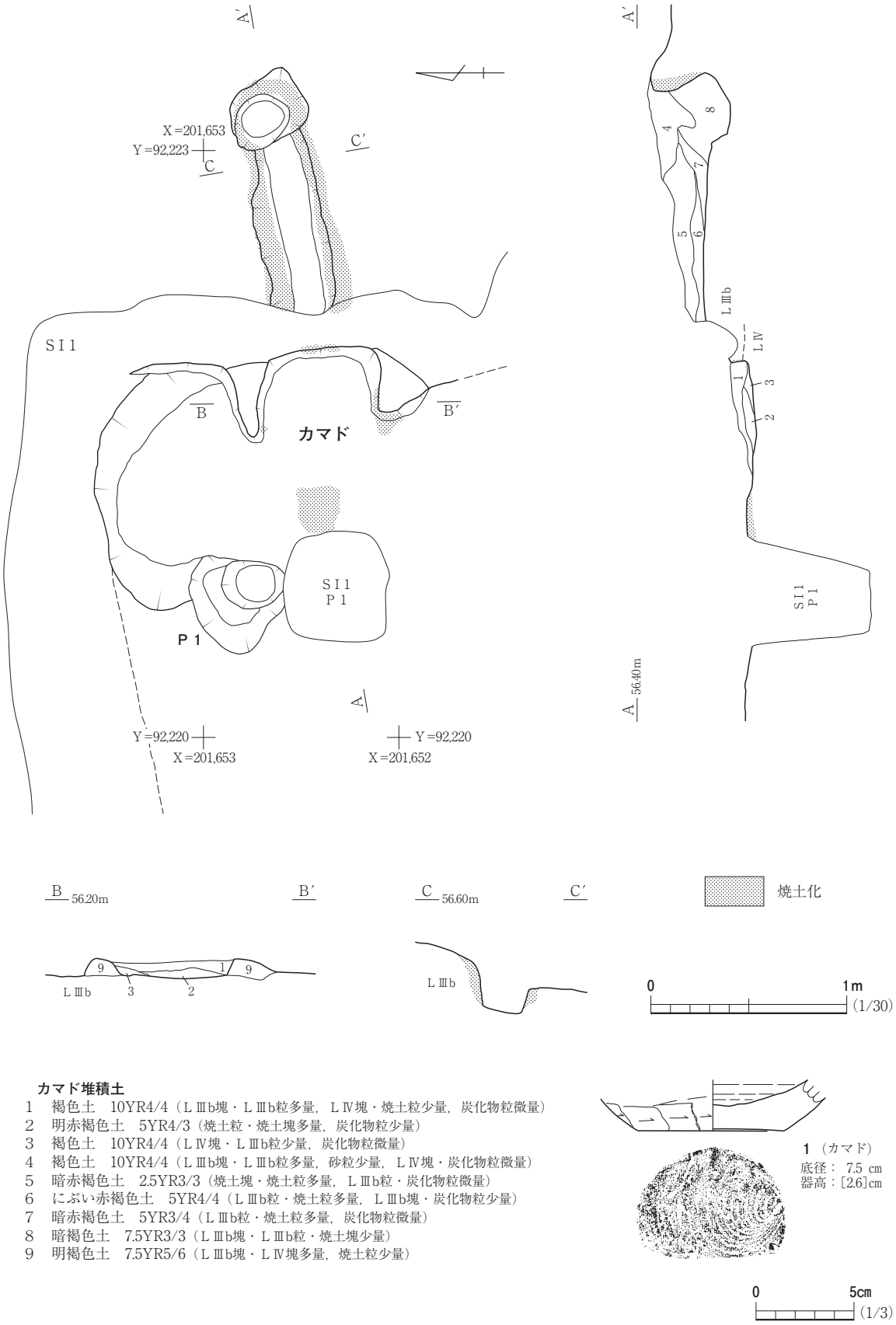
図９　２号住居跡

遺　　物（図10）

本遺構からは，土師器片16点が出土した。このうち１点を図示した。図10－１は土師器甕の底部でカマドの煙道から出土した。ロクロ成形されており，内面にロクロ目が観察できる。外面の体部下端に横方向の手持ちヘラケズリが施されている。底面には回転糸切り痕が残る。

ま と め

本住居跡は１号住居跡の真下で検出された住居跡である。遺構の平面形は柱配置やカマドの位置関係から方形と推定される。カマドは北東壁の北寄りに設置されており，煙道部が良好に遺存していた。１号住居跡とほぼ同じ位置に建てられており，１号住居跡の建て替え前の住居跡と想定して



カマド堆積土

1　褐色土　10YR4/4（ＬⅢb塊・ＬⅢb粒多量，ＬⅣ塊・焼土粒少量，炭化物粒微量）
2　明赤褐色土　5YR4/3（焼土粒・焼土塊多量，炭化物粒少量）
3　褐色土　10YR4/4（ＬⅣ塊・ＬⅢb粒少量，炭化物粒微量）
4　褐色土　10YR4/4（ＬⅢb塊・ＬⅢb粒多量，砂粒少量，ＬⅣ塊・炭化物粒微量）
5　暗赤褐色土　2.5YR3/3（焼土塊・焼土粒多量，ＬⅢb粒・炭化物粒微量）
6　にぶい赤褐色土　5YR4/4（ＬⅢb粒・焼土粒多量，ＬⅢb塊・炭化物粒少量）
7　暗赤褐色土　5YR3/4（ＬⅢb粒・焼土粒多量，炭化物粒微量）
8　暗褐色土　7.5YR3/3（ＬⅢb塊・ＬⅢb粒・焼土塊少量）
9　明褐色土　7.5YR5/6（ＬⅢb塊・ＬⅣ塊多量，焼土粒少量）

1（カマド）
底径：7.5 cm
器高：[2.6]cm

0　5cm
(1/3)

図10　２号住居跡カマド，出土遺物

いる。遺構の所属時期は，１号住居跡との重複関係から９世紀中葉以前と考えられる。なお，Ｐ３出土のコナラ属コナラ節に同定された炭化物の放射性炭素年代測定値は1345±20yrBPであり，暦年較正年代では７世紀中頃～後半のやや古い年代が出ている。（笠　井）

第３節　掘立柱建物跡

本遺跡で検出した掘立柱建物跡は３棟である。すべて平安時代の所産と考えられる。１棟は調査区南東部の丘陵斜面中位で１号住居跡と並び，２棟は調査区北西部の丘陵斜面上位に重複して検出された。いずれの建物跡も斜面地に構築されていることから，斜面の山側を削り谷側に盛土して平坦面を形成している。また，１・２号建物跡では，炉跡と考えられる焼土化範囲を伴う床面を確認した。以下番号順に説明していく。

１号建物跡　ＳＢ１

遺　　構（図11～13，写真11～14）

本遺構は調査区南東部のＨ５・６，Ｉ５・６グリッドに位置し，南向き斜面の中位に立地する。遺構北東側では３号溝跡と重複するが，重複部分の堆積土に明確な差異が認められないことから，同時期に埋没したものと判断した。遺構検出面はＬⅢａ上面で，貼床の一部と炉跡を検出し，調査範囲の拡張に伴い北側の掘削部分を確認した。

本遺構は，斜面を掘削して平場を形成した造成部と，床面・炉跡・柱穴跡で構成される建物本体とから構成される。造成部は，建物北側の斜面山側を平面「コ」字状，断面「Ｌ」字状に掘削して平坦面を造成したものである。造成部の規模は，南北230㎝，東西692㎝，遺構検出面から最深部までの深さ63㎝を測る。造成北壁沿いには幅70～90㎝の浅い溝状のくぼみが認められる。このくぼみの底面は建物床面よりも標高が低いことから，排水路である可能性がある。この浅いくぼみの北端は壁が北東側に70㎝ほど突出しており，この部分に３号溝跡が接続している。削平部分および床面上の堆積土は４層に分かれた。褐色および暗褐色を基調とした土壌で，いずれも斜面上方からの流れ込みが観察できることから，流入土の自然堆積と判断した。

建物本体は，桁行３間，梁行２間の側柱建物跡である。造成部の南側に位置し，柱痕跡が明瞭でないため正確な数値は断定できないが，南北約330㎝，東西約510㎝の規模で，柱間は梁行側で約165㎝，桁行側で約170㎝を測る。建物跡の長軸方位はＥ12°Ｎを示す。

床面は柱穴で囲まれた範囲とほぼ一致し，概ね長方形の範囲で，規模は南北400㎝，東西610㎝を測る。床面はℓ５とした黄褐色土で形成された貼床である。この層は斜面掘削時の排土と考えられるＬⅢｂ塊・ＬⅣ塊で構成されている。床面はほぼ平坦であるが，斜面下方にあたる南側へ緩やかに下っている。

炉跡は地床炉で，床面の西側と東側の２カ所で検出した焼土化範囲である。西側のものを炉１，

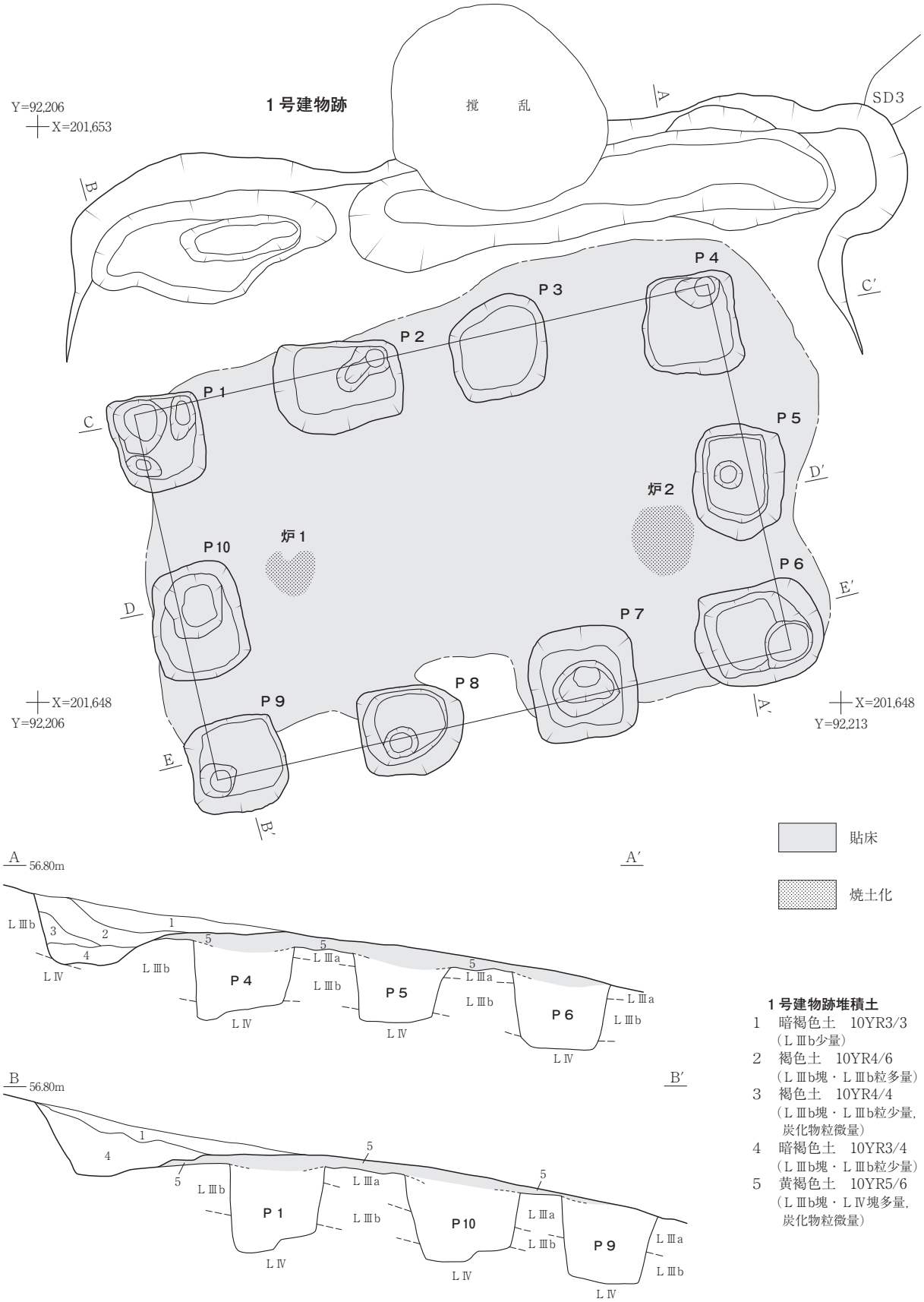
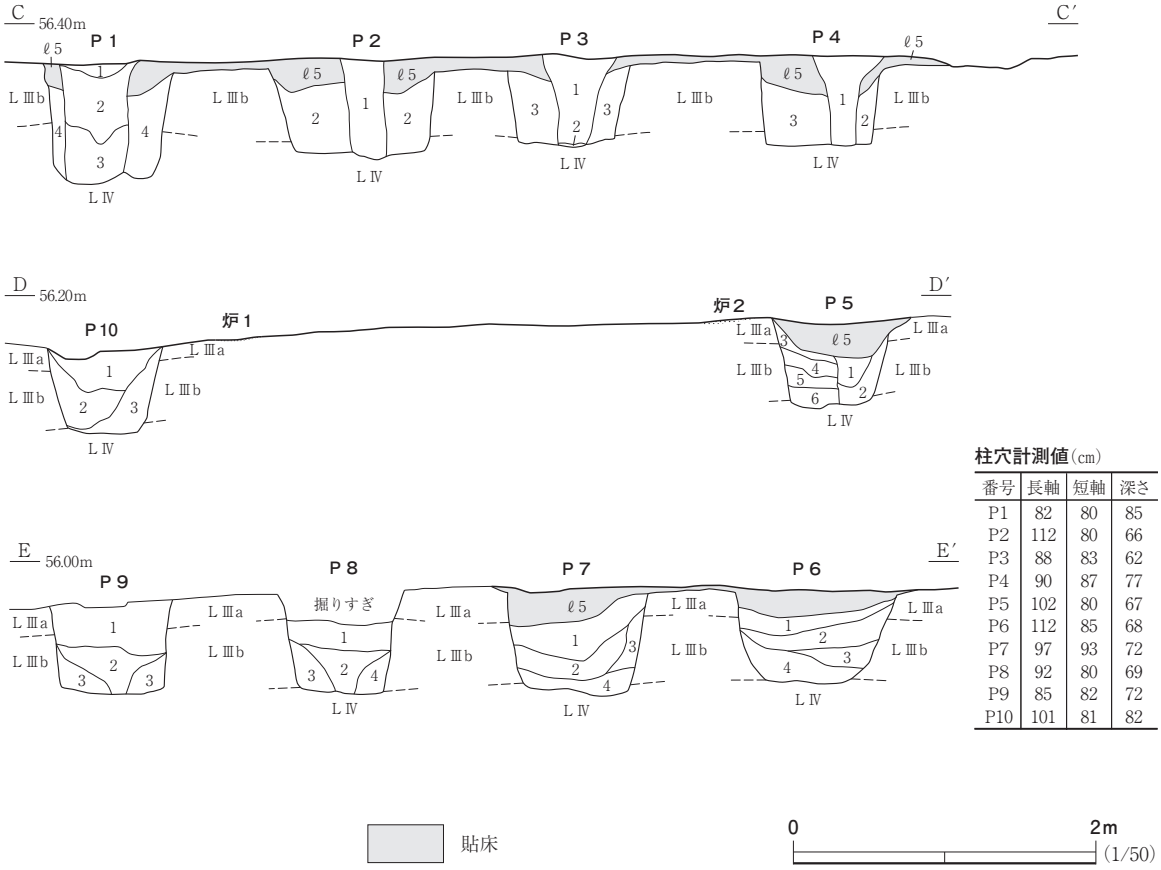

１号建物跡
撹　乱
SD3
Y=92,206
X=201,653
X=201,648
Y=92,206
X=201,648
Y=92,213
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
炉１
炉２
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
貼床
焼土化
56.80m
LⅢb
LⅢa
LⅣ
1号建物跡堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3
（LⅢb少量）
2　褐色土　10YR4/6
（LⅢb塊・LⅢb粒多量）
3　褐色土　10YR4/4
（LⅢb塊・LⅢb粒少量，炭化物粒微量）
4　暗褐色土　10YR3/4
（LⅢb塊・LⅢb粒少量）
5　黄褐色土　10YR5/6
（LⅢb塊・LⅣ塊多量，炭化物粒微量）
0
2m
(1/50)

図11　１号建物跡（１）



柱穴計測値(cm)

番号	長軸	短軸	深さ
P1	82	80	85
P2	112	80	66
P3	88	83	62
P4	90	87	77
P5	102	80	67
P6	112	85	68
P7	97	93	72
P8	92	80	69
P9	85	82	72
P10	101	81	82

Ｐ１堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（ⅢLb粒・ⅢLb塊少量，炭化物粒微量）
2　黄褐色土　10YR5/6（ⅢLb塊・ⅢLb粒多量，炭化物粒微量）
3　褐色土　10YR4/4（ⅢLb塊・ⅢLb粒少量，炭化物粒微量）
4　褐色土　10YR4/4
（ⅢLb粒多量，ⅢLb塊・ⅣL塊少量，炭化物粒微量）

Ｐ２堆積土
1　黄褐色土　10YR5/6（ⅢLb塊・ⅢLb粒多量，炭化物粒微量）
2　褐色土　10YR4/4
（ⅢLb粒多量，ⅢLb塊・ⅣL塊少量，炭化物粒微量）

Ｐ３堆積土
1　黄褐色土　10YR5/6（ⅢLb塊・ⅢLb粒多量，炭化物粒微量）
2　明黄褐色土　10YR6/6（ⅢLb粒多量）
3　褐色土　10YR4/4
（ⅢLb粒多量，ⅢL塊・ⅣL塊少量，炭化物粒微量）

Ｐ４堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（ⅢLb粒・ⅢLb塊少量，炭化物粒微量）
2　黄褐色土　10YR5/6（ⅢLb塊・ⅢLb粒多量，炭化物粒微量）
3　褐色土　10YR4/4
（ⅢLb粒多量，ⅢLb塊・ⅣL塊少量，炭化物粒微量）

Ｐ５堆積土
1　褐色土　10YR4/4（ⅢLb塊・ⅢLb粒少量，炭化物粒微量）
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3
（ⅢLb塊・ⅢLb粒・小礫少量，炭化物粒微量）
3　褐色土　10YR4/4（ⅢLb塊・ⅢLb粒少量，炭化物粒微量）
4　明黄褐色土　10YR6/6（ⅢLb塊多量，炭化物粒微量）
5　褐色土　10YR4/4（ⅢLb塊・ⅢLb粒少量，炭化物粒微量）
6　明黄褐色土　10YR6/6（ⅢLb塊多量，炭化物粒微量）

Ｐ６堆積土
1　明黄褐色土　10YR6/6（ⅢLb塊多量，炭化物粒微量）
2　褐色土　10YR4/4（ⅢLb塊・ⅢLb粒少量，炭化物粒微量）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3
（ⅢLb塊・ⅢLb粒・小礫少量，炭化物粒微量）
4　褐色土　10YR4/4（ⅢLb塊・ⅢLb粒少量，炭化物粒微量）

Ｐ７堆積土
1　明黄褐色土　10YR6/6（ⅢLb塊多量，炭化物粒微量）
2　褐色土　10YR4/6（ⅢLb塊・ⅢLb粒多量，ⅣL粒少量）
3　黄褐色土　10YR5/6（ⅢLb塊・ⅢLb粒多量，炭化物粒微量）
4　にぶい黄褐色土　10YR4/3
（ⅢLb塊・ⅢLb粒・小礫少量，炭化物粒微量）

Ｐ８堆積土
1　明黄褐色土　10YR6/6（ⅢLb塊多量，炭化物粒微量）
2　褐色土　10YR4/6（ⅢLb塊・ⅢLb粒多量，ⅣL粒少量）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3
（ⅢLb塊・ⅢLb粒・小礫少量，炭化物粒微量）
4　黄褐色土　10YR5/6（ⅢLb塊・ⅣL塊多量）

Ｐ９堆積土
1　明黄褐色土　10YR6/6（ⅢLb塊多量，炭化物粒微量）
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3
（ⅢLb塊・ⅢLb粒・小礫少量，炭化物粒微量）
3　褐色土　10YR4/6（ⅢLb塊・ⅢLb粒多量，ⅣL粒少量）

Ｐ10堆積土
1　明黄褐色土　10YR6/6（ⅢLb塊多量，炭化物粒微量）
2　褐色土　10YR4/4（ⅢLb塊・ⅢLb粒少量，炭化物粒微量）
3　明黄褐色土　10YR6/6（ⅢLb塊多量，炭化物粒微量）

図12　１号建物跡（２）

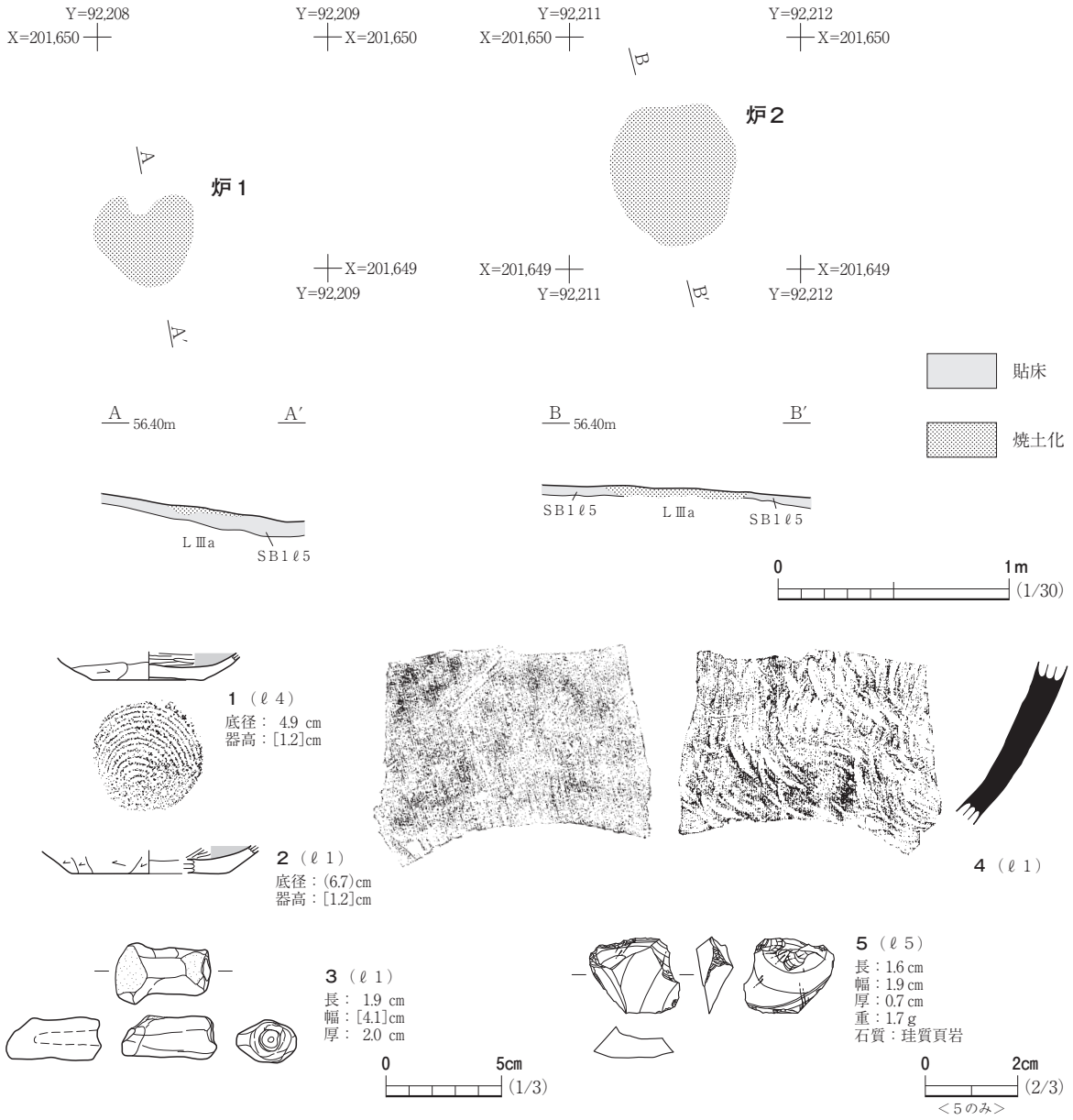


図13　１号建物跡炉，出土遺物

東側のものを炉２とした。炉１は平面ハート形で，南北38㎝，東西40㎝，焼土化した厚さ４㎝を測る。炉２は平面楕円形で，南北60㎝，東西55㎝，焼土化した厚さ４㎝を測る。

柱穴は10カ所で検出し，北西隅から時計回りにＰ１～10とした。柱掘形は方形および長方形をしており，長軸長が82～112㎝，短軸長が80～93㎝，検出面からの深さ62～85㎝を測る。柱痕跡は貼床構築土であるℓ５が柱掘形の上面を覆っていたため，平面で明確に確認できたものはなく，Ｐ１～５の断面で確認した。断面から推定される柱の太さは20～40㎝である。柱掘形内の堆積土と堆積状況は場所により異なった様相を示し，大きく３つの群に分かれる。１つめの一群は建物跡北側のＰ１～４で，これらの柱穴では，中央付近に柱痕跡とみられる混入物の少ない黄褐色土を主体とする堆積土（Ｐ１ℓ１～３，Ｐ２ℓ１，Ｐ３ℓ１・２，Ｐ４ℓ１）があり，その両側に掘形埋土と考えられるＬⅢｂ塊等を多量に含む褐色土が充填されている。Ｐ１～４の掘形埋土と考えられる

堆積土は，底面からほぼ一様な堆積土が貼床層の直下まで充填されるという特徴がある。２つめの一群は建物跡南東側のＰ５～７で，掘形埋土と考えられる堆積土が黄褐色土・にぶい黄褐色土・褐色土等の性質の異なる堆積土を薄く積み重ねて充填される傾向が認められる。柱痕跡とみられる堆積土はＰ５のℓ１・２で認められるが，そのほかの柱穴では状況が不明である。３つめの一群は建物跡南西側のＰ８～10で，いずれの柱穴でも柱痕跡の状況は不明である。掘形埋土と考えられる堆積土の状況は，底面近くでは，流れ込みの状況を示す三角堆積が確認でき，これらの層を覆うように明黄褐色土が充填されている。

遺　　物（図13，写真36）

本遺構からは，土師器片64点，須恵器片１点，石器１点が出土し，このうち土師器３点，須恵器１点，石器１点を図13に図示した。１・２は土師器杯の底部資料である。ともにロクロ成形され，内面にヘラミガキと黒色処理が施され，体部下端に手持ちヘラケズリが認められる。１では底面に回転糸切り痕も観察できる。３は小型の把手付土鍋の把手部分と推定される。図の左側が鍋の体部側と考えられるが，摩滅が顕著で割れ口の状況は不明である。図の右側は柄側で，棒状の柄を挿入したと考えられる直径６㎜，長さ３㎝の穴が開いている。４は須恵器甕の胴部資料である。外面に縦方向の平行タタキ目，内面に重弧状の当具痕が認められる。５は２次加工のある剝片である。珪質頁岩の台形をした剝片の一辺に両面から調整剝離が加えられている。

ま と め

本遺構は桁行３間，梁行２間の斜面地に建てられた側柱の掘立柱建物跡である。貼床および炉跡の存在から明瞭な床面を有することが判明した。柱穴は方形および長方形の平面形で，深さ60㎝を超える規模の大きな掘形をもつ。Ｐ１～Ｐ４の堆積状況から，柱痕跡とみられる堆積土は，貼床構築土であるℓ５を貫いて堆積しており，掘形埋土と考えられる堆積土はその上面をℓ５に覆われている。このことから，柱の設置順序は掘形の掘削→柱の据付→掘形埋土の充填→貼床の敷設であったと想定できる。

本遺構の所属時期は，出土土師器から平安時代の９世紀中葉以降と考えている。　　（笠　井）

２号建物跡　ＳＢ２

遺　　構（図14～16，写真15～18）

本遺構は，調査区の北西部のｚ１・２，Ａ１・２，Ｂ１・２グリッドにまたがって位置する。３号建物跡，３号特殊遺構と重複し，本遺構が最も新しい。本遺構より上方部分は削られているため，現状では南向き斜面の上位に位置している。遺構の検出面はＬⅢｂ上面である。

本遺構は，傾斜地に建てられた掘立柱建物跡である。斜面を断面Ｌ字状に掘削し，造成した平坦面の上に建物を建てている。造成した範囲は，東西が700㎝以上，南北が600㎝以上を測り，検出面より最大で60㎝程度掘り込んでいる。斜面掘削後に，平坦面を成形するために盛土造成を行っており，ほぼ水平な床面を形成する。北側の壁に沿った部分は，ほかの平坦部よりも掘り下げられて

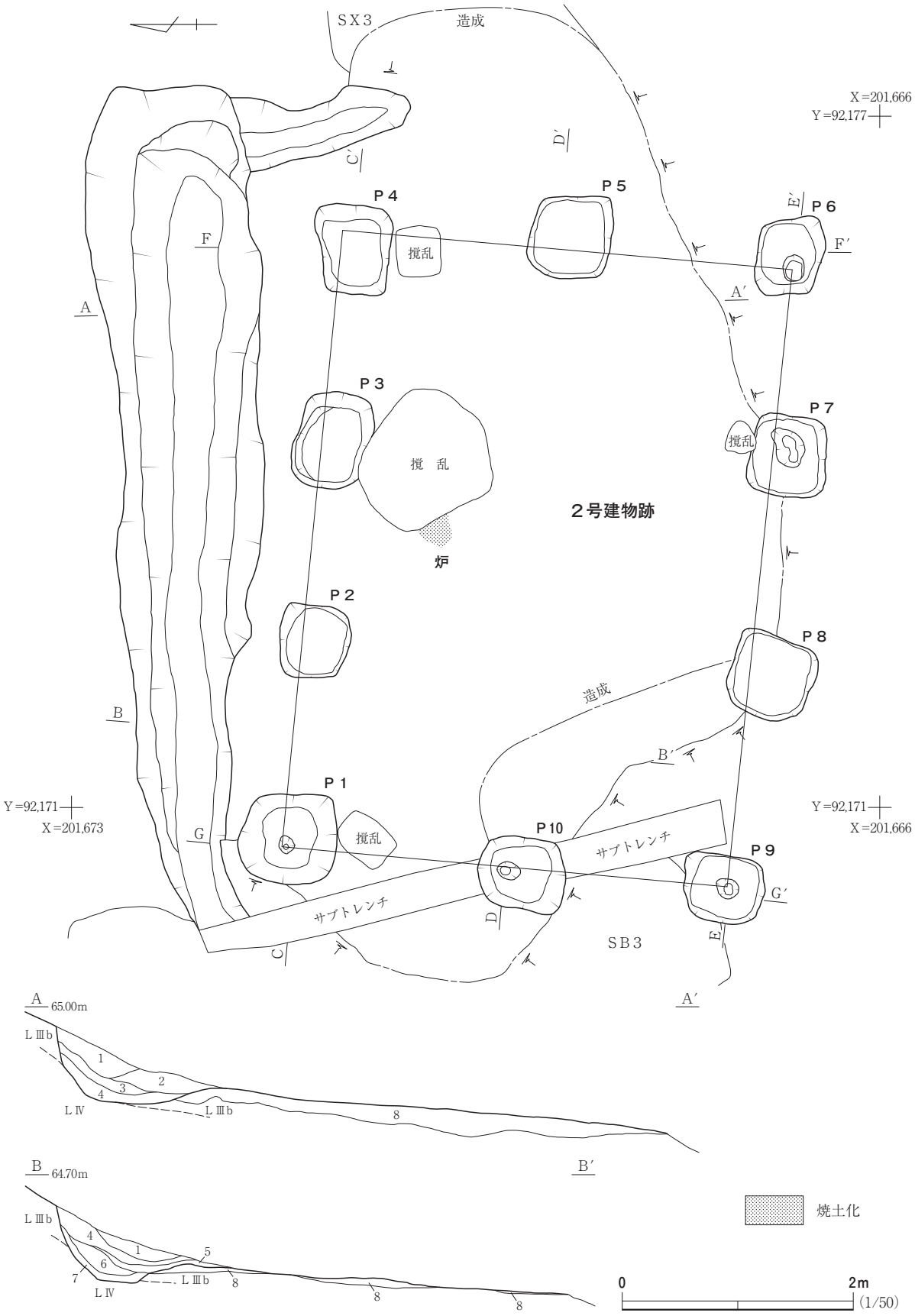
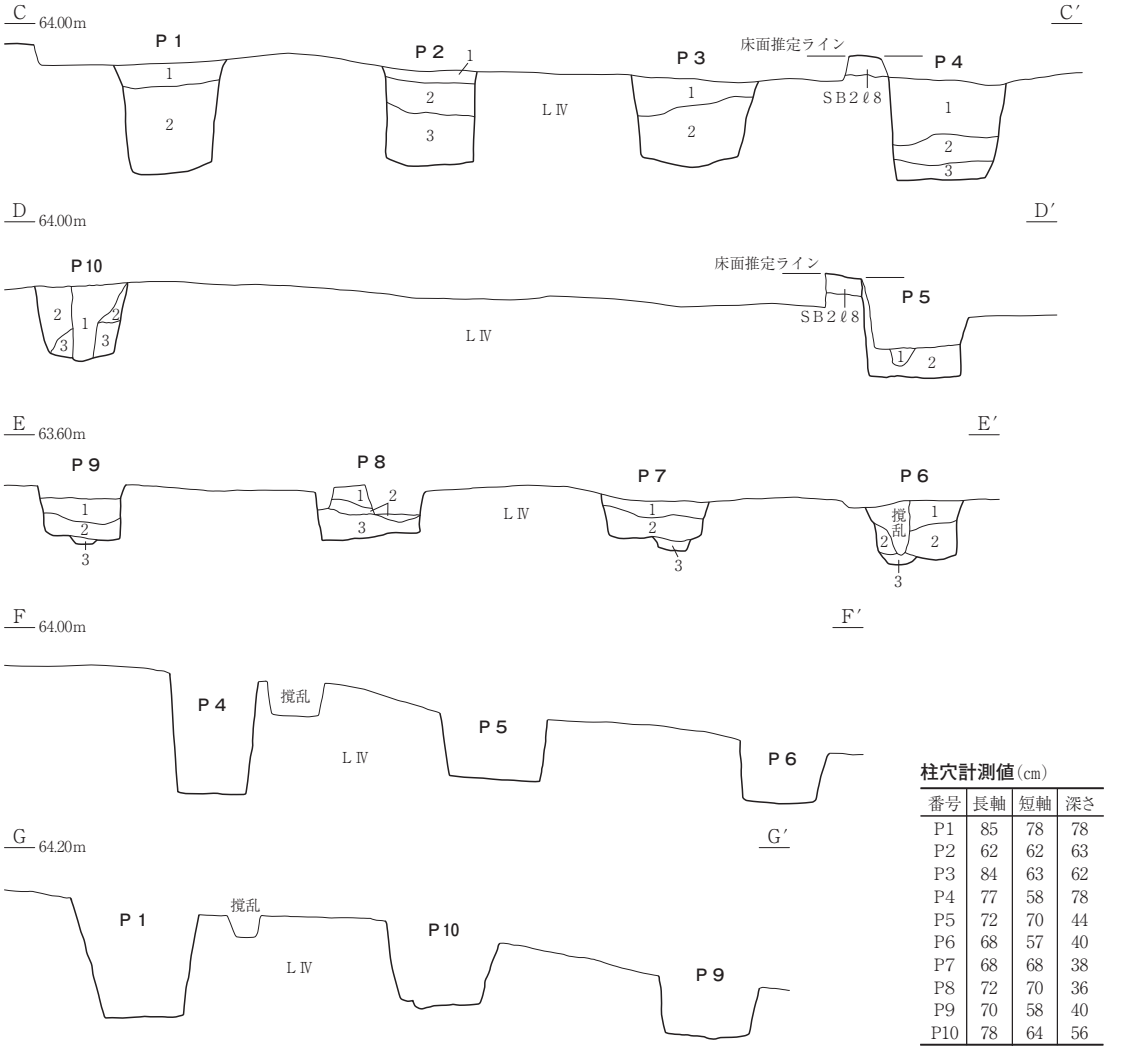

SX3
造成
X=201,666
Y=92,177
P4
P5
P6
P3
P7
P2
P8
P1
P10
P9
撹乱
撹　乱
炉
２号建物跡
サブトレンチ
SB3
Y=92,171
X=201,673
Y=92,171
X=201,666
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
G
G′
65.00m
64.70m
L Ⅲb
L Ⅳ
焼土化
0
2m
(1/50)

図14　２号建物跡（１）



柱穴計測値(cm)

番号	長軸	短軸	深さ
P1	85	78	78
P2	62	62	63
P3	84	63	62
P4	77	58	78
P5	72	70	44
P6	68	57	40
P7	68	68	38
P8	72	70	36
P9	70	58	40
P10	78	64	56

２号建物跡堆積土

1　褐色土　10YR4/4
（ⅢLb粒多量，ⅢLb塊・ⅣL塊少量，炭化物粒微量）
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3
（ⅢL粒・ⅣL粒少量，炭化物粒微量）
3　褐色土　10YR4/4
（ⅢLb粒多量，ⅢLb塊・ⅣL塊少量，炭化物粒微量）
4　黄褐色土　10YR5/8（ⅢLb塊・ⅢL粒多量，ⅣL塊少量）
5　明黄褐色土　10YR7/6（ⅣL塊・ⅣL粒多量，ⅢLb粒少量）
6　にぶい黄褐色土　10YR4/3（ⅣL塊少量，炭化物粒微量）
7　明黄褐色土　10YR7/6
（ⅣL粒多量，ⅣL塊少量，炭化物粒微量）
8　褐色土　7.5YR4/4（ⅢLb塊・ⅣL塊多量，ⅣL粒微量）

Ｐ１堆積土

1　黄褐色土　10YR5/6（砂多量，ⅣL塊少量）
2　黄褐色土　10YR5/8（ⅣL塊少量）

Ｐ２堆積土

1　黄褐色土　10YR5/6（砂多量，ⅣL塊少量）
2　黄褐色土　10YR5/8（ⅣL塊少量）
3　にぶい黄褐色土　10YR5/4（砂・ⅣL塊微量）

Ｐ３堆積土

1　黄褐色土　10YR5/8（ⅣL塊少量）
2　にぶい黄褐色土　10YR5/4（砂・ⅣL塊微量）

Ｐ４堆積土

1　黄褐色土　10YR5/6（砂多量，ⅣL塊少量）
2　にぶい黄褐色土　10YR5/4（砂微量）
3　黄褐色土　10YR5/8（ⅣL塊少量）

Ｐ５堆積土

1　明褐色土　7.5YR5/6
2　褐色土　10YR4/6（砂・ⅢLb塊・ⅣL塊少量）

Ｐ６堆積土

1　明褐色土　7.5YR5/6
2　黄褐色土　10YR5/6（砂多量，ⅢLb塊・ⅣL塊少量）
3　黄褐色土　10YR5/8（砂多量）

Ｐ７堆積土

1　褐色土　10YR4/6（砂・ⅢLb塊・ⅣL塊少量）
2　黄褐色土　10YR5/6（砂多量，ⅢLb塊・ⅣL塊少量）
3　黄褐色土　10YR5/8（砂多量）

Ｐ８堆積土

1　褐色土　10YR4/6（砂・ⅢLb塊・ⅣL塊少量）
2　黄褐色土　10YR5/6（砂多量，ⅢLb塊・ⅣL塊少量）
3　黄褐色土　10YR5/8（砂多量）

Ｐ９堆積土

1　褐色土　10YR4/6（砂・ⅢLb塊・ⅣL塊少量）
2　黄褐色土　10YR5/6（ⅢLb塊，ⅣL塊多量）
3　にぶい黄褐色土　10YR6/3

Ｐ10堆積土

1　明褐色土　7.5YR5/6（黒色土粒微量）
2　黄褐色土　10YR5/6（砂多量，ⅢLb塊・ⅣL塊少量）
3　にぶい黄褐色土　10YR6/3

図15　２号建物跡（２）

おり，溝状をなす。平坦面への雨水の浸入を防ぐ，排水路であった可能性がある。

堆積土は８層に細分した。ℓ１～７は，いずれも斜面上位からの流入による自然堆積と考えられる。このうち，溝の東側最下層に堆積しているℓ４が西側においては上層に位置し，ℓ５～７は遺構の西側にのみ堆積していることから，溝の西側はある時期に埋没し，溝の東側のみが開口していた可能性がある。ℓ８は褐色土で締まりが強く，ＬⅢｂやＬⅣなどの塊を多量に含んでいる。造成の際の人為堆積であると判断した。本層は最も厚い部分で20㎝の厚さがあるが，部分的には本層が認められずＬⅢｂが露出している箇所がある。

平坦面の中央には，桁行３間，梁行２間で平面形が長方形を呈する側柱建物が位置する。建物の長軸方位は東西方向で，Ｅ10°Ｓを示す。ほぼ斜面の等高線に沿って建物の長軸方位を設定している。建物跡の規模は，桁行にあたる東西方向が約540㎝，梁行にあたる南北方向が約390㎝を測る。柱間はＰ１－Ｐ10間で190㎝，Ｐ６－Ｐ７間で150㎝である。

柱穴内の堆積土は，ℓ８と同様にＬⅣ塊を多量に含み，特に南側の柱穴は認識するのが困難であった。このため，柱痕跡は掘形底部の沈み込みや断面からの確認を行ったものであり，検出面での確認は行えなかった。柱痕跡を推定できたのは，Ｐ１・６・７・９・10の５基である。

柱穴には，いずれも大型の掘形が伴う。柱掘形は１辺が60～80㎝の長方形および方形を呈する。Ｐ１－Ｐ４間で，床面から約80㎝程度，Ｐ10－Ｐ５間で約60㎝程度掘り込んでいる。南側のＰ６－Ｐ９間では，床面が流出しているため，約40㎝と浅めであるが，掘形底面の標高は北側の柱列とほぼ同じ標高となるため，底面はほぼ一定の深さとなっている。Ｐ１～４の掘形は，ℓ８の上面から確認できたため，床面構築後に柱掘形を掘削したと推定される。このことは，Ｐ５の断面からも確認した。掘形内の堆積土は，それぞれ２層ないし３層に分層した。Ｐ１やＰ２のように，水平堆積するものは，すべて柱を据える時の人為堆積と考える。Ｐ６やＰ７，Ｐ９のℓ３のような落ち込みは，柱に起因するものと考えているが，上層の断面から確認することができなかった。Ｐ10では，ℓ１の堆積状況から，柱を抜き取った可能性がある。

遺構内施設としては，床面に地床炉と考えられる焼土化範囲を検出した。建物跡の中心から北へ約80㎝の場所に位置する。焼土化した範囲は近世以降の撹乱を受けており，遺存部で30～20㎝を測る不正円形を呈する。焼土化した厚さは，一番厚いところで６㎝を測る。

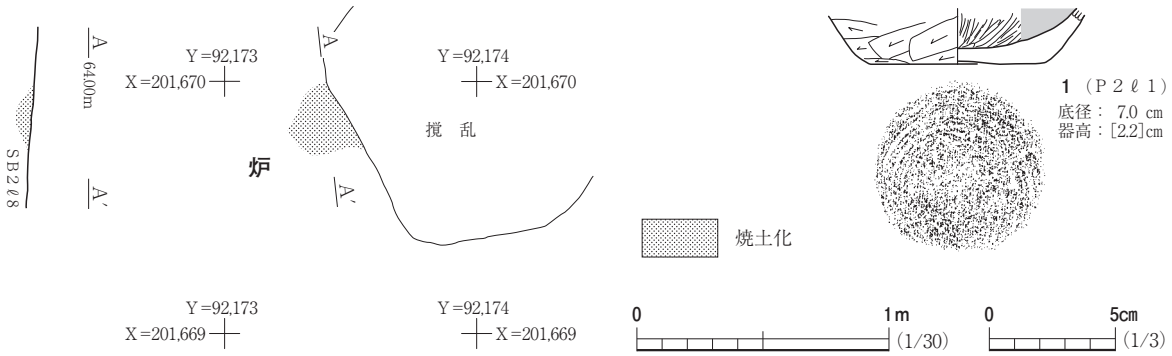


図16　２号建物跡炉，出土遺物

遺　　物（図16，写真36）

本遺構に伴う遺物として，土師器片７点が出土した。図16－１はＰ２ℓ１から出土した土師器杯である。底部資料で，体部下端は手持ちヘラケズリが施される。内面はミガキ調整が行われ，黒色処理が施される。底部には，回転糸切り痕が確認できる。

ま と め

本遺構は，丘陵の斜面部を造成して形成された平坦面に建てられた，桁行３間，梁行２間の側柱の掘立柱建物跡である。規模や形状，床面上に炉跡が認められることなどから，１号建物跡と同様の性格をもつ遺構と考えられる。本遺構の所属時期は，出土遺物の年代観から平安時代の９世紀中葉頃と考えられる。（西　澤）

３号建物跡　ＳＢ３

遺　　構（図17・18，写真15・16・19・20）

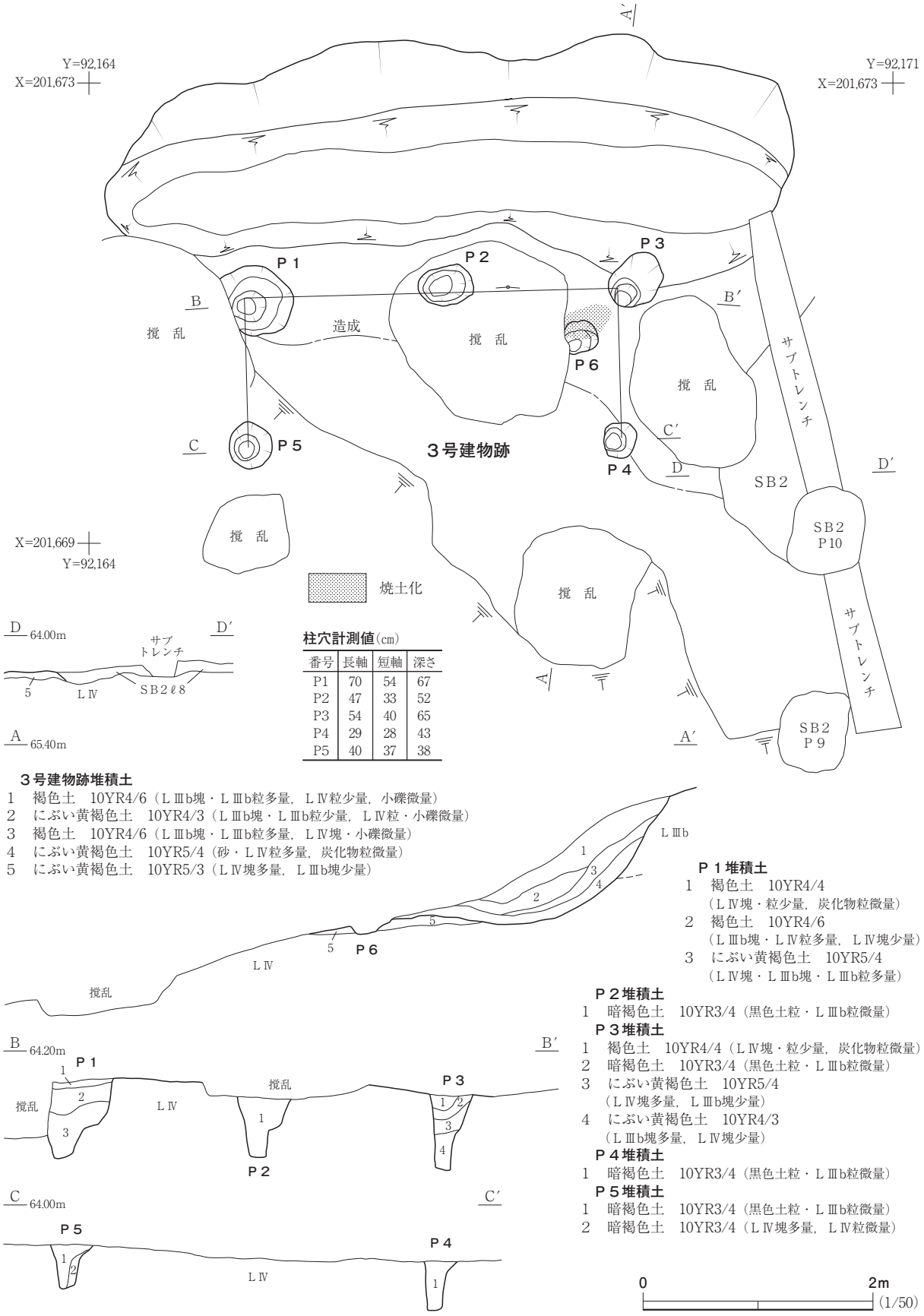
本遺構は，調査区北西部のｙ１，ｚ１・２グリッドに位置する。浅い谷状地形の谷頭部分にあたる丘陵南向き斜面の上位に立地する。遺構東側の一部が２号建物跡と重複しており，本遺構のほうが古い。本遺構の北側は，近現代に大きく削平されている。遺構の検出面はＬⅢｂ上面である。

本遺構は，傾斜地に建てられた掘立柱建物跡である。斜面を断面「Ｌ」字状に掘削し，造成した平坦面の上に建物を建てている。掘削された範囲は東西で600㎝程度，南北400㎝以上である。検出面から，最大で100㎝ほど掘り込んでいる。斜面掘削後に，平坦面を形成するための造成が行われており，その上面はほぼ水平となる。

堆積土は５層に細分した。ℓ１～４は自然堆積によるものであり，いずれも斜面から流れてきたものと考えられる。ℓ５は床面の造成に伴う人為堆積と考えられ，ＬⅢｂ塊およびＬⅣが混入し，10㎝程度の厚さで堆積する。北壁際に幅120㎝ほどの溝状のくぼみが形成され，平坦面へ水が浸入しないようにする排水路の役目を担っていたと考えられる。

建物跡は造成された平坦面に構築されており，「コ」字形に配置された５基の柱穴を確認した。斜面下方にあたる南側が流出して失われていることを踏まえると，桁行２間，梁行２間の側柱建物であったと推定されるが，現状では東西方向に２間，南北方向に１間分が遺存するのみである。建物の方位は北辺で測るとＥ５°Ｎを示す。建物の規模は，遺存値で東西方向が330㎝，南北方向が120㎝を測る。柱間は東西方向が165㎝を測る。

柱穴の堆積土は，ℓ５と同様にＬⅣ塊ないしＬⅢｂ塊を含むため判別が困難であり，ℓ５を除去した後にその形状を認めることができた。Ｐ１およびＰ３では，柱抜き取りの痕跡が確認され，抜き取り後に自然堆積で埋没したと考えられる。ほかの柱穴も，それぞれの柱穴は底部と比較して上端が広がることから，柱の抜き取りを行った可能性がある。いずれの柱跡も，底部の標高はほぼ一致しており，深さは検出面から38～67㎝を測る。最も大きい柱跡はＰ１で長軸長70㎝を測り，最も小さいものはＰ４の直径28㎝を測る。平面形はＰ１～３が楕円形，Ｐ４・５が円形を呈する。



柱穴計測値(cm)

番号	長軸	短軸	深さ
P1	70	54	67
P2	47	33	52
P3	54	40	65
P4	29	28	43
P5	40	37	38

３号建物跡堆積土

1　褐色土　10YR4/6（ＬⅢb塊・ＬⅢb粒多量，ＬⅣ粒少量，小礫微量）
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3（ＬⅢb塊・ＬⅢb粒少量，ＬⅣ粒・小礫微量）
3　褐色土　10YR4/6（ＬⅢb塊・ＬⅢb粒多量，ＬⅣ塊・小礫微量）
4　にぶい黄褐色土　10YR5/4（砂・ＬⅣ粒多量，炭化物粒微量）
5　にぶい黄褐色土　10YR5/3（ＬⅣ塊多量，ＬⅢb塊少量）

Ｐ１堆積土

1　褐色土　10YR4/4
（ＬⅣ塊・粒少量，炭化物粒微量）
2　褐色土　10YR4/6
（ＬⅢb塊・ＬⅣ粒多量，ＬⅣ塊少量）
3　にぶい黄褐色土　10YR5/4
（ＬⅣ塊・ＬⅢb塊・ＬⅢb粒多量）

Ｐ２堆積土

1　暗褐色土　10YR3/4（黒色土粒・ＬⅢb粒微量）

Ｐ３堆積土

1　褐色土　10YR4/4（ＬⅣ塊・粒少量，炭化物粒微量）
2　暗褐色土　10YR3/4（黒色土粒・ＬⅢb粒微量）
3　にぶい黄褐色土　10YR5/4
（ＬⅣ塊多量，ＬⅢb塊少量）
4　にぶい黄褐色土　10YR4/3
（ＬⅢb塊多量，ＬⅣ塊少量）

Ｐ４堆積土

1　暗褐色土　10YR3/4（黒色土粒・ＬⅢb粒微量）

Ｐ５堆積土

1　暗褐色土　10YR3/4（黒色土粒・ＬⅢb粒微量）
2　暗褐色土　10YR3/4（ＬⅣ塊多量，ＬⅣ粒微量）

0　2m
(1/50)

図17　３号建物跡

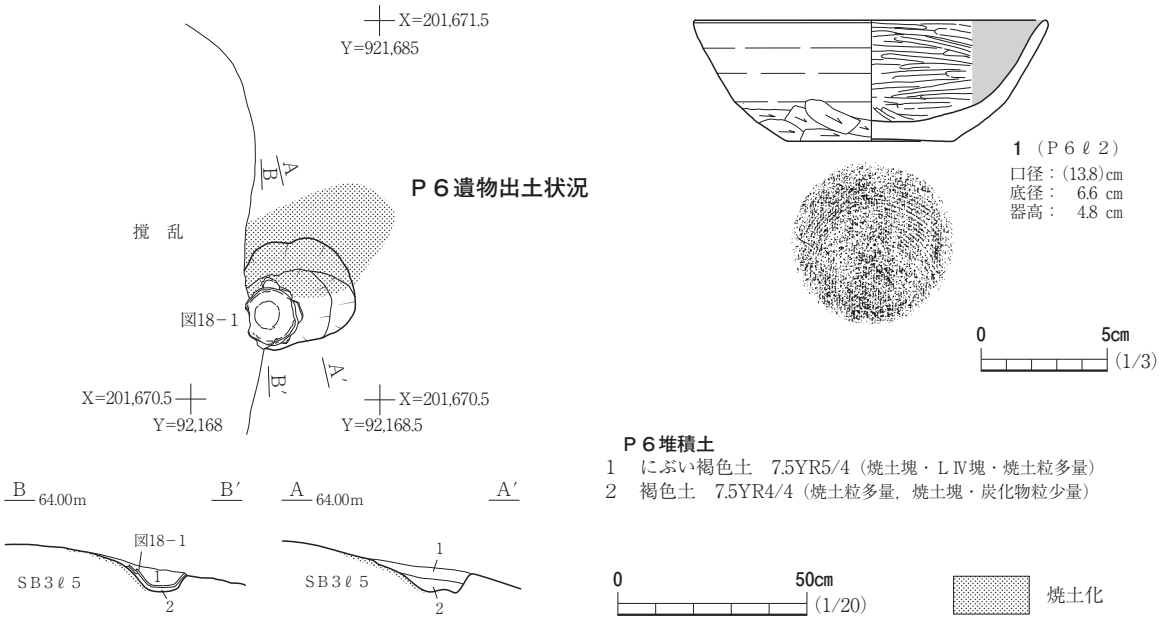


図18　３号建物跡Ｐ６遺物出土状況，出土遺物

床面のＰ３から南西に50cmの地点に，ほぼ完形の土師器杯が出土したＰ６が位置する。Ｐ６は南北26cm，東西28cm，深さ10cmを測る不整円形の小穴である。Ｐ６の底面から北側にかけては，楕円形に焼土化していた。焼土化範囲の規模は南西－北東方向が42cm，北西－南東方向に27cm，厚さ１cmを測る。Ｐ６の堆積土は，焼土塊・焼土粒を含むことから人為的埋土と考えられる。

遺　　物（図18，写真36）

本遺構からは，土師器片８点が出土し，このうちＰ６から出土した土師器１点を図化した。図18－１はロクロ成形の土師器杯である。体部から口縁部へやや直線的に立ち上がる。内面には全面的に細かいヘラミガキ調整が行われ，黒色処理が施される。外面の体部下端に手持ちヘラケズリが施され，底面には回転糸切り痕が残る。

ま と め

本遺構は，斜面に構築された側柱の掘立柱建物跡と考えられる。前述の１・２号建物跡と比較すると規模が小さく，柱掘形の平面形状もほかの建物跡が方形であるのに対し，本遺構のものは円形を呈する。２号建物跡との重複関係からみても，古い様相を示す。遺構の所属時期は，Ｐ６から出土した土師器の年代観から，平安時代の９世紀中葉頃の所産と考えられる。　（西　澤）

第４節　　土　　坑

本遺跡で検出した土坑は４基である。調査区南東部南向き斜面下の平坦面で落し穴と考えられる土坑が検出されたほかは，すべて調査区北西部の南向き斜面の上位から中位にかけて分布している。特に４号土坑は大型の土坑で，「伏せ焼き法」による木炭窯として報告例があるものに類似する。土坑の番号は検出順に１～４号土坑とした。以下番号順に説明していく。

１号土坑　ＳＫ１（図19，写真22）

本遺構は，調査区南東部のＭ８グリッドに位置し，丘陵裾の平坦面に立地する。遺構検出面は，ＬⅢｂ上面であり，重複する遺構はない。

遺構は楕円に近い隅丸長方形を呈する。遺構の規模は上端で長軸長83㎝，短軸長68㎝，検出面からの深さ64㎝を測る。遺構の長軸方位は，Ｎ25°Ｅを示す。周壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面は南方へ傾斜している。

遺構内の堆積土は４層に分けた。いずれもレンズ状堆積であり，自然堆積したものと判断した。本遺構から遺物は出土しなかった。

本遺構から，その時期を特定できる資料は得られなかった。その形状から縄文時代の落し穴の可能性があるが，詳細な時期については不明である。（西　澤）

２号土坑　ＳＫ２（図19，写真22）

本遺構は調査区北西部のｙ１グリッドに位置し，丘陵南向き斜面の上位に立地する。重複する遺構はなく，ＬⅡｃ上面で検出した。

遺構は平面形が楕円形をしており，長軸方位Ｎ67°Ｗを示す。遺構の規模は，長軸長78㎝，短軸長64㎝，検出面からの深さ26㎝を測る。周壁はあまり遺存状況が良くないが，ほぼ垂直に立ち上がる。底面はＬⅡｃ上に形成され，皿状に浅くくぼみ，細かな起伏が認められる。

遺構内堆積土は２層に分かれた。ℓ１はＬⅢａ粒を多量に含む暗褐色土で，乱れた堆積状況を示すことから人為的埋土と判断した。ℓ２は木炭片・木炭粒を多量に含む黒褐色土であることから，木炭層と判断した。本遺構から遺物は出土しなかった。

本遺構は木炭層の存在から木炭焼成土坑と考えられる。遺構の所属時期は伴う遺物がないことから不明であるが，周囲の遺構の状況から平安時代～中世にかけての所産である可能性が高い。

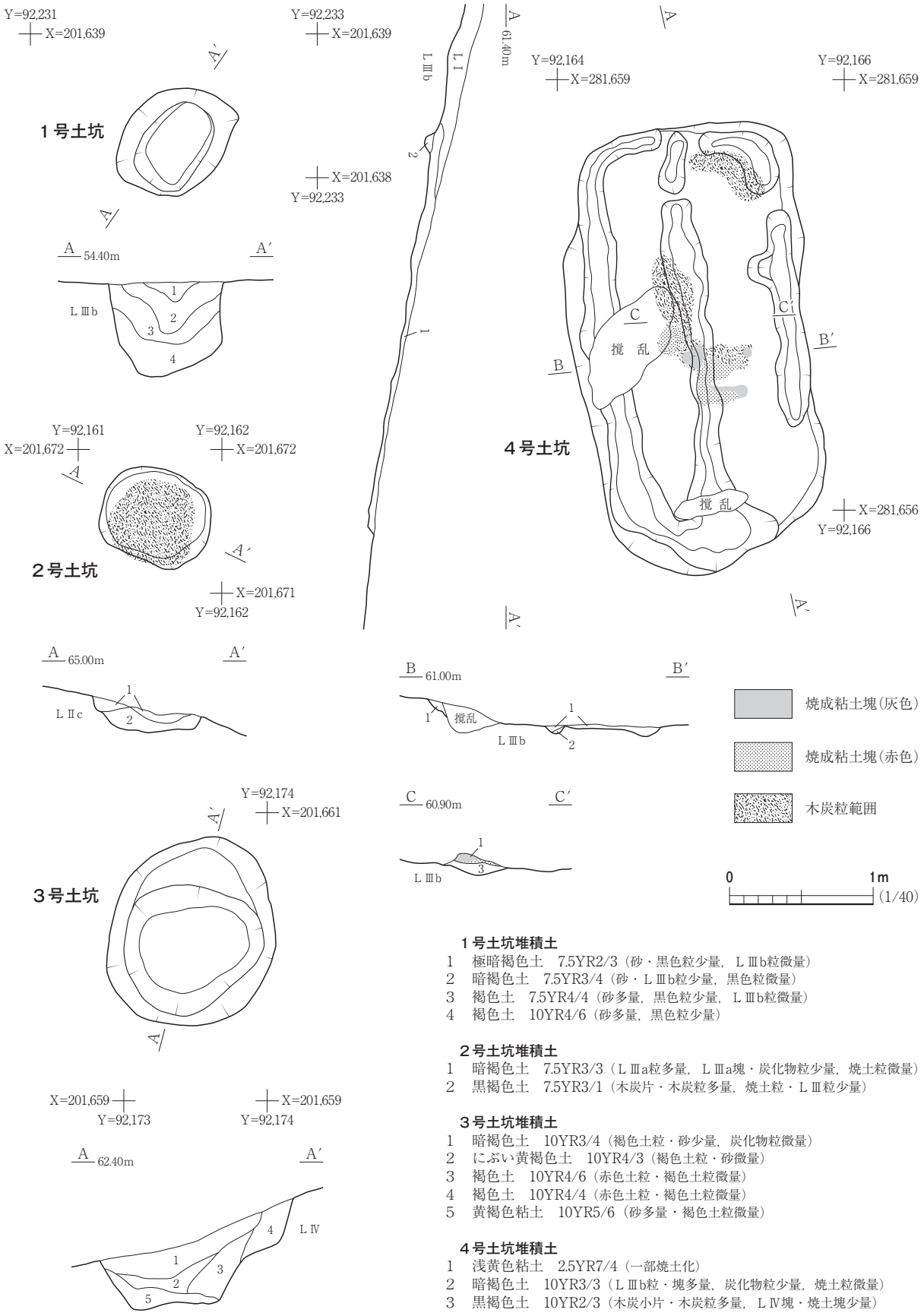
（笠　井）

３号土坑　ＳＫ３（図19，写真22）

本遺構は，調査区北西部のＡ３・４グリッドにまたがって位置する。遺構は浅い谷地形に面した，南西向きのやや急な斜面の中位に構築される。重複する遺構はなく，遺構検出面はＬⅣ上面である。

遺構は南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し，北壁にテラス状の段をもつ。規模は上端で長軸長135㎝，短軸長115㎝，検出面からの深さ75㎝を測る。周壁はいずれの壁も急峻に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

遺構内の堆積土は５層に細分した。流入を示す堆積状況から，ℓ１～４は自然堆積と判断した。ℓ５は黄褐色粘土であるため，人為堆積土と判断した。ℓ５から内面黒色処理の施された土師器杯片が１点出土していが，細片であるため図化しなかった。



１号土坑堆積土
1　極暗褐色土　7.5YR2/3（砂・黒色粒少量，ＬⅢb粒微量）
2　暗褐色土　7.5YR3/4（砂・ＬⅢb粒少量，黒色粒微量）
3　褐色土　7.5YR4/4（砂多量，黒色粒少量，ＬⅢb粒微量）
4　褐色土　10YR4/6（砂多量，黒色粒少量）

２号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5YR3/3（ＬⅢa粒多量，ＬⅢa塊・炭化物粒少量，焼土粒微量）
2　黒褐色土　7.5YR3/1（木炭片・木炭粒多量，焼土粒・ＬⅢ粒少量）

３号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（褐色土粒・砂少量，炭化物粒微量）
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3（褐色土粒・砂微量）
3　褐色土　10YR4/6（赤色土粒・褐色土粒微量）
4　褐色土　10YR4/4（赤色土粒・褐色土粒微量）
5　黄褐色粘土　10YR5/6（砂多量・褐色土粒微量）

４号土坑堆積土
1　浅黄色粘土　2.5YR7/4（一部焼土化）
2　暗褐色土　10YR3/3（ＬⅢb粒・塊多量，炭化物粒少量，焼土粒微量）
3　黒褐色土　10YR2/3（木炭小片・木炭粒多量，ＬⅣ塊・焼土塊少量）

図19　１～４号土坑

本遺構は底面が平坦で，斜面上方にあたる北壁にテラス状の段を有する平面楕円形の土坑である。機能や時期を特定できる資料は得られていないため，本遺構の性格は不明である。　（西　澤）

４号土坑　ＳＫ４（図19，写真21・22）

本遺構は，調査区西部のｙ４，ｚ４グリッドにまたがって位置する。遺構は，北西方向へ延びる浅い谷地形の谷底にあたる南向き斜面の中位に形成される。遺構検出面はＬⅢｂ上面である。遺構の南側で５号溝跡が重複しており，本遺構のほうが新しい。

本遺構は，平面形が南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈する。長軸方位はＮ５°Ｗを示し，丘陵の等高線に直交する。遺構の規模は，長軸長310㎝，短軸長160㎝，検出面からの深さ15㎝を測る。周壁は上面を削平されているため，床面近くの部分しか遺存せず，立ち上がる状況は不明である。遺構の底面は，周囲の地形と同様に南向きの下り勾配で，その比高差は47㎝を測る。

遺構の底面には溝が掘られている。溝は土坑の中央を長軸方向に縦断するものと，周壁沿いに廻るものがある。周壁沿いを廻る溝は南東隅で消失するなど，断続的ながらも全周する。溝は幅15～60㎝，深さ５㎝程度を測り，明瞭に立ち上がる。遺構の南側中央では，溝が大きく膨らみ，また壁の立ち上がりも緩やかになっていく。

遺構内の堆積土は３層に分けた。ℓ２は底面の溝に堆積しており，木炭の小片や焼土粒を多量に含む。ℓ２上面の一部は焼土化しており，本遺構の機能時において，既に底面の一部の溝へ堆積していたことがうかがえる。また，本土坑の中央部には，焼成粘土塊が堆積していた。非常に強く被熱しており，上部構造の一部が落下したものではないかと推定している。本遺構から出土した遺物は，木炭のみである。出土木炭は樹種同定によるとコナラ属クヌギ節の材を使用しており，樹皮の残るものも認められる。

本遺構は，長軸長が３ｍを超える大型の土坑である。その形態から炭窯跡と報告する事例があるが，明確な天井構造をもたないことから窯とは区分し，土坑として報告する。「伏せ焼き法」と呼ばれる方法で製炭を行った遺構であると推定される。

年代を特定する遺物が出土しなかったため，詳細な時期については不明であるが，出土木炭の放射性炭素年代測定値は1110±20yrBP，1115±20yrBP，1090±20yrBP であり，暦年較正年代によると９世紀末～11世紀前半代に伐採された木材を使用していた可能性が高い。　（西　澤）

第５節　溝　跡

本遺跡で検出した溝跡は５条である。調査区南東部南向き斜面下の平坦面に１条，調査区東部の斜面中位に３条，調査区西部の南向き斜面中位に１条が分布する。いずれの溝跡も平安時代の所産と推定され，東西方向に延びている。溝跡の番号は検出順に１～５号溝跡とした。以下番号順に説明していく。

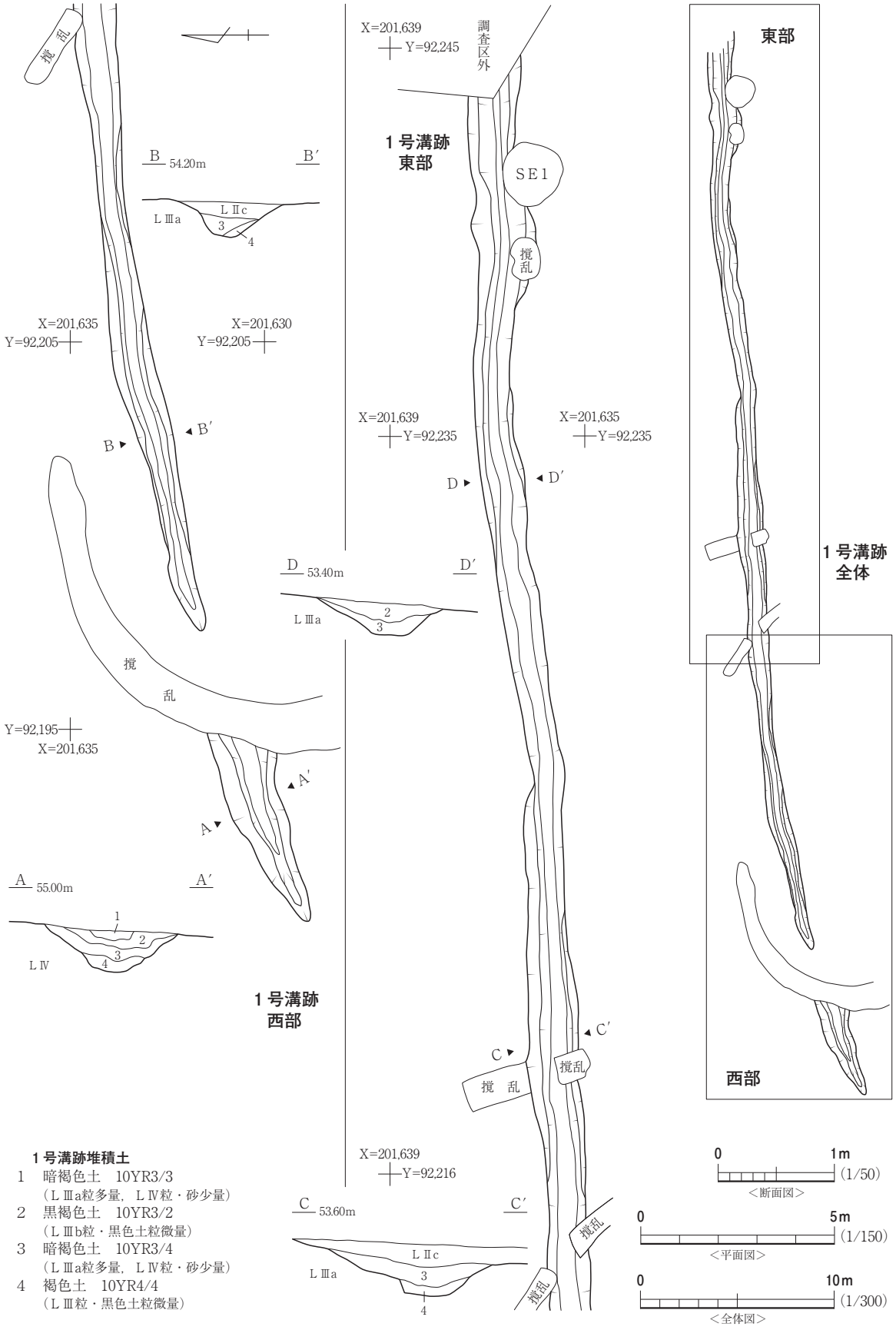

撹乱
B 54.20m
B′
L Ⅲa
L Ⅱc
3
4
X=201,635
Y=92,205
X=201,630
Y=92,205
B
B′
X=201,639
Y=92,245
調査区外
1号溝跡
東部
SE1
撹乱
X=201,639
Y=92,235
X=201,635
Y=92,235
D
D′
D 53.40m
D′
L Ⅲa
2
3
撹乱
Y=92,195
X=201,635
A′
A
A 55.00m
A′
1
2
3
4
L Ⅳ
1号溝跡
西部
C′
C
撹乱
撹乱
X=201,639
Y=92,216
C 53.60m
C′
L Ⅱc
L Ⅲa
3
4
撹乱
撹乱
東部
1号溝跡
全体
西部
0
1m
(1/50)
＜断面図＞
0
5m
(1/150)
＜平面図＞
0
10m
(1/300)
＜全体図＞
1号溝跡堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3
（L Ⅲa粒多量，L Ⅳ粒・砂少量）
2　黒褐色土　10YR3/2
（L Ⅲb粒・黒色土粒微量）
3　暗褐色土　10YR3/4
（L Ⅲa粒多量，L Ⅳ粒・砂少量）
4　褐色土　10YR4/4
（L Ⅲ粒・黒色土粒微量）

図20　１号溝跡

１号溝跡　ＳＤ１（図20・21，写真23・37）

本遺構は調査区南東部のＥ９・10，Ｆ～Ｉ９，Ｊ８・９，Ｋ８・９，Ｌ８・９，Ｍ～Ｏ８グリッドに位置し，丘陵南向き斜面下の平坦面に立地する。本遺構の南側は１～２ｍほどの崖となり，崖下には小河川が東流している。遺構の東側で１号井戸跡と重複し，これよりも古い。遺構検出面は，遺構西側ではＬⅣ上面，遺構東側ではＬⅢａ上面であり，遺構の上面にはＬⅡｃが堆積していた。

本遺構は東西方向に延びる溝跡で，西端に向かい南西方向に弱く湾曲している。遺構は後世の水田開削に伴い西側の一部で寸断されているが，一連の溝跡であることは確実で，規模は検出部分で全長51.4ｍ，上端幅50～150㎝，下端幅20～50㎝を測る。断面形は逆台形で，両壁は60°ほどの角度で底面から立ち上がる。底面はＬⅢａおよびＬⅣに形成され，ほぼ平坦で東から西に向かって緩やかな登り勾配となる。溝跡底面の東西端の比高差は180㎝を測る。なお，本溝跡の東側は調査区外に延びている。

遺構内堆積土は場所により欠落する層もあるが，全体で４層に分かれた。ℓ１は遺構西端付近のみで検出した暗褐色土，ℓ２は遺構西側および中央付近で部分的に検出した黒褐色土，ℓ３は遺構全域で検出したＬⅢａ粒を多量に含む暗褐色土，ℓ４は遺構最下層に堆積する褐色土で，いずれの層も堆積状況から流入土の自然堆積と判断した。

本遺構からは，土師器片99点，須恵器片５点，石器２点が出土した。このうち土師器３点，須恵器１点，石器２点を図21に図示した。１・２は土師器杯の体部下端から底部にかけての資料である。内湾気味に立ち上がる器形で，ロクロ成形されている。内面にはヘラミガキと黒色処理が施され，外面の体部下端には手持ちヘラケズリの再調整が認められる。底面の切離し法は，１は回転糸切り，２は回転ヘラ切りである。３は小型の土師器甕か鉢の底部資料である。ロクロ成形されており，内面にロクロ目が観察できる。底面には回転ヘラ切りとみられる痕跡が残る。４は須恵器の長頸瓶の肩部付近の資料である。ロクロ成形されており，頸部と肩部の境目に断面三角形のリングが認められる。５・６は石鏃である。５は珪質頁岩製の凸基有茎石鏃で，茎部と刃部先端を欠損している。

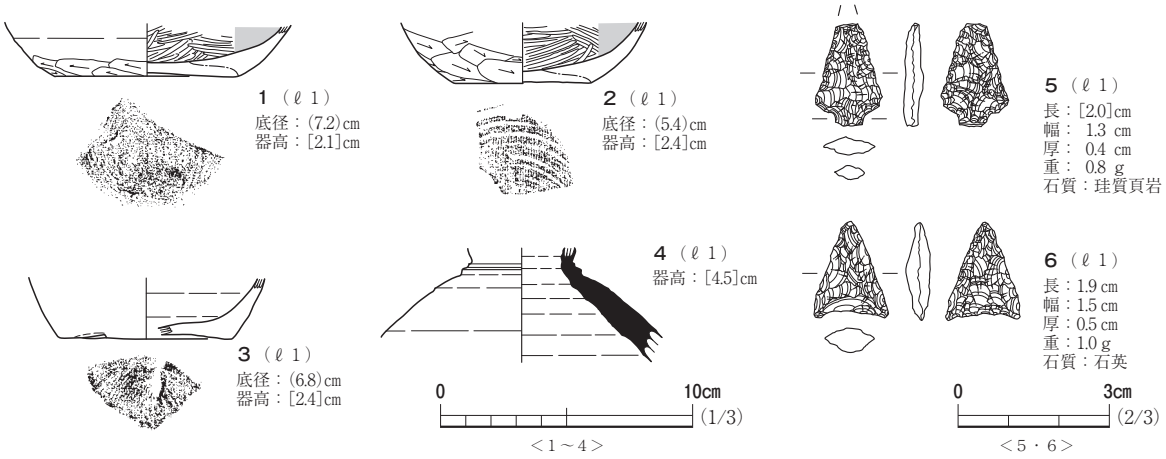


図21　１号溝跡出土遺物

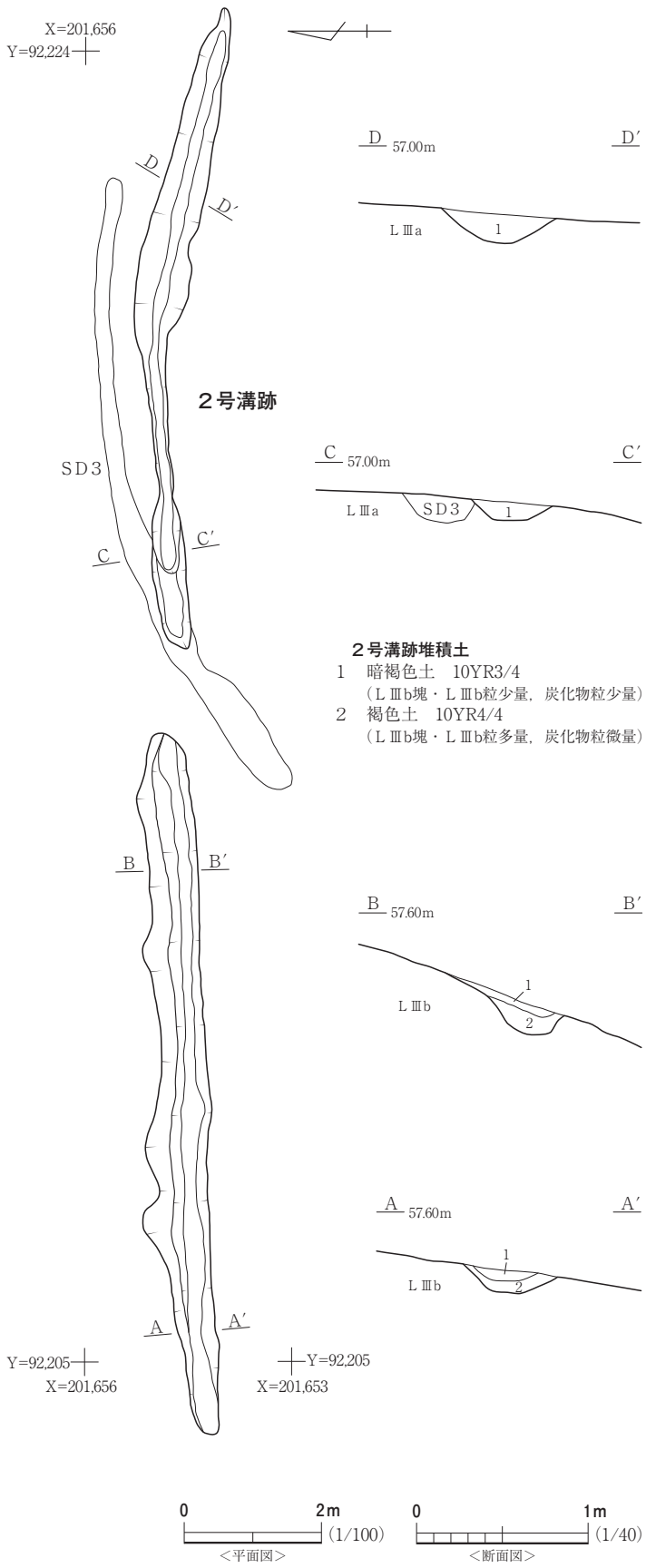


図22　２号溝跡

６は石英製の凹基無茎石鏃で，基部のえぐりは浅く平基に近い形状である。いずれの資料も両面から丁寧な押圧剥離を加えられ整形されている。

本遺構は，全長が50ｍを超える調査区内で最大の溝跡である。遺跡の最南端にあり，ほぼ東西方向に延びている。本遺構の南側は崖となっており，地形的な制約から平安時代の集落域は本遺構を南限としていたと考えられる。本遺構の性格は断定できないが，底面が平坦であることや底面の標高が一定ではなく西側に向かって登り勾配であることから，道跡である可能性を想定している。

本遺構の所属時期は，出土土師器の年代観から平安時代の９世紀中葉頃には埋没が始まり，堆積土に陶磁器片を含まないことから，近世より前には埋没していたと考えられる。

（笠　井）

２号溝跡　ＳＤ２

（図22，写真24）

本遺構は，調査区東部のＨ～Ｋ４，Ｇ～Ｋ５グリッドにかけて東西方向に延びる溝跡である。丘陵南向き斜面の中位に立地する。本遺構検出面は，遺構西側ではＬⅢｂ上面，遺構東側ではＬⅢａ上面である。本遺構は３号溝跡と重複し，本遺構のほうが新しい。本遺構とほぼ同軸上の西側30ｍに５号溝跡が位置するが，

両遺構が同一の溝跡であるかは判断できなかったため，別遺構として報告する。

溝跡はやや北側に湾曲しながらも，ほぼ東西方向に延びる。全長は21ｍで，中間地点が削平により失われていた。最大幅は100㎝に達し，概ね50㎝以上の幅をもつ。壁は明瞭に立ち上がり，検出面からの深さは最も遺存状態の良好な西側で50㎝を測る。溝の底面は西から東に向かって下っており，東端部と西端部での比高差は約90㎝を測る。

遺構内の堆積土は２層に分けた。堆積状況から斜面上部からの流入土と考えられる。遺物は出土しなかった。

本遺構の時期は，３号溝跡との重複関係から，平安時代後期～末期以降の所産であると考えられる。遺構の機能は，その立地から斜面を横切る道であった可能性がある。（西　澤）

３号溝跡　ＳＤ３（図23，写真25）

本遺構は，調査区東部のＩ５，Ｊ４・５，Ｋ４グリッドに位置する溝跡である。遺構の検出面はＬⅢｂ上面である。溝は東西方向に延び，南西側へ向かって弧を描くように曲がっていく。本遺構の一部が２号溝跡と重複しており，本遺構のほうが古い。また，南西端部が１号建物跡の造成部北東隅と重複しており，堆積土に明瞭な差異が認められないことから，本遺構と１号建物跡の造成部はほぼ同時期に埋没したものと判断した。

本遺構の全長は，9.3ｍを測る。幅は最も広くなる西側で55㎝，東側では20㎝を測る。両壁は急角度で立ち上がり，検出面からの深さは10～20㎝を測る。

遺構内の堆積土は１層のみである。本遺構の堆積土は斜面上方からの流入土と考えられる。本遺構から遺物は出土しなかった。

本遺構は弧状に延びる溝跡である。その機能は，１号建物跡との接続状況や本遺構のすぐ南側に隣接する１号住居跡との位置関係から，斜面下方の１号住居跡にそのまま雨水が流れないように掘削された排水路である可能性を考えている。遺構の所属時期は，１号建物跡との重複状況から，平安時代の９世紀中葉頃の所産と推定している。（西　澤）

４号溝跡　ＳＤ４（図23，写真25）

本遺構は，調査区東部のＪ４，Ｋ４グリッドに位置する溝跡である。丘陵南向き緩斜面の中位に立地する。遺構の検出面はＬⅢａ上面である。

本遺構は，ほぼ東西に延びる溝跡で，全長5.2ｍ，幅40㎝を測る。遺構の両壁は急角度に立ち上がり，検出面からの深さは15～20㎝を測る。溝の底面はほぼ平坦で，水平である。

本遺構の堆積土は１層のみである。本遺構の堆積土は斜面上方からの流入土と考えられる。本遺構からの出土遺物はない。

本遺構は，東西方向へ延びる短い溝跡である。遺物の出土もなく，時期や機能については不明である。（西　澤）

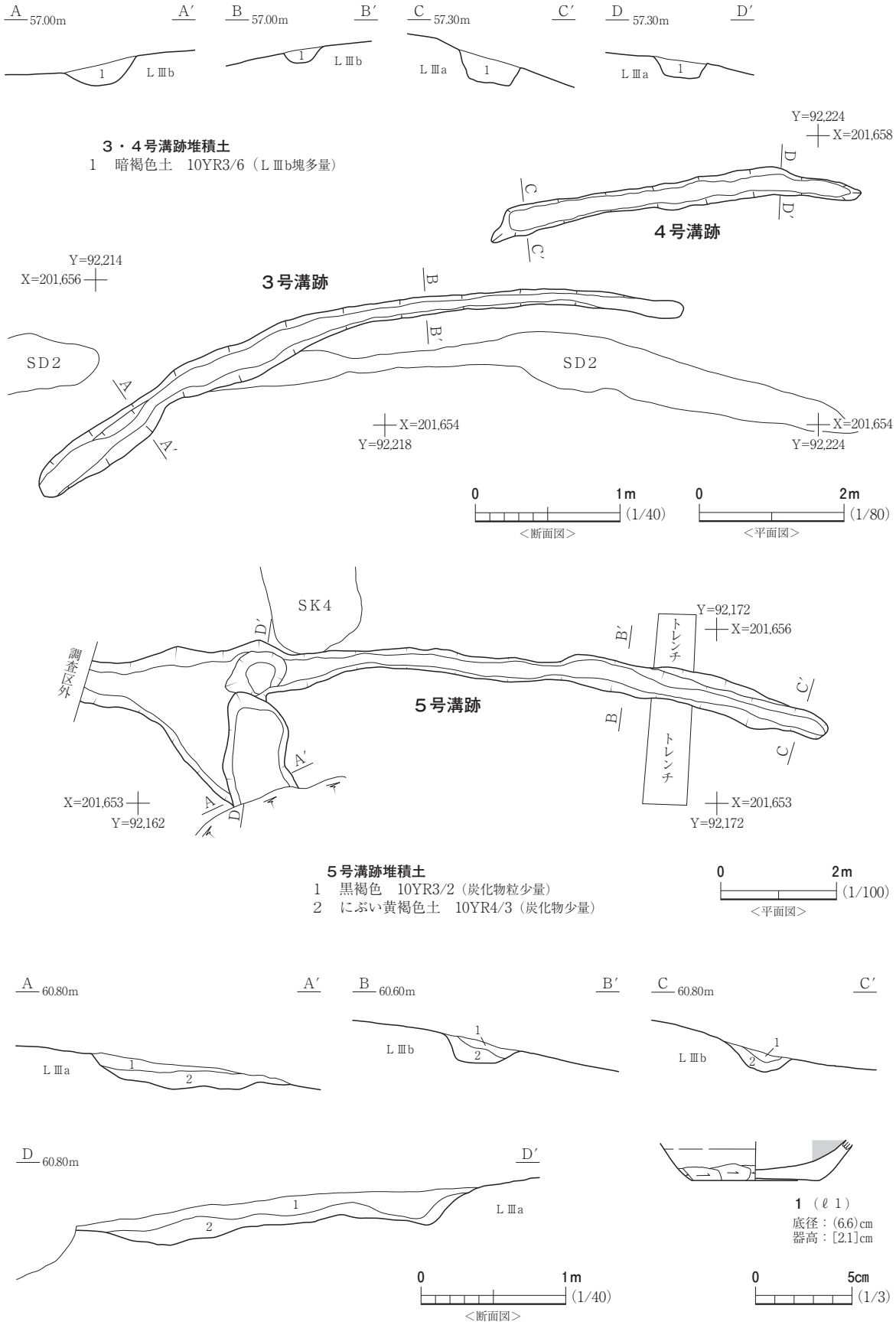


図23　３～５号溝跡，５号溝跡出土遺物

５号溝跡　ＳＤ５（図23，写真26）

本遺構は調査区西部のｙ４・５，ｚ４・５，Ａ４・５グリッドに位置する溝跡である。遺構は丘陵南向き斜面に形成された浅い谷地形を横切るように構築されている。遺構検出面はＬⅢａおよびＬⅢｂである。遺構の北側で４号土坑と重複しており，本遺構のほうが古い。

溝は西側で「Y」字状に分岐している。東西方向は全長13ｍを測り，西端から東に２ｍほどの地点で南東の方向へ溝が分かれる。東側へ延びる溝は細く，幅30～60㎝を測る。両壁は比較的緩やかに立ち上がるも，部分的には急峻に立ち上がる箇所もある。深さは検出面から20㎝を測る。それに比較して南東へ延びる溝は幅が太く，合流地点で180㎝，撹乱を受ける南東端で120㎝を測る。南東へ延びる溝は分岐後にすぐ一段下がっており，検出面からの深さは25㎝を測る。溝の底面は西側に向かって緩やかに上がっていき，遺構の西端を基準に東端で75㎝，南東端で85㎝の比高差を測る。また，東側の溝が合流する地点が小さくくぼむ。その規模は70㎝×110㎝の楕円形で，検出面からの深さは25㎝を測る。本遺構の堆積土は２層に分けた。いずれも自然堆積と考えられる。

本遺構からは土師器片が７点出土した。いずれもロクロ成形された杯や甕の破片資料である。そのなかから，比較的器形の判明する１点を図化した。

図23－１はロクロ成形の土師器の杯である。外面体部下端に手持ちヘラケズリが施される。内面は調整が不明瞭であるが，黒色処理が施されている。

本遺構は，出土した遺物や４号土坑との重複関係から，平安時代の所産と考えられる。遺構の機能としては，斜面に形成された道である可能性がある。（西　澤）

第６節　特 殊 遺 構

本遺跡では，住居跡や土坑と断定できないが，平安時代以前の所産と考えられる不定形の遺構を３基検出した。これらの遺構はそれぞれ異なった特徴をもつが，何らかの生産活動に関わる遺構であると推定されることから，本編ではこれらの遺構を特殊遺構としてまとめて報告する。特殊遺構は調査区中央部の丘陵斜面中位に１・２号特殊遺構，調査区北西部の丘陵斜面上位に３号特殊遺構が分布する。以下遺構番号順に説明する。

１号特殊遺構　ＳＸ１

遺　　構（図24，写真27・28）

本遺構は，調査区中央部のＥ５，Ｆ５グリッドに位置する。周囲の地形は，浅い谷状地形の谷頭にあたる南東向きの緩斜面中位である。遺構検出面はＬⅣ上面で，斜面下方にあたる遺構南側では地形の削平により，床面の一部が筋状に露出していた。遺構の北側でＦ５グリッドＰ２，西側で２号特殊遺構と重複しており，本遺構のほうが古い。

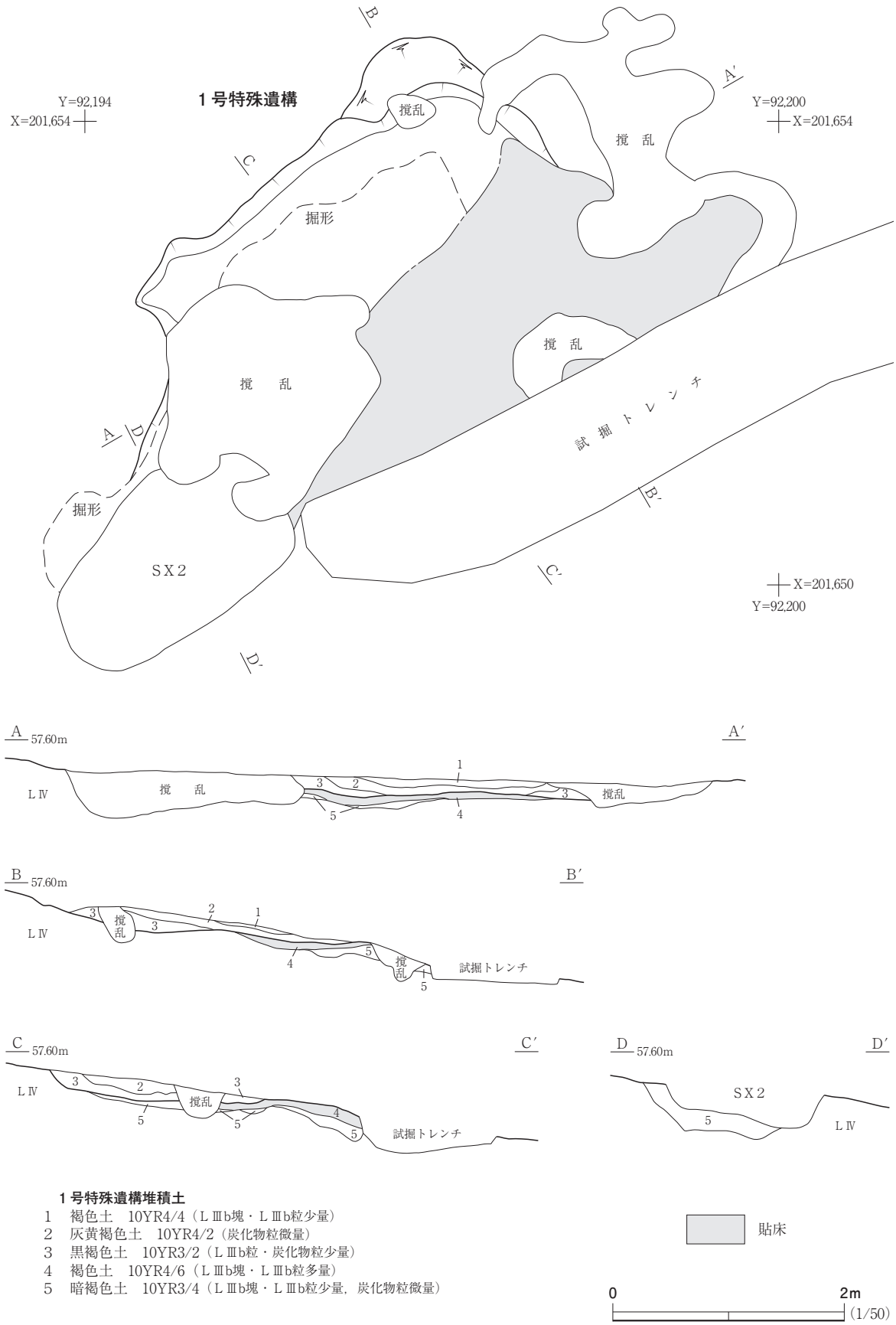

１号特殊遺構
Y=92,194
X=201,654
Y=92,200
X=201,654
X=201,650
Y=92,200
撹乱
撹　乱
掘形
撹　乱
撹　乱
試掘トレンチ
掘形
SX2
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
57.60m
LⅣ
撹　乱
撹乱
試掘トレンチ
SX2
１号特殊遺構堆積土
1　褐色土　10YR4/4（LⅢb塊・LⅢb粒少量）
2　灰黄褐色土　10YR4/2（炭化物粒微量）
3　黒褐色土　10YR3/2（LⅢb粒・炭化物粒少量）
4　褐色土　10YR4/6（LⅢb塊・LⅢb粒多量）
5　暗褐色土　10YR3/4（LⅢb塊・LⅢb粒少量，炭化物粒微量）
貼床
0
2m
(1/50)

図24　１号特殊遺構

遺構内堆積土は５層に分かれた。ℓ１～３は包含物をあまり混入せず，斜面上方からの流れ込み状況が認められることから，流入土の自然堆積と判断した。ℓ４は，遺構南側の床面を形成する褐色土である。ＬⅢｂ塊・ＬⅢｂ粒で構成される硬質の土層であり，上面は平坦に整えられていることから貼床層と判断した。ℓ５は貼床層の下位に位置する暗褐色土で，ℓ４ほど締まりがないことから掘形埋土と考えている。

遺構の平面形は，遺存部分では台形をしている。比較的遺存状況の良い北西壁の方位はＮ55°Ｅを示す。遺構の規模は，遺存値で台形の上底にあたる北西辺が360㎝，下底にあたる南側が690㎝，高さに相当する北西－南東方向が327㎝を測る。周壁は斜面山側の北西側にのみ認められ，北西壁で高さ13㎝を測り，南西および南東方向へ次第に高さを減じてゆく。周壁の立ち上がる角度は20～50°ほどで緩やかである。床面はほぼ水平かつ平坦で，遺構の北西側ではＬⅣおよびℓ５上に形成され，遺構南東側ではℓ４の貼床により形成される。遺構中央から南西側にかけては，底面が凸凹した掘形があり，ℓ５で埋められていた。本遺構から遺物は出土しなかった。

ま と め

本遺構は，貼床を有する平場を造成した遺構である。遺構の南側が削平されて失われており遺構の全貌は不明であるが，斜面の山側を削り，谷側に土砂を盛土して平坦面を形成している。遺構の性格は不明である。遺構の所属時期は遺物が出土していないため特定できないが，重複関係から本遺構よりも新しい２号特殊遺構が平安時代の所産と考えられることから，平安時代以前の所産と考えられる。

（笠　井）

２号特殊遺構　ＳＸ２

遺　　構（図25，写真27・28）

本遺構は，調査区中央部のＥ５・６，Ｆ５・６グリッドに位置する。周囲の地形は浅い谷状地形の谷頭にあたる南東向きの緩斜面中位である。遺構検出面はＬⅣ上面および１号特殊遺構床面である。１号特殊遺構と重複しており，本遺構のほうが新しい。

遺構内堆積土は４層に分層した。ℓ１～３は色調や包含物の内容が異なるが，焼土塊・焼成粘土塊・炭化物粒等を含み乱れた堆積であることから，人為的な廃棄土と判断した。ℓ４もＬⅢｂ塊・ＬⅢｂ粒を多量に含む褐色土で，締まりがあることから人為的に充填されたものと考えられる。

遺構の平面形は，楕円に近い隅丸長方形で，遺構の長軸方位はＮ47°Ｅを示す。遺構の規模は，長軸長230㎝，短軸長134㎝，検出面からの深さ32㎝を測る。周壁は，短辺側が30～45°と比較的緩やかに立ち上がり，長辺側が60～70°の急角度で立ち上がっている。床面は平坦であるが，南東方向に傾斜して下っている。遺構の北側の周壁および床面の大半は，１号特殊遺構の掘形埋土と考えられるℓ５を掘り込んで形成されている。

遺　　物（図25，写真37）

遺物は土師器片７点，須恵器片１点が出土した。このうち，須恵器１点を図示した。図25－１は

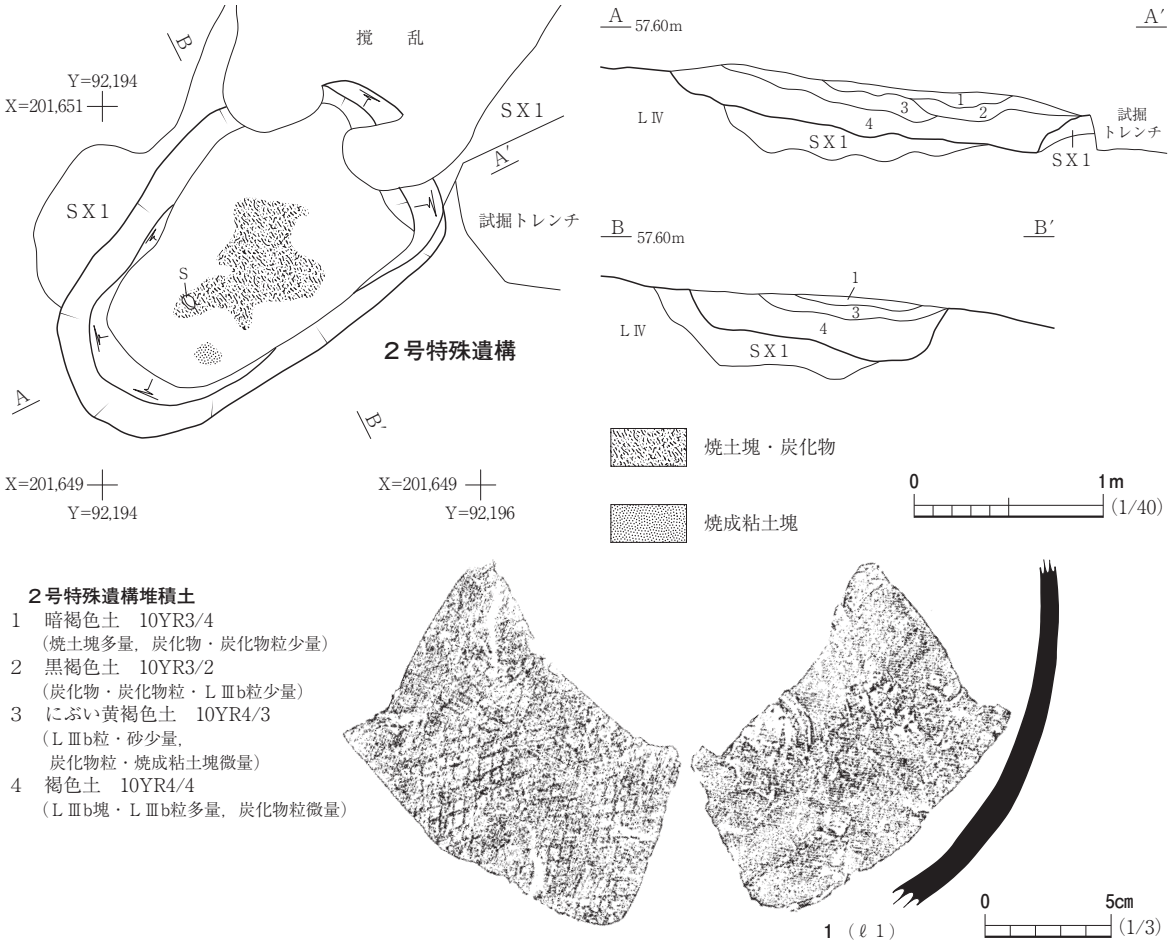


図25　２号特殊遺構，出土遺物

須恵器甕の胴部資料である。外面に格子状タタキ目が認められ，内面は当具痕がナデ消されている。

ま と め

本遺構は，平面形が隅丸長方形をした土坑状の遺構である。最下層に褐色土が充填されており，上層には焼土塊・焼成粘土塊・炭化物粒等を混入した堆積土が認められることから，燃焼を伴う炉のような施設の下部構造である可能性がある。本遺構の所属時期は出土した遺物の年代観から平安時代の所産と考えられる。

なお，本遺構出土のクワ属と同定された炭化物の放射性炭素年代測定値は1335±20yrBP であり，暦年較正年代では７世紀中頃～８世紀後半のやや古い年代が出ている。　（笠　井）

３号特殊遺構　ＳＸ３

遺　　構（図26，写真29・30）

本遺構は，調査区北西部のＢ１・２，Ｃ１・２グリッドに位置する。周囲の地形は丘陵南東向き斜面の上位である。遺構検出面はＬⅣおよびＬⅢｂ上面で，斜面下方にあたる南側は削平されて失われていた。西側で２号建物跡と重複しており，本遺構のほうが古い。

遺構内堆積土は３層に分かれた。ℓ１・２は斜面上方からの流れ込み状況が認められることから，

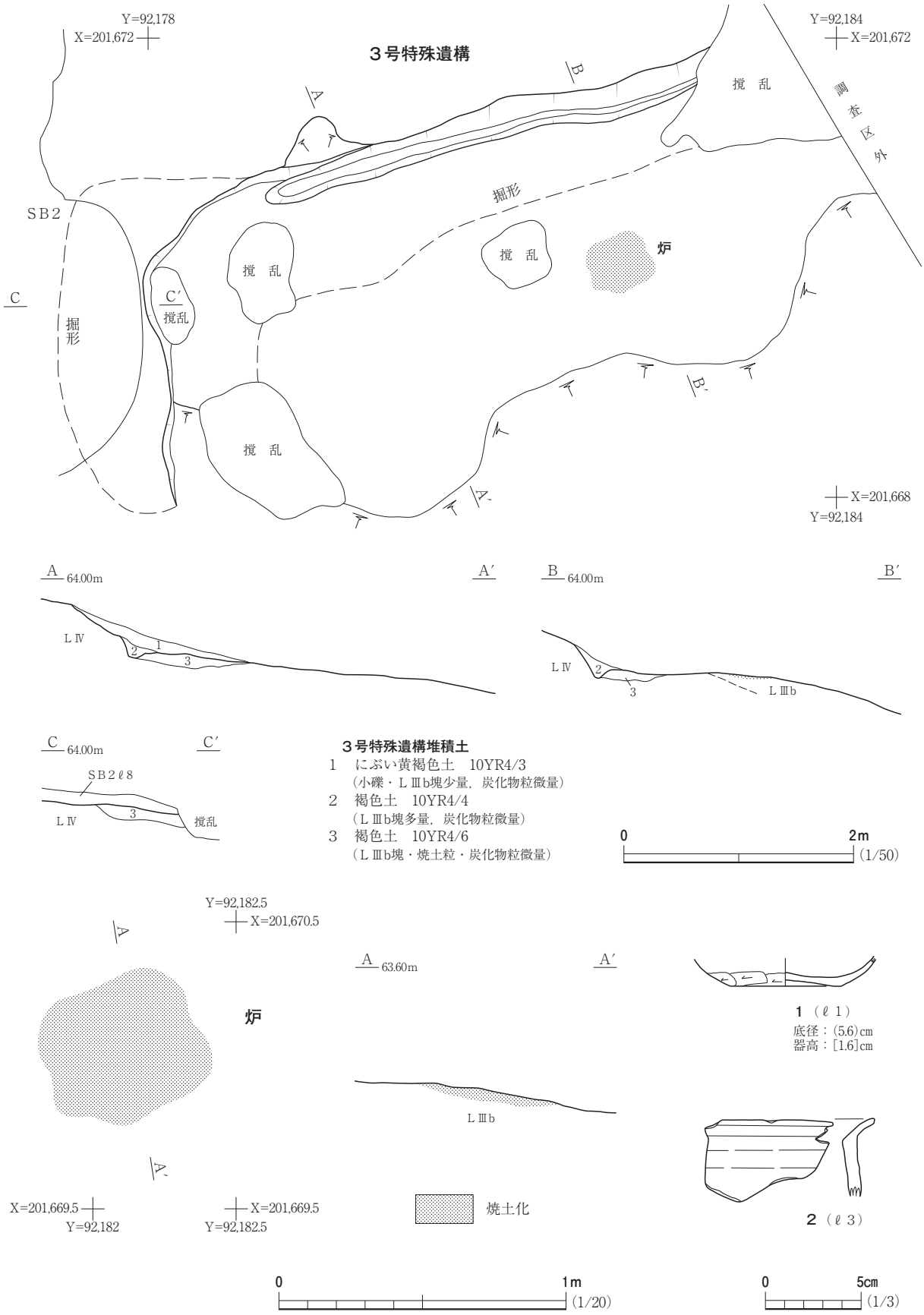


図26　３号特殊遺構，出土遺物

流入土の自然堆積と判断した。ℓ３は遺構北側の床面および遺構西壁を形成する褐色土で，掘形の埋土である。

遺構の東側は調査区外にあたり，南側は削平されているため，遺構の全体像はつかめないが，遺存する部分では長方形の平面形を呈する。比較的遺存状況の良い北西壁の方位はＮ83°Ｅを示す。

遺構の規模は遺存値で，南西－北東方向が675㎝，北西－南東方向が322㎝を測る。周壁は斜面上方の北西壁で34㎝を測り，南東方向へ次第に高さを減じてゆく。周壁の立ち上がる角度は60°ほどである。床面は遺構の北西側ではℓ３，遺構南東側ではＬⅢｂおよびＬⅣ上に形成され，ほぼ水平かつ平坦である。遺構の北西壁沿いから西壁の裏側にかけて幅80～110㎝，深さ10㎝の溝状をした掘形が「Ｌ」字状に延びている。

遺構内施設としては，炉跡と壁際に溝がある。炉跡は地床炉で，北西壁から１ｍほど離れた床面東寄りに位置し，隅丸長方形の平面形をした焼土化範囲である。炉跡の規模は南西－北東方向が58㎝，北西－南東方向が49㎝，焼土化した厚さ４㎝を測る。壁溝は北西壁沿いに390㎝を確認した。断面形状は「Ｖ」字形で幅30㎝を測る。

遺　　物（図26，写真37）

本遺構から出土した遺物は土師器片58点である。このうち，２点を図示した。図26－１は土師器杯の体部下端から底部の資料である。ロクロ成形と考えられるが，内外面ともに摩滅しており，外面の体部下端に手持ちヘラケズリが確認できる以外は調整が不明である。２は土師器甕の口縁部資料である。頸部で「く」字に屈曲して口縁部が直線的に開く器形である。ロクロ成形されている。

ま と め

本遺構は，平面長方形と推定される竪穴状遺構である。遺構の性格は不明であるが，床面が平坦であることや地床炉・壁周溝を有することから，柱穴の痕跡が確認できない住居跡である可能性もある。２号建物跡が本遺構の掘形上に構築されていることから，調査区北西部で密集する遺構群のなかでは古い遺構である。遺構の所属時期は，出土遺物の年代観から平安時代の９世紀中葉頃と考えられる。

（笠　井）

第７節　その他の遺構

本節では，その他の遺構として井戸跡，柱列跡，グリッドピットについて報告する。このうち，１号柱列跡，グリッドピットの一部と後述する１号遺物包含層は，一連の遺構となる可能性があるが，調査段階では把握できなかったため，別々の遺構として報告する。１号井戸跡は，近世代の所産であるが，比較的良好な木製品が出土したため，本節において報告を行う。

１号井戸跡　ＳＥ１

遺　　構（図27，写真31）

本遺構は，調査区南東部のＯ８・９グリッドに位置する。周囲の地形は丘陵裾の細長い平坦地であり，遺構のすぐ南側は低い崖となっている。遺構検出面はＬⅢａ上面である。遺構の北側で１号溝跡と重複しており，本遺構が新しい。

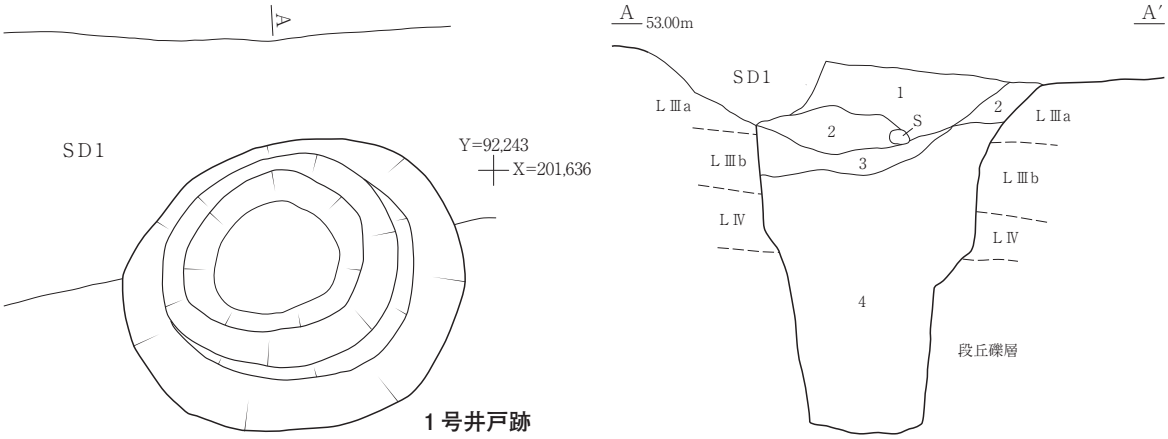
遺構の平面形は，東西方向に長軸方位をもつ楕円形である。遺構の規模は長軸長180㎝，短軸長154㎝，検出面からの深さ196㎝を測る。周壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり，深さの中間で約50°の緩やかな角度で内径を広げ，再びほぼ垂直に立ち上がり，開口部は約45°の角度で広がる。底面は段丘礫層を掘り抜いて形成され，中央に向かい緩やかにくぼむ。

遺構内堆積土は４層に分けられた。ℓ１～３はいずれも炭化物粒・ＬⅢ粒を含む黒褐色および暗褐色土で，乱れた堆積を示すことから人為的な埋土と判断した。ℓ４は水の流出が著しく，半截途中で崩落を開始したため，底部付近の詳細は不明である。細分される可能性もあるが，基本的には礫を多量に含む褐色土であり，ℓ１～３と同様に人為的な埋土と考えられる。

遺　　物（図27・28，写真39）

本遺構からは，陶磁器片６点，木製品10点が出土し，このうち，ℓ４から出土した木製品10点を図示した。図27－１～４は曲桶と推定される曲物容器である。１・２は同一個体と推定される曲物の側板である。１は残存弧の長さ23㎝，高さ7.9㎝，厚さ２㎜，２は残存弧の長さ26.4㎝，高さ8.3㎝，厚さ２㎜を測る。針葉樹とみられる柾目の薄板を横方向に使用しており，１では図中側面の右下に１カ所，２では図中側面の左上に５カ所で長方形の綴じ合わせ孔が確認でき，一部に樹皮紐が残る。３・４は底板の部材で，針葉樹とみられる柾目板を半円形に加工している。３個の部品を組み合わせて１枚の底板を形成していたと考えられるが，中央の部材は出土しなかった。各部材は直径４㎜のダボにより連結されていたようで，３の接合面４カ所にその一部が残る。底板および側板の湾曲から，曲桶の直径は18㎝程度と推定される。

図28－１は釣瓶桶の柄である。遺存値の長さ24.4㎝，幅3.1㎝，厚さ2.4㎝の中央が膨らんだ棒状の部材で両端にホゾが切られており，中央には紐か竿を通したとみられる直径約３㎝の孔が認められる。２は一端に突起をもつ棒状木製品である。一本の木材から削り出されたもので，断面円形の棒状部分と直方体の突起部で構成され，長さ28.5㎝，棒状部直径1.7㎝，突起部幅３㎝を測る。突起部と反対側の先端付近には幅７㎜の紐で縛ったような圧痕が廻り，棒状部の中央付近は長さ約５㎝が摩滅してえぐれている。３は木栓である。先すぼまりの円柱状で，長さ3.7㎝，幅2.5㎝，厚さ2.3㎝を測る。側面の全体に縦長の加工痕が観察できる。４は白木の横櫛である。復元長13㎝，幅3.7㎝，厚さ1.1㎝を測る。峰が山形をしており，中央部に対して両端の峰幅が極端に狭く，峰の厚さも中央付近が厚い。峰と歯の境には弱い段がついている。各歯の間隔は約１㎜で，歯数は60本前後と考えられる。５は円柱状の木製品である。長さ9.4㎝，直径3.5㎝を測る。枝材を使用し，側面



1号井戸跡堆積土

1　黒褐色土　10YR2/3（小礫少量，炭化物粒・ⅠⅢ粒微量）
2　暗褐色土　10YR3/3（砂・ⅠⅢ粒少量，炭化物粒微量）
3　黒褐色土　10YR2/2（炭化物粒多量，ⅠⅢ粒・礫少量）
4　褐色土　10YR4/4（礫多量，炭化物粒少量）

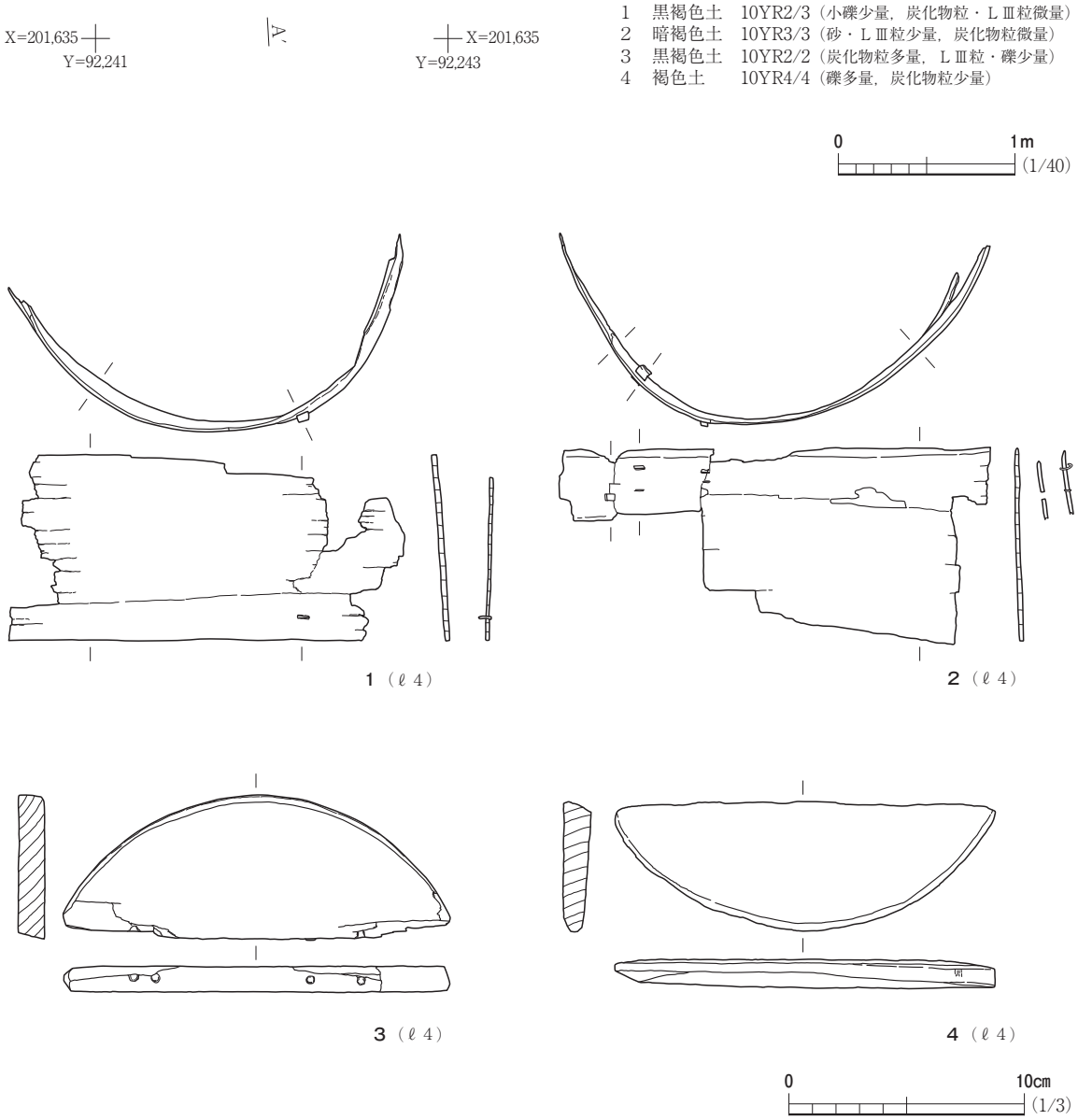


図27　１号井戸跡，出土遺物（１）

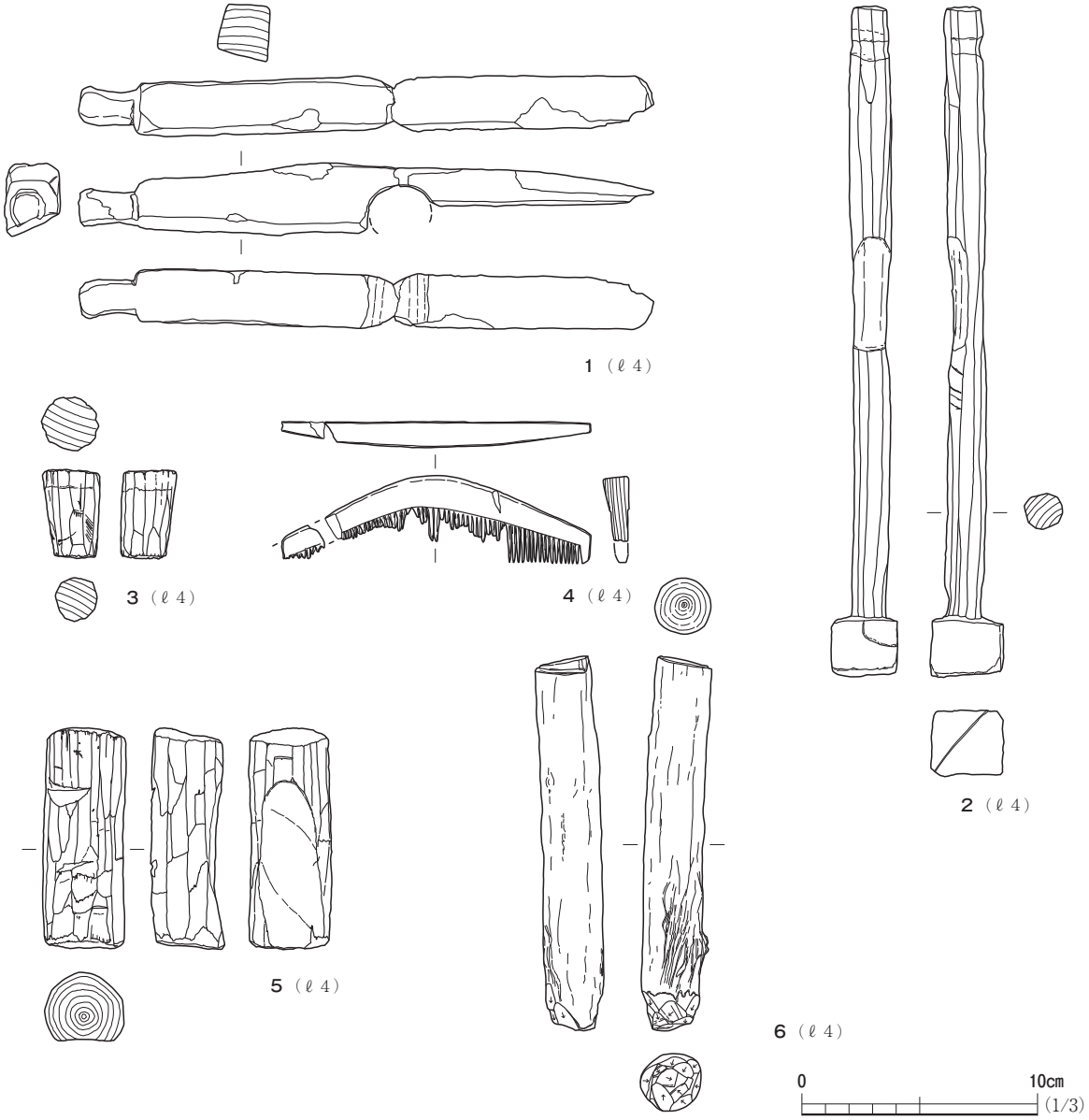


図28　１号井戸跡出土遺物（２）

の全体に縦長の加工痕が観察できる。半月状の切れ込みが側面の図中上寄りにあり，その裏側は７cmにわたり大きく削られている。６は先端に加工痕が認められる棒状木製品である。長さ15.9cm，直径2.6cmを測る。樹皮の残る枝材の一端に鉛筆を削るように加工を施して先端を尖らせている。

ま と め

本遺構は，深さ約２ｍの井戸跡である。本遺構の年代は，上層から陶磁器類が出土していることから，近世以降の所産と考えられる。（笠　井）

１号柱列跡　ＳＡ１

遺　　構（図29，写真32）

本遺構は調査区中央部のＦ６，Ｇ６グリッドに位置する。丘陵南向き斜面の中位に立地し，遺構

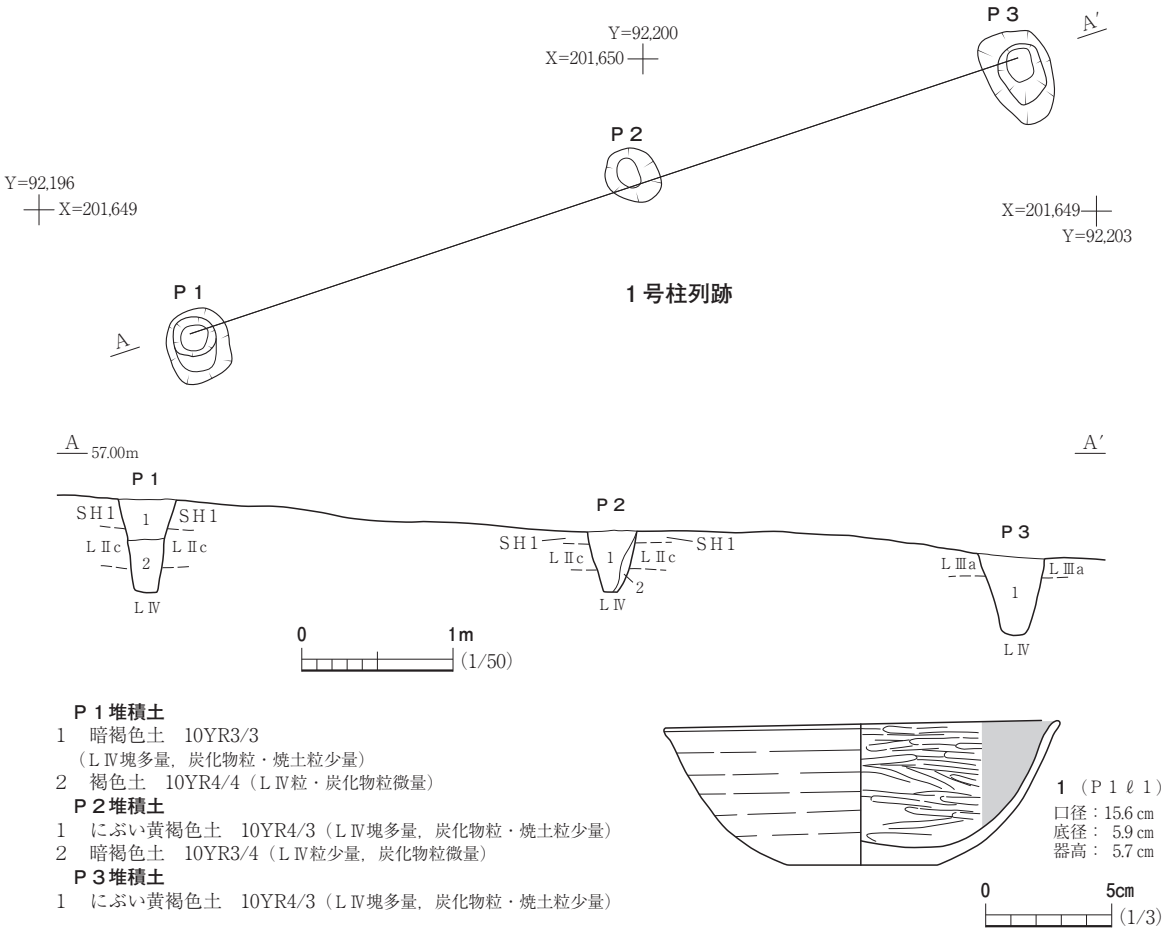


図29　１号柱列跡，出土遺物

検出面はＬⅢａおよび１号遺物包含層上面である。

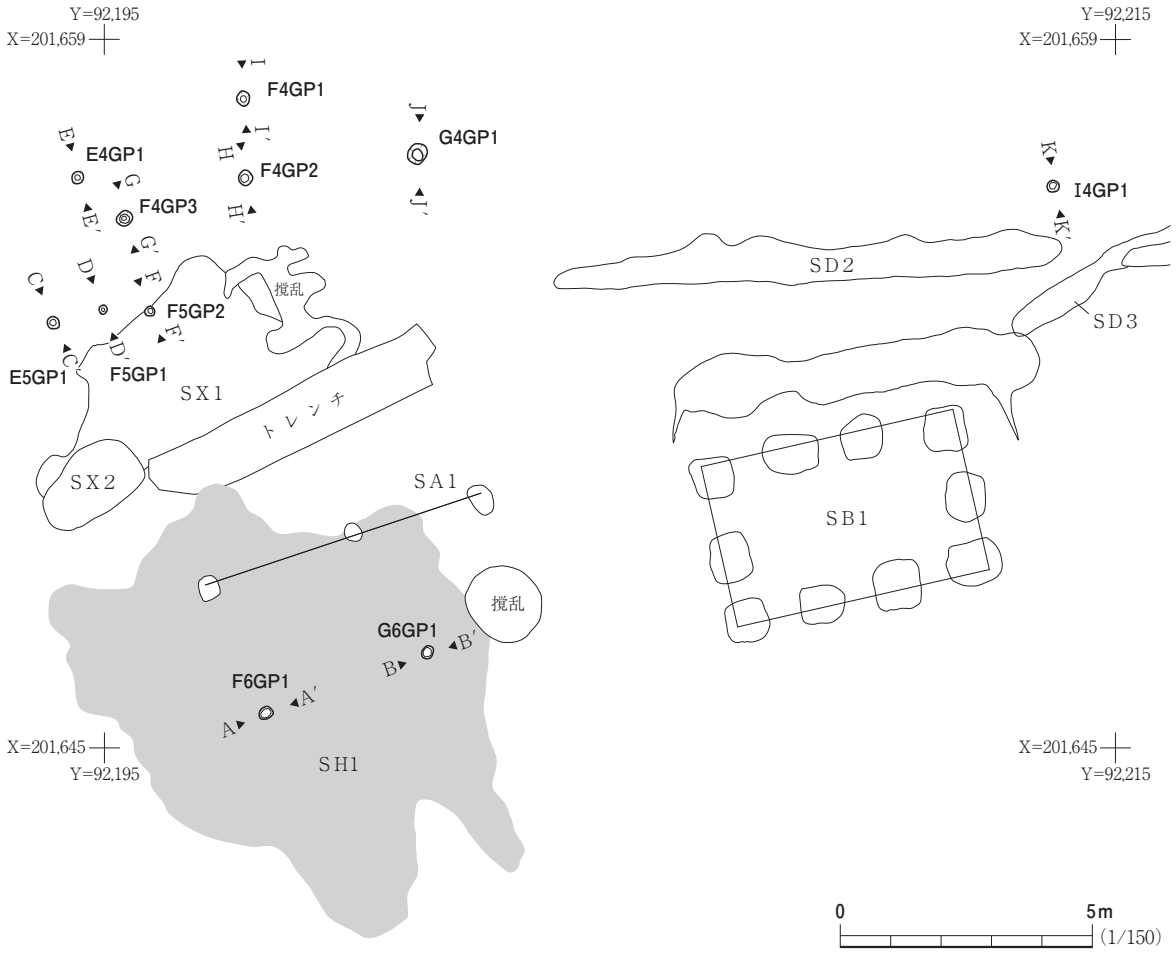
本遺構は東西方向に一直線に並ぶ３基の柱穴からなる。遺構の方位はＥ15°Ｎを示し，遺構の全長は580㎝を測る。Ｐ１－Ｐ２間の距離は310㎝，Ｐ２－Ｐ３間の距離は270㎝であり，柱間は一定していない。

各柱穴の詳細は次のとおりである。Ｐ１は平面形が隅丸方形の小穴で，南北48㎝，東西42㎝，検出面からの深さは60㎝で，底面の標高は56.10ｍである。Ｐ２は楕円形を呈する。南北38㎝，東西33㎝，検出面からの深さは40㎝で，底面の標高は56.10ｍである。Ｐ３は楕円形を呈する。南北62㎝，東西44㎝，検出面からの深さは50㎝を測る。底面の標高は55.80ｍとほかの２基より低い。

堆積土は，１層ないし２層に分けられる。Ｐ２ℓ２の暗褐色土は，柱を設置する際に掘形に充填した土であると考えられる。それ以外の層は，いずれもＬⅣ塊等を含んだ堆積土であり，柱の抜き取り後に埋め戻した土である可能性がある。

遺　　物（図29，写真37）

Ｐ１から完形に近い土師器杯が１点と，Ｐ２から土師器杯の細片が２点出土した。このうち，Ｐ１から出土した遺物を図示した。１はロクロ成形の土師器杯である。体部から口縁部にかけて丸みを帯びて立ち上がる器形で，口唇部はわずかに外反する。内面はミガキ調整が行われ，黒色処理が


Y=92,195
X=201,659
Y=92,215
X=201,659
F4GP1
G4GP1
E4GP1
F4GP2
F4GP3
I4GP1
SD2
SD3
撹乱
F5GP2
E5GP1
F5GP1
SX1
トレンチ
SX2
SA1
SB1
撹乱
G6GP1
F6GP1
SH1
X=201,645
Y=92,195
X=201,645
Y=92,215
0
5m
(1/150)

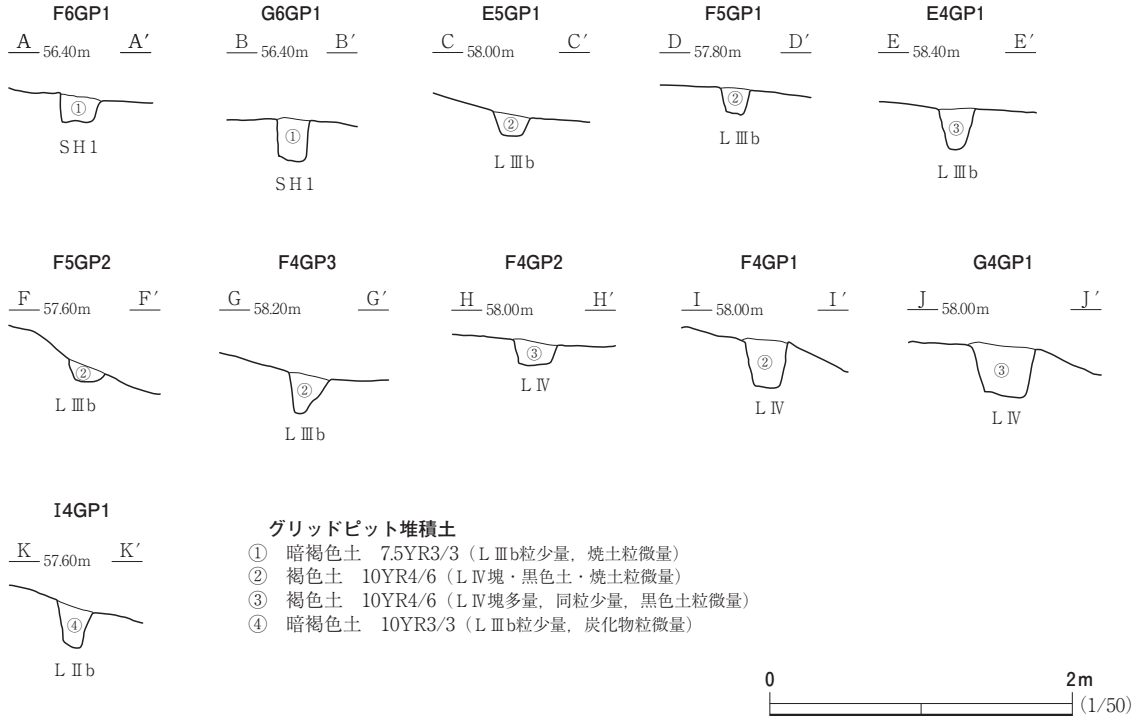

F6GP1
A 56.40m A′
SH1
G6GP1
B 56.40m B′
SH1
E5GP1
C 58.00m C′
LⅢb
F5GP1
D 57.80m D′
LⅢb
E4GP1
E 58.40m E′
LⅢb
F5GP2
F 57.60m F′
LⅢb
F4GP3
G 58.20m G′
LⅢb
F4GP2
H 58.00m H′
LⅣ
F4GP1
I 58.00m I′
LⅣ
G4GP1
J 58.00m J′
LⅣ
I4GP1
K 57.60m K′
LⅡb
グリッドピット堆積土
① 暗褐色土　7.5YR3/3（LⅢb粒少量，焼土粒微量）
② 褐色土　10YR4/6（LⅣ塊・黒色土・焼土粒微量）
③ 褐色土　10YR4/6（LⅣ塊多量，同粒少量，黒色土粒微量）
④ 暗褐色土　10YR3/3（LⅢb粒少量，炭化物粒微量）
0
2m
(1/50)

図30　グリッドピット

施される。体部の下端や底部の処理は摩滅がひどく判別できない。

ま と め

本遺構は１号遺物包含層上に築かれた柱列跡である。本遺構の南側には，グリッドピットが２基（Ｆ６グリッドＰ１，Ｇ６グリッドＰ１）存在しており，本遺構と合わせて建物跡となる可能性がある。その場合，本遺構は北辺の桁行側柱列となり，桁行２間，梁行１間の側柱建物跡の一部ということになる。本遺構の時期は，Ｐ１から出土した土師器の特徴から，９世紀中葉頃の所産と考えられる。（西　澤）

グリッドピット　ＧＰ（図30，写真34）

本調査において，調査区のほぼ中央を分布の中心として，多数の柱穴と考えられる小穴が認められた。そのほとんどは，近現代における住宅に関連するものと考えられる。そのなかから明らかに近現代に関わると判断できる小穴を除き，建物跡のような規格性が認められないものを，その検出位置のグリッドと検出番号を冠してグリッドピットとして報告する。

グリッドピットのそれぞれの規模は20～30㎝程度で，Ｇ４グリッドＰ１のように直径が40㎝を測るものも存在する。多くはＬⅢｂまたはＬⅣの上面で検出している。グリッドピットは，大きく２つの群に分かれる。１つは，１号特殊遺構の北に位置する一群である。Ｆ５グリッドＰ２は１号特殊遺構と重複しており，これらのグリッドピットは１号特殊遺構より新しい時期の所産である可能性が高い。もう一方の一群は，Ｆ６グリッドＰ１，Ｇ６グリッドＰ１の２基である。これらは堆積土の類似性から対になる可能性がある。検出面は１号遺物包含層上であり，１号柱列跡と関連して，梁行１間，桁行２間の側柱建物跡になる可能性がある。そのほか，Ｉ４グリッドＰ１のように，単独で存在するグリッドピットもある。いずれからも，遺物は出土しなかった。（西　澤）

第８節　遺物包含層と遺構外出土遺物

今回の調査では，調査区の中央付近に人為的な廃土と推定される堆積土の範囲を検出した。この堆積土の範囲は周囲の基本土層と明瞭に異なっており，土師器片が混入していることから遺物包含層として報告する。遺物包含層は浅い谷状地形に立地し，周囲には１号建物跡，１・２号特殊遺構があり，１号柱列跡と重複することから，これらの遺構と関わりがある堆積土と推定される。

遺構外出土遺物は，土師器片400点，須恵器片27点，陶磁器片497点，石器11点，土製品４点が出土した。最も出土点数の多い陶磁器類は大半がＬＩ～ＬⅡｃに含まれ，多くは宅地であった調査区中部から南東部を中心に出土している。これらの陶磁器類は，椀・皿・擂鉢等で，近世以降の遺物であるため，本書では掲載していない。次いで出土点数の多い土師器は，調査区中部から東部では１号住居跡・１号建物跡・１号遺物包含層の周囲からまとまって出土している。調査区北西部では，２・３号建物跡の南側斜面下で分布のまとまりが認められる。須恵器は土師器の集中する範囲

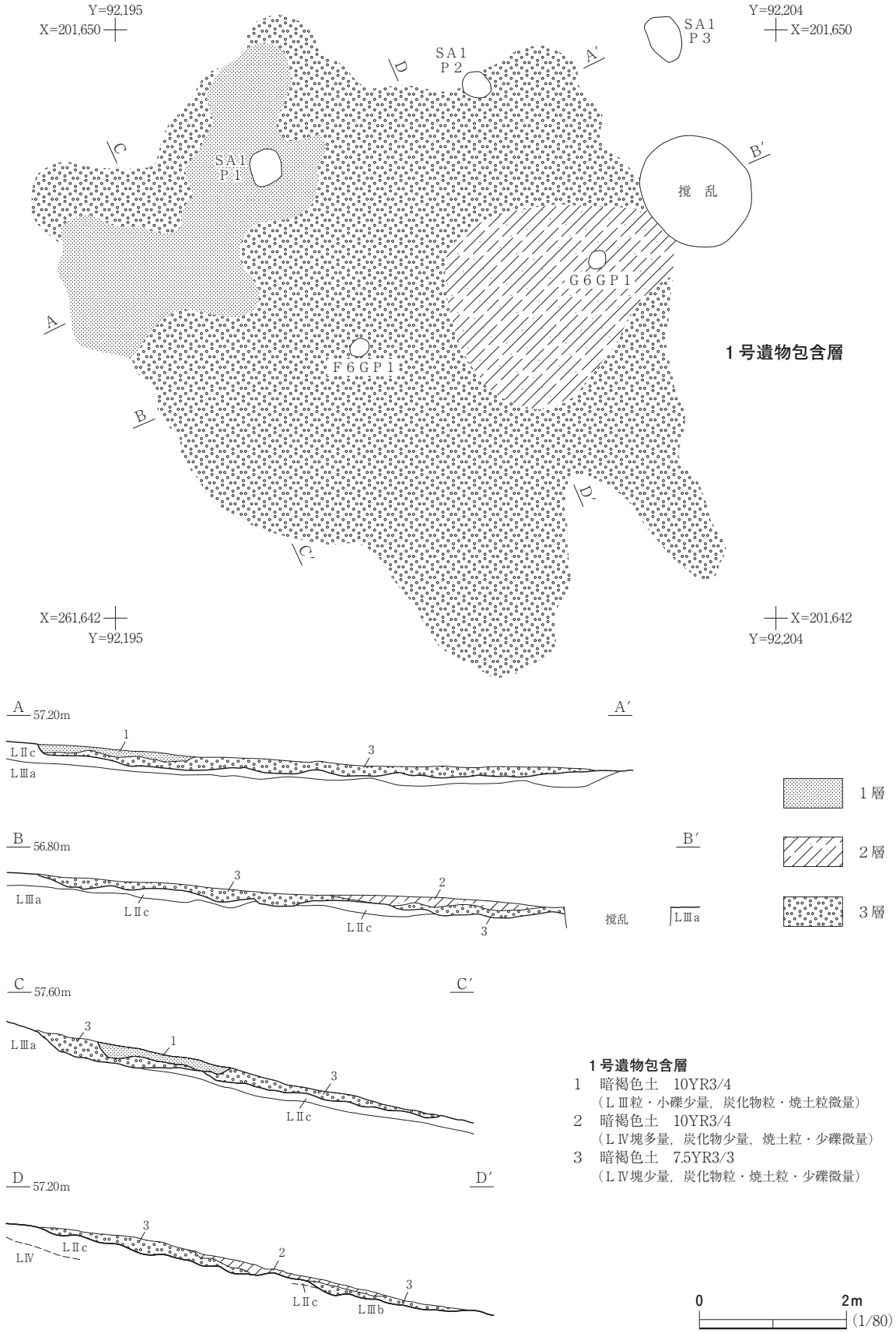

Y=92,195
X=201,650
Y=92,204
X=201,650
SA1
P3
SA1
P2
SA1
P1
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
撹乱
G6GP1
F6GP1
1号遺物包含層
X=261,642
Y=92,195
X=201,642
Y=92,204
A 57.20m
A′
LⅡc
LⅢa
B 56.80m
B′
撹乱
C 57.60m
C′
D 57.20m
D′
LⅣ
LⅢb
1層
2層
3層
1号遺物包含層
1　暗褐色土　10YR3/4
（LⅢ粒・小礫少量，炭化物粒・焼土粒微量）
2　暗褐色土　10YR3/4
（LⅣ塊多量，炭化物少量，焼土粒・少礫微量）
3　暗褐色土　7.5YR3/3
（LⅣ塊少量，炭化物粒・焼土粒・少礫微量）
0
2m
(1/80)

図31　１号遺物包含層

と分布が重なる傾向がある。石器・土製品は出土点数が少なく分布の傾向はつかめない。土師器12点，須恵器４点，土製品２点，石器４点を図示した。

以下遺物包含層，遺構外出土遺物の順に説明していく。

１号遺物包含層　ＳＨ１（図31・32，写真33・38）

本包含層は調査区の中央のＥ６，Ｆ６・７，Ｇ６・７グリッドにわたって広がる。１号柱列跡，Ｆ６グリッドＰ１，Ｇ６グリッドＰ１が本包含層を掘り込んで構築されていることから，これらよりも古い時期に堆積している。本包含層は，１号特殊遺構の南側の斜面に東西約900㎝，南北約900㎝の範囲にわたって広がっており，一番深く堆積しているところで20㎝程度の深さを有する。

堆積土は３層に分層した。包含層範囲の全体にわたりℓ３が堆積し，北西側の一部にℓ１が，東側の一部にℓ２が部分的に堆積する。いずれの層にも，ＬⅣの小塊のほか，炭化物や焼土が含まれており，検出面であるＬⅡｃとは区別される。堆積土を除去すると，周辺の地形は僅かながら谷状にくぼんでいることが確認された。

遺物はℓ１とℓ２から出土した。それぞれ土師器片が出土しており，ℓ１からは７点，ℓ２からは29点が出土している。遺存状態の良い５点を図32に図示した。１～４はいずれも土師器杯の底部付近の資料である。いずれもロクロ成形され，外面の体部下端に手持ちヘラケズリが施される。内面にはヘラミガキおよび黒色処理が施される。底面の処理は，１・２では回転糸切り痕が観察できるが，３・４では摩滅していて不明である。

同図５は土師器甕の口縁部付近の資料である。ロクロ成形され，ほぼ垂直に立ち上がる胴部から口縁部が外反して開く。

本包含層は北側に１号特殊遺構が位置しており，その構築廃土である可能性がある。また，重複する形で，１号柱列跡の柱穴が確認されていることからも，構築廃土を利用して斜面の小さな谷を造成した痕跡の可能性がある。ただ，明確に判断できなかったため，遺物包含層とした。

包含層が堆積した時期は，堆積土中に含まれる土師器や各遺構との関係から，９世紀中葉頃には堆積していたと考えられる。

（西　澤）

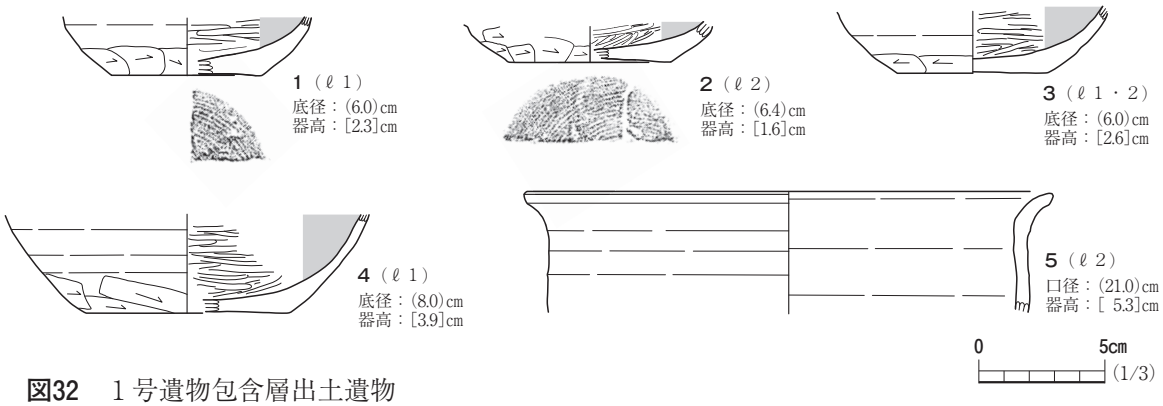


図32　１号遺物包含層出土遺物

遺構外出土遺物（図33，写真38）

図33－１～９はロクロ成形の土師器杯である。全体の器形がうかがえるのは１・７である。１は内湾気味に立ち上がる器形で，口縁部が弱く外反する。７は底部から直線的に開きつつ立ち上がる器形で，口径に対して器高が低い。いずれの資料も内面に黒色処理が施され，１～７についてはヘラミガキが認められる。体部下端の再調整は１～６で手持ちヘラケズリを確認したが，７～９については摩滅が顕著で，再調整の種類と有無は不明である。

同図10～12は土師器甕の口縁部付近の資料である。10・11はロクロ成形の小型甕で，頸部で強く屈曲し，口縁部が開く器形である。口唇部は外削ぎ状に尖っている。11はロクロ成形の中型甕で，頸部が「く」字に屈曲し，口唇部が上方へ摘み上げられている。12は非ロクロ成形の小型甕である。短い口縁部外面が横ナデされ，胴部に縦方向のハケメが施される。

同図13～15は須恵器瓶である。倒卵形の胴部をもつ長頸瓶とみられ，13は肩部から胴上部，14は底部，15は胴下部の資料である。ロクロ成形され，13には自然釉が認められ，14には断面方形の高台が付く。

同図16は須恵器甕の胴部資料である。器壁が薄く，外面には平行タタキ目，内面には同心円状の当具痕が認められる。

同図17・18は近世以降の所産と考えられる素焼きの土製玩具である。17は台の上に鳥が乗った形状の土製品である。鳥は雄鶏と推定され，翼を閉じ尾を上げている。頭部および左半身を欠く。台部は直方体で側面に肉彫り状の巴紋と唐草紋が施されている。中身は中空で，台部の下方は開放しており，内面には指頭圧痕が顕著にみられる。鳥の臀部に円形の孔が開いていることから，土笛の可能性がある。18は太鼓を持った土人形と推定される。太鼓部分は蒲鉾型で，２本１組の平行沈線を斜格子状に施し，斜格子状の文様の中央を同様の沈線で縦に分割している。側面には手と考えられる刻みの施された粘土塊が貼り付けられている。

同図19～21は石鏃である。19は凸基有茎石鏃である。流紋岩の厚めの剥片を素材とし，両面から丁寧な押圧剥離を加えている。長さが幅の３倍以上ある細長い形状で，断面形状は菱形である。刃部の形状は両側縁が内湾気味で，基部から茎部にかけてはえぐりが浅く菱形に近い。20は凹基無茎石鏃である珪質頁岩の剥片を素材とし，両面から丁寧な押圧剥離を加えている。長さ3.8㎝を測る大型の石鏃である。全体の形状は縦長の三角形で，基部のえぐりは浅く平基に近い。断面形状は薄いレンズ状を呈する。21はアメリカ式石鏃である。玉髄の剥片を素材とし，両面から丁寧な押圧剥離を加えている。全体的な形状は縦長の二等辺三角形を呈し，基部のやや上の両側縁を打ち欠いて３㎜の切れ込みを形成し，基部は半円形にえぐれる。

同図22は玉髄の石核である。傾いた台形状をしており，縁辺部から細かい剥片を割り取っている。

（笠　井）

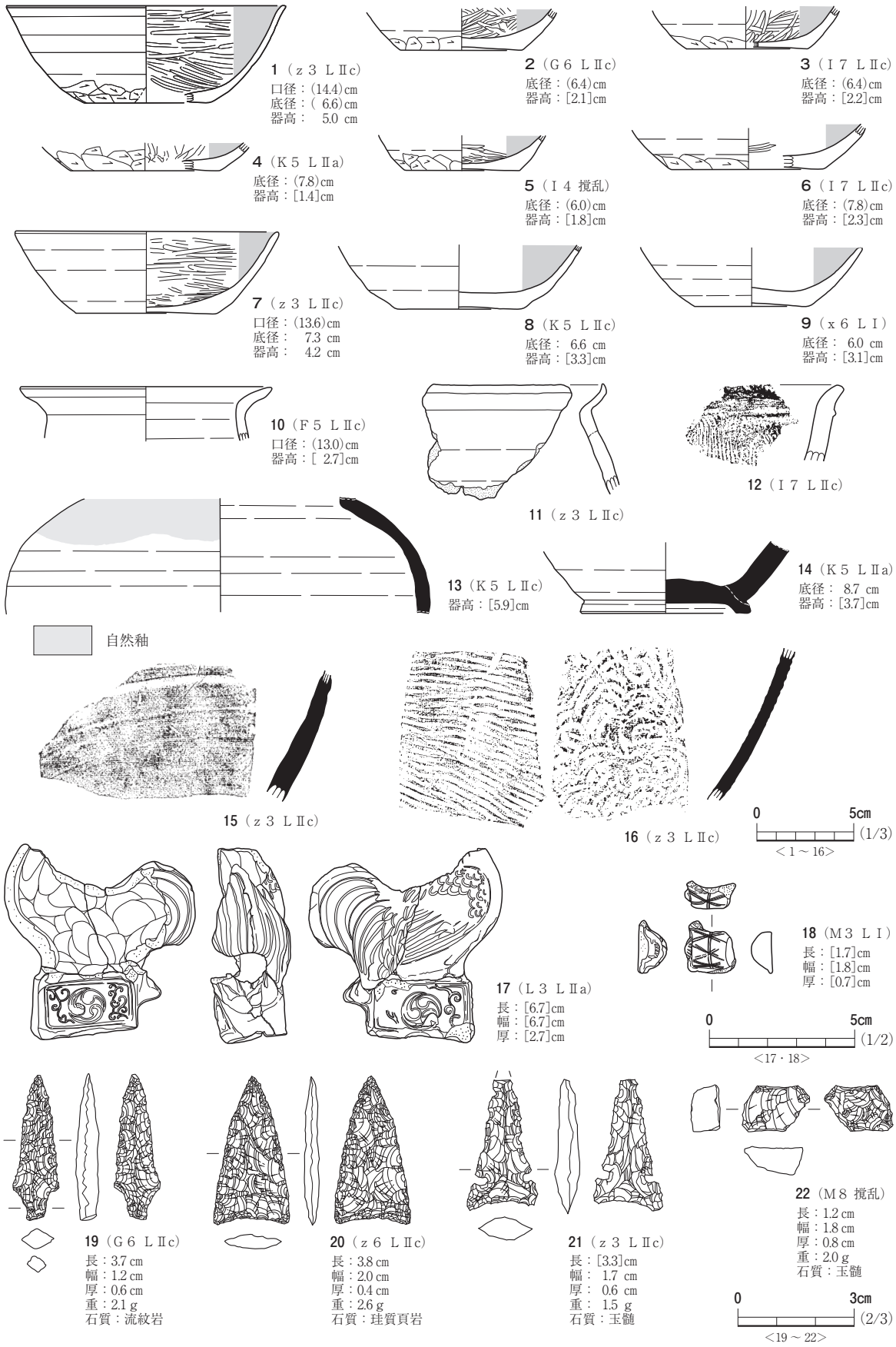

1（z３ ＬⅡc）
口径：(14.4)cm
底径：(6.6)cm
器高： 5.0 cm
2（Ｇ６ ＬⅡc）
底径：(6.4)cm
器高：[2.1]cm
3（Ｉ７ ＬⅡc）
底径：(6.4)cm
器高：[2.2]cm
4（Ｋ５ ＬⅡa）
底径：(7.8)cm
器高：[1.4]cm
5（Ｉ４ 撹乱）
底径：(6.0)cm
器高：[1.8]cm
6（Ｉ７ ＬⅡc）
底径：(7.8)cm
器高：[2.3]cm
7（z３ ＬⅡc）
口径：(13.6)cm
底径： 7.3 cm
器高： 4.2 cm
8（Ｋ５ ＬⅡc）
底径： 6.6 cm
器高：[3.3]cm
9（x６ ＬⅠ）
底径： 6.0 cm
器高：[3.1]cm
10（Ｆ５ ＬⅡc）
口径：(13.0)cm
器高：[2.7]cm
11（z３ ＬⅡc）
12（Ｉ７ ＬⅡc）
13（Ｋ５ ＬⅡc）
器高：[5.9]cm
14（Ｋ５ ＬⅡa）
底径： 8.7 cm
器高：[3.7]cm
自然釉
15（z３ ＬⅡc）
16（z３ ＬⅡc）
0 5cm (1/3)
＜1～16＞
17（Ｌ３ ＬⅡa）
長：[6.7]cm
幅：[6.7]cm
厚：[2.7]cm
18（Ｍ３ ＬⅠ）
長：[1.7]cm
幅：[1.8]cm
厚：[0.7]cm
0 5cm (1/2)
＜17・18＞
19（Ｇ６ ＬⅡc）
長：3.7 cm
幅：1.2 cm
厚：0.6 cm
重：2.1 g
石質：流紋岩
20（z６ ＬⅡc）
長：3.8 cm
幅：2.0 cm
厚：0.4 cm
重：2.6 g
石質：珪質頁岩
21（z３ ＬⅡc）
長：[3.3]cm
幅： 1.7 cm
厚： 0.6 cm
重： 1.5 g
石質：玉髄
22（Ｍ８ 撹乱）
長：1.2 cm
幅：1.8 cm
厚：0.8 cm
重：2.0 g
石質：玉髄
0 3cm (2/3)
＜19～22＞

図33　遺構外出土遺物

第３章　自然科学分析

第１節　出土炭化材の樹種同定

古代の森研究舎

１．試料と方法

南萱倉遺跡は相馬市初野字南萱倉の丘陵の南麓に位置する平安時代の集落跡である。本遺跡の平安時代末の木炭焼成土坑，火災で焼失したとみられる平安時代の竪穴住居，竪穴住居よりやや古いとみられる２号特殊遺構からは炭化材が検出され，当時の木材利用を調査する目的で炭化材６試料の樹種同定を行った。炭化材試料からはステンレス製剃刀で横断面，放射断面，接線断面の３方向の断面を割り取り，プレパラートに固定して生物顕微鏡 Nikon Eclipse 80i に反射照明装置 Nikon TE2－PS を取り付け，反射光で観察，同定を行った。

２．同定結果と考察

同定された樹種を図34に示す。本遺跡からはコナラ属コナラ節２点，コナラ属クヌギ節２点，クワ属１点，広葉樹樹皮１点が出土した。以下に同定された樹種の形態記載を行う。

コナラ属コナラ節（*Quercus* sect. *Prinus*）：大きな道管が年輪はじめに数列配列し，その後急に径を減じて薄壁で角張った小道管が波状に配列する環孔材。道管は単穿孔を有し，放射組織は同性で単列と幅の広い広放射組織がある。

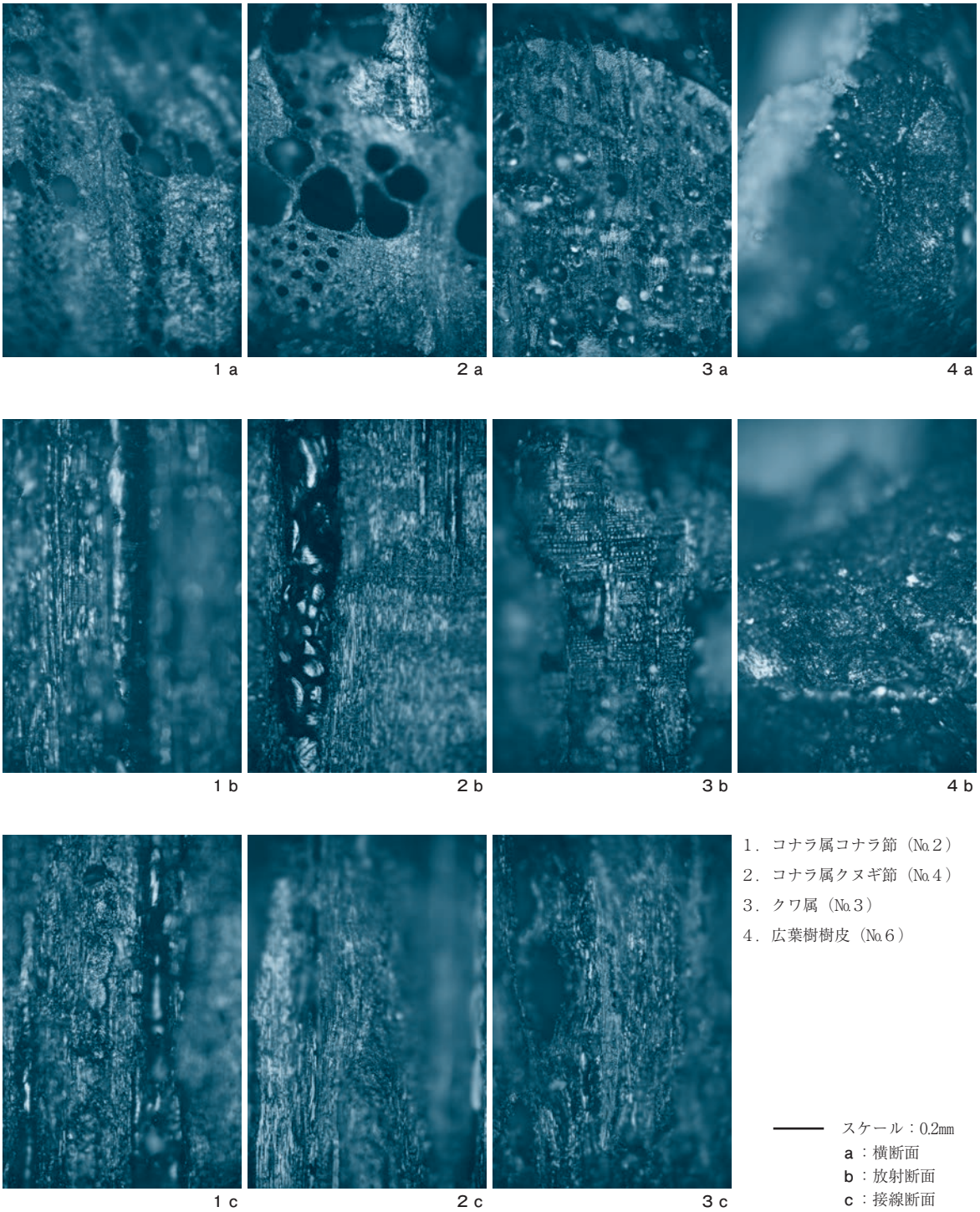
コナラ属クヌギ節（*Quercus* sect. *Cerris*）：大きな道管が年輪はじめに数列配列し，その後急に径を減じて厚壁で丸い小道管が波状に配列する環孔材。道管は単穿孔を有し，放射組織は同性で単列と幅の広い広放射組織がある。

クワ属（*Morus*）：やや大きな道管が年輪はじめに数列配列し，徐々に径を減じて数個の小道管が斜めないし集塊状に複合して散在する環孔材。道管は単穿孔を有し，放射組織は異性で１－５列の紡錘形である。

広葉樹樹皮：横断面，放射断面ともに柔細胞とみられる細胞が部分的に層状に配列し，道管などの構造は見られない。

１・２号住居跡出土の炭化材は２試料ともコナラ属コナラ節で，建築材として利用されていたと考えられる。また，木炭焼成土坑からはコナラ属クヌギ節，２号特殊遺構からはクワ属が出土し，いずれも燃料材として周囲に生育していた樹種を利用していたと考えられる。試料№６の炭化材は広葉樹樹皮で，木炭を焼成する際に樹皮を剝がさずに利用していたと思われる。

試料番号	遺　構		時　期	層　位	採取日	樹　種
№１	ＳＩ１	焼失竪穴住居跡	平安時代	ℓ３	100519	コナラ属コナラ節
№２	ＳＩ２Ｐ３	竪穴住居跡	平安時代	ℓ１	100611	コナラ属コナラ節
№３	ＳＸ２	特殊遺構	平安時代	ℓ１	100702	クワ属
№４	ＳＫ４	木炭焼成土坑	平安時代末	ℓ１	100721	コナラ属クヌギ節
№５	ＳＫ４	木炭焼成土坑	平安時代末	ℓ１	100721	コナラ属クヌギ節
№６	ＳＫ４	木炭焼成土坑	平安時代末	ℓ１	100721	広葉樹樹皮



１．コナラ属コナラ節（№２）
２．コナラ属クヌギ節（№４）
３．クワ属（№３）
４．広葉樹樹皮（№６）

スケール：0.2㎜
ａ：横断面
ｂ：放射断面
ｃ：接線断面

図34　出土炭化材の樹種および顕微鏡写真

第２節　放射性炭素年代測定

株式会社　パレオ・ラボ

１．はじめに

福島県相馬市初野字南萱倉に位置する南萱倉遺跡の竪穴住居跡，特殊遺構，土坑から出土した炭化材について，加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

２．試料と方法

測定試料の情報，調製データは表１のとおりである。

試料は，竪穴住居跡である１号住居跡および２号住居跡のＰ３（柱穴）から出土した炭化材各１点（PLD－17291・17292），２号特殊遺構から出土した炭化材１点（PLD－17293），製炭遺構と推定される４号土坑から出土した炭化材３点（PLD－17294～17296）の計６点である。２軒の住居跡は重複しており，１号住居跡が２号住居跡の造り替えと考えられている。１号住居跡では９世紀中頃の遺物が出土しているが，２号住居跡では時期のわかる遺物はない。また，１号住居跡は焼失家屋であり，この遺構出土の試料№１（PLD－17291）は建築材と考えられる。２号特殊遺構では，投げ込まれた焼土や炭化物とともに８～９世紀代とみられる須恵器破片が出土している。４号土坑は長軸３ｍほどの隅丸方形で，底面は焼けていて多量の炭化物が出土したが，時期のわかる遺物はない。試料№４～６は焼成された木炭の残りとみられる。

試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C 年代，暦年代を算出した。

３．結　　果

表２に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正した年代範囲，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代，^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲と暦年較正結果を示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり，今後，暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には，^{14}C の半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また，付記した ^{14}C 年代誤差（±１σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。なお，暦年較正の詳細は次のとおりである。

表１　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD－17291	遺構：ＳＩ１（竪穴住居跡） 層位：ℓ３ 試料番号：№1 採取日：100519	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪 採取位置：最外年輪を含む約２年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）
PLD－17292	遺構：ＳＩ２Ｐ３（竪穴住居跡） 層位：ℓ１ 試料番号：№2 採取日：100611	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪 採取位置：最外年輪を含む約５年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）
PLD－17293	遺構：ＳＸ２（特殊遺構） 層位：ℓ１ 試料番号：№3 採取日：100702	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側から約１年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）
PLD－17294	遺構：ＳＫ４（土坑） 層位：ℓ１ 試料番号：№4 採取日：100720	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪 採取位置：最外年輪を含む約２年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）
PLD－17295	遺構：ＳＫ４（土坑） 層位：ℓ１ 試料番号：№5 採取日：100721	試料の種類：炭化材（約１年輪分） 試料の性状：最外年輪 位置：最外年輪を含む約１年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）
PLD－17296	遺構：ＳＫ４（土坑） 層位：ℓ１ 試料番号：№6 採取日：100721	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）

表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号 試料番号	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD－17291 №1	−23.01 ± 0.16	1222 ± 17	1220 ± 15	730AD（ 3.4%）735AD 772AD（47.7%）826AD 840AD（17.1%）863AD	715AD（13.0%）745AD 767AD（82.4%）881AD
PLD－17292 №2	−28.92 ± 0.20	1344 ± 18	1345 ± 20	655AD（68.2%）674AD	648AD（95.4%）688AD
PLD－17293 №3	−25.62 ± 0.15	1335 ± 18	1335 ± 20	658AD（68.2%）678AD	651AD（90.6%）693AD 749AD（ 4.8%）764AD
PLD－17294 №4	−25.54 ± 0.15	1112 ± 18	1110 ± 20	897AD（28.8%）924AD 939AD（39.4%）972AD	892AD（95.4%）982AD
PLD－17295 №5	−28.42 ± 0.20	1113 ± 20	1115 ± 20	896AD（29.5%）925AD 938AD（38.7%）972AD	890AD（95.4%）983AD
PLD－17296 №6	−26.93 ± 0.22	1089 ± 20	1090 ± 20	899AD（24.2%）919AD 950AD（44.0%）989AD	893AD（93.8%）995AD 1006AD（ 1.6%）1012AD

暦年較正とは，大気中の^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C 年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C 濃度の変動，および半減期の違い（^{14}C の半減期5730 ± 40年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：INTCAL09）を使用した。なお，1 σ暦年代範

囲は，OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり，同様に２σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

４．考　　察

各試料の暦年較正結果のうち，２σ暦年代範囲（確率95.4％）に着目して結果を整理する。

１号住居跡の建築材である試料№１（PLD－17291）は，８世紀前半～９世紀後半，２号住居跡のＰ３出土の試料№２（PLD－17292）は７世紀中頃～後半の暦年代範囲であった。試料はいずれも最外年輪を含んでおり，測定した木材の伐採年代を示している。２軒の住居跡は，切り合い関係から１号住居跡が２号住居跡よりも新しいとされており，年代測定の結果はこれに整合的である。ただし，１号住居跡の試料№１は奈良～平安時代の年代であったが，いわゆる飛鳥時代の年代を示した２号住居跡の試料№２とは年代がややひらく結果となった。

２号特殊遺構から出土した試料№３（PLD－17293）は，７世紀中頃～８世紀後半の暦年代範囲を示した。木材の場合，最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが，内側の年輪を測定すると最外年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。試料№３は部位不明の炭化材であり，古木効果の影響を考慮すると，飛鳥～奈良時代あるいはそれ以降に伐採された木材と考えられる。

４号土坑出土の３点，試料№４～６（PLD－17294～17296）は，試料№４と５が９世紀末～10世紀後半，試料№６が９世紀末～11世紀前半の暦年代範囲を示した。なお，試料№６は９世紀末～10世紀末の範囲の確率が特に高かった。№４と５は最外年輪を含む試料で，試料№６は部位不明の試料だが，３点はほぼ同じ年代範囲を示している。試料№６の古木効果の影響を考慮すると，試料№６の木材は試料№４と５よりも新しい時期に伐採された可能性がある。３点の結果を総合すると，４号土坑で最後に焼成された木材には，平安時代の９世紀末～10世紀後半に伐採された木材と，９世紀末～11世紀前半あるいはそれ以降に伐採された木材とが含まれていたと考えられる。

参考文献

Bronk Ramsey, C. 1995 Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy：The OxCal Program, *Radiocarbon* 37, pp.425−430.

Bronk Ramsey, C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon* 43, pp.355−363.

中村俊夫　2000「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の ^{14}C 年代』pp.3−20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. 2009 IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0−50,000 Years cal BP. *Radiocarbon* 51, pp.1111−1150.

第４章　ま　と　め

概　　要

南萱倉遺跡は，阿武隈高地の東縁部から連なる東西方向に細長い舌状丘陵の東端部に近い南向き斜面に立地する遺跡である。遺跡のすぐ南側は小泉川により形成された幅の狭い沖積地で，この沖積地は東方の黒木宿の集落や，古くからの交通路である県道228号線へと続いている。

今回の調査区は遺跡の西部にあたり，調査前は宅地・果樹園・畑地であったために地形の改変が顕著で，遺構は壊滅的に破壊されていることが予想された。ところが，実際に発掘調査を実施してみると，宅地造成時の盛土が厚かったことから，複数の遺構が比較的良好に遺存しており，当初の調査予定範囲を拡張して調査することとなった。

本遺跡で検出した遺構は，竪穴住居跡２軒，掘立柱建物跡３棟，土坑４基，溝跡５条，特殊遺構３基，井戸跡１基，柱列跡１列，グリッドピット11基，遺物包含層１カ所である。遺物は，遺構内および遺構外から土師器片801点，須恵器片41点，陶磁器片503点，石器15点，木製品10点，焼成粘土塊５点，土製品４点が出土している。以下では，遺構と遺物の特徴について時代ごとに概観し，調査のまとめとする。

弥生時代以前の遺構と遺物

本遺跡からは明確に当該期の所産と断定できる遺構は検出されていない。遺構の形状から当該期に含まれる可能性のある遺構としては，落し穴と想定している１号土坑がある。１号土坑は，調査区南東部の丘陵裾部平坦面に立地し，平面形が楕円形に近い隅丸長方形で，深さが64㎝を測る土坑である。この種の土坑はけもの道に沿って数10ｍおきに並んで発見されることが多いが，調査区内ではほかにこの種の土坑は確認できなかった。

当該期の遺物としては石器が少数出土している。図示したものでは，石鏃(図21－５・６，図33－19～21)，２次加工のある剝片(図13－５)，石核(図33－22)がある。これらの遺物は，遺構外出土遺物か，遺構内でも混入品とみられる資料である。石器は単体での時期の特定が困難であるが，石鏃のうち特徴的な資料については所属時期がうかがえる資料もある。調査区北西部のｚ３グリッドから出土した資料(図33－21)は，形態的特徴からアメリカ式石鏃であり，弥生時代でも中期末～後期の所産と考えられる。同様に，Ｇ６グリッド出土の凸基有茎石鏃(図33－19)やｚ６グリッド出土の凹基無茎石鏃(図33－20)は，長さが3.5㎝を超える大形の石鏃であることから，弥生時代の所産である可能性が高い。

今回の調査区において，弥生時代以前の遺構・遺物は，可能性のあるものを含めても非常に希薄である。わずかに出土した遺物も，集落跡に伴うような土器や石皿・磨石等が認められない。この

ことから，当該期の南萱倉遺跡は，狩場などの人々があまり足を踏み入れない場所であったと推定される。

平安時代の遺構と遺物

平安時代は南萱倉遺跡の主体となる時期である。当該期の所産と考えている遺構には，竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑，溝跡，特殊遺構，柱列跡，遺物包含層があり，またグリッドピットのいくつかは，この時期に所属する可能性が高い。

当該期の遺物としては土師器・須恵器が出土している。土師器は，表面が摩滅して調整の観察が困難な資料が多い。杯・甕が認められ，１点のみ土鍋の把手(図13－３)が出土している。土師器の時期は，杯外面の体部下端の再調整が手持ちヘラケズリである資料が卓越することから，９世紀前半代の所産が主体と考えられる。また，ごく少数であるが，非ロクロの甕(図33－12)認められ，８世紀以前にさかのぼる資料も含まれる。須恵器は，甕・長頸瓶の破片資料が少数出土したのみで，全形を復元できるものはない。

竪穴住居跡

１・２号住居跡の２軒を検出した。両住居跡はほぼ同じ位置で重複しており，２号住居跡が古く，１号住居跡が新しい。両住居跡ともに斜面の中位に構築されているため，斜面下方にあたる南側の床面が失われている。

１号住居跡は，南北約６ｍ，東西約5.2ｍと推定される平面長方形をしたやや大型の住居跡である。長辺側にあたる東壁のほぼ中央にカマドが設置され，貼床された床面の中央やや東寄りに地床炉の可能性のある焼土化範囲が認められる。周壁際には壁溝が廻り，４基の主柱穴をもつ。１号住居跡が特徴的なのは，主柱穴の掘形が方形を基調とした平面形をしており，床面から70㎝ほどの深さがある点である。１号住居跡の時期は出土土師器の年代観から，９世紀中葉頃と推定しているが，相馬地域で検出されている当該期の住居跡は，柱穴自体を床面に残さないものが多く，柱穴をもつ場合も掘形の平面形は円形を基調とする。

方形の柱掘形の類例を求めると，近隣の遺跡では新地町に所在する三貫地遺跡原口地区の６・24号住居跡などで認められるが，いずれも７世紀後半～８世紀前半の所産と考えられており，本遺跡の１号住居跡よりも年代的に古い。このため，本遺跡の１号住居跡は９世紀代の住居跡としては特異な存在と言える。なお，１号住居跡の床面近くには構造材と推定される炭化材が多く検出されたことから，焼失家屋と判断している。

２号住居跡は１号住居跡の床面下で検出した住居跡である。周壁が１号住居跡により破壊されているために，平面形および規模については不明であるが，カマドと主柱穴の位置関係から１号住居跡よりもやや規模が小さい方形の平面形であったと推定される。カマドは東壁の北隅と推定される位置に設置されており，両袖の基底部と煙道部が遺存していた。主柱穴は３基検出したが，１号住居跡のＰ４と重なる位置にもう１基存在した可能性が高い。柱掘形の平面形は，１号住居跡が方形

を基調としていたのに対し，２号住居跡は円形を基調としており，また，床面からの深さが最も深いものでも15㎝と浅い。２号住居跡は，１号住居跡と位置・方位がほぼ一致することから１号住居跡の建て替え前の遺構と考えている。

掘立柱建物跡

１～３号建物跡の３軒を検出した。いずれの建物跡も斜面に構築されていることから，斜面の山側を掘削し谷側に排土を盛って平坦面を造成し，その上に建物を建設している。また，山側の掘削部分の直下には排水施設と推定される溝状のくぼみが設けられている。

１・２号建物跡は，桁行３間，梁行２間の側柱建物跡である。規模は１号建物跡が東西約5.1ｍ，南北約3.3ｍ，２号建物跡が東西約5.4ｍ，南北約3.9ｍで２号建物跡がわずかに大きい。両遺構ともに方形を基調とした規模の大きい掘形をもち，床面には地床炉と考えられる焼土化範囲が確認されている。焼土化範囲は，１号建物跡では床面の西寄りと東寄りの２カ所，２号建物跡では床面中央の北寄りに１カ所あり，建物内で何らかの燃焼行為を行っていたことがわかる。この燃焼行為が具体的にどのような作業に伴うものなのかは，判断する材料が少ないため断定できないが，１号建物跡の出土遺物のなかには工房跡から出土することの多い把手付土鍋の把手部分が含まれることから，何らかの生産活動に関わる可能性を指摘しておきたい。遺構の時期は，両遺構ともに出土遺物から９世紀前半代の所産と考えており，特に１号建物跡は１号住居跡の西側に並ぶように建てられていることから，１号住居跡と同時期に併存していたと推定している。

３号建物跡は，現状で桁行２間，梁行１間分が遺存する側柱建物跡で，規模は桁行側にあたる東西方向が約3.3ｍを測る。２号建物跡と重複しており，これよりも古い。柱掘形は平面形が円形基調で規模が小さく，床面造成後に掘られたものである。地床炉とみられる焼土化範囲は認められないが，壁面が焼け，土師器杯が埋納された小穴Ｐ６がある。遺構の時期はＰ６出土遺物から９世紀前半代の所産と考えられるが，重複関係から２号建物跡に先行する。１・２号建物跡と比較すると規模が小さく，柱掘形も簡素である。

本遺跡の掘立柱建物跡は床面の状況が判明しており，２通りの床面施工手順が存在する。１つめは１号建物跡例で，柱掘形に柱を建てた後，黄褐色の粘質土で土間状の貼床面を構築する施工手順がとられる。２つめは２・３号建物跡例で，斜面掘削時の排土により床面が造成された後に柱の掘形が掘られ，柱が建てられる方法である。

１号建物跡と同様の施工手順で建物が建てられている例としては，宮城県東松島市の赤井遺跡ＳＢ419があり，２・３号建物跡と同様の施工手順で建てられている例としては，新地町の武井Ｅ遺跡１号建物跡がある。赤井遺跡ＳＢ419は８世紀代の役所に関連する桁行５間，梁行２間の大型建物跡であり，黄色粘土で構築された床面は，基壇に近い立派なものである。武井Ｅ遺跡１号建物跡は８世紀代の葬送儀礼に関連すると考えられる桁行２間，梁行１間の小型建物跡で，堆積土に木炭粒を多量に含み平面方形を基調とする２基のピットが伴う。両遺構ともに特殊な建物跡であり，所属時期・規模ともに本遺跡の建物跡と異なるため，直接比較検討することは困難であるが，掘立柱

建物跡で床面の状況が判明した例が極めて少ないことから今後の類例の増加を待ち，平地式の掘立柱建物跡の機能の復元も含めて再検討していく必要がある。

土　　坑

検出した４基の土坑のうち，２号土坑と４号土坑の２基を平安時代の所産と考えている。２号土坑は平面形が楕円形の小型の木炭焼成土坑である。底面が皿状にくぼみ，底面直上に木炭層が形成されている。同様の遺構は，近隣の相馬市段ノ原Ａ遺跡６・８・10・54号土坑や，段ノ原Ｂ遺跡307号土坑などで認められ，平安時代には比較的多い製炭遺構と考えられる。

４号土坑は隅丸長方形をした長軸長3.1ｍの大型の土坑で，斜面地に立地する。底面の周壁沿いと中央の長軸方向に溝が認められ，堆積土には木炭片・焼土粒を含む。類似する遺構としては，「伏せ焼き法」による製炭遺構とされる南相馬市の横大道遺跡１・３・５・６号木炭窯跡やいわき市の駒込遺跡１号土坑に床面中央の溝が認められる例がある。これらの遺構は，平坦地に立地する点，床面の周壁沿いに溝が認められない点，長軸長が長い点で本遺跡４号土坑と相違するが，基本的には同じ性格の遺構と考えている。４号土坑の時期は出土木炭の放射性炭素年代測定値が９世紀末～11世紀前半代の年代が出ているため，平安時代後半の所産と考えている。

溝　　跡

堆積土の状況から，検出した溝跡５条は平安時代の所産と考えている。本遺跡の溝跡は３種類に大別できる。１種類めは１・２号溝跡が該当する大型のものである。溝幅は上端で60～80㎝前後，下端で20㎝以上あり，全長は調査範囲内で１号溝跡が51.4ｍ，２号溝跡は21ｍを測る。断面形は概ね逆台形で，底面の起伏は少ない。両遺構ともに等高線を斜めに横切るように東西方向に延びており，東端と西端で比高差が90㎝以上ある。堆積土はいずれも流入土で自然堆積したものである。このような特徴をもつ溝跡は道跡と考えられ，相馬市猪倉Ｂ遺跡１号道跡，山田Ａ遺跡１号溝跡，山田Ｂ遺跡１号溝跡，新地町向田Ｅ遺跡１～３号道跡などに類例が求められる。

２種類めは３・４号溝跡が該当する規模の小さいものある。溝幅は上端で40～50㎝前後，下端で15～30㎝，全長は３号溝跡が9.3ｍ，４号溝跡が5.2ｍを測る。断面形は概ね逆台形で，底面の起伏が少なく比高差も少ない。３号溝跡は，１・２号住居跡の斜面上方にあたる北側に弧状に掘られ，その西端は１号住居跡の西側に隣接する１号建物跡の排水施設へと接続しており，４号溝跡は３号溝跡の途切れる東側を補強するように掘られている。このことから，これらの溝跡は，住居跡への雨水の流入を防ぐ目的で掘られた排水溝と考えられる。

３種類めは５号溝跡が該当する分岐する溝跡である。東西方向に延びる幅の狭い溝と，北西－南東方向へ延びる幅の広い溝が遺構の西側で「Ｙ」字状に接続している。幅の狭い溝は断面逆台形をしており，底面の起伏が少なく，規模がやや小さいものの，道跡と推定した１種類目と似た特徴がある。幅の広い溝は斜面を登るように掘られ，断面は浅い「Ｕ」字形で，底面には起伏が多く南東方向へ傾斜している。遺構の性格は断定できないものの，幅の狭い溝は２号溝跡の西側延長線上にあり，位置関係および断面形状から同一の遺構である可能性がある。

特殊遺構・柱列跡・グリッドピット

３基の特殊遺構は，出土遺物および遺構の重複関係から，いずれも当該期の所産と考えている。１号特殊遺構は，斜面を削平して方形基調の平坦面を造成した遺構である。斜面下方にあたる南側に１号建物跡のような貼床を施し，平坦な床面を形成している。遺物が出土していないためどのような作業が行われていたのか不明であるが，作業場として使用されていたと想定している。

２号特殊遺構は，隅丸長方形の土坑状の遺構で，充填土の上部に焼成粘土塊・焼土塊・炭化物が廃棄されていた。炉跡等の燃焼を伴う遺構の下部施設と推定しているが，材料が少なく断定できない。位置関係から１号特殊遺構に伴う可能性もある。

３号特殊遺構は，１号特殊遺構と同様に斜面を削平して方形基調の平坦面を造成した遺構である。周壁際に壁溝が掘られ，床面には地床炉と考えられる焼土化範囲が認められる。住居跡の一部である可能性もあるが，現在判明している範囲では，１号特殊遺構同様に作業場と想定している。

柱列跡は，１号特殊遺構南側の斜面に位置する１号柱列跡１列のみである。１号遺物包含層上に構築され，東西方向に並ぶ３基の柱穴で構成される。東側に隣接する１号建物跡の北側柱列の延長線上に位置している。柱内出土遺物から，９世紀前半代の所産と考えられる。位置関係から，本遺構の南側で東西方向に並ぶ２基のグリッドピット（Ｆ６ＧＰ１・Ｇ６ＧＰ１）と合わせて，桁行２間，梁行１間の建物跡を形成していた可能性がある。

遺構の変遷と集落の性格

南萱倉遺跡の平安時代の遺構は，出土遺物から概ね９世紀中葉頃の所産と考えられ，４号土坑が11世紀も含めたより新しい時期の遺構と推定される。９世紀中葉頃の遺構群は，少なくとも２～３段階の変遷が想定される。重複関係のある１・２号住居跡と２・３号建物跡で，円形基調から方形基調への柱掘形の変化が認められる。この形状変化がほかの遺構にも援用できるとすれば，２号住居跡→１号住居跡，１号柱列跡→１号建物跡，３号建物跡→２号建物跡といった変遷を想定できる。

各遺構間の併存関係は不明であるが，調査区西部では，２号建物跡との重複関係から，３号建物跡と３号特殊遺構は時期的に近い可能性が高い。調査区東部では，位置関係から１号住居跡，１号建物跡，３・４号溝跡が同時期に併存していたと推定される。また，３号溝跡との重複関係から２号溝跡およびその西側の延長部分と推定される５号溝跡は，１号住居跡，１号建物跡などに後続する遺構と考えられる。そのほかには，１号遺物包含層の堆積土供給元の可能性が高い１号特殊遺構は，１号柱列跡に先行していた可能性がある。

以上を整理すると，南萱倉遺跡の平安時代の遺構は古い順から以下のような変遷をたどったと推定される。

第１段階　１号特殊遺構≒２号特殊遺構≒１号遺物包含層

第２段階　２号住居跡≒１号柱列跡≒３号建物跡≒３号特殊遺構

第３段階　１号建物跡＝３号溝跡≒４号溝跡≒１号住居跡≒２号建物跡

第４段階　２号溝跡≒５号溝跡

第５段階　４号土坑

なお，第１～４段階は，出土遺物から９世紀中葉を中心としての短い時間幅での変遷であると考えられ，各段階は漸次的な変遷であった可能性が高い。また，２号土坑，１号溝跡については，他遺構との関係を分析する材料に乏しいため，どの段階に属する遺構であるのか不明である。

本遺跡の平安時代の集落は，竪穴住居跡・掘立柱建物跡・特殊遺構が小規模な群を成している印象をうける。近隣に所在する新地町三貫地遺跡原口地区・北原遺跡・境Ａでみられるような複数の竪穴住居跡と掘立柱建物跡で構成される規模の大きな集落や，新地町白子下Ｃ遺跡・相馬市宿仙木Ａ遺跡でみられる少数の竪穴住居跡で構成される小規模集落，相馬市山田Ａ遺跡・新地町向田Ａ遺跡でみられるような竪穴住居跡・製鉄炉・鋳造遺構・木炭窯等で構成される中規模の製鉄関連集落とは規模・遺構の構成で様相が異なる。今回の調査では本遺跡で検出された集落の性格を特定することができなかったが，今後の類例の増加を待って再評価されることをのぞみたい。

近世の遺構と遺物

中世を通して南萱倉遺跡では遺構・遺物が検出されず，次に遺構・遺物が認められるのは近世の所産である。この時期には調査区東部は宅地となっていたようで，多数の陶磁器が出土している。ただし，近代以後の大規模な地形改変で明確な遺構は残されておらず，１号井戸跡のみを掲載した。１号井戸跡は，深さ約２ｍの素掘りの井戸である。堆積土の下層から，曲桶・櫛・栓等の木製品が出土した。調査区西部の斜面上位には複数の墓坑群が存在し，近世～近代にかけての墓地であることが明確であったが，調査の対象とはしなかった。（笠　井）

引用・参考文献

(財)福島県文化センター編　1986「北原遺跡」『国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅱ』福島県文化財調査報告書第166集
(財)福島県文化センター編　1987「三貫地遺跡(原口地区)」『国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅲ』福島県文化財調査報告書第179集
(財)福島県文化センター編　1988「境Ａ遺跡」『国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅳ』福島県文化財調査報告書第192集
(財)福島県文化センター編　1989「向田Ａ遺跡」「向田Ｅ遺跡」「武井Ｅ遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅰ』福島県文化財調査報告書第215集
埋蔵文化財研究会関西世話人会編　1992「第Ⅰ部第３分冊北陸，信越，関東，東北編」『弥生時代の石器－その始まりと終わり－』
(財)福島県文化センター編　1995「段ノ原Ａ遺跡」「段ノ原Ｂ遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅲ』福島県文化財調査報告書312集
(財)福島県文化センター編　1995「駒込遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告４』福島県文化財調査報告書316集
(財)福島県文化センター編　1996「猪倉Ａ遺跡」「猪倉Ｂ遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅳ』福島県文化財調査報告書326集
(財)福島県文化センター編　1997「山田Ａ遺跡」「山田Ｂ遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅴ』福島県文化財調査報告書333集
矢本町教育委員会編　2001『赤井遺跡Ⅰ－牡鹿柵・郡家推定地－』矢本町文化財調査報告第14集
(財)福島県文化振興事業団編　2010「横大道遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告60』福島県文化財調査報告書469集
(財)福島県文化振興事業団編　2010「宿仙木Ａ遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告64』福島県文化財調査報告書473集
(財)福島県文化振興事業団編　2011「白子下Ｃ遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告66』福島県文化財調査報告書479集

第２編　払川（はらいがわ）遺跡

遺跡記号	ＳＭ－ＨＲＧ
所在地	相馬市初野字払川・羽黒
時代・種類	縄文時代の集落跡 平安時代以降の製炭場
調査期間	平成22年８月２日～９月17日
調査員	吉田秀享・西澤正和

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形

払川遺跡は，太平洋に面した福島県浜通り地方北部に所在する遺跡である。行政区分では，相馬市初野字払川・羽黒地内に位置する。調査を開始する前の現況は，宅地および山林であった。遺跡は，ＪＲ常磐線相馬駅から北西に約４㎞，最も近い海岸線（相馬港周辺）まで約７㎞の地点に位置する。遺跡の西側には阿武隈高地が連なり，西には標高346ｍの羽黒山が，北西には標高275ｍの羽山がそびえ立っている。羽黒山の西側は，宮城県丸森町となっている。羽山の北側には，福島県道・宮城県道228号相馬大内線が東西方向に走り，旗巻峠を越えることで宮城県に至る。旗巻峠は，戊辰戦争の折に政府軍と奥羽越列藩同盟軍との激戦があった場所であり，宮城県側には今も当時の碑が残っている。

遺跡は北西側にある羽山の南向き斜面と，そこから延びる小さな谷筋にあり，その標高は58～72ｍである。遺跡の南側には羽黒山より流れる払川が流れている。払川は相馬市街地を東流する地蔵川の支流であり，遺跡の北東約600ｍで両河川は合流する。その後，地蔵川は段丘間の沖積低地を北流し，相馬港の北側で太平洋へと注いでいる。（西　澤）

第２節　調 査 経 過

払川遺跡は，縄文土器の散布地として周知されていた遺跡である。平成５年度に行った常磐自動車道に伴う表面調査においても，縄文土器が採集されている（『福島県内遺跡分布調査報告５』）。

表面調査の結果を受けて，平成20年度に工区内の12,700㎡を対象に試掘調査が行われ，本報告書における３号土坑の一部を検出した。その結果，800㎡の範囲において保存が必要とされ，記録保存を行うこととなった（『福島県内遺跡分布調査報告14』）。

常磐自動車道建設の工事の進捗にあわせ，平成19年度から本遺跡の調査が計画されたが，条件整備が整わず，平成22年６月まで発掘調査が不可能と判断されていた。しかし，６月末の関係機関との連絡調整会議の折，再確認した結果，調査可能と判断され，平成22年度の８月から９月にかけて発掘調査を実施した。

ただ，調査現場へ至る一般道路は非常に狭く，常磐自動車道建設の工事にかかわる大型ダンプが頻繁に移動していた。このため，当初は作業員の安全を考慮して，工事に区切りがつく機会をうかがっていた。しかしながら，大型ダンプの運行は途絶えることがなかったため，調査員および作業員の現場への侵入する時間帯のみ工事用車両の進入を止めて現場へ出入りすることとなった。このほか，現地連絡所のプレハブから現場に入る際にも，工事用ダンプや重機と交差せねばならず，安

図１　調査区位置図

全管理には特に気をつける必要があった。また本年は，全国的に記録的な猛暑となり，厳しい暑さのなかでの調査を強いられた。例年以上に熱中症や日射病への対策が余儀なくされ，調査員や作業員の健康状態を常に管理しての調査となった。

現地調査は，本格的な作業員の導入をお盆休み明けに計画し，８月当初より先行して調査員１名を配置して準備を開始した。作業員を導入した本格的な発掘調査が開始した後は，調査員を１名ないし２名配置して調査を行った。

８月２日に，重機の搬入路等を確保し，翌３日からバックホー(0.7)を搬入し，駐車場および現地連絡所等のヤードの造成を開始した。翌４日には６トンクローラーキャリアーを搬入し，調査区内の表土除去作業を開始した。表土掘削中，調査区の西側半分程に埋没谷が確認され，大量の砂礫層によって谷が埋まっていることが判明した。このため福島県教育庁文化財課との協議の結果，埋没谷の形成時期が比較的新しい時代と思われるため，谷部についてはトレンチ調査で対処することとなった。具体的な調査は，砂礫層の堆積状況把握と，砂礫層下位からの遺構の有無確認となった。表土除去作業は８月６日まで行ったが，次週からは盆休みに入るため，斜面部にある遺構の範囲にはブルーシートで養生し，谷部のトレンチ範囲には二重の縄張りを行い，現場での作業を一時終了した。

お盆休みが明けた８月17日からは調査を再開し，現地連絡所や作業員休憩所等のプレハブを設置し，発掘調査に必要な器材の運搬を行った。翌８月18日には，それまで発掘調査を行っていた南萱倉遺跡から移動し，作業員と共に本格的に発掘作業を開始した。開始直後は，調査区の北東部から南西部にかけての遺構検出作業を行い，それに平行して重機で掘り下げた谷部のトレンチを人力で清掃した。トレンチ調査の結果，土砂の堆積中やその下に遺構や遺物を伴わないことが確認され，その結果を受けて福島県教育庁文化財課と協議した結果，トレンチ西側まで掘削を広げないことが決定した。調査した谷部トレンチは，福島県教育庁文化財課の了解の下で，記録した後に安全のため埋め戻しを行った。８月19日にはグリット杭の打設を行い，20日から検出遺構の調査を開始した。８月31日には，検出した土坑４基の調査と調査区域の地形測量を終え，撤収の準備を開始した。空中写真撮影の予定を９月第３週と設定したため，９月１日には調査区全域をブルーシートで養生し，調査を一時中断することとした。

９月13日より空中写真撮影の準備のため現場での作業を再開するも，悪天候が続き清掃作業が思うように進まなかったため，最終的に撮影日を９月17日に延期することとした。このため16日には，現場の撤収作業を先行して行った。翌17日は快晴で，ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い，払川遺跡に関わる全ての調査を終了した。

その後，９月28日に引渡しを予定したが，諸般の事情により月が明けた10月６日に，東日本高速道路株式会社東北支社・福島県教育庁文化財課・福島県文化振興事業団遺跡調査部の三者により，現地確認の上，引渡しを行った。本遺跡の調査日数は８月２日から９月17日までの延べ22日である。確認した遺構は平安時代および中世と思われる木炭焼成土坑４基である。　（吉田・西澤）

第２章　遺 構 と 遺 物

第１節　遺跡の分布と基本土層

１．遺跡の分布（図２，写真３）

今回の調査で払川遺跡から検出された遺構は４基の土坑のみである。本遺跡は，縄文土器の散布地として登録されていたが，縄文時代の明確な痕跡は確認できなかった。これらの遺構は南向き斜面の下方にあり，いずれも伏せ焼き法による木炭焼成土坑である。その平面形は，２基が長軸１ｍほどの長方形であり，１基が長軸７ｍを超える長楕円形を呈する（１基は形状が不明）。これらの土坑の時期は，前者が平安時代と思われ，後者はそれ以降の鎌倉時代と考えている。

出土した遺物は，表土中と風倒木痕より縄文土器片が２点出土した。両方とも細片であり，器形や時期に関しては不明である。

このほか調査区の西側からは，斜面より流れてきた大量の土砂に埋没した谷が確認された。表土除去後，深いところでは２ｍ以上も砂礫層が堆積していた。砂礫層の堆積下へ遺構や遺物が広がっている様子は確認できなかった。

基本土層（図２，写真４）

今回の調査では，試掘調査時の所見の３層のほか，本調査中に新たに確認した１層を加え，ＬⅠ～ＬⅣの４層の基本土層を確認した。

ＬⅠは現表土である。調査区全域にわたり50㎝程度で堆積していた。場所により黒褐色～暗褐色と一定していない。部分的に分層も可能であったが，ＬⅠとして一括した。

ＬⅡは，調査区西側の谷部にのみ確認できた砂礫層であり，色調や包含物から３層に細分した。いずれも，ある時期に土石流として流れ込んだ土砂が堆積したものと考えられる。３層に細分でき，特にＬⅡｃには土石流で押し流されたと考えられる倒木が含まれており，その遺存状態からさほど古くない時期に流れ込んできたものと推測している。

ＬⅢは，本遺跡の基底層である。２層に分層した。ＬⅢａは暗褐色の砂質土である。ＬⅢｂの上位部分が雨水などで流出し，斜面下位の一部分にのみ認められた。ＬⅢｂは明黄褐色土であり，調査区全域で認められた。

ＬⅣは，３号土坑の東側にのみ部分的に露出していた岩盤礫層（にぶい黄褐色土　10YR7/4）である。

（西　澤）

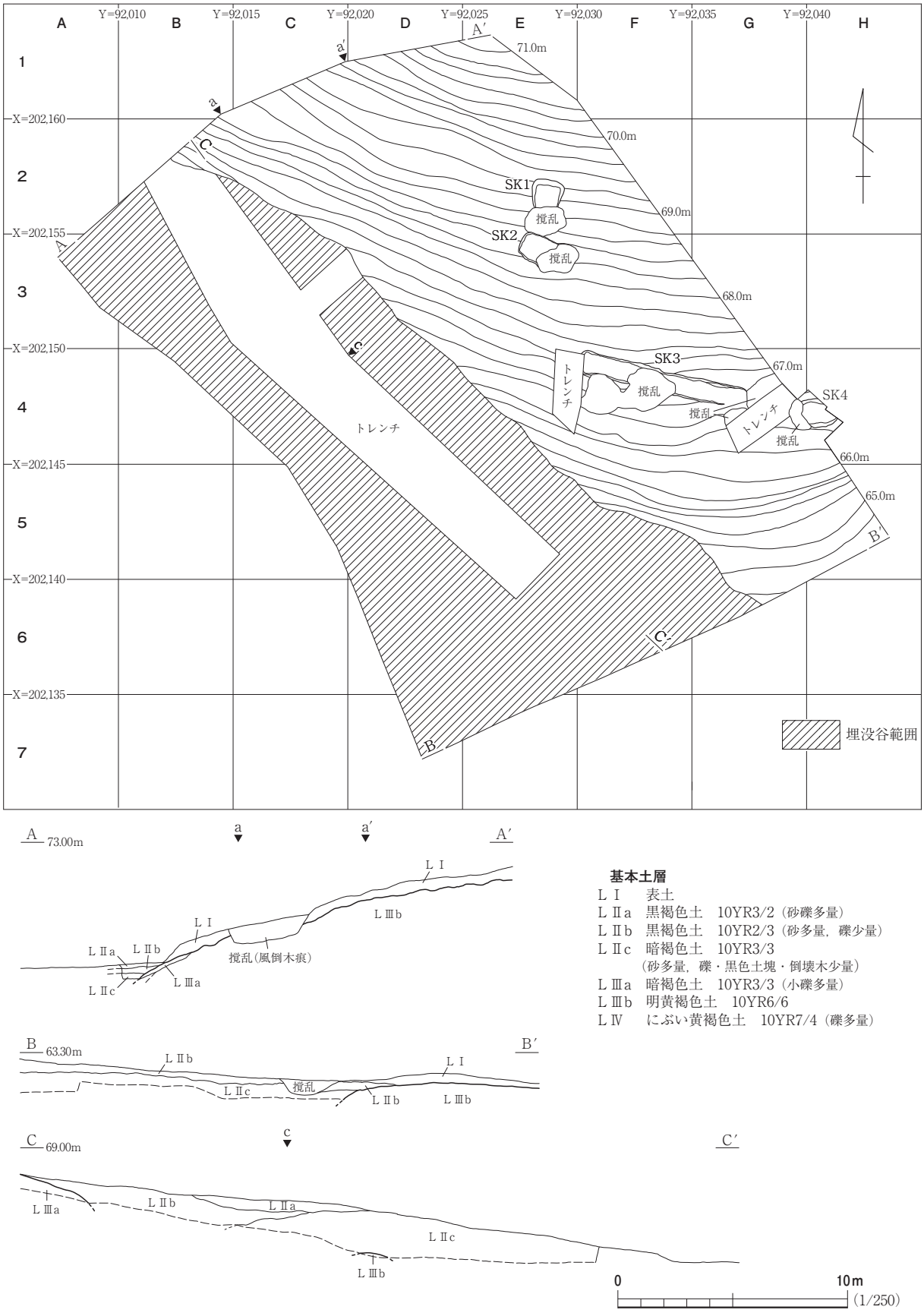


図２　遺構配置図，基本土層

第２節　　土　　坑

今回の調査では４基の土坑を確認した。以下，番号順に記載する。

１号土坑　ＳＫ１（図３，写真７）

本遺構は，調査区中央北寄りのＥ２グリッドに位置し，ＬＩ除去後に木炭粒の広がりとして確認した。遺構検出面はＬⅢｂ上面である。本遺構の１ｍほど南側には，２号土坑が主軸を異にしながらも並んでいる。

遺構の南側が風倒木痕による撹乱を受けているため，正確な規模と形状は判別できないが，南北方向がやや長い長方形ないし方形を呈する。南北遺存長120㎝，東西長120㎝を測る。底面までの深さは検出面より30㎝であり，底面はＬⅢｂに形成され，ほぼ水平である。壁は遺存する三方位ともほぼ同じ角度で急峻に立ち上がる。底面や壁面の一部には焼土化範囲が確認できる。

堆積土は２層に細分した。ℓ１は斜面上方からの自然堆積土である。ℓ２は木炭や焼土粒を多量に含み，水平に堆積していることから，木炭層と考える。遺構内より木炭以外の遺物は出土していない。

本遺構は木炭焼成土坑である。遺構の年代を決定付けるものは確認できなかったが，放射性炭素年代測定の結果は，平安時代11世紀中頃～鎌倉時代13世紀前半であった（第３章参照）。また，周辺遺跡における同様の特徴の木炭焼成土坑の時期からも，本遺構については平安時代の所産と推測している。

（西　澤）

２号土坑　ＳＫ２（図３，写真７）

本遺構は，調査区中央北寄りのＥ３グリッドに位置し，ＬＩ除去後に木炭粒の広がりとして確認した。遺構検出面はＬⅢｂ上面である。本遺構の１ｍほど北側には，１号土坑が隣接している。

遺構の南東側は，風倒木痕により撹乱を受けているため正確な規模と形状は判別できないが，おおよそ東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈する。遺存する規模は，東西遺存長150㎝，南北長120㎝を測る。底面までの深さは検出面より20㎝であり，底面は僅かに南側に傾斜しているものの，ほぼ水平である。壁は遺存する三方位ともほぼ同じ角度で垂直に立ち上がる。底面のごく一部が焼土化している。

堆積土は２層に細分した。ℓ１は斜面上方からの自然堆積土である。ℓ２は木炭や焼土粒を含み水平に堆積していることから，木炭層と判断した。遺構内より木炭以外の遺物は出土していない。１点のみであるが，出土した木炭を樹種同定した結果，ハンノキ属ハンノキ亜属と同定され（第３章参照），湿地性に生育する樹木を利用していたことが推測できた。

本遺構は木炭焼成土坑である。遺構の年代を決定付けるものは確認できなかったが，放射性炭素

年代測定の結果は，１号土坑同様，平安時代末12世紀中頃～鎌倉時代13世紀前半であった(第３章参照)。このことから，１号土坑同様に本遺構の時期も平安時代の所産と考えている。　（西　澤）

３号土坑　ＳＫ３（図４，写真５・６）

本遺構は，平成20年度に行われた試掘調査の際，木炭窯として認識・報告された遺構である。本調査の結果，焚口や天井部の構造が確認できないことから，土坑として報告する。

土坑の長軸は東西方向にあり，丘陵の等高線に平行する。本遺構の東側約３ｍには，ほぼ同じ標高のところに４号土坑が立地する。

遺存状態が良好な西側に比較して，東側は遺存状態が悪く，焼土化した底面や木炭層の広がりで遺構の範囲を決定した。土坑の規模は，東西遺存長740㎝，南北長90～100㎝を測る。東端部では，撹乱を受け，明確な掘り込みが確認できなかった。ただ，東側に隣接する試掘調査時のトレンチにおいて遺構の広がりが確認されていないことから，木炭層の広がりを遺構の境界と判断した。遺存状態の良い西側では，壁がほぼ垂直に立ち上がり，検出面からの深さは，最深で50㎝を測る。底面はＬⅢｂに形成され，東側へ向かってゆるやかに傾斜する。西端と東端の比高差は最大で30㎝にもなる。底面や壁面の一部は焼土化しており，特に西側ではその状況が広範囲で確認された。

堆積土は３層に分層した。ℓ１は斜面上方からの流入土，ℓ２は壁際の三角堆積土であり，この両者は自然堆積土と判断した。ℓ３は木炭を多量に含み水平に堆積していることから，木炭層と判断した。木炭以外の遺物の出土はない。出土した木炭の樹種同定の結果，いずれもクリであった(第３章参照)。

本遺構は，極めて長大化しているが木炭焼成土坑の一種であると考えられる。遺構の年代を決定付けるものは出土していないが，放射性炭素年代測定の結果は，鎌倉時代13世紀代であった(第３章参照)。このことや，遺構の特徴が古代とは異なることより，本土坑の時期については鎌倉時代以降と考えられる。　（西　澤）

４号土坑　ＳＫ４（図３，写真７）

本遺構は，調査区東端部のＨ４グリッドに位置する。表土除去後に調査区境界の壁面に木炭層の堆積を確認したことから，高速道路建設予定地の際まで拡張し，調査を行った。その位置関係から３号土坑と同一遺構である可能性が考えられたが，両者の間に設定した試掘調査のトレンチにおいて確認されていないので，別な遺構とした。

本遺構は，調査区外に広がるほか，撹乱や削平を受けているために正確な規模と形状を測ることができない。確認できた範囲の形状は東西方向にやや長い楕円形で，東西遺存長130㎝，南北長120㎝を測る。底面までの深さは，検出面より12㎝であり，壁は極めて緩やかに立ち上がる。

堆積土は１層のみであり，木炭の小片が多量に含まれることから木炭層だけが遺存していると考える。本土坑から木炭以外の遺物の出土はない。木炭の樹種同定の結果はクリであった(第３章参

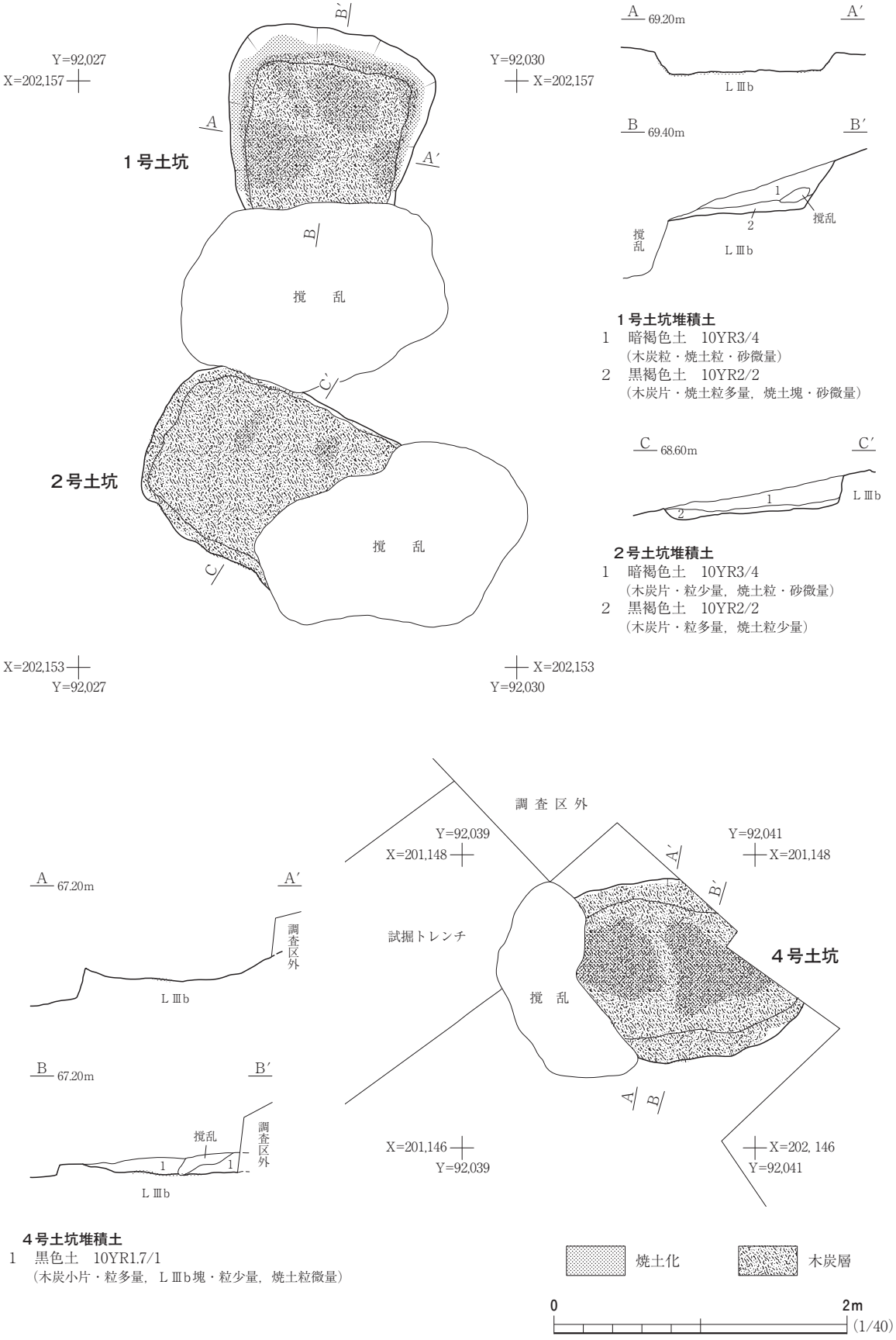

Y=92,027
X=202,157
Y=92,030
X=202,157
A
A′
B
B′
C
C′
１号土坑
２号土坑
撹　乱
撹　乱
A 69.20m
A′
ⅠⅢb
B 69.40m
B′
1
2
撹乱
撹乱
ⅠⅢb
１号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
（木炭粒・焼土粒・砂微量）
2　黒褐色土　10YR2/2
（木炭片・焼土粒多量，焼土塊・砂微量）
C 68.60m
C′
1
2
ⅠⅢb
２号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
（木炭片・粒少量，焼土粒・砂微量）
2　黒褐色土　10YR2/2
（木炭片・粒多量，焼土粒少量）
X=202,153
Y=92,027
X=202,153
Y=92,030
調 査 区 外
Y=92,039
X=201,148
Y=92,041
X=201,148
A′
B′
試掘トレンチ
４号土坑
撹　乱
A
B
X=201,146
Y=92,039
X=202, 146
Y=92,041
A 67.20m
A′
調査区外
ⅠⅢb
B 67.20m
B′
撹乱
調査区外
1
1
ⅠⅢb
４号土坑堆積土
1　黒色土　10YR1.7/1
（木炭小片・粒多量，ⅠⅢb塊・粒少量，焼土粒微量）
焼土化
木炭層
0
2m
(1/40)

図３　１・２・４号土坑

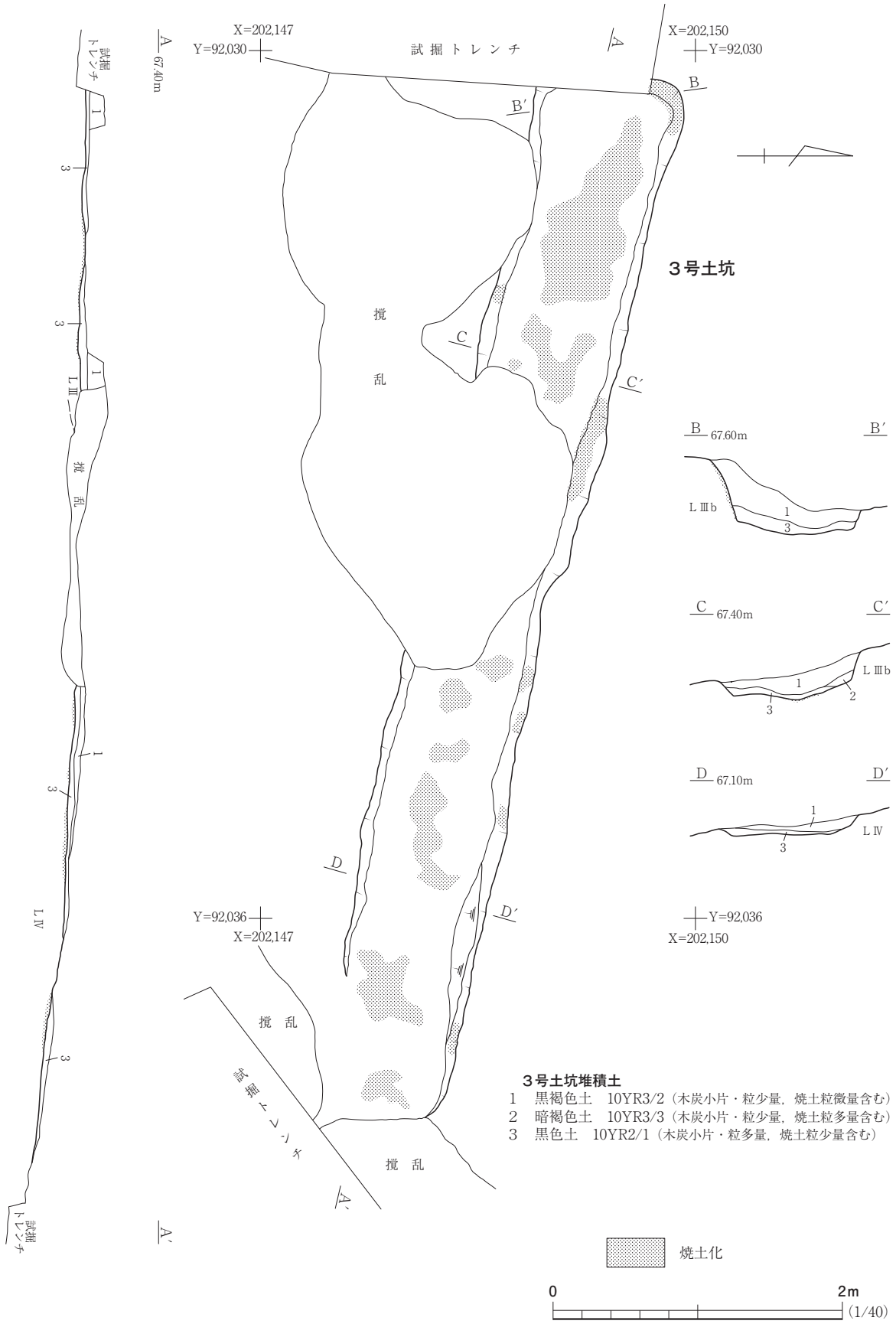

試掘トレンチ
A
67.40m
X=202,147
Y=92,030
試掘トレンチ
A
X=202,150
Y=92,030
B
B′
３号土坑
撹乱
C
C′
B
67.60m
B′
LⅢb
1
3
C
67.40m
C′
LⅢb
1
2
3
D
67.10m
D′
1
LⅣ
3
D
D′
Y=92,036
X=202,147
Y=92,036
X=202,150
撹乱
試掘トレンチ
撹乱
A′
LⅢ
撹乱
LⅣ
試掘トレンチ
A′
３号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（木炭小片・粒少量，焼土粒微量含む）
2　暗褐色土　10YR3/3（木炭小片・粒少量，焼土粒多量含む）
3　黒色土　10YR2/1（木炭小片・粒多量，焼土粒少量含む）
焼土化
0
2m
(1/40)

図４　３号土坑

照)。

本遺構は，木炭層の広がりを確認できるものの，明確に立ち上がる壁を確認できない。木炭焼成土坑の底面のみが遺存したものと考えられる。遺構の年代を決定付けるものは確認できなかったが，放射性炭素年代測定の結果は，鎌倉時代13世紀代であった(第３章参照)。このことや，前述の３号土坑の状況から，本遺構の時期は鎌倉時代の所産と推測している。（西　澤）

第３節　　遺　　物

払川遺跡では，表土除去中および風倒木内より土器片が２点出土している。両方とも細片で，摩耗も進んでいることから図化に耐えうるものではない。縄文土器と思われるが，器形や時期に関しては不明である。

そのほか，各土坑から放射性炭素年代測定と樹種同定の試料として，比較的形状のしっかりした木炭を採集している。（西　澤）

第３章　自然科学分析

第１節　出土炭化材の樹種同定

古代の森研究舎

１．試料と方法

払川遺跡は相馬市初野字払川・羽黒の沢が流れる山麓斜面に位置し，平安時代から鎌倉時代にかけて形成されたとみられる木炭焼成土坑から炭化材が検出された。当時の燃料材利用を調査する目的で炭化材４試料の樹種同定を行った。炭化材試料からはステンレス製剃刀で横断面，放射断面，接線断面の３方向の断面を割り取り，プレパラートに固定して生物顕微鏡 Nikon Eclipse 80i に反射照明装置 Nikon TE2－PS を取り付け，反射光で観察，同定を行った。

２．同定結果と考察

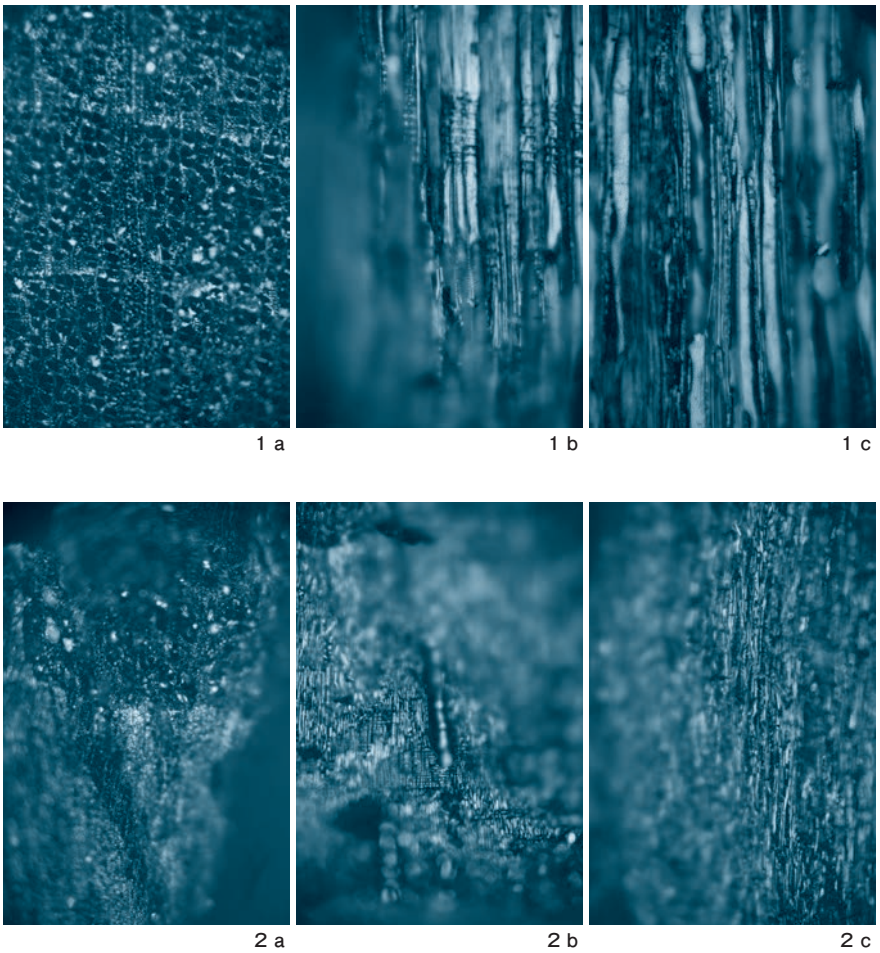
同定された樹種を図５に示す。本遺跡からはクリ３点とハンノキ属ハンノキ亜属１点が出土した。以下に同定された樹種の形態記載を行う。

ハンノキ属ハンノキ亜属（*Alnus* subgen. *Alnus*）：やや小さい道管が単独ないし数個放射方向に複合して年輪内に均一に分布する散孔材。道管の穿孔板は階段状で，放射組織は同性で単列と多くの放射組織が集まってできた集合放射組織が見られる。

クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）：年輪はじめにかなり大きな道管が数列配列し，その後徐々に径を減じながら小道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔板は単一で，放射組織は同性で単列である。なお，試料№６は微少破片の集まりであったが，いくつかの破片に火炎状配列の道管が確認されたためクリと同定した。

本遺跡の平安時代から鎌倉時代にかけての燃料材はおもにクリを利用していたと考えられる。またハンノキ属ハンノキ亜属を１点出土していることから，払川遺跡周辺にはクリやハンノキ亜属が生育し，周囲に生育していたこれらの樹種を燃料材として利用していたと考えられる。

試料番号	遺　構		時　期	層　位	採取日	樹　種
№２	ＳＫ２	木炭焼成土坑	平安～鎌倉時代	ℓ２	100820	ハンノキ属ハンノキ亜属
№４	ＳＫ３	木炭焼成土坑	平安～鎌倉時代	ℓ２	100820	クリ
№５	ＳＫ３	木炭焼成土坑	平安～鎌倉時代	ℓ２	100820	クリ
№６	ＳＫ４	木炭焼成土坑	平安～鎌倉時代	ℓ１	100829	クリ



１．ハンノキ属ハンノキ亜属（№２）
２．クリ（№４）

スケール：0.1㎜ ＜１ｂ・ｃ＞
スケール：0.2㎜ ＜１ａ，２ａ～ｃ＞
ａ：横断面
ｂ：放射断面
ｃ：接線断面

図５　出土炭化材の樹種および顕微鏡写真

第２節　放射性炭素年代測定

株式会社　パレオ・ラボ

１．はじめに

福島県相馬市初野字払川・羽黒に位置する払川遺跡の木炭焼成土坑から出土した炭化材について，加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

２．試料と方法

測定試料の情報，調製データは表１のとおりである。

試料は，平安時代の木炭焼成土坑と推定される１～４号土坑から出土した炭化材，計６点である。１号土坑，２号土坑からはそれぞれのℓ２から出土した炭化材各１点（PLD－17285，17286），長軸が７ｍある大型の３号土坑からはいずれもℓ２から出土した炭化材３点（PLD－17287～17289），４号土坑からはℓ１出土の炭化材１点（PLD－17290）である。試料の炭化材はいずれも木炭焼成遺構において焼成された木材と考えられる。各遺構からは，時期の分かる遺物は全く出土しておらず，平安時代という推定時期は，周辺の遺跡で検出されている同様の遺構が平安時代のものであるためである。

試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C 年代，暦年代を算出した。

３．結　　果

表２に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正した年代範囲，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代，^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲と暦年較正結果を示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には，^{14}C の半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また，付記した ^{14}C 年代誤差（±１σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動，および半減期の違い（^{14}C の半減

表１　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD－17285	遺構：ＳＫ１（木炭焼成土坑） 層位：ℓ２ 試料番号：№1 採取日：100819	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側から約３年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）
PLD－17286	遺構：ＳＫ２（木炭焼成土坑） 層位：ℓ２ 試料番号：№2 採取日：100820	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪１年輪分 採取位置：外側から約５年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）
PLD－17287	遺構：ＳＫ３（木炭焼成土坑） 層位：ℓ２ 試料番号：№3 採取日：100820	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪１年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）
PLD－17288	遺構：ＳＫ３（木炭焼成土坑） 層位：ℓ２ 試料番号：№4 採取日：100820	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側から約４年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）
PLD－17289	遺構：ＳＫ３（木炭焼成土坑） 層位：ℓ２ 試料番号：№5 採取日：100820	試料の種類：炭化材（樹皮？） 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）
PLD－17290	遺構：ＳＫ４（木炭焼成土坑） 層位：ℓ１ 試料番号：№6 採取日：100829	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側から約２年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）

表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号 試料番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD－17285 №1	−24.61 ± 0.12	867 ± 19	865 ± 20	1165AD(68.2%)1208AD	1055AD(4.8%)1077AD 1153AD(90.6%)1220AD
PLD－17286 №2	−25.85 ± 0.17	855 ± 18	855 ± 20	1174AD(68.2%)1214AD	1156AD(95.4%)1225AD
PLD－17287 №3	−25.82 ± 0.14	801 ± 17	800 ± 15	1224AD(68.2%)1255AD	1215AD(95.4%)1266AD
PLD－17288 №4	−24.97 ± 0.14	797 ± 19	795 ± 20	1224AD(68.2%)1257AD	1215AD(95.4%)1270AD
PLD－17289 №5	−26.01 ± 0.13	787 ± 17	785 ± 15	1225AD(68.2%)1263AD	1220AD(95.4%)1270AD
PLD－17290 №6	−23.91 ± 0.15	808 ± 17	810 ± 15	1220AD(68.2%)1254AD	1210AD(95.4%)1266AD

期5730 ± 40年)を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1(較正曲線データ：INTCAL09)を使用した。なお，1 σ暦年代範囲は，OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり，同様に2 σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，

その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

４．考　　察

各試料の暦年較正結果のうち，２σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目すると，試料はいずれも11世紀中頃～13世紀後半の暦年代範囲を示した。これは，平安～鎌倉時代に相当し，一部の試料では出土遺物から推定された平安時代という時期よりも新しい年代が得られたことになる。

１号土坑出土の試料№１（PLD－17285）は11世紀中頃～13世紀前半，２号土坑出土の試料№２（PLD－17286）は12世紀中頃～13世紀前半の暦年代範囲を示した。それぞれ平安時代後半～鎌倉時代，平安時代末～鎌倉時代に相当する。ただし木材の場合，最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが，内側の年輪を測定すると最外年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。試料№１と２はいずれも部位不明の炭化材であるため，古木効果の影響を考慮する必要がある。古木効果を考慮に入れると，１号土坑の試料№１は平安時代後半～鎌倉時代あるいはそれ以降，２号土坑の№２は平安時代末～鎌倉時代あるいはそれ以降に伐採された木材と考えられる。

３号土坑出土の試料№３～５（PLD－17287～17289）および４号土坑出土の試料№６（PLD－17290）はいずれも13世紀代（鎌倉時代）の暦年代範囲を示した。３号土坑の試料№３は最外年輪を含むが，それ以外の試料№４～６は部位不明の炭化材であり，古木効果の影響を考慮に入れる必要がある。ただ３号土坑については，№３が最外年輪を含んでおり，同遺構出土のほかの２点も試料№３とほぼ同じ暦年代範囲を示しているため，３号土坑で最後に焼成された木材が伐採されたのが13世紀代であったと考えられる。４号土坑の試料№６は，古木効果の影響を考慮すると，13世紀代（鎌倉時代）あるいはそれ以降に伐採された木材と考えられる。

参考文献

Bronk Ramsey, C.　1995 Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy：The OxCal Program. *Radiocarbon* 37, pp.425−430.

Bronk Ramsey, C.　2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Rabiocarbon* 43, pp.355−363.

中村俊夫　2000「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の^{14}C 年代』pp.3−20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E.　2009 IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0−50,000 Years cal BP. *Radiocarbon* 51, pp.1111−1150.

第４章　ま　と　め

今回の調査で本遺跡からは，平安時代から鎌倉時代にかけてと思われる木炭焼成土坑４基が確認された。出土遺物は縄文土器２点であった。このことから本遺跡では，縄文時代と平安時代以降の大きく二時代にわたって生活していた可能性が考えられる。本章では，今回の調査成果を簡単にまとめることとする。

本遺跡で最初の痕跡は縄文時代である。これまでの表面調査や発掘調査で縄文土器が出土しているが，僅かな数であり，詳細な時期は不明である。今回の調査においても縄文時代の遺構は見出せなかった。今回，丘陵の斜面部においても縄文土器片を確認したことから，丘陵の尾根部を含め，払川により開析された段丘上において縄文時代の遺構の痕跡が発見される可能性が推測される。

次は平安時代から鎌倉時代にかけてである。当該期に比定できるのは土坑４基であり，いずれの土坑からも，考古学的に年代の根拠となる資料は得られなかった。ただ，これまで行われてきた当地域の相馬開発や常磐自動車道の建設に関わる遺跡発掘調査事例からみて，１・２号土坑は平安時代におけるいわゆる開放型の伏せ焼き法による木炭生産の過程で形成されたものと考えられる。

一方で，４号土坑に関しては，その極めて長大化した形態は，近隣の遺跡において類例を見出すことができなかった。類似する長大化した木炭焼成土坑としては，南相馬市(旧原町市)の羽山Ｂ遺跡においてⅣ類の土坑(平面系の長軸が短軸に対してかなり長い形体を呈した木炭焼成土坑)が確認されている。そのほか，八重米坂Ｂ遺跡などでも確認されているが，いずれも遺構の形態や堆積状況などから近世以降の所産としている。

今回の調査においても，遺構の年代を表す明確な根拠は確認できなかった。放射性炭素年代測定を行った結果では，本土坑出土の木炭は，平安時代後半～鎌倉時代の年代値が提示されている。同様の時代の年代測定を示す遺構としては，新地町の鴻ノ巣遺跡５号土坑(『常磐自動車道遺跡発掘調査報告66』)や南相馬市の君ヶ沢Ｂ遺跡２・３号性格不明遺構(『常磐自動車道遺跡調査報告59』)などがある。これらの遺構も古代のものに比べ長軸が長大化している。このことからも，中世から近世になると，開放型の木炭焼成土坑は，短軸幅は１～２ｍほどと一定であるが，長軸長は５～７ｍと大きくなる傾向が看取できる。今後の類例を待ちたい。　（西　澤）

引用・参考文献

吉野滋夫ほか　2010「君ヶ沢Ｂ遺跡」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告59』福島県文化財調査報告書第467集

水野一夫ほか　2011「鴻ノ巣遺跡・赤柴前遺跡(１次調査)」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告66』福島県文化財調査報告書479集

第３編　赤柴前遺跡（２次調査）

あかしばまえ

遺跡記号	ＳＴ－ＡＳＭ
所在地	新地町駒ヶ嶺字赤柴前
時代・種類	縄文時代の狩場
	平安時代の製炭場
調査期間	平成22年７月７日～９月９日
調査員	吉田秀享・大波紀子
	西澤正和・本田拓基

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形

赤柴前遺跡は，相馬郡新地町駒ヶ嶺字赤柴前地内に所在する。ＪＲ常磐線駒ヶ嶺駅から西へ約４㎞に位置し，遺跡の東方約３㎞には国道６号線がＪＲ常磐線と平行して南北方向に延びている。遺跡は，阿武隈高地を水源とし太平洋へと注いでいる立田川北岸の河岸段丘上に立地し，太平洋岸からは６㎞ほど内陸となる。

今回の調査は，平成21年度に行われた１次調査に引き続き常磐自動車道建設に伴うもので，そこから北に約200m離れた半弧状を描く新地ＩＣ部分の2,500㎡を対象として実施した。１次調査は鴻ノ巣遺跡に隣接する1,000㎡を対象とし，立田川に沿って細長く発達した中位段丘面の傾斜面での調査であったが，今回の調査は赤柴前遺跡の主体を成す低位段丘面の平坦な部分を行った（図１）。

調査区は南北約75m，東西約110mの範囲に，道路幅20m前後で弧状を呈し，このため，調査区中央部分が北に突出した状況となっている。弧状の調査区は西端から東端へかけて緩やかに傾斜しているが，標高差は最大で約1.5mであるためほぼ平坦な地形となっている（図２）。現況では周辺地も含めて旧耕作地となっており，調査区内を東西方向に近隣住宅からの配水管が通っている。検出した遺構の周壁の遺存状況や風倒木の痕跡等から，後世に上面が大きく削平を受け整地されたことがうかがわれる。

第２節　調　査　経　過

赤柴前遺跡は，平成10年度の表面調査に加えて，新たに平成19年度に遺跡推定地として登録された遺跡である。そのうちの常磐自動車道路建設予定地については，漸次，要保存範囲確認のための試掘調査が実施され，保存対象とされた遺跡について本調査が行われている。今回の発掘調査は，平成20年度に実施された試掘調査により保存範囲となった2,500㎡を対象とし，赤柴前遺跡の本調査としては２次調査にあたる。

赤柴前遺跡の２次調査は，平成21年度の１次調査に引き続き，平成22年７月７日から９月９日までの延べ40日間において発掘調査が行われた。

調査開始に先立って，６月24日には作業員募集説明会および採用面接を行うなど作業員の雇用準備を進めつつ，６月15日からは重機による表土除去作業を始め，６月17日にはプレハブ・仮設トイレを設置して器材搬入等の環境整備を行った。その後中断し，７月７日からは調査員２名を配置し，作業員19名を雇用して，人力による掘削作業を開始し，本格的な調査を始動した。

開始当初は，時期的に梅雨明け直前の豪雨に見舞われたことから調査日を確保できず，調査区内

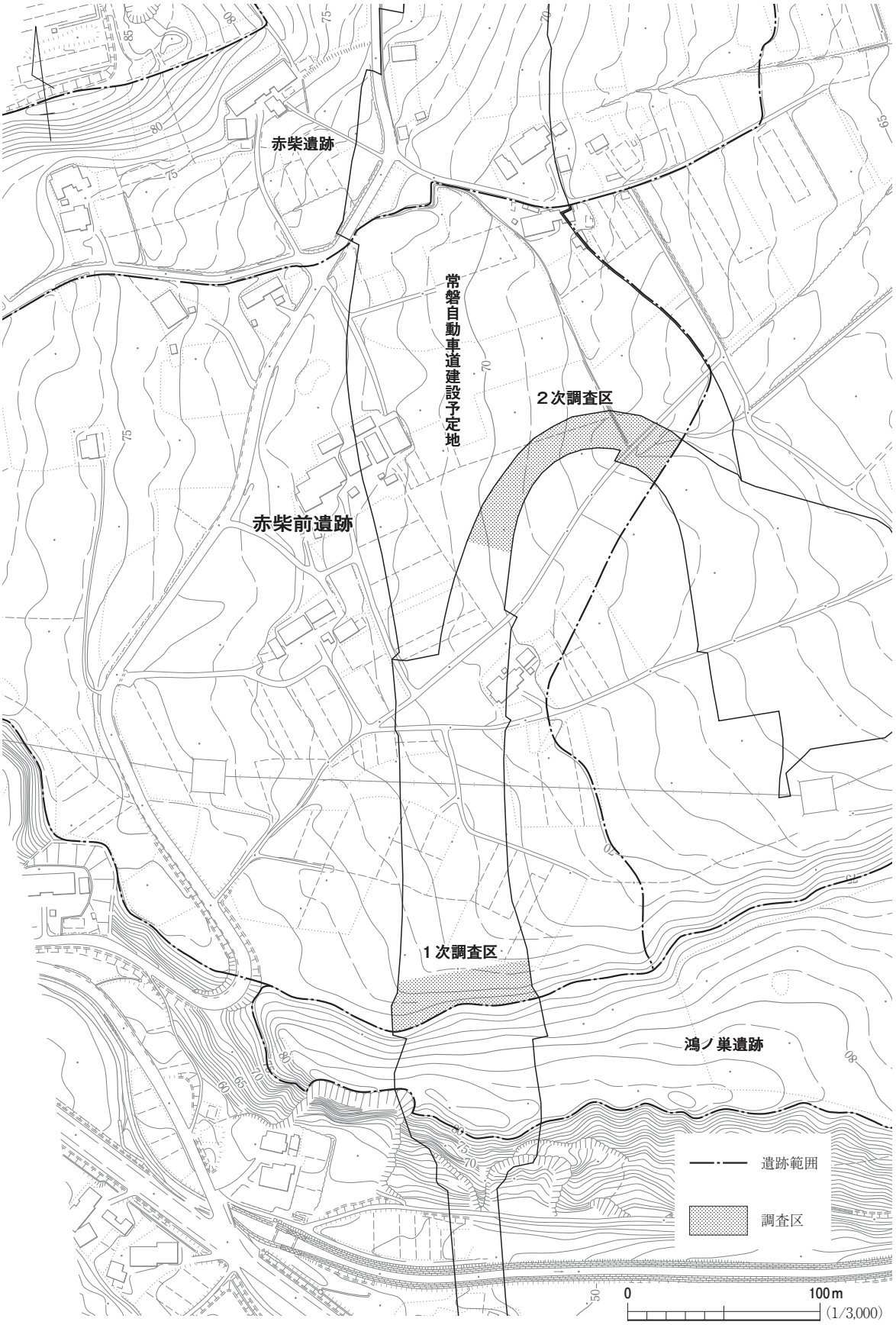

赤柴遺跡
常磐自動車道建設予定地
２次調査区
赤柴前遺跡
１次調査区
鴻ノ巣遺跡
遺跡範囲
調査区
0
100m
(1/3,000)

図１　調査区位置図

に集まる周辺地域からの雨水の排水が懸案事項であった。しかしながら，梅雨が明けると一転して晴天日が続き，連日の炎天下での発掘作業を強いられることとなった。この平成22年夏の記録的な猛暑は盆明け以降も衰えることなく，調査期間を通して熱中症への危惧と過度な体力の消耗，調査用水の確保に悩まされた。

発掘調査は，重機による表土除去作業時から木炭焼成土坑を確認していたため，調査区西側から段階的にＬⅡ上面での遺構検出作業を行って木炭焼成土坑２基を検出し，検出遺構の精査に執りかかった。その見通しが立つと検出遺構を島状に残しながら，７月29日からは遺跡の範囲確認調査で報告される落し穴を検出したＬⅢ上面までの掘り下げを開始し，風倒木痕とみられる撹乱部分を処理しながら検出作業を継続した。

検出作業は平坦な地形での単純な掘り込み作業であったが，連日の猛暑日による体力の消耗は著しく，細かな水分補給と休憩を取りながらの調査となった。加えて，梅雨明け以降のまとまった降水もなく，１カ月以上にわたり直射日光を浴び続けた地面は全体が白っぽく乾燥してしまって色調や土質が判然とせず，風倒木痕が顕著に残されることもあって遺構の検出作業は予想外に手間取ることとなった。

ようやく調査終盤の８月26日になってＬⅢ上面より検出していた落し穴群の精査に入り，９月２日にはすべての遺構の調査・記録を終了することができた。平行して８月30日には地形測量，９月２日には基本土層の記録を行った。調査の最終週は秋雨前線の影響で天候が安定せず，予定していた空中写真撮影は最終日まで持ち越されたが，結果的には調査区内が適度な湿り気を帯びた良好な状態で撮影が行われることとなった。９月９日には調査区全体の空中写真撮影を実施し，撤収準備とともに調査の最終確認を行って，同日に作業員の雇用を終了した。

調査区の引渡しに向けて賃貸物件の返却，器材の搬出等の残務処理を済ませ，９月28日には東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所・福島県教育庁文化財課・福島県文化振興事業団遺跡調査部との三者による現地確認を行い，現状のまま引渡して現地での調査を完了した。　（大　波）

第２章　遺 構 と 遺 物

第１節　遺構の分布と基本土層

検出した遺構は土坑６基で，それらは奈良・平安時代とみられる木炭焼成土坑２基と，縄文時代の落し穴４基である。落し穴は，調査区西部の標高69.2～69.4m付近に並んで分布している。出土遺物は遺構外から出土した羽口片１点のみである。

今回の調査対象となる範囲はほぼ平坦な地形であり，調査区西側に検出遺構が偏っていることから，調査区中央のやや西寄りのところに調査区南壁を利用して周囲を深掘りし，ＡＫ16・17，ＡＬ16グリッドにかかる土層観察地点を設定した。１次調査の対象範囲とは200mほどの距離があり，地形も大きく異なることから，設定した層序は必ずしも一致していない。今回の調査では，ＬⅠからＬⅣまでの４層に分層した。なお，基本土層中の撹乱は風倒木痕である。

ＬⅠ：黒褐色土　10YR2/3　粘性・締まりなし。調査区内全体を覆う表土層で，草木痕が主体となる暗褐色土層を含む。

ＬⅡ：にぶい黄褐色土　10YR4/3　粘性・締まりなし。層中に１cm程度の小礫を少量含む。厚さ20～30cm程度で調査区全体に堆積しており，このＬⅡ上面より２基の木炭焼成土坑を検出した。およそ調査区の東半と西半とで検出されたが，どちらも周壁の残りは20cm足らずであったことから木炭焼成土坑の構築後に削平を受けているようである。

ＬⅢ：明黄褐色土　10YR6/8　やや粘性あり，締まりあり。ＬⅡ同様に１cm程度の小礫を少量含んでいるが，場所によっては５cm程度の角礫も認められ，下層に近づくほど含有量が増加する様子が観察できる。また，調査区東側では徐々に堆積層が薄くなっており，角礫を多く含んでいる。縄文時代と考えられる落し穴は本層上面から検出した。

ＬⅣ：明黄褐色粘質土　10YR7/6　粘性・締まり強い。層中に５cm大の角礫を極めて多く含む。検出した落し穴は，このＬⅣをさらに掘り込み下層まで到達しているが，観測地点では人力で一部掘り下げるだけで精一杯であった。落し穴の周壁から観察した限りでは，ＬⅣの厚さは一様ではなく，同規模の角礫でまとまった礫層を成している部分もある。また，この下層には砂質土と粘質土の部分の双方を確認でき，さらにその下層では再び礫層へと転じている。

以上が，本調査で確認した基本土層の堆積状況である。１次調査と２次調査では，およそＬⅢまでの堆積状況は整合するようであるが，その下位層では中位段丘面と下位段丘面との違いにより形成が異なる。

（大　波）

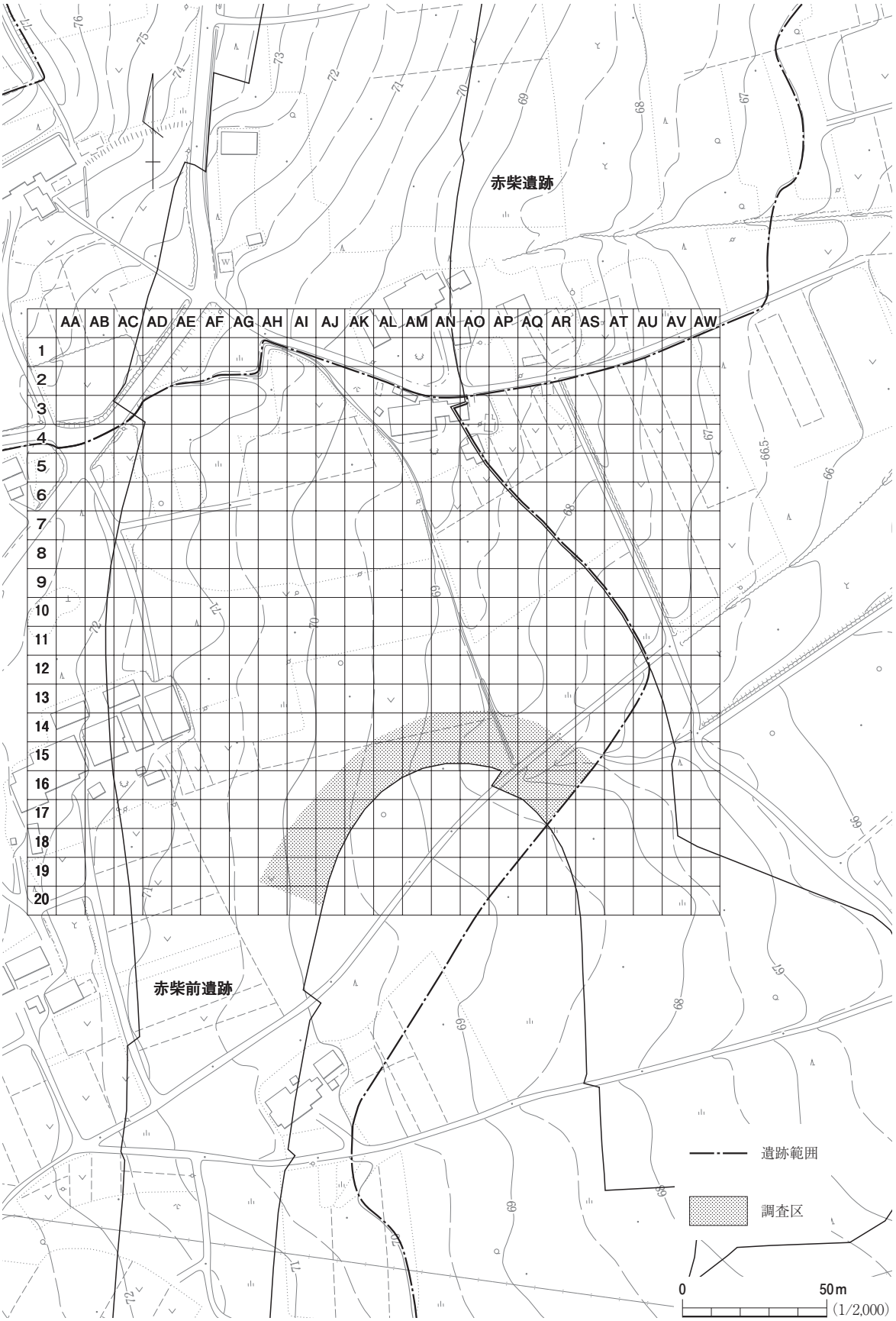

赤柴遺跡
赤柴前遺跡
AA AB AC AD AE AF AG AH AI AJ AK AL AM AN AO AP AQ AR AS AT AU AV AW
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
遺跡範囲
調査区
0
50m
(1/2,000)

図2　グリッド配置図

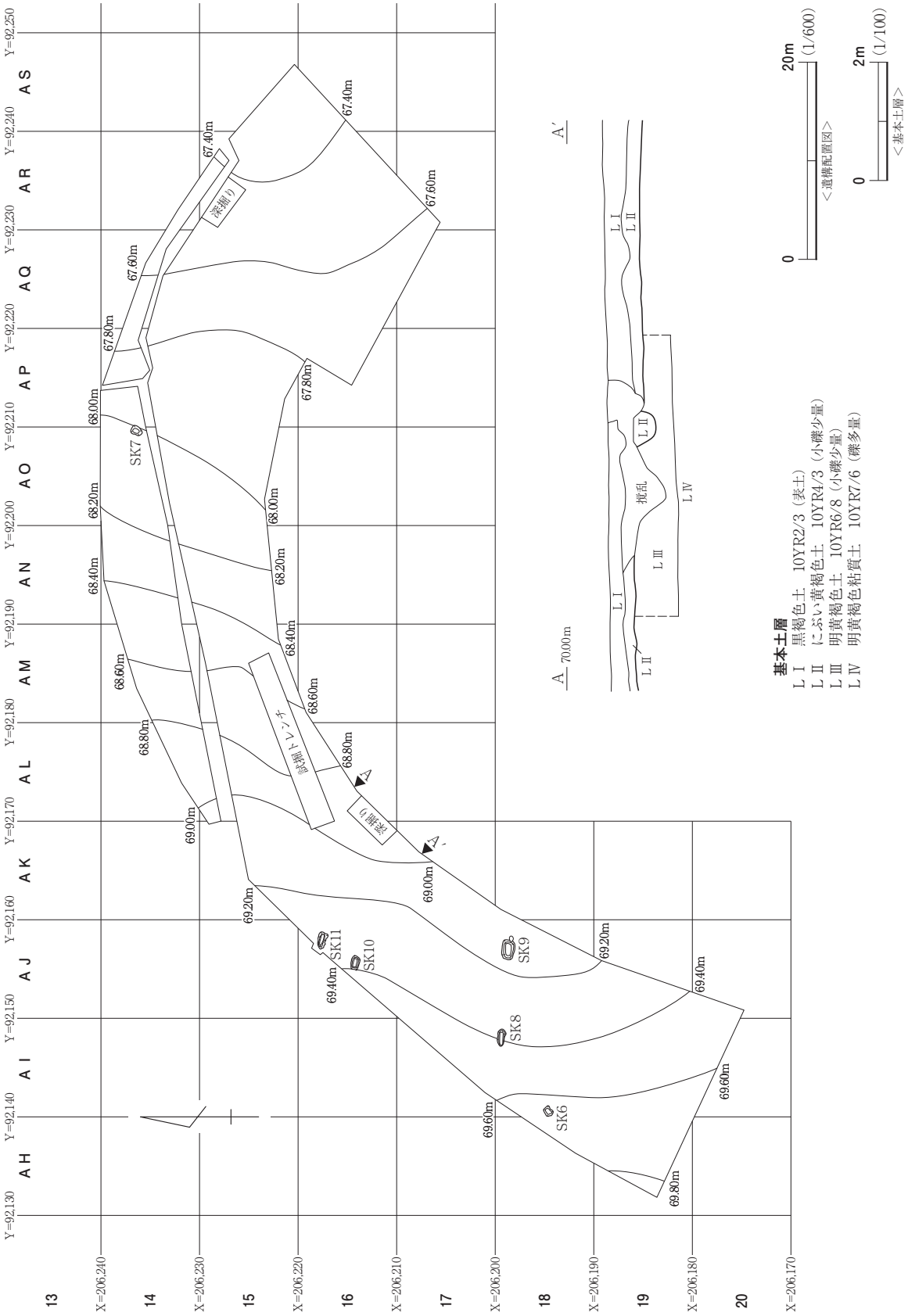


図３　遺構配置図，基本土層

第２節　　土　　坑

本調査では，土坑６基を検出した。それらは形状から２基が奈良・平安時代の木炭焼成土坑，４基が縄文時代の落し穴と考えられる。木炭焼成土坑は，近隣の製鉄関連遺跡で多数検出され，奈良時代から平安時代の年代が与えられている。一方，落し穴は遺存状態が大変良好であり，形状や規模に規格性が認められること，長軸方向を揃えて直線的に配置されることなどから，同時期に構築された一連の落し穴群と考えられる。以下，個別に報告するが，遺構番号は１次調査からの連番となる。

６号土坑　ＳＫ６（図４，写真５）

本遺構は調査区西側のＡＨ18，ＡＩ18グリッドに位置し，ＬⅢ上面より検出した。形状から木炭焼成土坑とみられ，北東方向に80ｍほど離れて同様の遺構と考えられる７号土坑が存在する。

遺構内堆積土はℓ１の単層で，炭化物粒をわずかに含んでいる。

平面形は隅丸方形であるが，撹乱や周壁の崩落で歪んでいる。規模は，長軸約110㎝，短軸約80㎝で，遺存する周壁は底面から20㎝に満たない。主軸方向はＮ60°Ｅである。底面は凹凸が認められ，周壁は緩やかに立ち上がる。壁の北隅は，熱により硬化して赤変した痕跡が認められる。

本遺構は，近隣の製鉄関連遺跡から多数検出される木炭焼成土坑と同様に製炭に利用されたものと考えられる。時期は奈良時代～平安時代頃の所産と推定され，堆積土から出土した炭化物より測定した放射性炭素年代の測定値は若干古い年代を示すようである（第３章参照）。　（大　波）

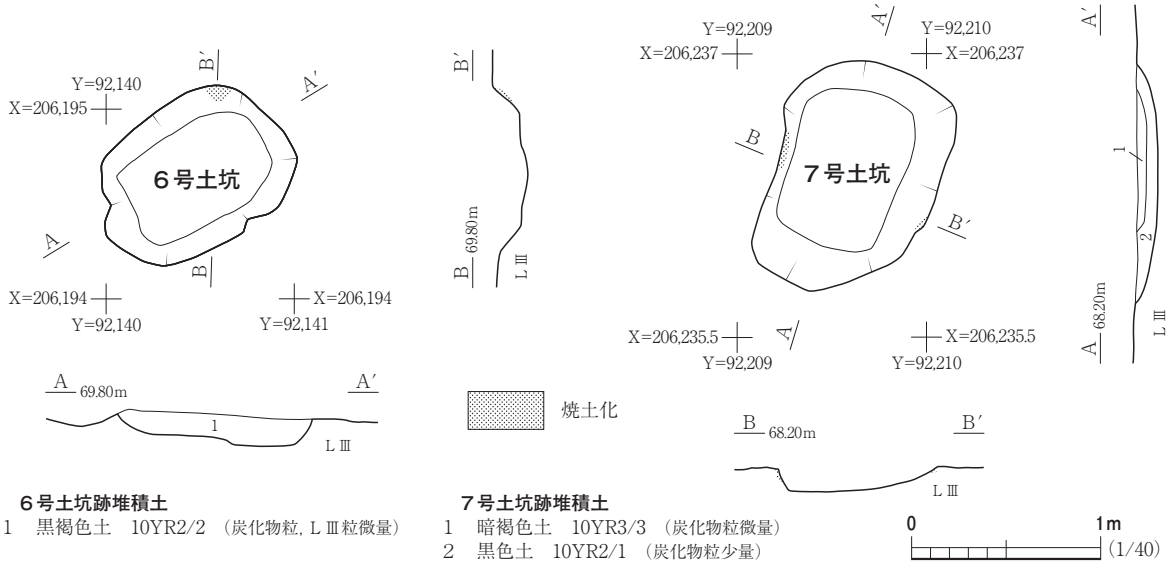
７号土坑　ＳＫ７（図４，写真５）

本遺構は調査区中央北寄りのＡＯ14，ＡＰ14グリッドに位置し，ＬⅢ上面より検出した。形状から６号土坑と同様の木炭焼成土坑とみられ，６号土坑より北東方向約80ｍに位置する。

遺構内堆積土は２層に分層した。本遺構が風倒木痕より新しい時期に構築されていたため，遺構内堆積土と風倒木痕の覆土との違いが判然とせず，一部底面を掘り下げてしまったが，底面上にはℓ２とした炭化物粒を含んだ黒色土が堆積する。

平面形は隅丸方形であるが，周壁は一部を除いて崩落したものとみられ，旧状をとどめてはいない。規模は，長軸約130㎝，短軸約80㎝で，周壁は遺存する部分で約10㎝を測る。主軸方向はＮ20°Ｅである。底面は中央がややくぼみ，周壁は緩やかに立ち上がる。東西壁の一部分には，熱による硬化で赤変した痕跡が認められる。

近隣の製鉄関連遺跡の事例から，本遺構は奈良時代～平安時代にかけての製炭に関わる木炭焼成土坑と考えられる。なお，堆積土から出土した炭化物の年代測定値は，若干古い値が示されている（第３章参照）。　（大　波）



６号土坑跡堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2　（炭化物粒, L Ⅲ粒微量）

７号土坑跡堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3　（炭化物粒微量）
2　黒色土　10YR2/1　（炭化物粒少量）

図４　６・７号土坑

８号土坑　ＳＫ８（図５，写真６）

本遺構は調査区南側のＡＩ18グリッドに位置し，遺構検出面はＬⅢ上面である。形状から落し穴と考えられ，同様の遺構として，東方約７ｍに９号土坑が位置し，やや離れて北東方向には10・11号土坑が直線上に配置されている。

本遺構は調査区内に多く見受けられる風倒木痕と重複しており，風倒木痕が遺構部分を覆っていたため，撹乱と判断して掘り下げてしまい，遺構内の堆積状況を確認できなかった。風倒木痕の下には，やや色調が異なる暗褐色土(10YR3/3)の堆積が認められた。

本遺構は風倒木痕によって上方の形状が乱れるものの，ＬⅢ以下の礫層を掘り込んだ部分は安定しており，底面付近については遺構本来の形状を維持しているものとみられる。平面形は細長い長方形となり，規模は長軸約150㎝，短軸約50㎝，検出面から底面までの深さは約120㎝を測る。主軸方向はＮ85°Ｗである。周壁は底面から垂直方向に立ち上がり急峻となっており，西壁では下端部分がオーバーハング気味に掘り込まれている。底面は平坦で，中央部分には直径約20㎝，深さ約30㎝の小穴が認められ，炭化物をわずかに含んだ褐色土が堆積していた。

本遺構の用途は９～11号土坑とともに縄文時代の落し穴とみられ，同時期に機能したものと考えられる。ただし，出土遺物は認められず，時期の詳細については不明である。　（大　波）

９号土坑　ＳＫ９（図５，写真６）

本遺構は調査区西側のＡＪ18グリッドに位置し，遺構検出面はＬⅢ上面で，先の試掘調査の際に検出したものである。形状から８号土坑と同様の落し穴と考えられ，８号土坑からは東方約７ｍに位置する。

遺構内堆積土は６層に分層した。ℓ１・２は周囲からの流入土であり，ℓ３は周壁の崩落土とみ

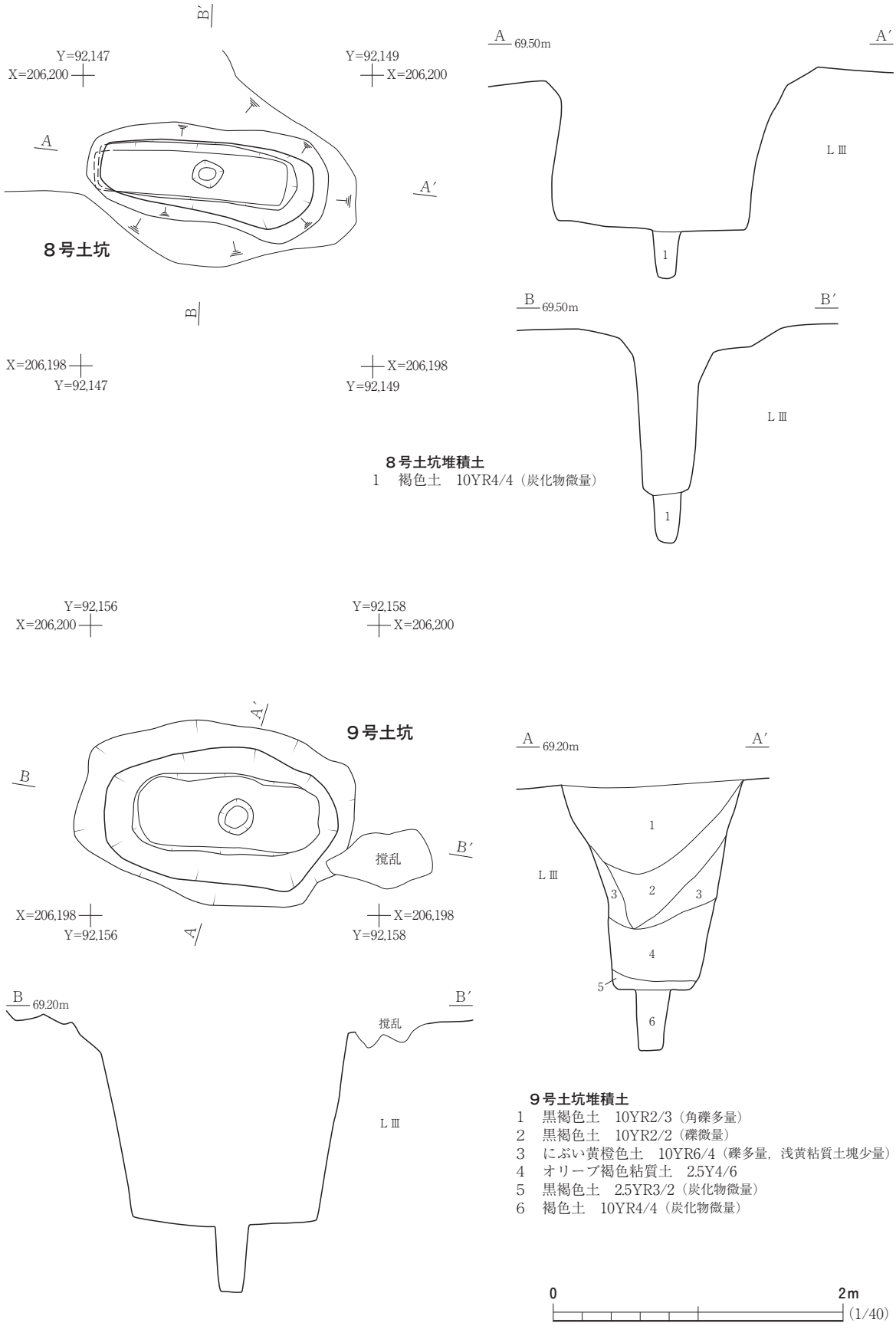

B′
Y=92,147
X=206,200
Y=92,149
X=206,200
A
A′
８号土坑
B
X=206,198
Y=92,147
X=206,198
Y=92,149
A
69.50m
A′
L Ⅲ
1
B
69.50m
B′
L Ⅲ
1
８号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/4（炭化物微量）
Y=92,156
X=206,200
Y=92,158
X=206,200
A′
９号土坑
B
B′
撹乱
X=206,198
Y=92,156
A
X=206,198
Y=92,158
B
69.20m
B′
撹乱
L Ⅲ
A
69.20m
A′
1
L Ⅲ
3
2
3
4
5
6
９号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（角礫多量）
2　黒褐色土　10YR2/2（礫微量）
3　にぶい黄橙色土　10YR6/4（礫多量，浅黄粘質土塊少量）
4　オリーブ褐色粘質土　2.5Y4/6
5　黒褐色土　2.5YR3/2（炭化物微量）
6　褐色土　10YR4/4（炭化物微量）
0
2m
(1/40)

図５　８・９号土坑

られる。その下層のℓ４が底面から50cmほどの位置に水平堆積することから，廃絶後にℓ４が埋められ，その後にℓ１～３が自然堆積した可能性が考えられる。ℓ５は炭化物を含み，底面上に薄く均一に堆積することから廃絶直後にかけて堆積したものと考えられ，ℓ６は杭などを立てた痕跡とみられる小穴内に堆積するが，炭化物を含むものの杭材の痕跡は認められなかった。

遺構の平面形は隅丸方形で，規模は遺存状態のよい部分で長軸約160cm，短軸約90cm，検出面から底面までの深さは約150cmを測る。主軸方向はＮ85°Ｗである。周壁は崩落部分を除き，底面から急峻に垂直方向に立ち上がる。底面は平坦で，中央部分には直径約25cm，底面からの深さ約50cmの小穴が認められる。

用途は，直線上に並列する８・10・11号土坑と同様の縄文時代の落し穴とみられる。ただし，本遺構は主軸方向が一致するものの，ほかの土坑と比べて大きく，同一の直線上には並列しないことから構築時期に違いがあるのかもしれない。事前調査時には石鏃１点が出土したが，今回の調査では出土遺物は認められないため，時期の詳細については不明である。堆積土中の炭化物による年代測定によれば，縄文時代前期初頭～前葉と提示される。（大　波）

10号土坑　ＳＫ10（図６，写真７）

本遺構は調査区西側北寄りのＡＪ16グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。形状から落し穴と考えられる。同様の遺構としては北東方向約３ｍに11号土坑，南西方向約16ｍに８号土坑が配置され，それらは一直線上に主軸方向を揃えて並列する。

遺構内堆積土は４層に分層した。ℓ１・２は周囲からの流入土であり，ℓ３は周壁の崩落土とみられる。その下層のℓ４は，底面上に厚さ20cmほどで堆積する。

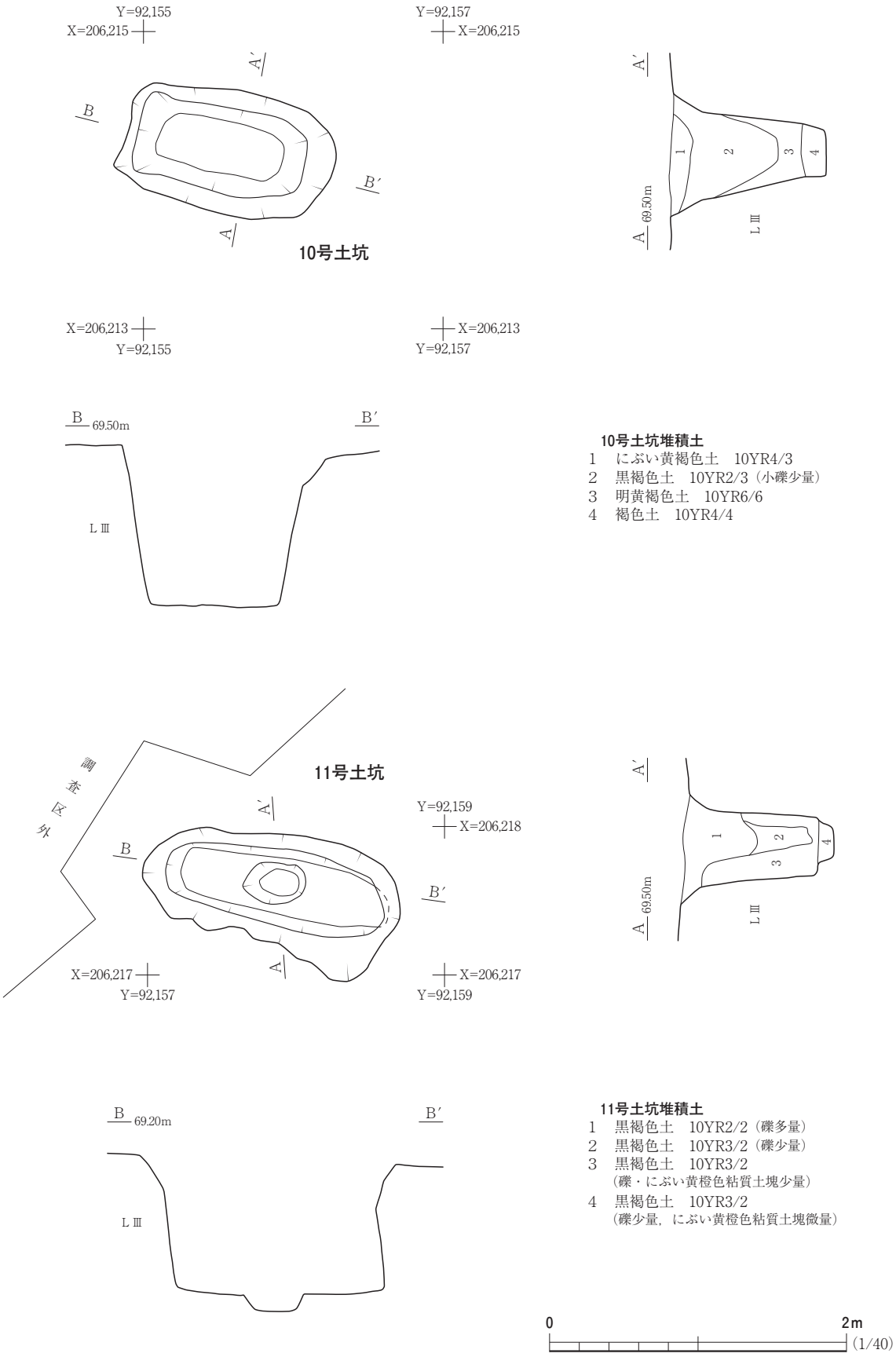
遺構の平面形は隅丸方形で，規模は遺存状態のよい部分で長軸約110cm，短軸約60cm，検出面から底面までの深さは約110cmを測る。主軸方向はＮ80°Ｗである。崩落部分を除き，周壁は底面から急峻に垂直方向に立ち上がる。底面は平坦である。

本遺構の用途は，直線上に並列する８・11号土坑と同様の縄文時代の落し穴と考えられるが，ほかの遺構の底面から確認できた小穴は認められなかった。出土遺物は認められず，時期の詳細については不明である。（大　波）

11号土坑　ＳＫ11（図６，写真７）

本遺構は調査区東側のＡＪ16グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。形状から隣接する10号土坑同様の落し穴と考えられ，そこから北東方向約３ｍに位置する。

遺構内堆積土は４層に分層した。色調や土質にほとんど違いは認められないものの，含有物とその量によって細分した。これらは自然堆積と考えられ，ℓ３・４に含むにぶい黄橙色粘質土塊は周壁の崩落土の一部とみられる。ℓ２は含有物がほとんど認められず，底面にみられた小穴状のくぼ地に対応するため設置された杭材の痕跡の可能性も考えられる。



10号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3
2　黒褐色土　10YR2/3（小礫少量）
3　明黄褐色土　10YR6/6
4　褐色土　10YR4/4

11号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（礫多量）
2　黒褐色土　10YR3/2（礫少量）
3　黒褐色土　10YR3/2
（礫・にぶい黄橙色粘質土塊少量）
4　黒褐色土　10YR3/2
（礫少量，にぶい黄橙色粘質土塊微量）

図６　10・11号土坑

平面形は細長い楕円形である。規模は，遺存状態のよい部分で長軸約150cm，短軸約50cm，検出面から底面までの深さは約100cmを測る。主軸方向はＮ80°Ｗである。崩落部分を除き，周壁は底面から急峻に垂直方向に立ち上がり，東壁は底面近くがオーバーハングして掘り込まれている。底面は平坦で，中央部分に長径約40cm，短径約30cmの楕円形で底面からの深さ約10cmの浅いくぼみが認められる。

本遺構と10号土坑，さらに約20m離れて一直線上に並列する８号土坑は，同時期に構築された縄文時代の落し穴と考えられる。ただし，出土遺物は認められず，時期の詳細については不明である。

（大　波）

第３節　遺構外出土遺物

今回の２次調査で出土した遺物は，ＡＱ15グリッド付近から出土した羽口１点のみである。１次調査と同様，遺構に伴うものは確認されず，古代の製炭場と縄文時代の狩場ということが反映したものとみられる。

羽　　口（図７，写真８）

図７は羽口である。遺存する部分は先端部であり，溶着滓で覆われたリング状となっている。吸気部側は欠損している。遺存する部分での長さは3.4cmで，最大径は外径4.8cm，内径3.2cmである。器厚は0.7～0.9cmである。

（大　波）

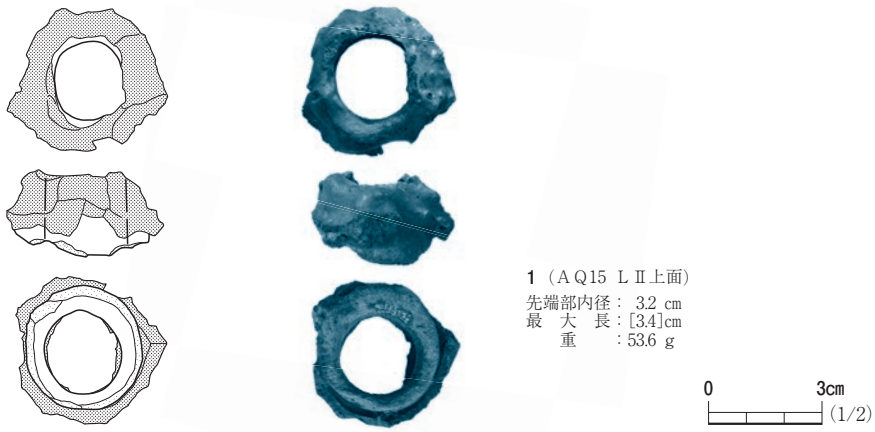


図７　遺構外出土遺物

第３章　自然科学分析

第１節　出土炭化材の樹種同定

古代の森研究舎

１．試料と方法

赤柴前遺跡は相馬郡新地町駒ヶ嶺字赤柴前の鹿狼山の東麓，立田川の北岸台地上に位置する。本遺跡の縄文時代の落し穴と，平安時代の木炭焼成土坑から炭化材が検出され，当時の木材利用を調査する目的で炭化材３試料の樹種同定を行った。炭化材試料からはステンレス製剃刀で横断面，放射断面，接線断面の３方向の断面を割り取り，プレパラートに固定して生物顕微鏡 Nikon Eclipse 80i に反射照明装置 Nikon TE2－PS を取り付け，反射光で観察，同定を行った。

２．同定結果と考察

同定結果を図８に示す。本遺跡の平安時代からはクリ２点，縄文時代からはタケ亜科１点を出土した。以下に同定された樹種の形態記載を行う。

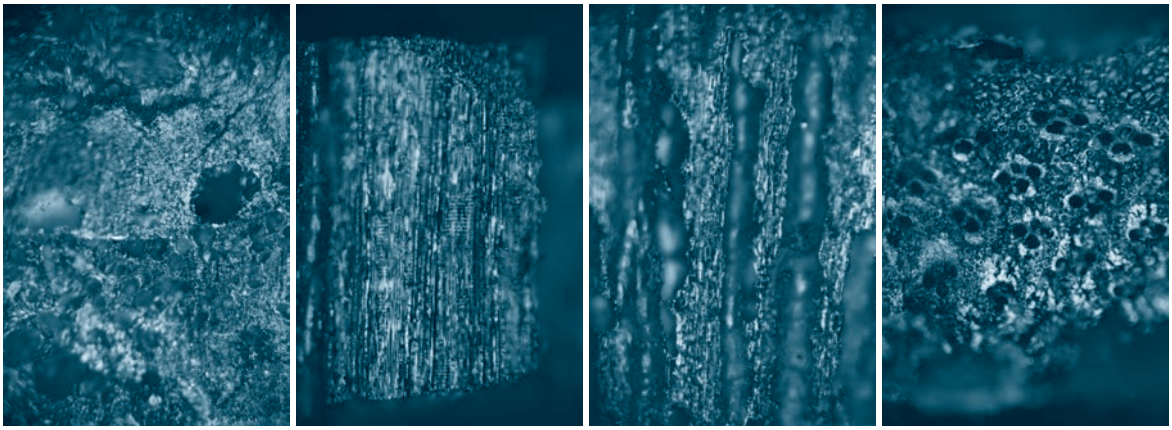
クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）：年輪はじめに大きな道管が数列配列し，その後徐々に径を減じながら小道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔板は単一で，放射組織は同性で単列である。

タケ亜科（*Subfam. Bambusoides*）：桿は中空で表皮は平滑，道管と師管が対をなす維管束を丈夫な維管束鞘が取り囲んで，柔細胞の中に多数分布している。

縄文時代の落し穴では炭化したタケ亜科を出土した。タケ亜科の残存状況は不明であるが，この炭化材は利用されていたかどうかは不明である。

平安時代の木炭焼成土坑からは２試料ともクリを出土し，これらは燃料材として周囲に生育していたクリを利用していたと考えられる。

試料番号	遺　構		時　期	層　位	採取日	樹　種
№1	ＳＫ６	木炭焼成土坑	平安時代	ℓ１	100722	クリ
№2	ＳＫ７	木炭焼成土坑	平安時代	ℓ２	100722	クリ
№3	ＳＫ９	落し穴	縄文時代		100826	タケ亜科



１ａ　１ｂ　１ｃ　２ａ

１．クリ（№2）
２．タケ亜科（№3）

―――　スケール：0.2㎜
ａ：横断面
ｂ：放射断面
ｃ：接線断面

図８　出土炭化材の樹種および顕微鏡写真

第２節　放射性炭素年代測定

株式会社　パレオ・ラボ

１．はじめに

福島県相馬郡新地町駒ヶ嶺字赤柴前に位置する赤柴前遺跡の２次調査で検出された落し穴および木炭焼成土坑から出土した炭化材について，加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

２．試料と方法

測定試料の情報，調製データは表１のとおりである。

試料は，平安時代の木炭焼成土坑と推定される６号土坑と７号土坑から出土した炭化材各１点（試料№１，２；PLD－17297，17298），縄文時代の落し穴である９号土坑から出土した試料№３（PLD－17299）の計３点である。試料№１と２は，木炭焼成遺構で焼成された木材と考えられる。各遺構から時期のわかる遺物は出土しておらず，本遺跡の１次調査によって，縄文時代は狩場，平安時代は製炭場であったことが判明しているために，木炭焼成土坑は平安時代，落し穴は縄文時代と推測されている。

試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C 年代，暦年代を算出した。

表１　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD－17297	遺構：ＳＫ６（木炭焼成土坑） 層位：ℓ１ 試料番号：№１ 採取日：100722	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側から約２年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）
PLD－17298	遺構：ＳＫ７（木炭焼成土坑） 層位：ℓ２ 試料番号：№２ 採取日：100722	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪 採取位置：最外年輪を含む約３年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）
PLD－17299	遺構：ＳＫ９（落し穴） 層位：底面近く 試料番号：№３ 採取日：100826	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）

３．結　　果

表２に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正した年代範囲，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C 年代，^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲と暦年較正結果を示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には，^{14}C の半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また，付記した^{14}C 年代誤差（±１σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}C 年代がその^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C 年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C 濃度の変動，および半減期の違い（^{14}C の半減期5730 ± 40年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：INTCAL09）を使用した。なお，１σ暦年代範囲は，OxCal の確率法を使用して算出された^{14}C 年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり，同様に２σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号 試料番号	δ^{13}C （‰）	暦年較正用年代 （yrBP ± １σ）	^{14}C 年代 （yrBP ± １σ）	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
PLD－17297 №.１	－25.44 ± 0.16	1228 ± 18	1230 ± 20	720AD（17.4%）742AD 769AD（39.9%）819AD 842AD（10.8%）859AD	694AD（ 1.3%）701AD 708AD（23.4%）748AD 766AD（70.7%）878AD
PLD－17298 №.２	－25.81 ± 0.15	1274 ± 19	1275 ± 20	687AD（37.6%）721AD 741AD（30.6%）770AD	676AD（95.4%）775AD
PLD－17299 №.３	－27.76 ± 0.15	5787 ± 23	5785 ± 25	4689BC（68.2%）4609BC	4709BC（89.8%）4579BC 4573BC（ 5.6%）4554BC

４．考　　察

各試料の暦年較正結果のうち，２σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目して結果を整理する。

平安時代の木炭焼成土坑と考えられている６号土坑出土の試料№.１（PLD－17297）は，７世紀末～９世紀後半の暦年代範囲を示した。これはいわゆる飛鳥時代～平安時代前半に相当する。同じく平安時代の木炭焼成土坑とみられる７号土坑出土の試料№.２（PLD－17298）は，７世紀後半～８世紀

後半の暦年代範囲を示した。これは飛鳥時代～奈良時代に相当する。いずれも，予想された平安時代よりやや古い年代が得られた。ただし木材の場合，最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが，内側の年輪を測定すると最外年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。

試料№.１については部位不明の炭化材であるため，実際の伐採年代よりも古い年代が得られている点を考慮に入れる必要がある。一方の試料№.２は最外年輪を含む試料であるため，７号土坑で最後に焼成された木材の伐採年代は７世紀後半～８世紀後半と考えられる。

縄文時代の落し穴とみられる９号土坑出土の試料№.３（PLD－17299）は，4710－4579 cal BC（89.8%）および4573－4554 cal BC（5.6%）の暦年代範囲を示した。早瀬（2008）や小林（2008）を参考にすると，この年代は縄文時代前期初頭～前葉に相当する。

参考文献

Bronk Ramsey, C.　1995 Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy：The OxCal Program. *Radiocarbon* 37, pp.425－430.

Bronk Ramsey, C.　2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon* 43, pp.355－363.

早瀬亮介　2008「前期大木式土器」『総覧縄文土器』pp.226－233.

小林謙一　2008「縄文時代の暦年代」『縄文時代の考古学２　歴史のものさし－縄文時代研究の編年体系－』pp.257-269.

中村俊夫　2000「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の^{14}C 年代』pp.3－20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E.　2009 IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0－50,000 Years cal BP. *Radiocarbon* 51, pp.1111－1150.

第４章　ま　と　め

赤柴前遺跡は，阿武隈高地を水源に太平洋へ東流する立田川北岸に位置する。この遺跡周辺は，河川沿いに形成される中位段丘面から低位段丘面にかけて，連続する地形となっている。遺跡は，常磐自動車道建設に先立って，平成21年度の１次調査では緩斜面となる中位段丘面1,000㎡を，平成22年度の２次調査では平坦な地形となる低位段丘面2,500㎡を対象として行われた。１・２次の調査区間は200mほど離れている。

２次にわたる調査で検出した土坑は計11基で，木炭焼成土坑４基と落し穴５基，性格が不明なものが２基である。以下に，今回の調査で確認した遺構を概観してまとめとしたい。

木炭焼成土坑は６・７号土坑の２基で，１次調査でタイプＡとして分類されたものである。平面形が隅丸長方形を基調としたもので，ほとんど周壁は残っていない。それらは出土遺物や関連遺構が認められず，時期や用途の詳細については不明である。ただし，遺構内の堆積土から出土した炭化物を試料とした放射性炭素年代測定を行った。１次調査と同様に８～９世紀の所産との結果が提示されている（第３章第２節）。また，遺構外ではあるものの羽口片が出土したことから，調査区外に製鉄関連遺構が存在する可能性があり，製造された木炭の配給先とも考えられる。

落し穴は８～11号土坑の４基で，縄文時代の狩場に広く一般に普及したものとみられる。興味深いことに，検出した10・11号土坑付近の調査区北側では，夜間に野生のイノシシが出現し，温度調節や寄生虫除去の‘泥遊び’を繰り返していた。４基の落し穴は，締まりのある礫層を掘り込んで構築されるためか遺存状態がよく，開口部分での崩落を除きほぼ旧状をとどめている。それらは細長い楕円形を基調として周壁が垂直に落ち込み，主軸方向も一致することから外観的な印象はほとんど変わらない。４基は８号土坑を起点として，８・10・11号土坑が北北東から南南西に直線上に配置され，さらに８・９号土坑は主軸方向が東西方向で一致する。以上のことから，検出した落とし穴は同時期に，一連のしかけとして意図的に配置されたことがうかがわれ，さらに調査区外へも連続して構築された可能性が考えられる。ただし仔細な点では，８・９号土坑には底面中央に明瞭な柱状の掘り込みがあるのに対し，10号土坑は小穴をもたず，11号土坑は浅いくぼみとなっている点など，相違点もあるため時期差があることも考えられる。

以上のような調査成果から，赤柴前遺跡は古代の製炭場と縄文時代の狩場であることが判明したが，全容については今後の調査成果を待つこととしたい。（大　波）

引用・参考文献

笠井崇吉ほか　2011「鴻ノ巣遺跡・赤柴前遺跡（１次調査）」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告66』福島県文化財調査報告書第479集

第４編　大槻（おおつき）遺跡

遺跡記号	ＳＴ－ＯＴＫ
所在地	相馬郡新地町杉目字大槻
時代・種類	縄文時代・平安時代の集落跡 近世以前の祭祀跡
調査期間	平成22年９月７日～12月10日
調査員	吉田秀享・大波紀子 笠井崇吉・西澤正和

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形

大槻遺跡は，相馬郡新地町杉目字大槻地内に所在する。ＪＲ常磐線新地駅と駒ヶ嶺駅の両駅からそれぞれ約４㎞のところに位置し，遺跡の東方約３㎞には国道６号線がＪＲ常磐線と平行して南北方向に延びている。遺跡は，阿武隈高地を水源として太平洋へと注ぐ砂子田川とその支流によって形成された河岸段丘の残丘に立地し，太平洋岸からは５㎞ほど内陸となる。

大槻遺跡の地形は，阿武隈高地を形成する鹿狼山東麓の小丘陵部分となり，周囲は平坦な耕作地が広がっている（図１）。今回の調査は常磐自動車道建設予定地となる1,000㎡を対象に，丘陵地の西側部分について実施した。丘陵地の頂上部分には祠が設置されており，その頂上部からは鹿狼山が眺望できることや，すぐ南に鎮座する大槻神社との関連性などから，当地域が信仰の対象や求心的な場所として継続的に活用されたことがうかがわれる。今回の調査でも，建設以前に祠が置かれた頂上部分では角礫が集積する性格不明遺構が検出され，祭祀に関わるものとみられる。

調査区の範囲は，丘陵部分の南北約60ｍ，東西約25ｍである。調査区南側は旧河川の埋め戻し部分であったため旧地形は未確認であるが，頂上部分では標高66.20ｍ，調査区北側では58.60ｍの等高線が巡り，その部分での標高差は7.2ｍを測る。調査区内には無数のスギの植林の伐採痕が残るが，植林以前の旧地形では丘陵端部が一段と落ち込んでおり，丘陵周囲の平坦な地形は後世の広範な整地によるものとみられる。（大　波）

第２節　調 査 経 過

大槻遺跡は，縄文土器の散布地として登録された周知の遺跡である。常磐自動車道建設予定地については，漸次，要保存範囲確認のための試掘調査が実施され，保存対象となった遺跡について本調査が行われている。今回の発掘調査も，先に行われた試掘調査により範囲が確定され，保存対象となった1,000㎡に対して実施されたものである。調査期間は，平成22年９月７日から12月10日までの延べ87日間である。

９月７日より，作業員の雇用準備，重機による表土除去作業，プレハブ・仮設トイレの設置や器材搬入など環境整備に取りかかった。対象面積は1,000㎡と小規模ながらも，調査区は丘陵地の斜面となり，植林したスギの伐根跡がいたる所に残される状況であった。そのため，相応の安全対策や作業手順の必要性を考慮し，常時２名以上の調査員を配置し，登録作業員30名弱を雇用して発掘調査を開始した。

先の試掘調査により表土直下の遺物包含層（ＬⅡ）を確認していたことから，９月15日より丘陵頂

鈴山遺跡
常磐自動車道建設予定地
大槻遺跡
猿田川
町道大槻飯樋線
県道赤柴・中島線
大槻溜池
遺跡範囲
調査区
0
50m
(1/2,000)

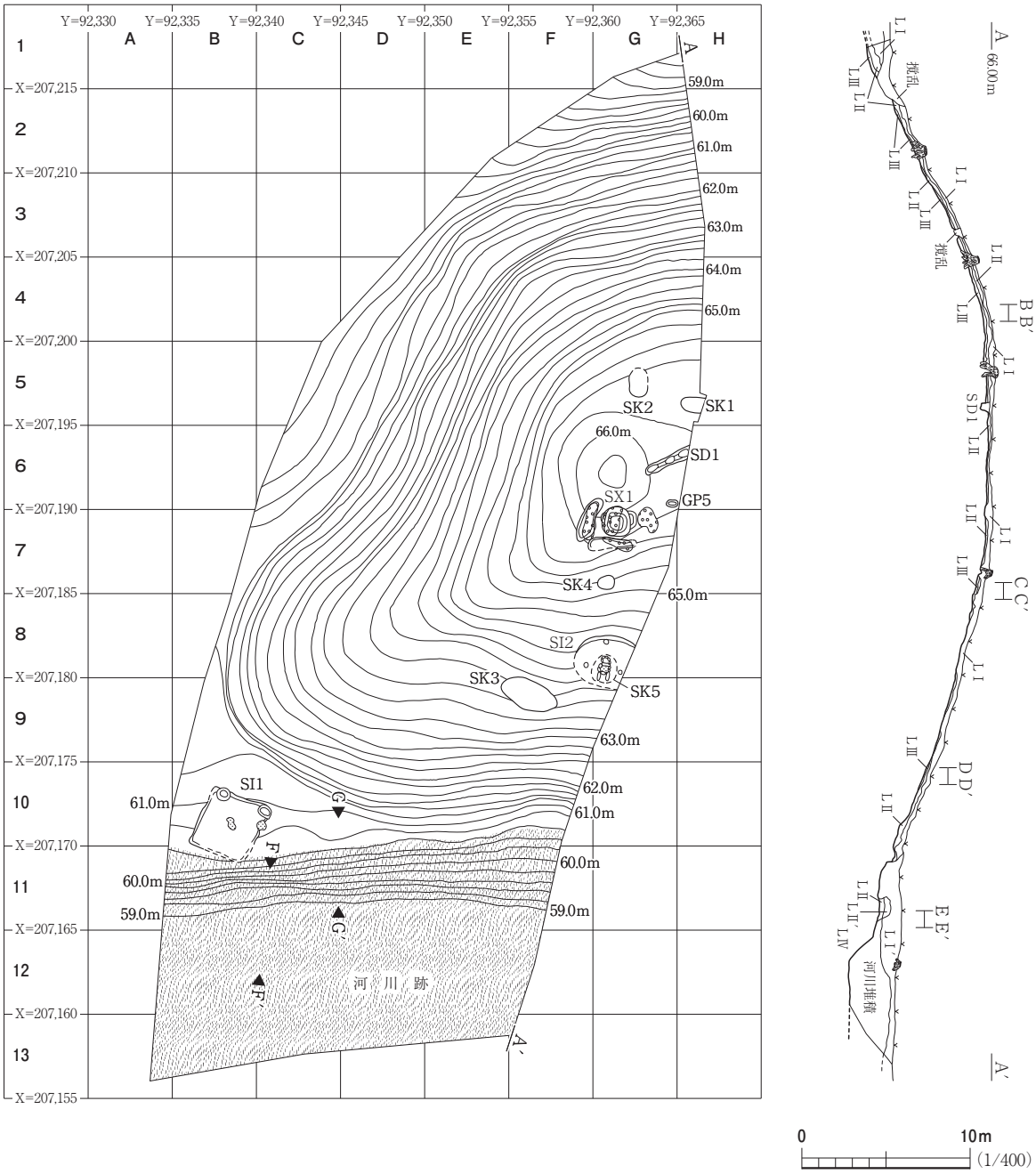
図１　調査区位置図

上部から段階的に遺構検出と人力による掘削作業を行った。28日には測量杭の打設が完了し，遺物は設定したグリッドごとの採り上げが可能となった。作業員の実働は１日あたり20人弱ではあったが，３班編成を取りながら，包含層の掘り下げと遺構検出，調査区外への廃土の搬出，伐根跡周りの処理というように日替わりで作業内容を分担した。10月５日には頂上部で集石が認められた性格不明遺構（ＳＸ１）の精査に着手した。

当初予定の11月後半の引渡しに向けて10月28日には現状での空中写真撮影を実施し，それ以降は調査区南側の緩斜面と丘陵裾部の平坦面での検出作業を重点的に行った。29日には頂上部の土坑，溝跡とともに，丘陵裾部の平坦面から検出した平安時代の竪穴住居跡（ＳＩ１）の精査に入り，翌週からはそれら遺構の精査と平行して一部地形測量と基本土層の確認を行った。その間，11月９～11日には重機による丘陵裾部および旧河川堆積土の掘削を行い，11日から南側緩斜面（ＬⅢ）の掘り下げ作業に移った。翌12日には伐根周りに縄文時代の竪穴住居跡（ＳＩ２）を検出するに至った。

調査区全域からは，縄文土器を主体とする遺物を採取していたが，調査終盤に入って南側斜面から複数の縄文時代の遺構を確認したことに加え，地元の小学校から現地見学の希望もあったため，複式炉が確認された竪穴住居跡については現状を維持し，ほかの遺構の調査および地形図と基本土層図の作成を優先させて11月末までの終了を目指した。この段階で残務の把握ができると，調査員１名と作業員数名を残し，12月からは別遺跡の調査へ移行することとなった。この複式炉は新地町の広報誌にも掲載され，12月２日には地元の２つの小学校の児童たちが見学に訪れた。

複式炉の断ち割りと重複するフラスコ状土坑（ＳＫ５）を完掘すると，調査は10日までには賃貸物件の返却，器材の搬出などの残務処理を済ませて終了した。その後，12月16日には東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所関係者・福島県教育庁文化財課・福島県文化振興事業団遺跡調査部との三者による現地確認を行い，現状のまま引渡して現地での調査を完了した。　　（大　波）



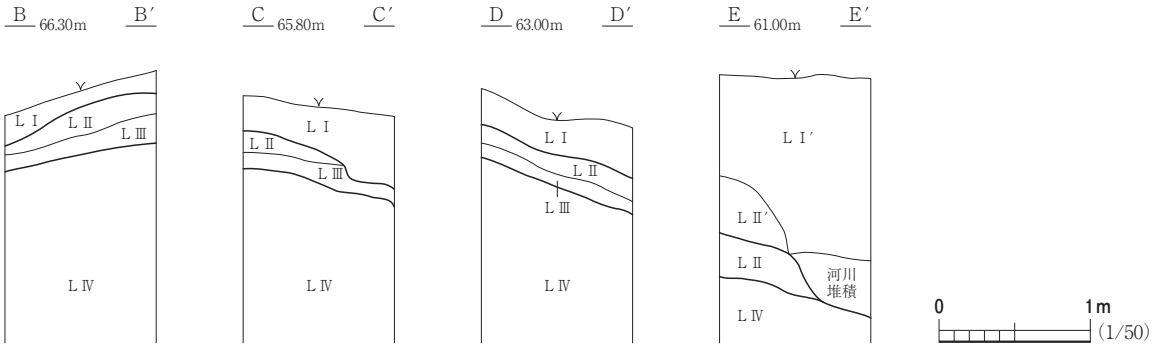


図２　遺構配置図，基本土層（１）

第２章　遺 構 と 遺 物

第１節　遺構の分布と基本土層

１．遺構の分布（図２）

今回の調査で検出した遺構は，竪穴住居跡２軒，土坑５基，溝跡１条，性格不明遺構１基，小穴１基である。それらの遺構は縄文時代と平安時代，近世のものであり，時代ごとにまとまりが認められる。

縄文時代の遺構は丘陵部南側の緩斜面上に集中し，平安時代の住居跡は旧河川に面した丘陵裾部の平坦地から，近世の祭祀関連とみられる遺構は丘陵頂上部から検出された。出土遺物は，検出した遺構を中心にほぼ調査区全域から認められるが，主体となるものは縄文時代中期末頃のもので，石皿や凹石といった石製品が散在することも特徴である。

２．基本土層（図２・３，写真５・６）

今回の調査対象となる範囲は，南北約60ｍ，東西約25ｍの丘陵部分である。調査区南側の旧河川を除き，調査区内での最大標高差は調査区北端から丘陵頂上部までの7.4ｍを測る。調査区内の高低差が大きいこともあり，調査区東壁を利用して丘陵地のおよそ南北ラインでの堆積状況を確認し，地形の変換箇所など要所ごとに柱状図を作成した。堆積土は，丘陵頂上部では薄く，丘陵下端では厚くなる傾向がみられる。また，調査区南側の旧河川への落ち込み部分では，部分的にＬⅡ上に堆積するＬⅡ′が確認できたため，一部深掘りして土層観察地点を設定した。層位は表土をＬＩとし，ＬＩからＬⅣまでの４層に分層した。

ＬＩ　：黒褐色土　10YR2/3　粘性・締まりなし。調査区全体を覆う表土層である。

ＬＩ′：黒褐色土　10YR2/3　粘性なし。締まり強い。角礫を多量含む。表土層のうち，旧河川

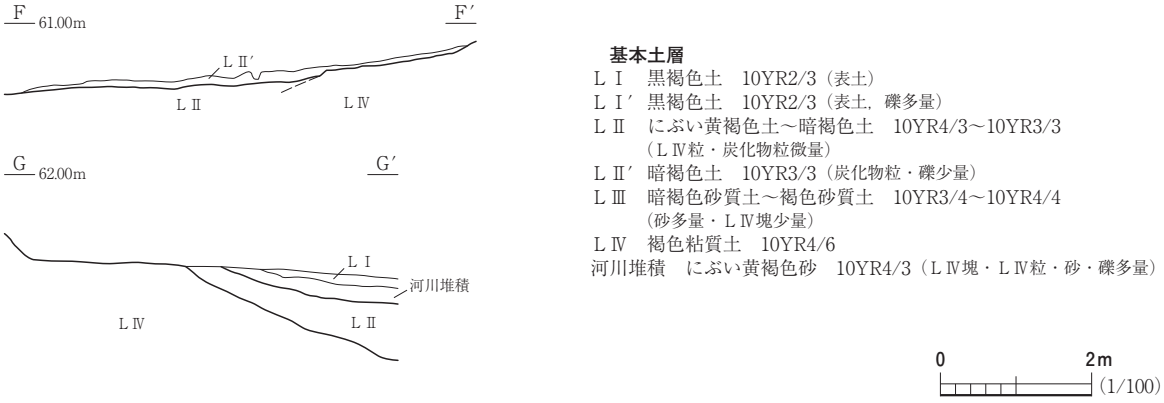


図３　基本土層（２）

堆積土上に認められ，旧河川の埋め戻しあるいは付近の整地の際に運ばれたものとみられる。

ＬⅡ：にぶい黄褐色土～暗褐色土　10YR4/3～10YR3/3　粘性・締まり弱い。ＬⅣとみられる褐色粘質土粒や炭化物粒を微量含む。縄文時代以降の遺物包含層であり，本層上面が平安時代の住居跡（ＳＩ１）の検出面である。

ＬⅡ′：暗褐色土　10YR3/3　やや粘性・締まりあり。炭化物粒・礫を少量含む。旧河川への傾斜部分に認められ，ＬⅡ上に堆積する。平安時代の遺物包含層である。

ＬⅢ：暗褐色砂質土～褐色砂質土　10YR3/4～10YR4/4　やや粘性・締まりあり。ＬⅣとみられる褐色粘質土塊を少量含む。縄文時代の遺物包含層である。

ＬⅣ：褐色粘質土　10YR4/6　粘性あり。締まり強い。本層上面が縄文時代の遺構検出面である。

（大　波）

第２節　竪 穴 住 居 跡

竪穴住居跡は２軒検出され，それぞれ平安時代と縄文時代に属する住居跡である。平安時代の住居跡は調査区南側の丘陵裾部に位置し，旧河川に面した平坦地に構築される。縄文時代の住居跡は，丘陵頂上部すぐ下の比較的緩やかな南側斜面に位置し，敷設する複式炉には新旧の造り替えが認められ継続的に営まれた様子がうかがわれる。出土遺物は，どちらも住居跡とその周囲からまとまって出土している。

１号住居跡　ＳＩ１

遺　　構（図４，写真７・８）

本遺構は，調査区南西側のＢ10・11，Ｃ10グリッドにかけて位置する住居跡で，ＬⅡ上面より検出された。遺構が立地する地形としては，丘陵頂部から南西方向へやや張り出した斜面裾部にあたる。本遺構は，調査区南側に埋め戻されていた東西に流れる旧河川に面しており，平坦な地形を利用して構築されたものとみられる。遺存状態は悪く，後世のスギの植林による撹乱が著しく，各所に伐根跡が残されている。また，住居跡の周壁がほとんど残らないことから，おそらく旧河川の埋め戻しの際に整地され，丘陵裾に沿って掘削を受けたものとみられる。

検出した住居跡は，遺存する北周壁と西周壁との関係から，平面形は正方形に近い隅丸方形で，規模は北周壁で約340㎝，西周壁で約370㎝の小型の住居跡である。主軸方向は北周壁を基準とするとＮ65°Ｗを指す。周壁の立ち上がりは10㎝ほどである。遺構内堆積土は２層に分層したが，ℓ２が周壁側からの流入土，ℓ１がその後の堆積土となり，自然堆積の様相を示す。床面は凹凸が認められ，スギの根による撹乱で南東側が大きく乱れている。貼り床は認められず，地山を掘り込んだまま使用されたものとみられる。住居跡の中央部分には炭化物の広がりが認められる。

付属施設としては床面からＰ１・Ｐ２の貯蔵穴跡を検出した。そのほかにも，２カ所で焼土化範

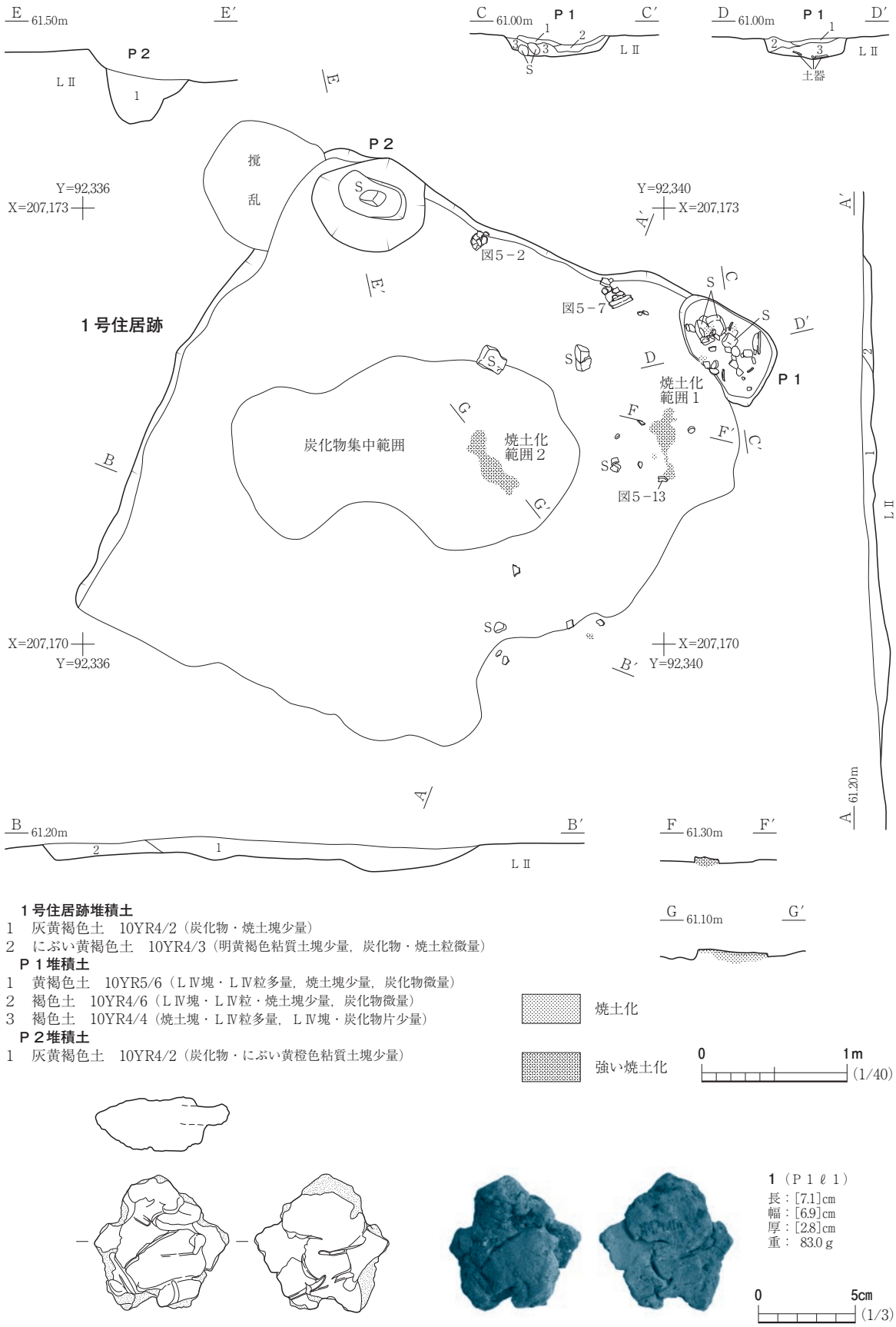


図４　１号住居跡，出土遺物（１）

囲を確認した。焼土範囲はどちらも赤く熱で硬化しており，頻繁に熱を受けていた様子がうかがわれる。位置的に北東隅近くから検出した焼土化範囲１はカマドの燃焼面の痕跡と考えられ，東周壁に平行して不整形に広がっている。

Ｐ１はカマド脇に設置された貯蔵穴とみられる。Ｐ１内堆積土は３層に分層され，堆積土中には焼土などの塊が認められる。堆積土中の焼土については，カマドが住居の廃絶時に取り壊され，その一部がＰ１内へ廃棄されたものと推測している。Ｐ１はカマド袖と北東隅の形状に沿うように掘り込まれ，大きさは長軸約75㎝，短軸約50㎝，深さ10㎝程度である。Ｐ１内からは土師器の甕とみられる土器片や礫，粘土・焼土塊などが出土した。粘土塊としたもののなかには，製鉄関連の炉壁，たとえば鍛冶炉の壁と考えられるものもあり，耐火性を強化するためか胎土中に羽口片が混入される。ほかに，豆粒大の種子がまとまって出土したが，これらは同定の結果エゴノキで現代のものであるため，混入したものと断定した。

Ｐ２は住居跡北西隅近くに配置され，一部北周壁を掘り込んでいる。長軸約80㎝，短軸約65㎝の楕円形で，深さは床面から約25㎝である。底面は椀状にくぼんでおり，周壁は緩やかに立ち上がっている。Ｐ１のように出土遺物は認められず，底面に15㎝大の礫が認められた。

焼土化範囲２は住居跡中央のカマド寄りで検出されたが，ちょうど伐採木根の真下となり周囲は撹乱によって旧状をとどめてはいない。焼土範囲は極めて酸化が著しく，最も顕著な部分では数㎝の厚さで煉瓦状に焼けていた。床面上の炭化物の広がりがこの周囲に集中するため，何らかの関連性が考えられるが，特定はできなかった。

遺　　物（図４・５，写真19）

本遺構から出土した遺物は，土師器片125点，須恵器片６点などである。ほとんどが細片で熱を受け脆弱となっており，表面の剝離や接合部分の摩滅が著しく，もとの形状に復元することが困難であった。それらのうち，図示できたものは14点である。

出土遺物はＰ１内およびその周辺に集中することから，多くは住居の廃絶時に不用品としてまとめられ，Ｐ１内に一括廃棄されたものと考えられる。また，図示した図５－13の須恵器甕は，住居内から出土した細片２点と同一丘陵の反対側となる北側斜面から出土した口縁部片とが接合しており，その廃棄過程については不明である。

図５－１～６はロクロ成形の土師器杯である。やや小型となる５を除き，どれも熱を受けた痕跡が認められる。１・２の器形は体部が丸みをもち，口縁部が緩やかに外傾する。３・５は底部が欠けるが，器形としては１・２と同様とみられ，３は口縁部下端がやや張り出し，５は口縁部が短く直立する。６は厚みのある底部から直線的に口縁部までが外傾する器形である。４は遺構外出土遺物として図示した図17－30の高台部分と同一個体の可能性がある。１・２・６の底部は摩滅が著しく不明瞭であるが，周縁には手持ちヘラケズリとみられる調整があり，２には部分的に回転糸切り痕が認められる。底部は平底であるが，１・６の中央には小石が外れたような凹みがある。内面は，１・４にはヘラミガキが施され黒色処理が施される。２は熱を受けて判然としないが，３・５

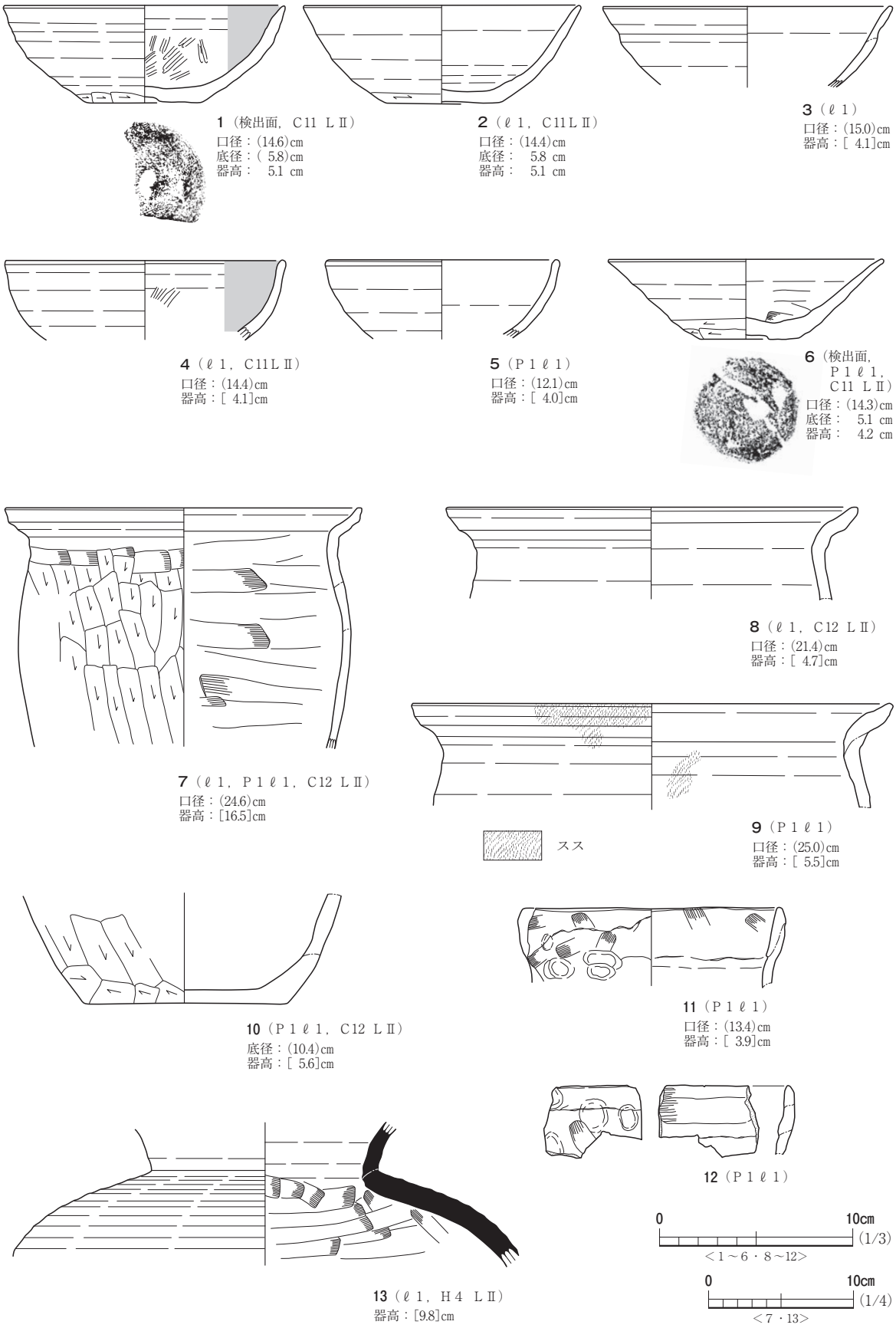


図5　1号住居跡出土遺物（2）

にはそのような調整が認められず，いわゆる赤焼き土器に分類されるものとみられる。

同図７～10はロクロ成形の土師器甕である。やや大小があるものの，どれも煮沸具として利用された長胴甕とみられ，口縁部分にはススの付着が認められる。７～９の口縁部は，頸部が「く」字状に屈曲し，口唇近くで直立する。体部上半が残る７には，外面が縦方向にヘラケズリ，内面が横方向にヘラナデが施され，10の底部片にも外面にヘラケズリが認められる。10の底部片は，８か９の同一個体となる可能性もある。

11・12は筒型土器とみられるが，細片のため形状や用途については不明である。熱を受けた痕跡が認められ，輪積み痕が目立ち，指オサエや指ナデが各所に残される。

13は須恵器甕の肩部である。頸部が「く」字状に屈曲し，肩が大きく張っている。内面には横方向のヘラナデが認められる。

図４－１は，鍛冶炉の炉壁とみられる粘土塊で，植物繊維状のスサを含み，羽口の細片が混入している。

ま と め

本遺構は，旧河川に面した丘陵裾部の平坦面に構築された小型の住居跡で，廃絶時にカマドが故意に壊されている。住居跡の中央には焼土範囲が確認されることから，一般的な居住目的のものではなく，水場近くに造られた鍛冶などの工房跡であった可能性が考えられる。本住居跡の時期は，出土した土師器の形態的特徴から平安時代９世紀後半頃と想定される。（大　波）

２号住居跡　ＳＩ２

遺　　構（図６～８，写真９～12）

本遺構は，調査区東側のＦ７・８，Ｇ７～９グリッドに位置する住居跡で，丘陵頂上部からやや下った南向き斜面上部に立地する。斜面に構築されているため，遺構の南側半分は流出して失われており，堆積土の大半も後世のスギの植林で顕著な撹乱を受けていた。また，遺構の東側は調査区外に延びている。５号土坑と重複しており，本遺構が新しい。遺構検出面はＬⅣ上面である。

遺存する北周壁の形状から，検出した住居跡の平面形は不整楕円形と推測される。規模は遺存値で，南北280㎝，東西320㎝を測るが，炉・柱穴・北周壁の位置関係から，本来は南北３ｍ，東西3.5ｍほどの小型の住居跡であったと考えられる。主軸方向はＰ１－Ｐ３間の中点とＰ２の中心を結んだ線を基準とするＮ６°Ｅを指す。周壁は遺存する北周壁で18㎝を測り，40～50°の緩やかな角度で立ち上がる。遺構内堆積土は２層に分層した。いずれも斜面上部からの流れ込みの状況が観察できるため，自然堆積土と判断した。床面はＬⅣ上に形成され，起伏があり，全体的に斜面下方の南側へ向かって弱く傾斜している。

付属施設としては床面中央南側で新旧の２時期の炉跡２基と焼土化範囲１カ所，周壁寄りの３カ所に柱穴３基を検出した。炉跡は，床面中央南側で重複する５号土坑の堆積土上に上下に重なって構築されていた。

上方の新炉は，土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉で，土器埋設部と石組部の接合部が明瞭にくびれるダルマ形の平面形をしており，簡素な前庭部が付設する。複式炉の規模は，全長が127㎝を測り，長軸方位はＮ10°Ｅを示す。

土器埋設部は，埋設土器を中心に，南北37㎝，東西40㎝の不整円形に縁石が巡り，縁石上端から埋設土器の下端までの深さは36㎝を測る。土器埋設部の縁石には長さ10～30㎝ほどの砂岩のやや細長い亜角礫が使用されていた。埋設土器は，口縁部と底部を欠損した深鉢形土器を正位に直立させて据えていた。石組部は，南北57㎝，東西64㎝の不整楕円形をしており，検出面から底面までの深さは30㎝を測る。底面から壁面にかけて長さ20㎝前後の砂岩および安山岩の板状礫を掘形に貼付けるように配しており，土器埋設部との接合部には，石皿を転用した直径約40㎝の大型の板状礫（図９－２）を北側にやや傾けて設置している。石組部の配石は被熱して表面が剝離しているものや，破砕したものが認められる。前庭部は両脇に砂岩および安山岩の板状礫を掘形に立てただけの簡素なものである。南北70㎝，東西94㎝の方形をしており，底面はほぼ平坦である。

新炉に関わる堆積土は，ℓ１～７と考えられる。ℓ１・２は石組部から前庭部にかけて堆積する

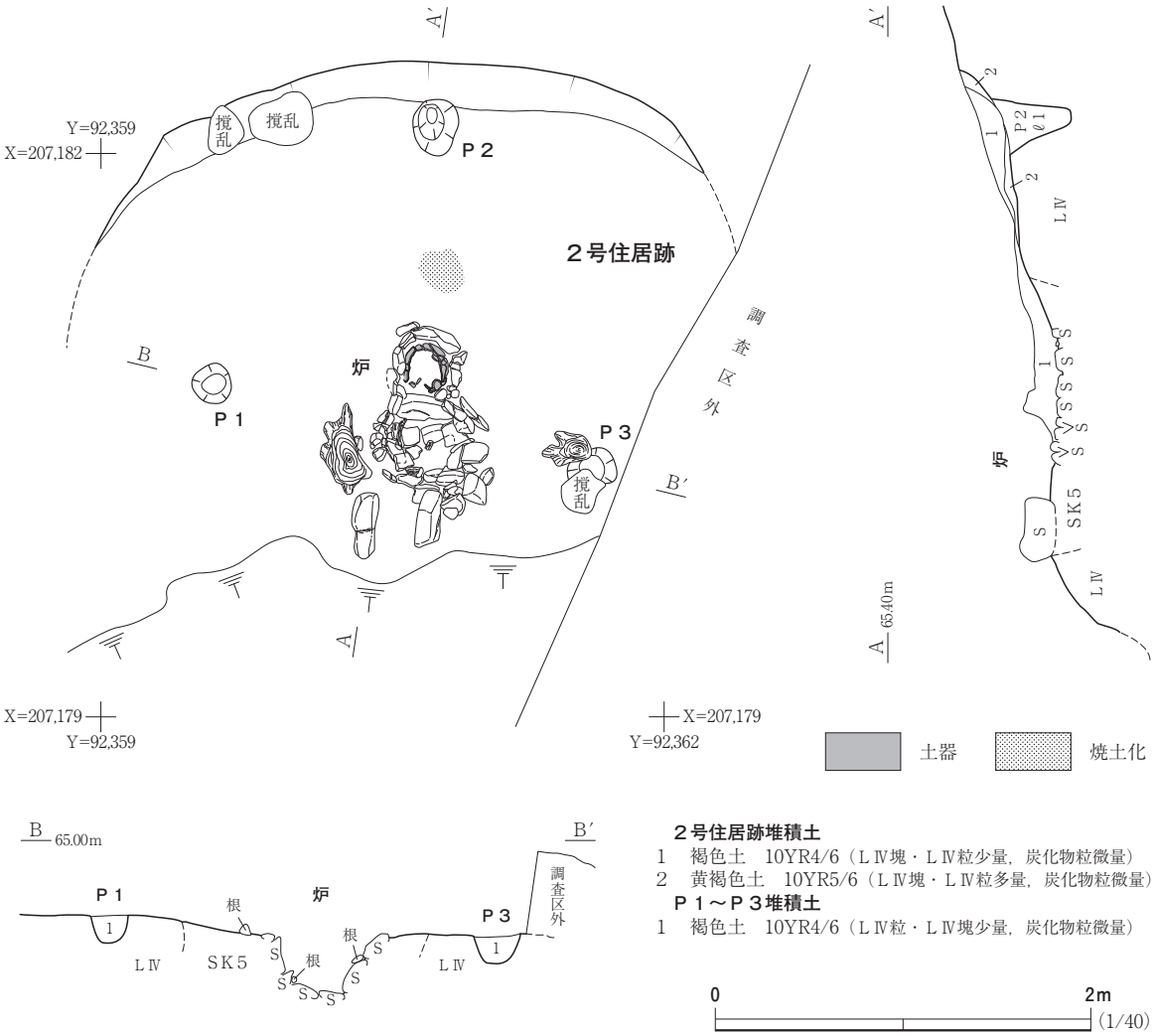


図６　２号住居跡

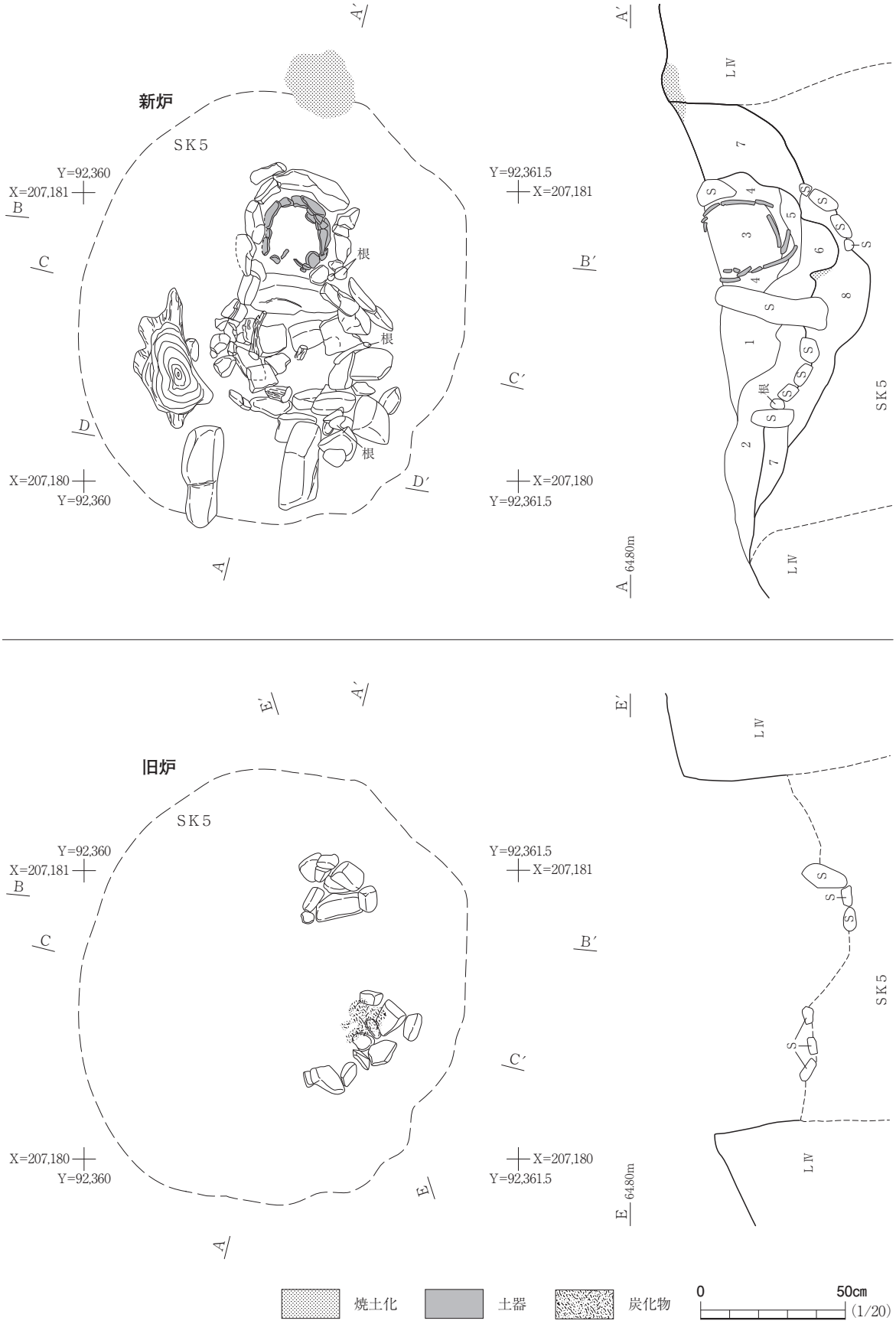
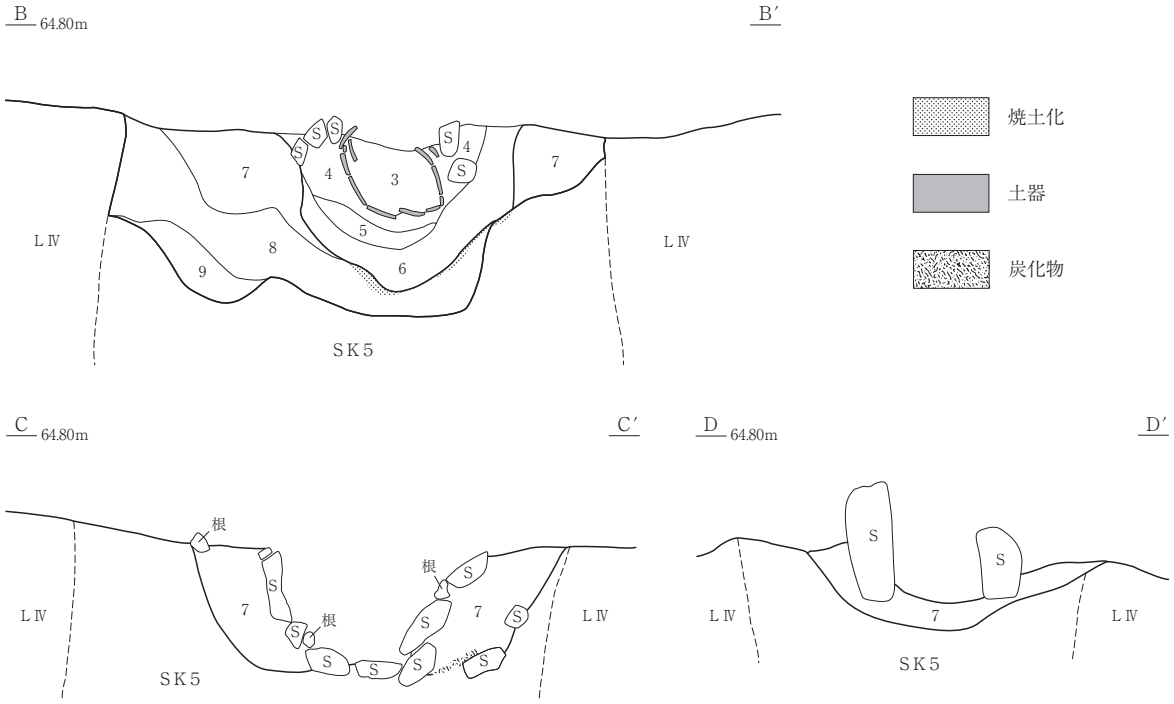

新炉
SK5
Y=92,360
X=207,181
Y=92,361.5
X=207,181
X=207,180
Y=92,360
X=207,180
Y=92,361.5
根
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
LⅣ
SK5
64.80m
旧炉
E
E′
焼土化
土器
炭化物
0
50cm
(1/20)

図７　２号住居跡炉（１）



炉堆積土

1　褐色土　10YR4/4（ＬⅣ塊少量，炭化物粒微量）
2　暗褐色土　7.5YR3/3（炭化物粒微量）
3　褐色土　10YR4/4（ＬⅣ塊・炭化物粒少量）
4　褐色土　10YR4/6（ＬⅣ塊・ＬⅣ粒多量，炭化物粒少量）
5　褐色土　10YR4/4
（ＬⅣ粒多量，ＬⅣ塊・焼土粒少量，炭化物粒微量）
6　黄褐色土　10YR5/6（ＬⅣ塊多量，焼土塊・炭化物粒微量）
7　黄褐色土　10YR5/6（ＬⅣ塊・ＬⅣ粒多量，炭化物粒少量）
8　褐色土　10YR4/4
（ＬⅣ粒多量，ＬⅣ塊・炭化物・炭化物粒少量，上面の一部焼土化）
9　暗褐色土　10YR3/4
（ＬⅣ塊・ＬⅣ粒・焼土塊少量，炭化物粒微量）

0　1m
(1/20)

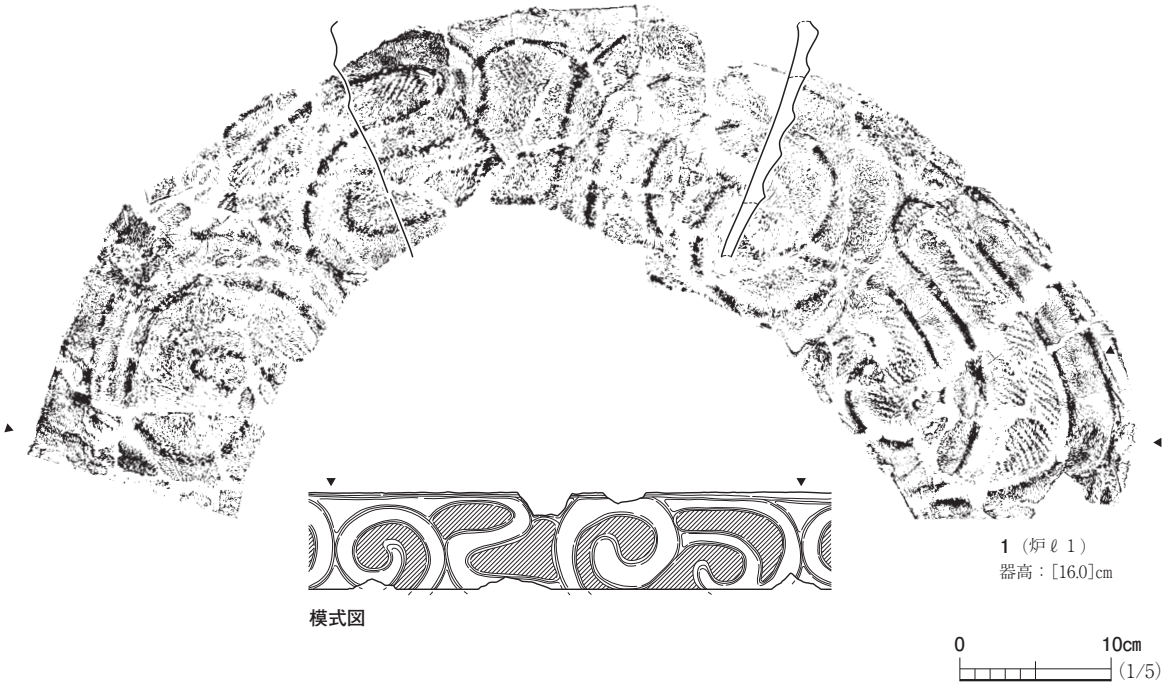


図８　２号住居跡炉（２），出土遺物（１）

褐色および暗褐色土で，堆積状況とその性格から自然埋没土と判断した。ℓ３は埋設土器内に堆積する褐色土で，ＬⅣ塊・炭化物粒が偏在する状況から人為的埋土と判断した。ℓ４・５はＬⅣ塊・ＬⅣ粒・炭化物粒が混入した褐色土で，堆積状況から土器埋設部の掘形埋土と判断した。ℓ６・７はＬⅣ塊を多量に混入する黄褐色土で，堆積状況から新炉を作るために旧炉を埋め立てた構築土と考えられる。

下方にある旧炉は，新炉の底面から10～20㎝下に構築された炉跡と考えられるが，大きく壊されており，東側の一部に配石が残るのみである。遺存する配石は北部と南部に分かれて検出した。北部と南部の配石の間は50㎝ほど離れており，この間に配石は認められないが，本来一つの施設であったと推定している。両配石を合わせた全長は87㎝を測る。両配石の底面には15㎝の比高差があり，南側がやや高い。住居跡床面から底面までの深さは，北部が80㎝，南部が30㎝を測る。

北部の配石は，長さ10～35㎝の砂岩の亜円礫を円形か楕円形の擂鉢状に配置したものと推定され，その北東隅の部分が，南北48㎝，東西52㎝の扇形に遺存したものと考えられる。同様に南部の配石は，長さ15～25㎝の砂岩の亜円礫を円形か楕円形の擂鉢状に配置したものと推定され，その南東隅の部分が，南北75㎝，東西45㎝の「Ｃ」字状に遺存したものと考えられる。南部の配石の直上には炭化物がまとまって出土した。旧炉に関わる堆積土は，ℓ８・９と考えられる。ℓ８はＬⅣ粒・ＬⅣ塊・炭化物粒を含む人為堆積とみられる褐色土で，配石上に堆積する層の境目付近が焼土化していることから，炉底として使われている時期があると考えられる。ℓ９はＬⅣ塊・ＬⅣ粒・焼土塊・炭化物粒が混入した堆積土で，５号土坑の堆積土とは明瞭に異なることから旧炉に関わる堆積土と判断した。

また，炉跡北側に南北22㎝，東西25㎝の不整楕円形をした焼土化範囲が認められ，６㎝の厚さで焼土化が及んでいた。

柱跡は，新炉の土器埋設部と石組部の接合部の西側82㎝の位置にＰ１，東側64㎝の位置にＰ３があり，北壁沿いの中央付近にＰ２が位置する。Ｐ１は平面形で，直径21㎝，床面からの深さ15㎝を測る。Ｐ２は平面楕円形で，南北29㎝，東西24㎝，床面からの深さ34㎝を測る。Ｐ３は平面楕円形で，南北19㎝，東西25㎝，深さ14㎝を測る。柱穴の堆積土はいずれも同様の褐色土であり，住居内堆積土のℓ１に近い。

遺　　物（図８・９，写真20）

本遺構から出土した遺物は，縄文土器片185点，石器７点である。ほとんどが細片で表面の剝離や接合部分の摩滅が著しく，もとの形状に復元することが困難であった。そのうち図示できる縄文土器１点と石器３点を掲載した。

図８－１は新炉の埋設土器である。深鉢形土器の胴部資料で，口縁部と底部は失われている。やや外傾が強い器形をしており，外面は断面三角形の隆帯で「Ｓ」・「Ｌ」字状や渦巻状のモチーフを描いており，モチーフ間には単節の縄文が充填されている。文様モチーフはそれぞれが近接し，一部で重複している。器形および文様の特徴から，縄文時代中期末葉の大木10式に比定される。

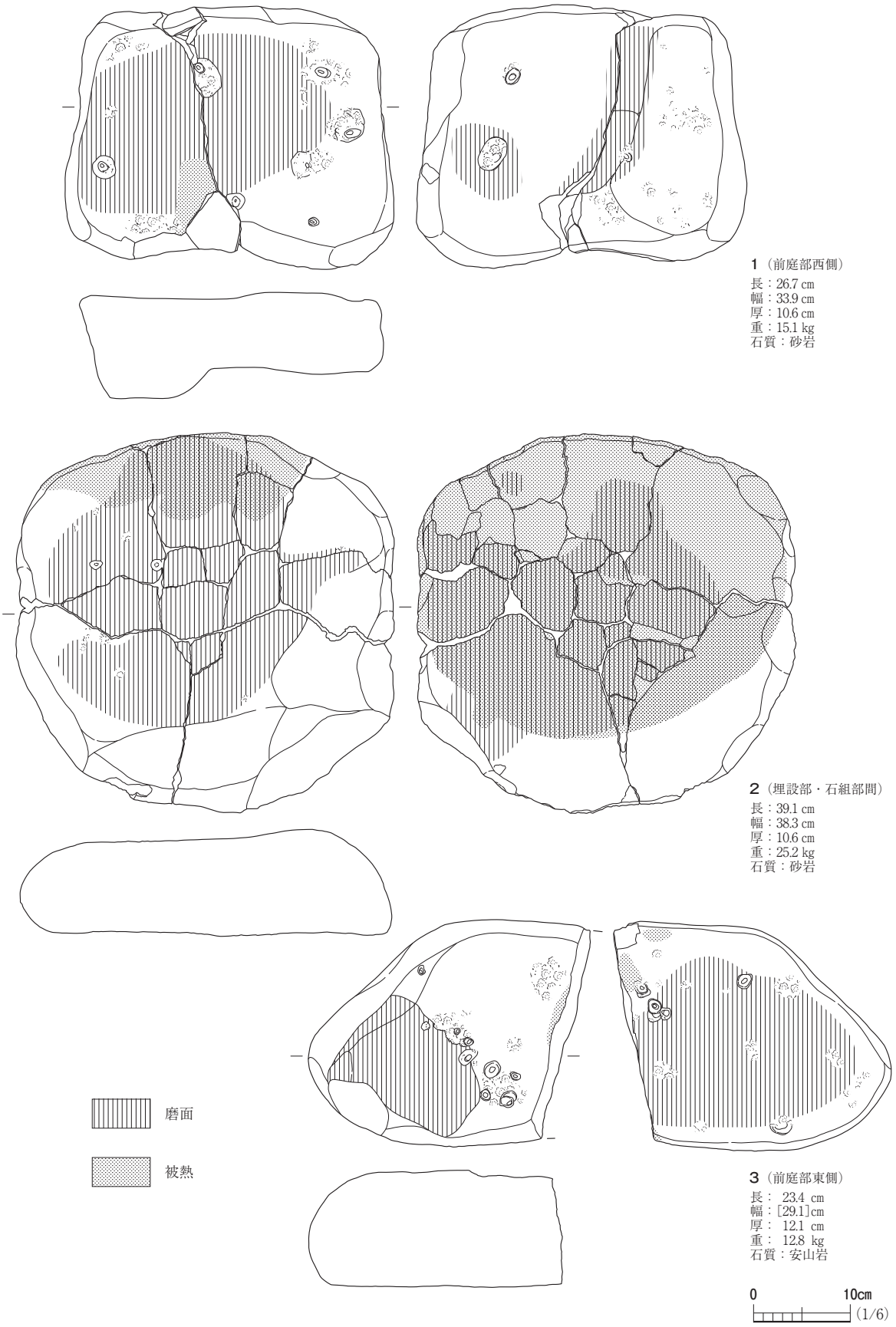


図９　２号住居跡出土遺物（２）

図９－１～３は石皿である。いずれも新炉の構築材に転用されていた。１は前庭部西側の立石，２は土器埋設部と石組部の境の石，３は前庭部東側の立石である。１・２は砂岩，３は安山岩の板状礫を素材としており両面を磨面としている。１・３は円錐状のくぼみと敲打痕が複数認められ，３では図上表面（土器埋設部側）の上部と，裏面（石組部側）の大半に被熱痕が認められる。

ま と め

本遺構は，丘陵斜面に構築された小型の住居跡である。床面の中央付近で重複する５号土坑を埋めて，２時期の炉跡が構築されていた。新しい段階の炉跡は複式炉で，前庭部が失われる直前の新しい様相を示している。

遺構の時期は，複式炉の埋設土器の形態的特徴から縄文時代中期末葉と考えられる。　（笠　井）

第３節　土　坑

土坑は５基検出され，いずれも縄文時代に属する遺構と考えている。土坑の分布は丘陵頂部から南側の斜面部中位にかけての比較的狭い範囲にまとまっている。

１号土坑　ＳＫ１（図10・11，写真13・21）

本遺構は調査区の北側，Ｈ５グリッドに位置する。遺構の一部は調査区外へと広がっており，今回の調査では常磐自動車道の工区内のみに限られる。遺構検出面はＬⅣ上面である。遺構の西方約２ｍに２号土坑が位置する。

本遺構は，東側が調査区外へと延びるため正確な規模や形状を把握できないが，現状で楕円形を呈する。現状の上端で長軸遺存長135㎝，短軸長95㎝を測る。遺構の検出面からの最深は約40㎝を測る。底面は中央部分がゆるやかにくぼみ，壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺構内堆積土は２層に分けた。レンズ状に堆積しており，いずれも自然堆積土と考える。

縄文土器片が５点出土し，そのうち１点を図化した。図11－１は，倒卵文状の沈線区画に縄文を施したものである。

本遺構は，後述する２号土坑と立地や堆積土が類似することから，縄文時代後期前葉頃の所産であると考える。土坑の機能については不明である。　（西　澤）

２号土坑　ＳＫ２（図10・11，写真13・21）

本遺構は調査区の北側，Ｇ５グリッドに位置し，遺構検出面はＬⅣ上面である。遺構の北側は樹木による撹乱を受けている。東方約２ｍに１号土坑が位置する。

本遺構は，北側に撹乱を受けているため正確な規模や形状を把握できないが，現状で楕円形を呈する。現状の上端で長軸長125㎝，短軸長120㎝を測る。遺構の検出面からの最深は約45㎝である。底面はほぼ水平で，周壁もほぼ垂直に立ち上がる。

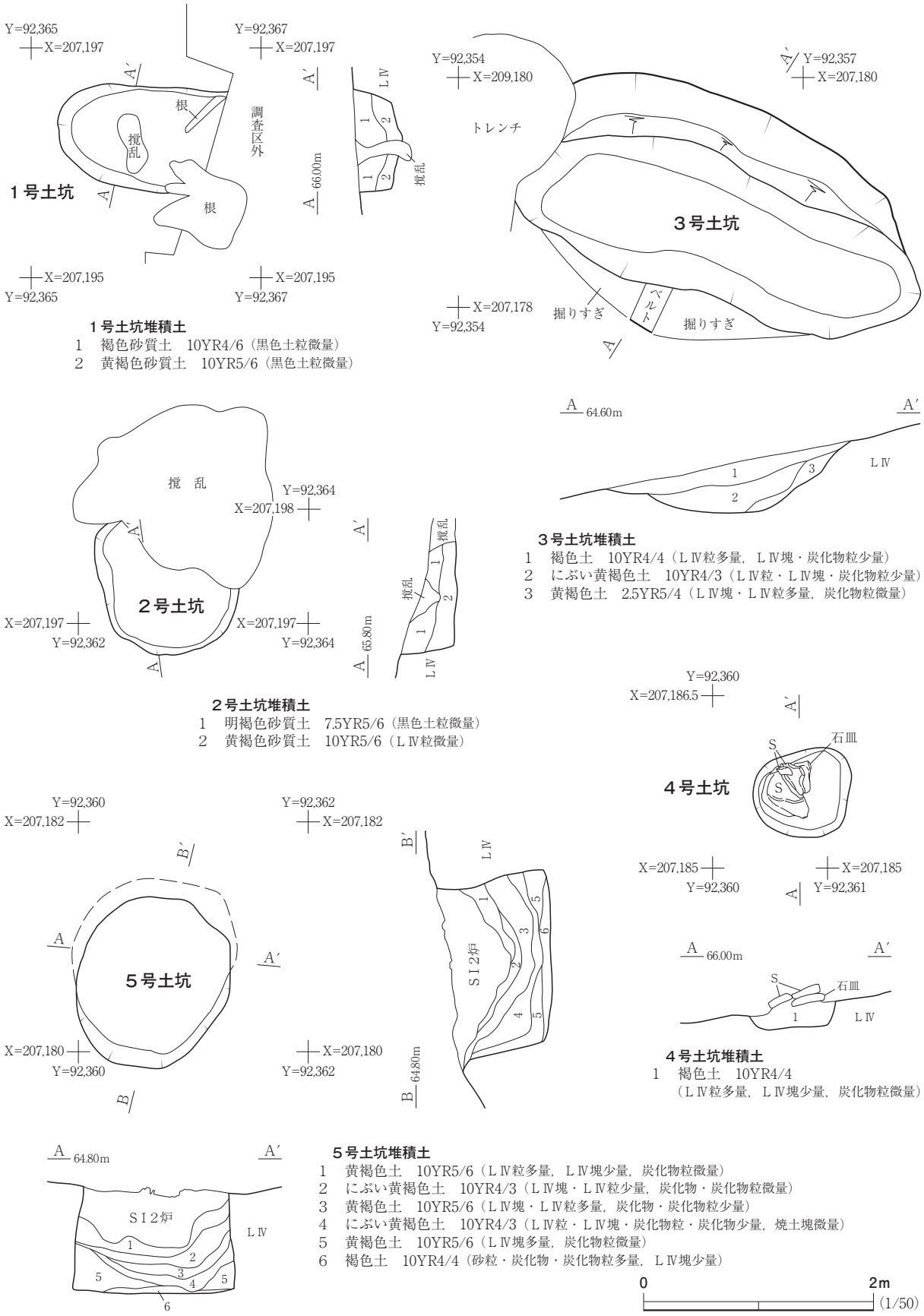

Y=92,365
X=207,197
Y=92,367
X=207,197
A′
根
調査区外
撹乱
１号土坑
A
根
A′
L Ⅳ
1
2
1
2
撹乱
A
66.00m
X=207,195
Y=92,365
X=207,195
Y=92,367
１号土坑堆積土
1　褐色砂質土　10YR4/6（黒色土粒微量）
2　黄褐色砂質土　10YR5/6（黒色土粒微量）
Y=92,354
X=209,180
トレンチ
A′
Y=92,357
X=207,180
３号土坑
X=207,178
Y=92,354
掘りすぎ
ベルト
掘りすぎ
A
A
64.60m
A′
L Ⅳ
1
3
2
３号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/4（ＬⅣ粒多量，ＬⅣ塊・炭化物粒少量）
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3（ＬⅣ粒・ＬⅣ塊・炭化物粒少量）
3　黄褐色土　2.5YR5/4（ＬⅣ塊・ＬⅣ粒多量，炭化物粒微量）
撹　乱
Y=92,364
X=207,198
A′
２号土坑
X=207,197
Y=92,362
X=207,197
Y=92,364
A
A′
撹乱
1
撹乱
2
1
A
65.80m
L Ⅳ
２号土坑堆積土
1　明褐色砂質土　7.5YR5/6（黒色土粒微量）
2　黄褐色砂質土　10YR5/6（ＬⅣ粒微量）
Y=92,360
X=207,186.5
A′
S
石皿
４号土坑
S
X=207,185
Y=92,360
X=207,185
Y=92,361
A
A
66.00m
A′
S
石皿
1
L Ⅳ
４号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/4
（ＬⅣ粒多量，ＬⅣ塊少量，炭化物粒微量）
Y=92,360
X=207,182
Y=92,362
X=207,182
B′
A
A′
５号土坑
X=207,180
Y=92,360
X=207,180
Y=92,362
B
B′
L Ⅳ
1
5
3
6
ＳＩ２炉
2
4
5
B
64.80m
A
64.80m
A′
ＳＩ２炉
L Ⅳ
1
2
5
3
4
5
6
５号土坑堆積土
1　黄褐色土　10YR5/6（ＬⅣ粒多量，ＬⅣ塊少量，炭化物粒微量）
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3（ＬⅣ塊・ＬⅣ粒少量，炭化物・炭化物粒微量）
3　黄褐色土　10YR5/6（ＬⅣ塊・ＬⅣ粒多量，炭化物・炭化物粒少量）
4　にぶい黄褐色土　10YR4/3（ＬⅣ粒・ＬⅣ塊・炭化物粒・炭化物少量，焼土塊微量）
5　黄褐色土　10YR5/6（ＬⅣ塊多量，炭化物粒微量）
6　褐色土　10YR4/4（砂粒・炭化物・炭化物粒多量，ＬⅣ塊少量）
0
2m
(1/50)

図10　１～５号土坑

遺構内堆積土は２層に分けた。２層とも，斜面上方からの流れ込みの様相を呈する。人為的な様相はうかがえず，自然に堆積したものと考える。

本遺構からは縄文土器片１点と石器１点がℓ２より出土した。図11－２は，比較的細い沈線で集合沈線を施している。同図９は，頁岩製の二次加工のある剝片である。石材の色調は灰白色であり，本地域でよくみられるものより白みがかっている。縁辺から粗い調整剝離を施し，それが両面に観察できる。掻器もしくは石鏃の未成品の可能性が考えられる。

本遺構は縄文時代後期前葉頃の所産であると考える。土坑の機能については不明である。（西　澤）

３号土坑　ＳＫ３（図10・12，写真14・21）

本遺構は調査区中央東側のＥ９，Ｆ９グリッドに位置し，丘陵の南側斜面の中位に立地する。遺構検出面はＬⅣ上面で褐色土の楕円形範囲を検出した。本遺構の北東側に隣接して２号住居跡および５号土坑が所在する。重複する遺構はない。

平面形は不整楕円形をしており，斜面に平行するように東西方向に長軸をとる。上端遺存値で長軸長360㎝，短軸長215㎝，遺構検出面からの深さは61㎝を測る。底面はＬⅣに形成され，船底形をしている。周壁は，斜面下方にあたる南側はほとんど遺存していない。北側については緩やかに立ち上がる。

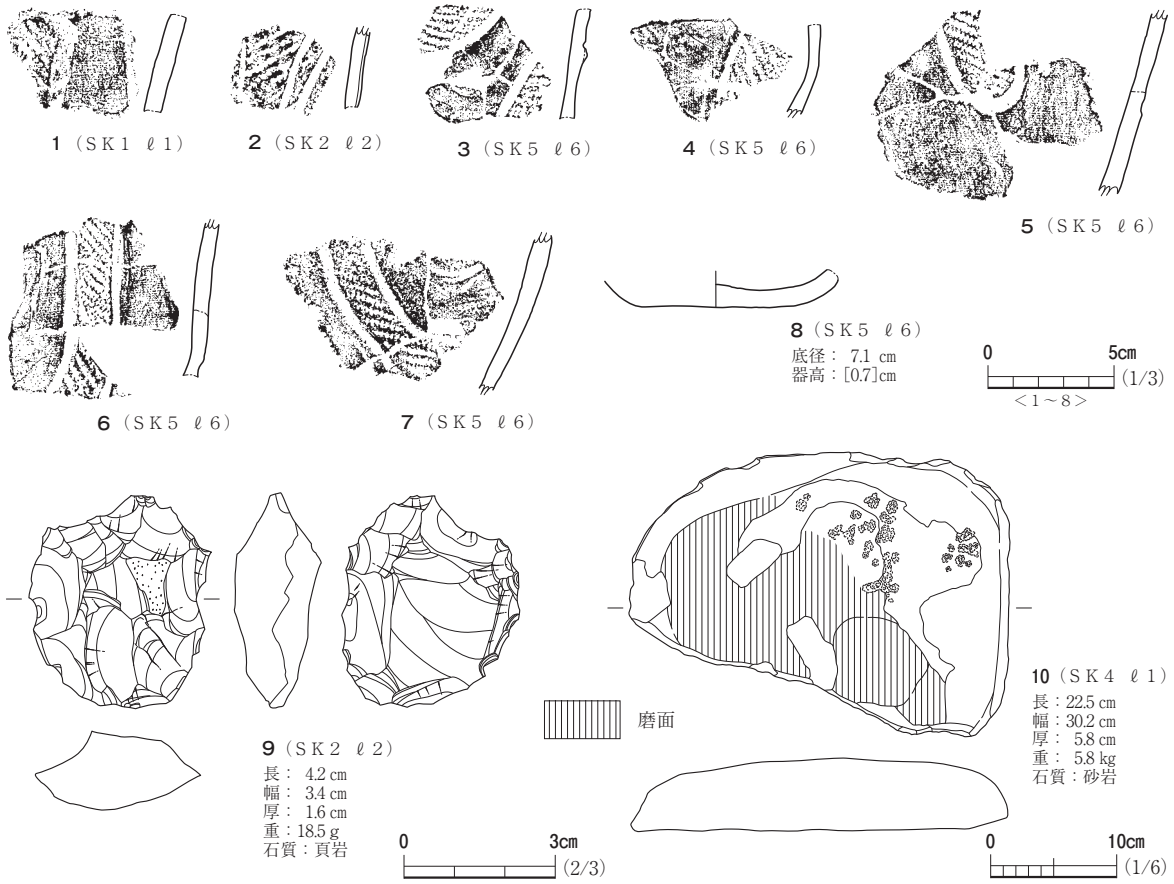


図11　１・２・４・５号土坑出土遺物

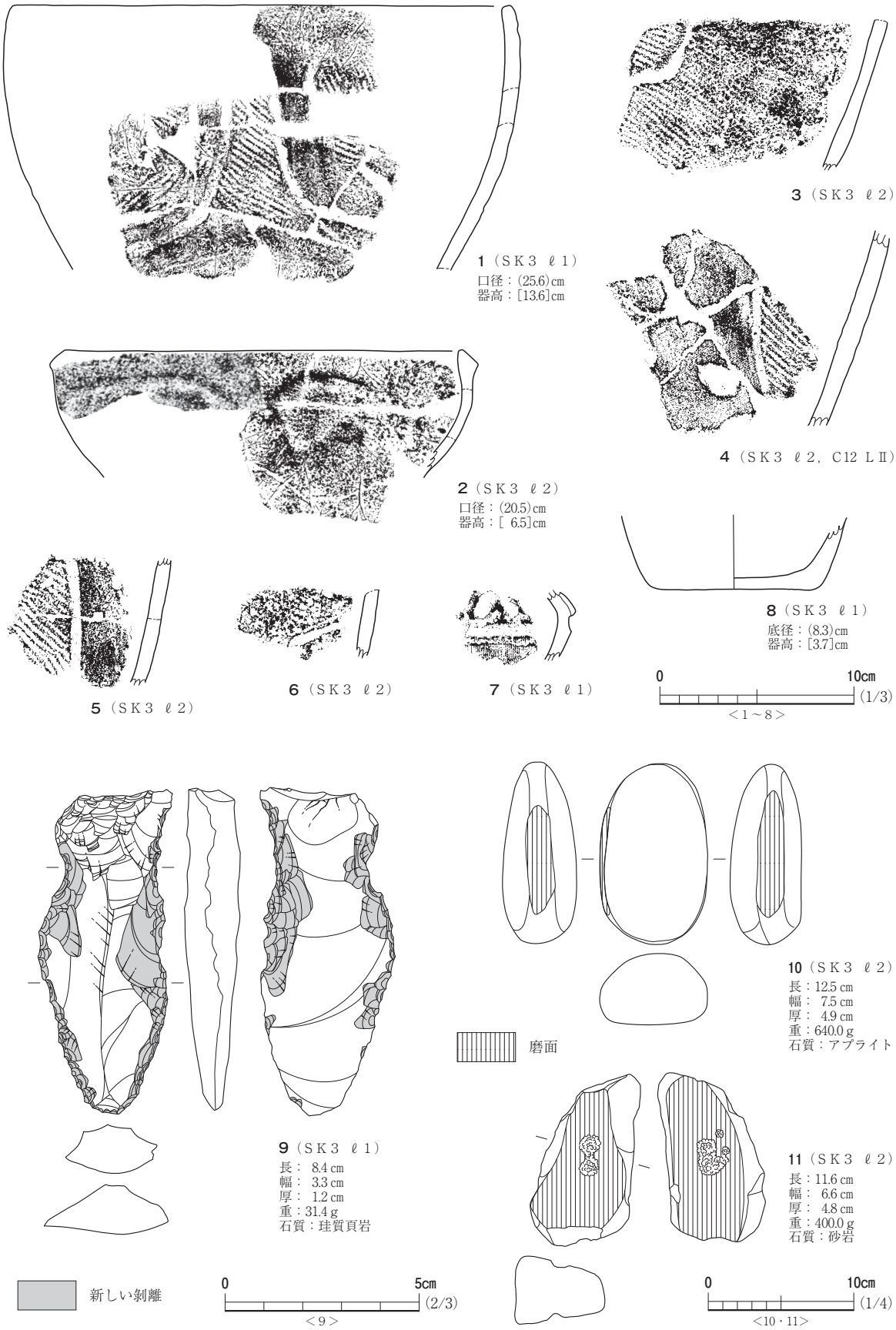


図12　３号土坑出土遺物

遺構内堆積土は３層に分けられた。いずれの層も斜面上方からの流れ込みの状況を示すことから自然堆積した流入土と判断した。

本遺構からは縄文土器片198点，石器３点が出土した。これらのうち，特徴的な土器８点と石器３点を図示した。図12－１は深鉢形土器の口縁部から胴上部にかけての資料である。内湾して立ち上がる器形で，口唇部は平坦に面取りされている。口縁部直下は幅の狭い無文帯で，その下に平行沈線で「Ｕ」字状のモチーフが描かれ，文様モチーフの外側に単節の充填縄文が施されている。２は鉢形土器の口縁部から胴上部にかけての資料である。内湾して立ち上がる器形で，口唇部は外削ぎ状をしている。口縁部直下に断面三角形の隆帯で「Ｃ」字状文や渦巻き文の一部と推定される弧状のモチーフが表現されている。３～６は深鉢形土器の胴部資料である。３は縄文原体を縦位に回転させて単節縄文を施している。４・５は沈線で区画された縄文帯で垂下した文様が描かれている。６は斜位の沈線区画内に単節の充填縄文が認められる。７は浅鉢形土器の口縁部近くの資料とみられ，強く内湾する器形である。横方向の区画沈線とスリット状の縦位沈線が認められる。８は底部資料で内湾気味に立ち上がる器形で，底部下端は角が丸い。９は石匙である。後期旧石器時代の石刃技法による縦長剝片を転用したと考えられる資料である。つまみ直下から先端にかけての縁辺部に両面から新しい調整剝離を加え，刃部および括れ部を形成している。10・11は磨石である。10はアプライトの細長い円礫の側面に磨面が認められる。11は砂岩の亜角礫の２面に磨面が認められ，中央に敲打によるくぼみが形成されている。

本遺構は不整楕円形をした大型の土坑である。性格は不明であるが，比較的多くの土器片が出土した。遺構の時期は，出土した土器が大木10式に比定されることから，縄文時代中期末葉の所産と考えられる。

（笠　井）

４号土坑　ＳＫ４（図10・11，写真14）

本遺構は調査区中央東側のＧ７グリッドに位置し，丘陵の南側斜面の上位に立地する。遺構検出面はＬⅣ上面で，砂岩の板状礫とその周囲に褐色土の楕円形範囲を検出した。重複する遺構はないが，遺構の上部はスギの根株による撹乱を受け大きく破壊されていた。

平面形は長軸長と短軸長の差が少ない不整楕円形をしており，東西方向に長軸をとる。上端遺存値で長軸長83㎝，短軸長73㎝，遺構検出面からの深さは22㎝を測る。底面はＬⅣに形成され，ほぼ平坦かつ水平である。周壁は急角度で立ち上がる。

遺構内堆積土は１層のみである。ＬⅣ粒を多量に混在する褐色土で，その性状から人為的な埋土と判断した。

本遺構の上部には，長さ50㎝に達する砂岩の板状礫が置かれており，その下からは図11－10の石皿が出土した。10は砂岩の板状礫の一面を磨面とするもので，磨面の縁辺部に敲打痕が認められる。

本遺構は上部に板状礫が置かれた不整楕円形の土坑である。性格は不明である。遺構の時期は土

器が出土していないため断定できないが，堆積土の特徴や出土した石皿の存在から，縄文時代の所産と判断した。（笠　井）

５号土坑　ＳＫ５（図10・11，写真15・21）

本遺構は調査区中央東側のＧ８・９グリッドに位置し，丘陵の南側斜面の上位に立地する。遺構検出面は２号住居跡の床面にあたるＬⅣ上面である。２号住居跡と重複し，本遺構が古い。本遺構の上部は２号住居跡の炉跡掘形として利用されていた。

平面形は南北方向に長軸をとる不整楕円形をしており，上端よりも下端が広いフラスコ状の土坑である。遺構の規模は上端で長軸長148㎝，短軸長128㎝，下端で長軸長149㎝，短軸長134㎝，遺構検出面からの深さは99㎝を測る。底面はＬⅣに形成され，ほぼ平坦かつ水平である。周壁は南から東側にかけては急角度で立ち上がり，北から西側にかけてはオーバーハングしている。

遺構内堆積土は６層に分かれた。ℓ１～５はＬⅣ塊・ＬⅣ粒・炭化物などを不均一に包含する黄褐色土とにぶい黄褐色土の互層で，その性状から人為的埋土と判断した。ℓ６は底面直上に平坦に堆積する褐色土で，炭化物や土器片を多く包含することから，ℓ１～５同様に人為的埋め土と判断した。

本遺構から縄文土器片69点が出土した。これらのうち，特徴的な土器６点を図示した。図11－３～７は深鉢形土器の胴部資料である。３は断面三角形の隆帯と沈線，４～７は沈線区画の単節縄文帯で文様モチーフを描いている。３・４は「Ｃ」字状か渦巻状のモチーフの一部と推定される弧状文，５はステッキ状文の下端部分，６・７は「Ｕ」字状文の一部とみられる。８は底部資料である。無文で内面側中央が盛り上がり，底部下端が丸くなっている。８については断定できないが，文様の特徴から３～７については縄文時代中期末葉の大木10式に比定される。

本遺構は，貯蔵穴と考えられる平面が不整楕円形をしたフラスコ状土坑である。２号住居跡の炉跡は本遺構の上部を掘形として再利用していた。遺構の時期は出土土器の年代観から，縄文時代中期末葉と考えられる。（笠　井）

第４節　その他の遺構

本節では，住居跡と土坑以外の遺構を取り上げる。いずれも，遺跡の所在する丘陵の頂上付近にそれぞれ近接して形成される。

１号性格不明遺構　ＳＸ１（図13～15，写真17・18・22）

本遺構はＦ６・７，Ｇ６・７グリッドにあり，丘陵の頂部に位置する。遺構の検出面はＬⅣ上面で，10～30㎝大の礫の集石範囲として検出した。

遺構の東側は大きく撹乱を受けており，遺構の遺存する広がりは，東西320㎝×南北200㎝の範

囲に収まる。集石は大きく西側と南側，中央と東側の４つに分けることができ，西側は160㎝×60㎝，南側は170㎝×50㎝，中央は120㎝×110㎝の範囲に礫が集中して確認された。東側に広がる石は，撹乱によって元々の位置を留めていない。集石は径10～30㎝程度の砂岩質の川原石が多用されており，一部には縄文の石皿などを利用したものも見受けられる。

これらの集石の下からは，中央が円形を呈し，その周囲に「コ」字状に巡る溝状を呈する掘形を確認した。西側と南側の集石の下で確認できたほか，明確な集石状況が認められなかった東側でも認めることができた。掘形はそれぞれ不正形な溝状を呈し，現状の残存上端で西側は220㎝×70～

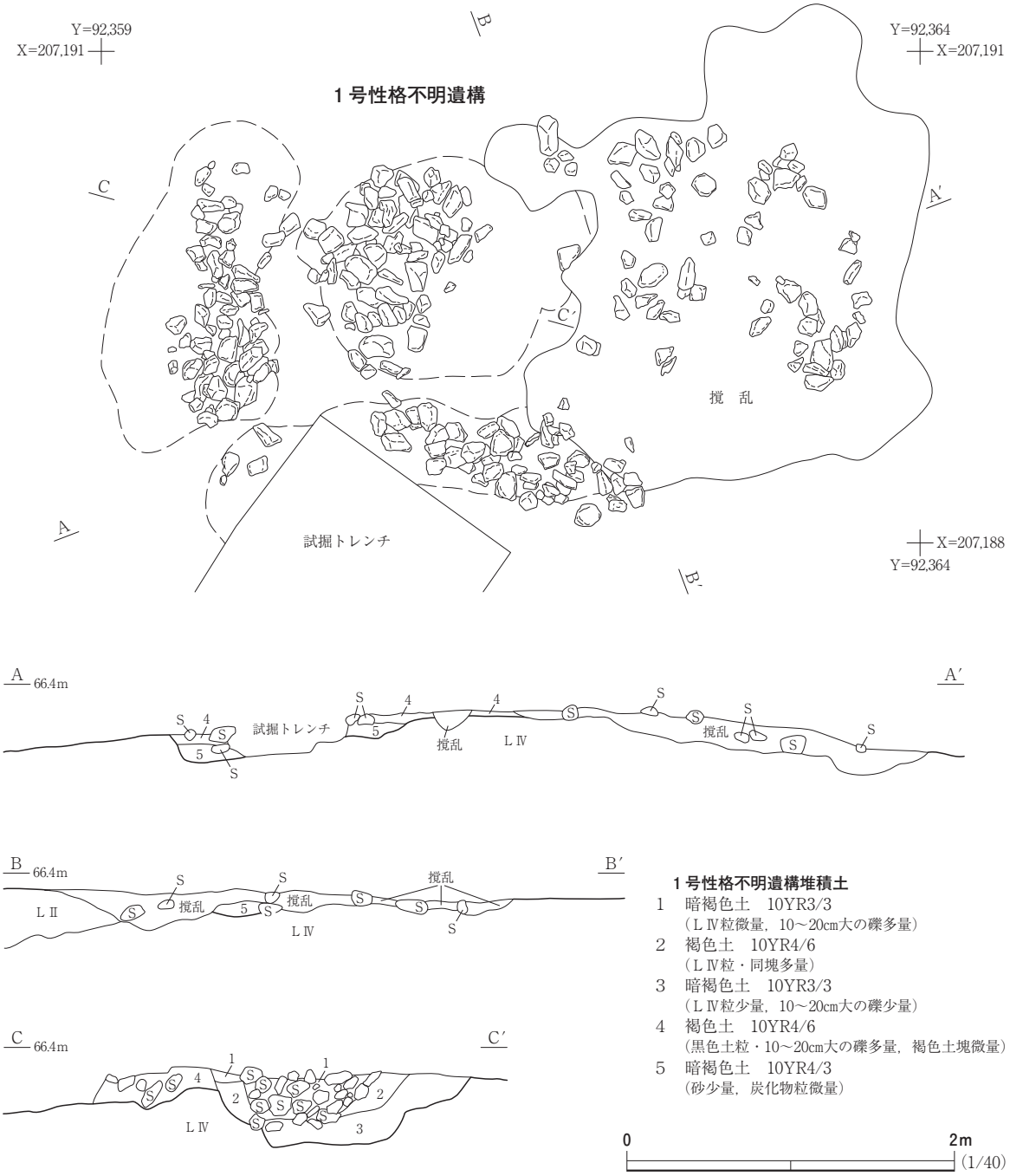


図13　１号性格不明遺構（１）

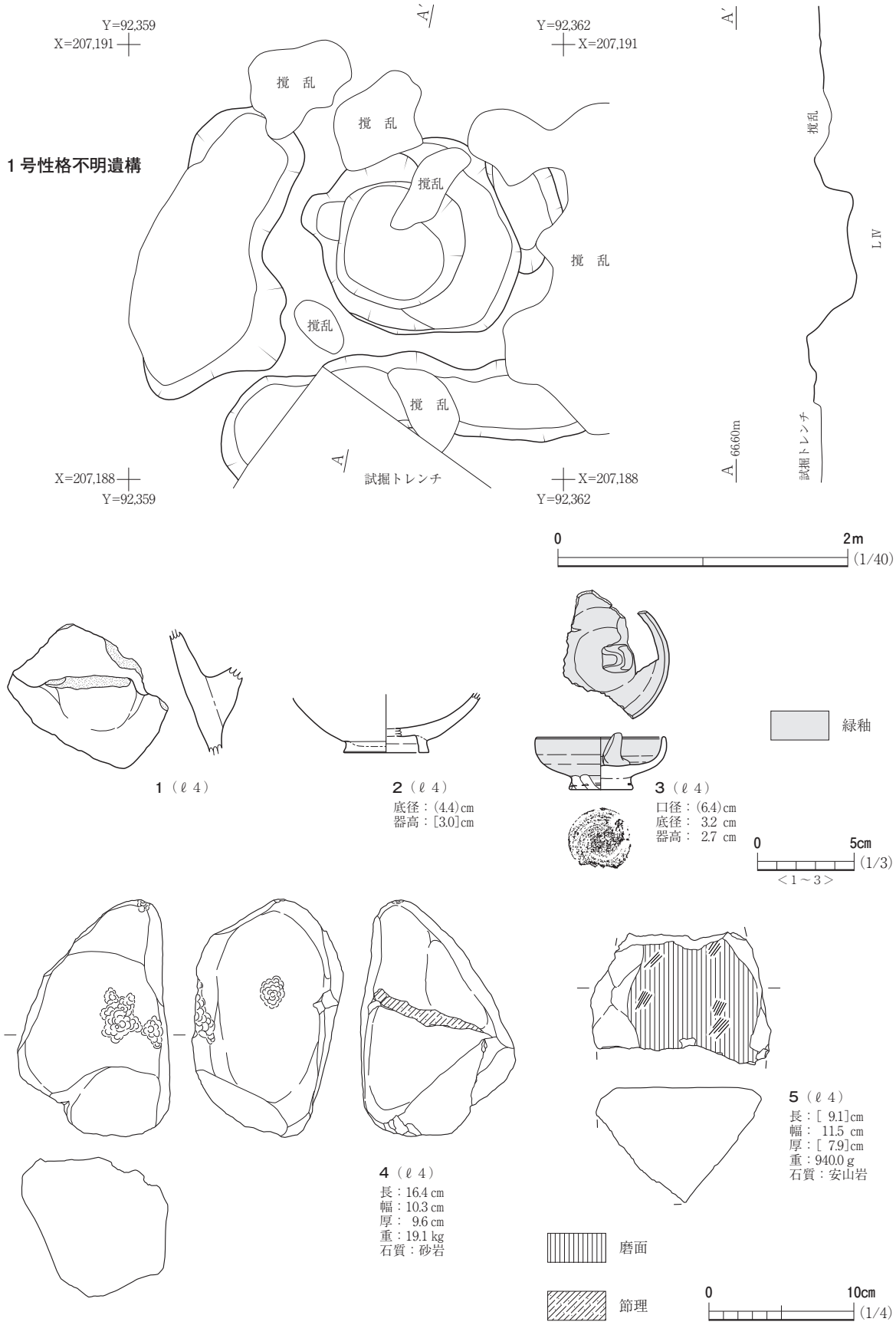


図14　１号性格不明遺構（２），出土遺物（１）

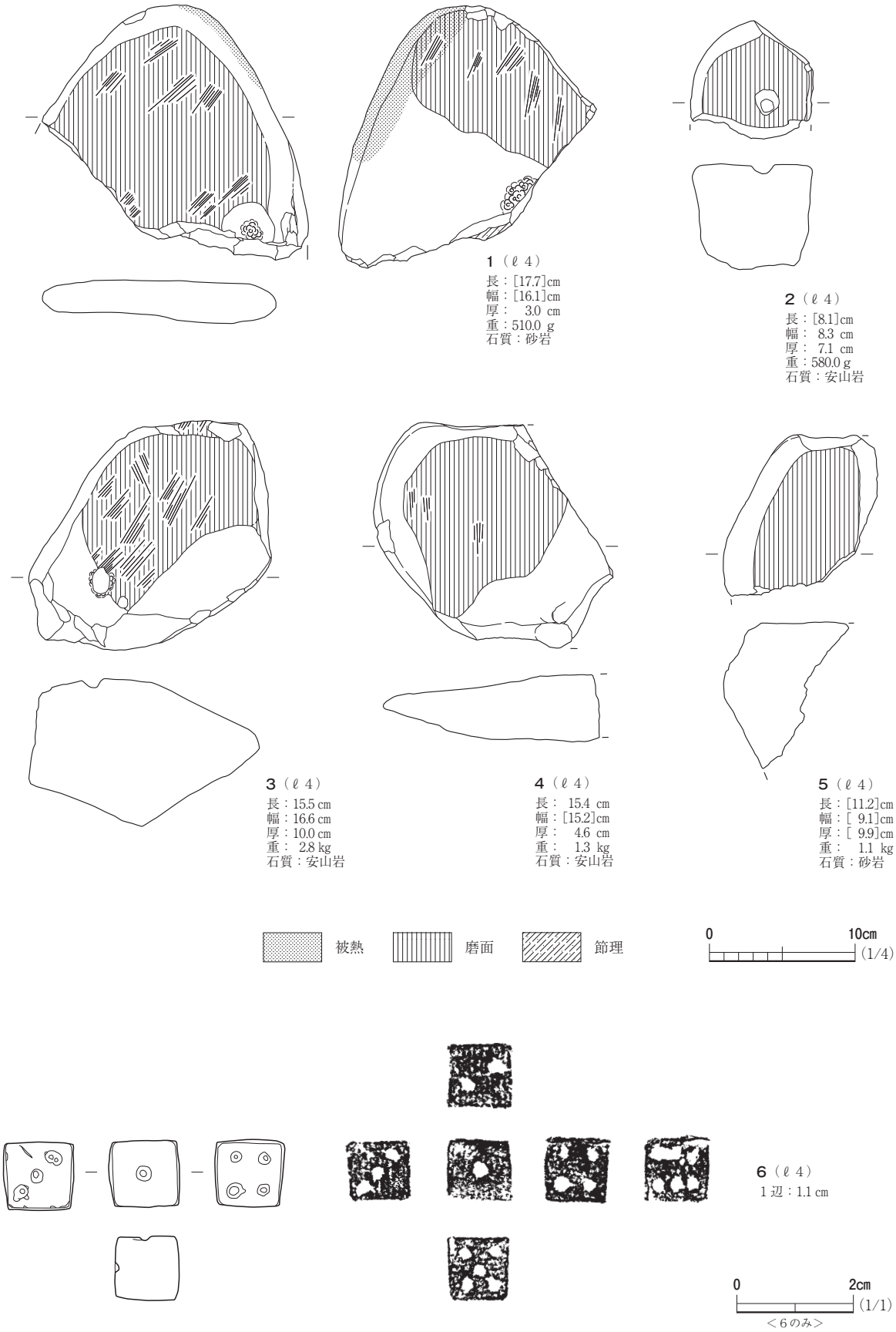


図15　１号性格不明遺構出土遺物（２）

110㎝，南側は240㎝×60㎝，東側は80㎝×40㎝程度を測る。掘形の底面は一定せず，最大で比高差45㎝を測る。

中央の集石の下からは，130～150㎝の不正形の土坑状の掘形を検出した。底面は不正形な隅丸方形を呈し，１辺が70㎝程度を測る。

掘形内堆積土は５層に分けた。ℓ１～３は，中央の土坑状の落ち込みに堆積する層である。いずれも人為堆積と考えられ，ℓ１を埋める際には多量の石を投棄することで，中央の集石が形成されている。ℓ４とℓ５は周囲の溝状の掘形に堆積する層である。また，西側の溝状掘形のℓ４を掘り込んで中央の土坑状の落ち込みが形成されていたことが判明した。

本遺構からは，縄文土器片１点，陶磁器片８点，石器９点，石製のサイコロ１点が出土した。いずれもℓ４からの出土である。器形の判明する縄文土器１点，陶磁器２点，石製のサイコロ１点，石器７点を図化した。

図14－１は，壺形の縄文土器の取手部分である。摩滅し文様などは確認できないが，その形状から縄文時代中期末葉～後期前葉の取手付き壺であると考える。本遺構に伴うものではなく，周囲から流れ込んできたものと考える。

図14－２・３は近世陶磁器である。２は高台付の椀である。高台部を除き，淡緑色の釉が全面に施される。焼成は堅密で，内面の釉薬にごくわずかな発泡が確認できる。３は中心に芯立てをもつ灯明皿である。焼成は堅密で，光沢のにぶい濃緑色の釉薬が，芯立てと高台部の一部を除き全面に施される。芯立ての部分には緑がかった灰色の釉薬が別に施される。底部には回転糸切り痕が残る。高台部の外面には，一度切り離しに失敗した痕跡が残り，部分的に指ナデで修正している。

図14－４は凹石，図14－５・図15－１～５は石皿の一部である。石皿は，扁平な面を磨面としている。１は両面に磨痕があり，敲打痕も認められる。また，側面には熱を受けている。２・３には磨痕上に僅かな凹みが認められる。

図15－６は石製のサイコロである。ほぼ正六面体を呈し，各面を研磨しながら目の部分を凹ませる。目は「天一地六」で，全て対面の目の和が７になるよう配置されている。

本遺構は，出土した遺物の特徴から近世の遺構であると考える。明治初頭の地籍図や丈量帳からは，本遺構周辺は「山林」との記載しか残っておらず，近世末期にはすでに遺棄されていた可能性がある。詳細な構造は不明であるが，近年まで祠が本遺構の周辺に置かれており，礫を敷設した上方に何らかの祠のような施設が存在していたのではないかと推測している。（西　澤）

１号溝跡　ＳＤ１（図16，写真16）

本遺構はＧ６グリッドからＨ６グリッドへ，北東方向へ向かって延びる溝跡である。丘陵頂部に近いやや平坦な面に位置する。遺構はＬⅢ上面で検出したが，その東側は調査区外まで延びており，調査区際の断面で確認すると，ＬⅡ上面からの掘り込みが確認できた。

検出面では一条の溝として確認できるが，堆積土を取り除くと溝の底部に規則的に並ぶくぼみが

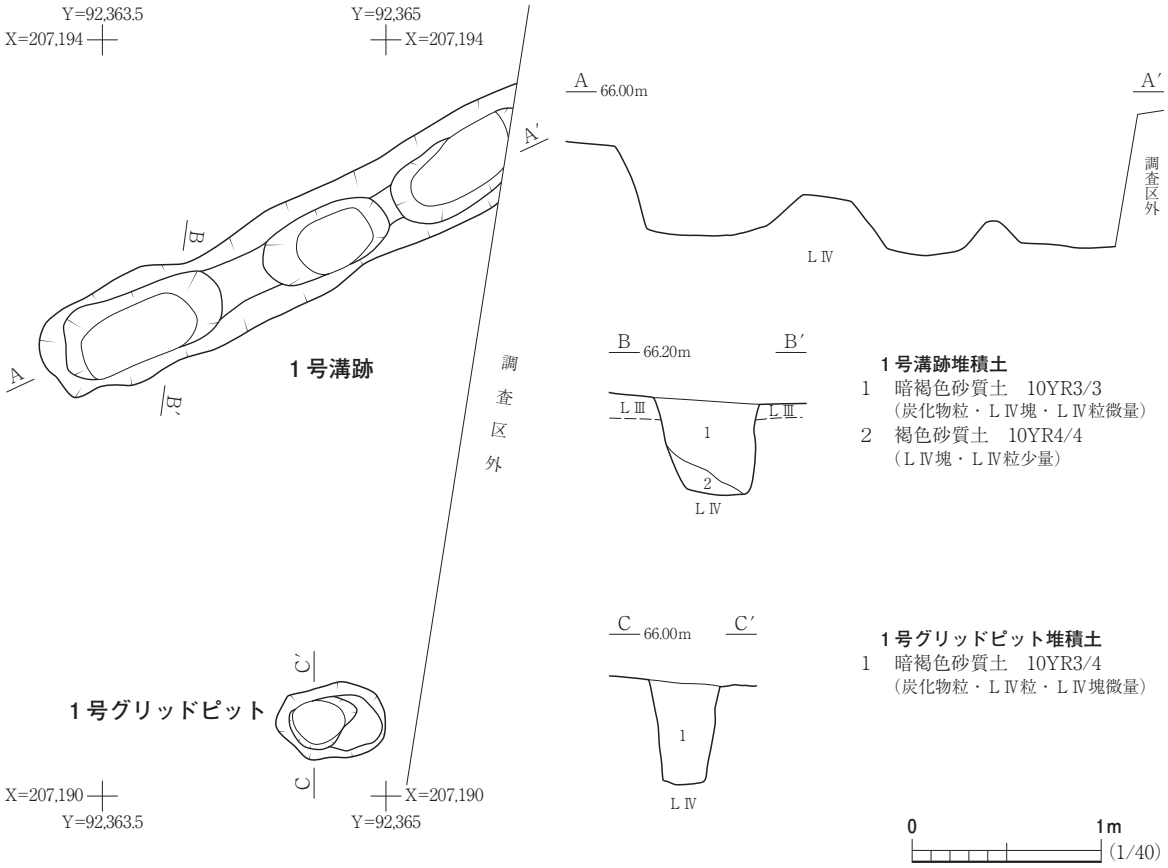


図16　１号溝跡，１号グリッドピット

認められた。布掘り状の柱列跡の可能性があるが，明確に柱跡とする根拠が得られなかったため，本報告では溝跡として報告する。

遺構の規模は，上端で長さ290㎝，幅55㎝を測る。溝の中段は，幅35㎝程度を測る。最深部はそれぞれ長楕円形を呈し，３つのくぼみとして認識された。それぞれの窪みは下端の規模で，西から65㎝×30㎝，40㎝×30㎝，60㎝×30㎝を測る。検出したＬⅢ上面からの深さは，中段で25～35㎝程度，最深部で45㎝程度を測る。最深部はほぼ水平で，壁はほぼ垂直に立ち上がる。

堆積土は２層に分けた。２層とも砂を多量に含む。いずれも人為堆積土と判断した。ℓ１から縄文土器片４点が出土したものの，細片で図化していない。

前述のとおり本遺構は，底面の形状から布掘りの柱列跡の可能性があるも，具体的な柱跡などは確認することができなかった。しかし，その堆積土は後述する１号グリッドピットと類似することから，対となる可能性は残る。本遺構の所属する時期に関しては，ＬⅡ上面からの掘り込みが確認できることから，平安時代末を上限として，それ以降の所産であると考える。　（西　澤）

１号グリッドピット　ＧＰ１（図16，写真16）

本遺構はＧ６グリッドに位置し，丘陵頂部周辺の平坦面に構築されている。検出面はＬⅣ上面である。

遺構は上端で楕円形，下端で円形を呈する。遺構の規模は，上端で60㎝×40㎝，底面で径25㎝を測る。検出面からの深さは55㎝を測る。堆積土は単層で，暗褐色の砂質土である。遺構から遺物は出土しなかった。

本遺構は調査区際に位置しており，対となる柱穴が調査区外に存在している可能性がある。また，堆積土が１号溝跡のℓ１と非常に類似しており，また最深部の高さもほぼ同一であるなど，１号溝跡と一連のものとの可能性がある。本遺構の所属時期は，１号溝跡と同等の時期であると考え，平安時代末を上限として，それ以降の所産であると考える。（西　澤）

第５節　遺構外出土遺物

今回の調査では，ほぼ調査区全域より遺物の出土を確認した。出土遺物のうち，主体となるものは縄文時代中期末頃の縄文土器である。出土遺物は検出した遺構付近に集中しており，Ｇ５・７・８，Ｃ11グリッドからまとまった出土数が認められる。Ｇ７・８グリッド付近からは２号住居跡をはじめ縄文時代の遺構を検出しており，さらに関連遺構が調査区東側へ続いている可能性もある。調査区内から出土した遺物は，丘陵頂上部近くの緩斜面を利用して営まれた縄文時代中期末頃の集落に起因するものとみられ，そこから斜面下方へ流れ込み丘陵全体から出土するものと考えられる。

また，縄文時代の遺物は丘陵頂部のＧ５グリッド付近にも集中していることから，当時の集落範囲はさらに広がるものとみられる。頂部の平坦面からは１号性格不明遺構をはじめ近世以降の祭祀関連とみられる遺構が検出されたが，１号性格不明遺構には縄文時代の石製品が転用され，周囲にも石製品が散在することから何らかの関連遺構が存在した可能性が考えられる。

Ｃ11グリッド付近からは平安時代の土師器片を主体とする遺物が多数出土しており，旧河川沿いに検出した平安時代の１号住居跡から河川側へ廃棄されたものとみられる。

これら遺構外から出土した遺物のうち，特徴的な縄文土器29点，土師器１点，石器10点，金属製品６点を掲載した。

縄文土器（図17，写真23）

１は縄文時代早期中葉の田戸下層式に比定される資料である。胎土に繊維混和痕は認められず，口唇部は両削ぎ状を呈する。無文地に扁平な棒状工具により横位・縦位の幅広で浅い沈線が施されている。また内面にはベンガラによる赤色塗彩がなされている。

２～４は縄文時代中期中葉の大木８ｂ式に比定される資料である。いずれも深鉢の口縁部資料で，キャリパー形を呈する。断面三角形の隆帯で，横位に展開する渦巻文と楕円文が表現され，楕円文には縄文が施される。

５～15は縄文時代中期末葉の大木10式に比定される資料である。５～８は沈線と縄文で文様が構成される資料である。５は口縁部資料で，直線的に外傾し，口唇部が肥厚する。縦位に施した単

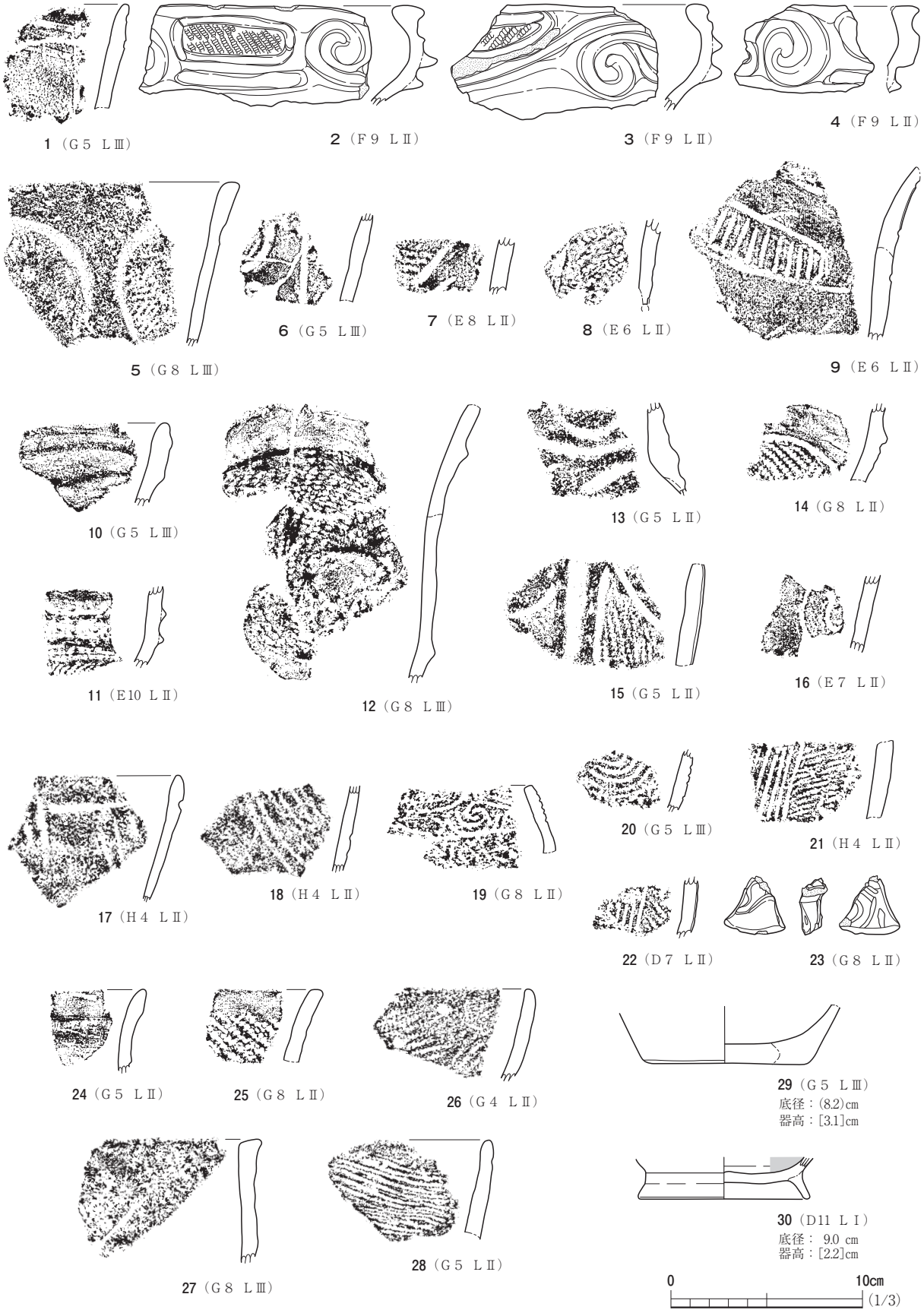


図17　遺構外出土遺物（1）

節文を，太く浅い沈線で区画し，楕円文の一部と考えられるモチーフが描かれている。６～８は胴部資料で，縦位に施した単節縄文を沈線で区画し，「U」字状文やステッキ状文の一部と考えられる垂下する直線的なモチーフや，楕円文の一部と考えられる弧状のモチーフが描かれている。９は沈線のみで文様が構成される資料である。横長の楕円文の内側に縦位の短沈線が連続して施されている。

10は隆帯のみにより文様が構成される口縁部資料である。内湾気味に立ち上がる器形で，口唇部は丸頭状を呈する。断面三角形の低い隆帯で，渦巻文の一部と考えられる弧状モチーフが施される。

11・12は，隆帯と縄文により文様が構成される胴部資料である。11では断面三角形の高めの隆帯が平行して２本横位に走り，隆帯下方には無節の縄文が横位に施されている。12では断面三角形の隆帯と単節縄文で大柄の渦巻き文が表現されている。11については，大木８b式の可能性がある。

13は沈線と隆帯により文様が構成される胴部資料である。断面半円形の低い隆帯と太く浅い沈線で，楕円文か渦巻文の一部と考えられる弧状モチーフが描かれている。14・15は隆帯・沈線・縄文で文様が構成される胴部資料である。14は隆沈線文で弧状のモチーフを描いている。また，モチーフの外側にはベンガラによる赤色塗彩が認められる。15では逆「U」字状文やステッキ状文の一部と考えられる垂下する直線的なモチーフを断面半円形の低い隆帯で表現し，その脇に縄文と沈線により三角形の区画文が施されている。

16～23は，縄文時代後期前葉の綱取Ⅱ式に比定される資料である。16は充填縄文が認められる胴部資料で，平行する弧状の沈線に単節縄文が施されている。17・18は，無文地に太めの沈線で文様が描かれる資料である。17は口縁部資料で，内湾気味に立ち上がり，口唇端部は両削ぎ状である。縦位の短沈線が施されている。18は胴部資料で，集合沈線が斜位に施されている。19～22は，縄文の地文に集合沈線で文様を描いている資料である。19は口縁部資料である。内傾する器形で口唇部は平坦に面取りされている。連弧状のモチーフの頂点に渦巻文が施される。20～22は胴部資料で，20では弧状，21・22では垂下する直線文が認められている。23は突起の一部と考えられる。三角形の板状で，表裏面に沈線で弧状文が施されている。

24～27は，縄文時代中期～後期の所産と考えられる型式を特定できなかった口縁部資料である。24・25は外反する深鉢である。24は無文で口縁端部が肥厚して外面に段を有する。25は外面上端付近が細い無文帯で，その下方に単節縄文が施される。26は内湾気味に立ち上がる器形で，外面に単節縄文が施される。27は直立する器形で，口唇部が平坦に面取りされ，端部が外方へ突出する。当資料は表面の摩滅が顕著で縄文などの施文は不明である。

28は縄文時代晩期の粗製深鉢と考えられる口縁部資料である。波状口縁の頂部付近の資料で，内湾気味に立ち上がり，外面に撚糸文が施されている。

29は縄文土器の底部資料である。全面ナデ調整されている。

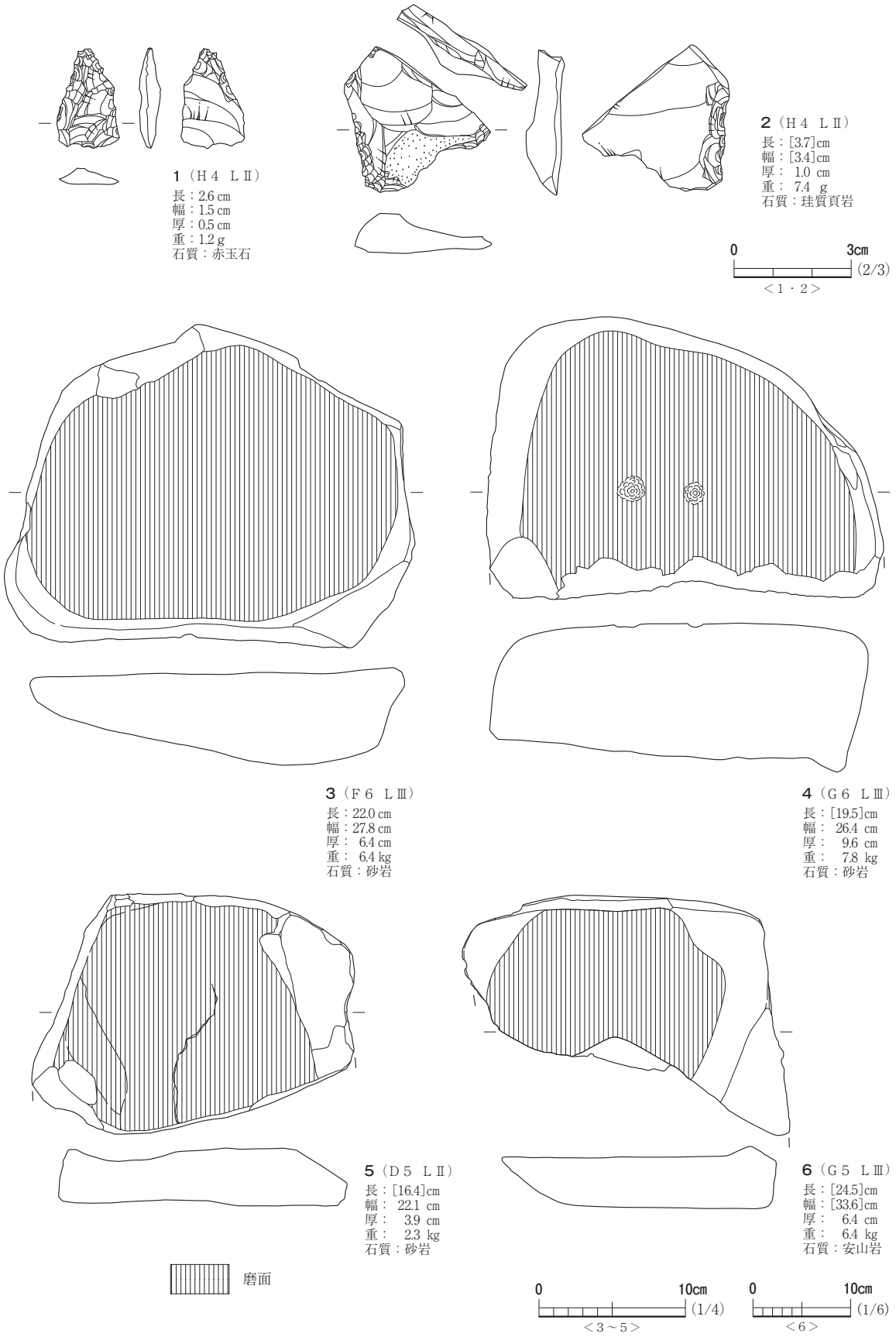


図18　遺構外出土遺物（２）

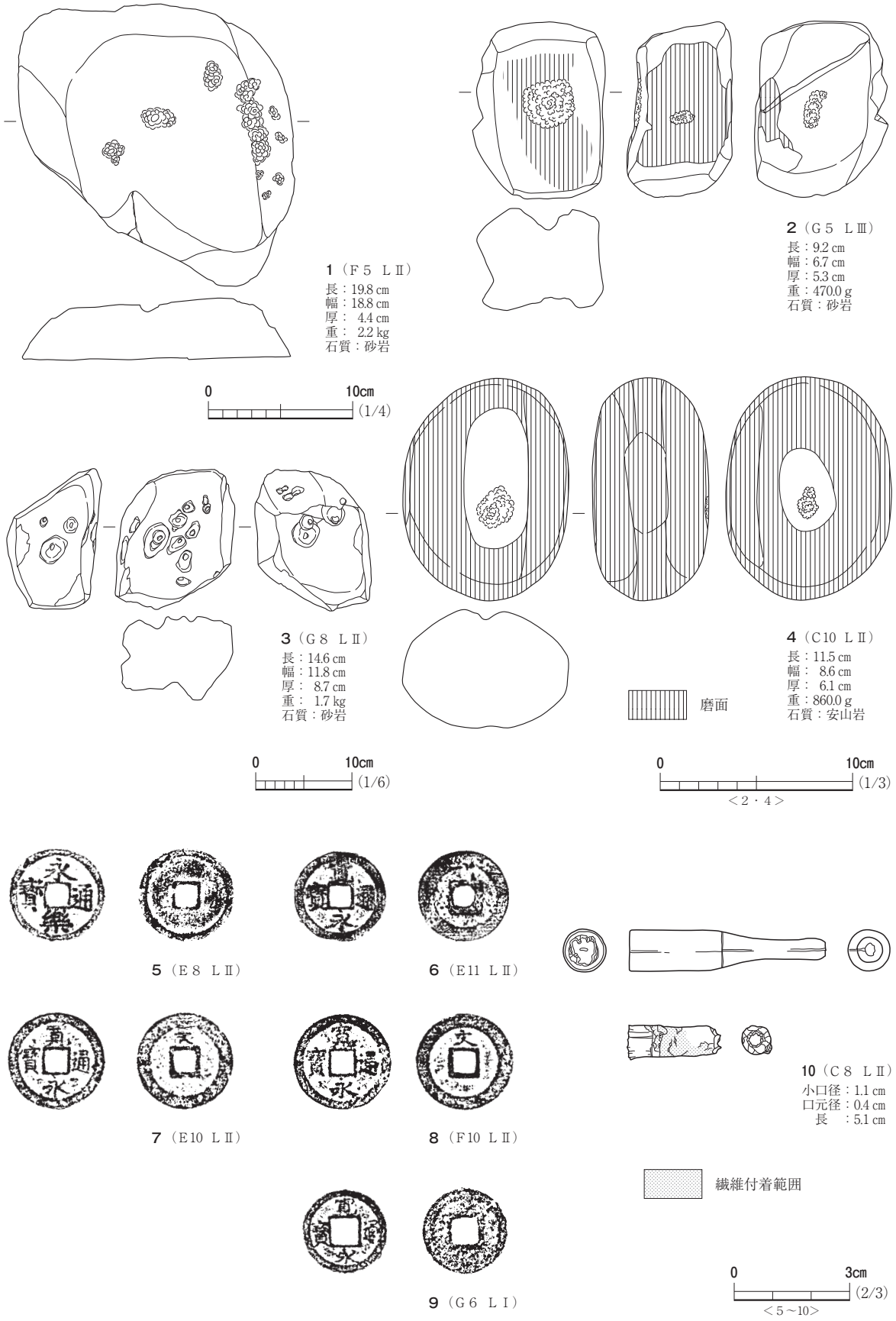


図19　遺構外出土遺物（３）

土 師 器（図17，写真23）

30は高台付杯の底部資料である。ロクロ成形で底面に回転糸切り痕が認められる土師器杯に，低い高台部が取り付けられている。

石　　器（図18・19，写真24）

図18－１は石鏃の未成品と考えられる。偏りのある縦長の五角形をしており，先端付近を中心に両面から押圧剝離が認められるが，基部付近の調整が未熟である。２は二次加工のある剝片である。台形の自然面の残る剝片の一端を中心に調整剝離が施されている。３～６は石皿である。扁平な板状礫の一面を磨面としている。４の磨面中央には，２カ所に敲打痕が認められる。

図19－１～４は凹石である。１では板状礫の平坦な面の中央から縁辺にかけて，２・３では厚みのある亜角礫の３面，４では円礫の平坦な２面に円錐形の凹みが認められる。また２・４では磨痕が認められ，４ではその痕跡がほぼ全面に及んでいる。

金属製品（図19，写真25）

図19－５～９は銅銭である。５は中世に多く流通した永楽通宝，６～９は近世の寛永通宝である。６は面字の特徴から，越後高田で初鋳されたとされる古寛永高田銭と考えられる。７・８は背字が「文」と読めることから，寛文８(1688)年に江戸亀戸で初鋳された新寛永銭である。９は外径が22㎜と小さく穿が大きいことから，宝永５(1708)年に江戸亀戸で初鋳された新寛永四ツ宝銭であろう。10は羅宇煙管の吸口である。口元側と小口側の２枚の青銅板を丸めて溶接している。内側に羅宇の一部が遺存していた。

（笠　井）

第３章　自然科学分析

第１節　出土種子同定

古代の森研究舎

１．試料と方法

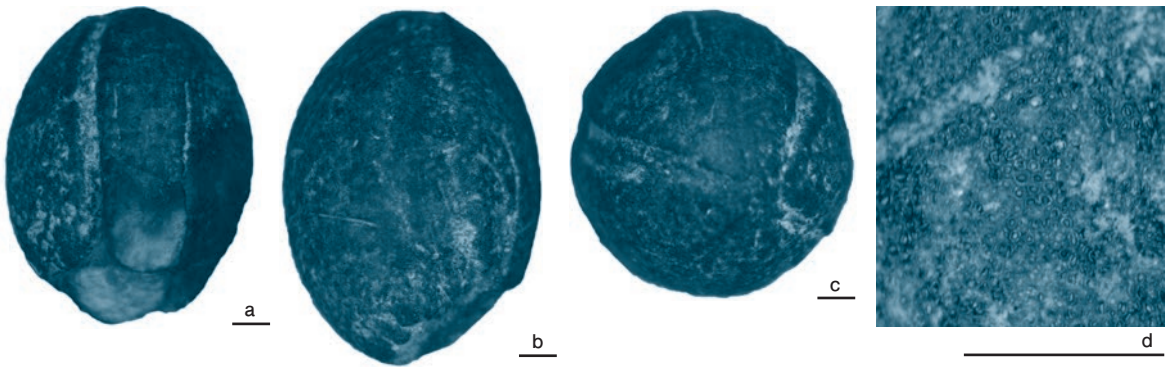
大槻遺跡は相馬郡新地町杉目字大槻の鹿狼山の東麓，立田川の北岸台地上に位置する。本遺跡の平安時代（９世紀頃）の１号住居跡カマド脇の床面に掘られた貯蔵穴Ｐ１から種子が検出されたため同定を行った。種子は双眼実体顕微鏡 Nikon SMZ－10にリング照明装置 HDR61WJ を取り付け，反射光で観察，同定を行った。

２．同定結果と考察

土坑から出土した種子はエゴノキ完形果実82個と半分に割れた果皮４点（２個分）であった。以下に出土した種実の形態記載をおこなう。

エゴノキ（*Styrax japonica* Sieb. et Zucc.）：出土した内果皮の外形は楕円形で高さは８㎜±1.5㎜程度，内果皮の下部を斜めに切った形の楕円形の基部がある。頂部はやや尖り，頂部から基部にかけて細い溝が３本走り，頂部付近のみに短い不明瞭な稜が３本下部に向かって伸びる。内果皮壁はやや厚く固く濃褐色から赤褐色を呈し，表面は不規則な浅い凹凸があり，中央にくぼみがある同じ大きさの細かい網目が全体に密に分布する。

エゴノキは落葉広葉樹林の中低木層構成要素として東北地方に普通に生育している。果実はサポニンを多く含むため石けんや漁労の際に毒として用いることがあるが，住居内に貯蔵しておく例はまれであると考えられる。また，炭化していない種実は，湿潤な環境下以外では保存性が低いため本遺跡で出土した内果皮は混入の可能性が高いと考えられる。



a：基部側の側面観　b：側面観　c：上面観　d：内果皮表面拡大　　スケール：１㎜

図20　出土エゴノキ内果皮の顕微鏡写真

第２節　放射性炭素年代測定

株式会社　加速器分析研究所

１．測定対象試料

大槻遺跡は，福島県相馬郡新地町杉目字大槻に所在する。測定対象試料は，１号住居跡Ｐ１ℓ１出土種子(IAAA－102701～IAAA－102703)，１号住居跡ℓ１出土炭化物(IAAA－102704)，２号住居跡複式炉埋設土器内出土炭化物(IAAA－102705)，２号住居跡複式炉ℓ８の炭化物を含む土(IAAA－102706)，２号住居跡複式炉石組部掘形出土炭化物(IAAA－102707)，５号土坑ℓ６出土炭化物(IAAA－102708)の合計８点である(表１)。１号住居跡は床面近くまで後世の掘削が及んでいる。また，２号住居跡は５号土坑が埋め戻された後に構築されたと捉えられる。なお，試料№５～７は，調査現場で炭化物を視認し，土ごと採取された。このうち試料№６は，炭化物が土と同化して取り出すことが難しいため，後述するように土と合わせて処理を行った。

２．測定の意義

１号住居跡出土試料の測定では，試料№４により住居跡の年代を検討し，試料№１～３で住居跡と種子の年代が符合するかどうか確認する。２号住居跡出土試料の測定では，住居跡の年代を明らかにし，さらに５号土坑出土試料の測定によって，２号住居跡と５号土坑の関連性を確かめる。

３．化学処理工程

（１）種子(試料№１～３)，炭化物(試料№４・５・７・８)の化学処理

① メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

② 酸－アルカリ－酸(AAA：Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA 処理における酸処理では，通常１mol/ℓ(１M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い，0.001M から１M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１M に達した時には「AAA」，１M 未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

③ 試料を燃焼させ，二酸化炭素(CO_2)を発生させる。

④ 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

⑤ 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト(C)を生成させる。

⑥ グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

（２）炭化物を含む土（試料№６）の化学処理

① メス・ピンセットを使い，土の中からできるだけ炭化物とみられる部分を取り出し，すりつぶす（Bulk）。

② 酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。処理には１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用い，表１に「HCl」と記載する。

以下，（１）③以降と同じ。

４．測定方法

３MV タンデム加速器（NEC Pelletron ９SDH−２）をベースとした ^{14}C−AMS 専用装置を使用し，^{14}C の計数，^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５．算出方法

（１）δ^{13}C は，試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS 装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libby の半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は δ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に，補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C 年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C 年代の誤差（±１σ）は，試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し，pMC が100以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ^{13}C によって補正する必要があるため，補正した値を表１に，補正していない値を参考値として表２に示した。

（４）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（1 σ = 68.2％）あるいは２標準偏差（2 σ = 95.4％）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C 補正を行い，下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い，OxCalv4.1較正プログラム（Bronk

表１　放射性炭素年代測定結果

測定番号 試料番号	出土地点		試料形態	処理方法	δ ^{13}C（‰）	δ ^{13}C 補正あり	
	遺構名	層位			（AMS）	Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA－102701 No.1	１号住居跡	Ｐ１ℓ１	種子	AAA	−29.22 ± 0.58	Modern	113.28 ± 0.33
IAAA－102702 No.2	１号住居跡	Ｐ１ℓ１	種子	AAA	−29.93 ± 0.62	Modern	112.63 ± 0.35
IAAA－102703 No.3	１号住居跡	Ｐ１ℓ１	種子	AAA	−29.67 ± 0.38	Modern	112.71 ± 0.34
IAAA－102704 No.4	１号住居跡	ℓ１	炭化物	AAA	−24.93 ± 0.46	1,220 ± 30	85.95 ± 0.29
IAAA－102705 No.5	２号住居跡	複式炉 埋設土器内	炭化物	AaA	−24.52 ± 0.43	4,020 ± 30	60.66 ± 0.21
IAAA－102706 No.6	２号住居跡	複式炉 ℓ８	炭化物を 含む土	HCl	−25.97 ± 0.38	3,980 ± 30	60.92 ± 0.22
IAAA－102707 No.7	２号住居跡	複式炉 石組部掘形	炭化物	AaA	−25.95 ± 0.39	4,060 ± 30	60.35 ± 0.21
IAAA－102708 No.8	５号土坑	ℓ６	炭化物	AAA	−23.8 ± 0.45	4,140 ± 30	59.73 ± 0.23

表２　暦年較正年代

測定番号 試料番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）	（yrBP）		
IAAA－102701 No.1	Modern	112.3 ± 0.3	Modern	—	—
IAAA－102702 No.2	Modern	111.49 ± 0.32	Modern	—	—
IAAA－102703 No.3	Modern	111.64 ± 0.33	Modern	—	—
IAAA－102704 No.4	1,220 ± 30	85.96 ± 0.28	1,216 ± 27	774AD（68.2%）870AD	695AD（ 0.9%）700AD 708AD（13.4%）748AD 766AD（81.2%）889AD
IAAA－102705 No.5	4,010 ± 30	60.72 ± 0.21	4,016 ± 28	2572BC（53.5%）2512BC 2504BC（14.7%）2488BC	2617BC（ 1.2%）2611BC 2581BC（94.2%）2471BC
IAAA－102706 No.6	4,000 ± 30	60.8 ± 0.22	3,981 ± 29	2565BC（36.8%）2532BC 2496BC（31.4%）2470BC	2576BC（95.4%）2461BC
IAAA－102707 No.7	4,070 ± 30	60.23 ± 0.2	4,056 ± 27	2624BC（46.6%）2566BC 2524BC（21.6%）2497BC	2836BC（ 5.9%）2816BC 2667BC（89.5%）2487BC
IAAA－102708 No.8	4,120 ± 30	59.88 ± 0.22	4,139 ± 30	2864BC（14.1%）2833BC 2819BC（ 5.2%）2807BC 2759BC（19.1%）2717BC 2711BC（22.8%）2659BC 2652BC（ 7.0%）2634BC	2874BC（95.4%）2620BC

Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は，^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６．測定結果

１号住居跡出土試料の^{14}C 年代は，Ｐ１ℓ１出土種子の試料№.１～３がいずれも Modern，ℓ１出土炭化物の試料№.４が1220 ± 30yrBP である。試料№.４の暦年較正年代（1σ）は774～870cal AD の範囲で示される。この住居跡の時期は，出土土器から平安時代と推定され，試料№.４の年代値はこれに矛盾しない。他方，貯蔵穴から出土した３点の種子は，内部が白く新鮮な印象を与えるもので，測定結果から後世の混入と考えられる。

２号住居跡出土試料の^{14}C 年代は，複式炉埋設土器内出土炭化物の№.５が4020 ± 30yrBP，複式炉ℓ８の炭化物を含む土の№.６が3980 ± 30yrBP，複式炉石組部掘形出土炭化物の№.７が4060 ± 30yrBP である。№.５と№.６，№.６と№.７の値は各々誤差（±１σ）の範囲で重なり合っており，３点で見ても概ね近い年代を示している。暦年較正年代（1σ）は，№.５が2572～2488cal BC，№.６が2565～2470cal BC，№.７が2624～2497cal BC の間に各々２つの範囲で示され，いずれも縄文時代中期末葉頃に相当する。

５号土坑ℓ６出土炭化物である№.８の^{14}C 年代は4140 ± 30yrBP，暦年較正年代（1σ）は2864～2634cal BC の間に５つの範囲で示される。縄文時代中期後葉頃に相当する年代値で，２号住居跡との前後関係と整合的な結果と言える。

試料№.１～４・８の炭素含有率はすべて50％を超える適正な値であったが，土ごと採取された№.５・７はやや低い値を示した。№.６は土と厳密に区別できない状態で処理され，炭素含有率も19％と通常の炭化物のみの場合に比べて低い値で，ほかの試料よりも測定結果の扱いに若干注意を要する。

参考文献

Stuiver M. and Polach H.A.　1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3), pp.355−363.

Bronk Ramsey C.　2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), pp.337−360.

Reimer, P.J. et al.　2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0−50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51 (4), pp.1111−1150.

第４章　ま　と　め

今回の調査は常磐自動車道建設予定地の1,000㎡を対象に発掘調査を実施し，調査の結果，縄文時代と平安時代及び近世以前と思われる遺構と遺物を確認できた。ここでは検出した遺構から，縄文時代，平安時代，近世以前についての大槻遺跡の概略についてまとめてみたい。

縄文時代

調査区内からは縄文時代早期から晩期の縄文土器片が出土しており，本遺跡では断続的な生活の営みがうかがわれる。このうち主体を占めるのは，縄文時代中期末葉大木10式期である。

検出された縄文時代の遺構は，竪穴住居跡１軒（ＳＩ２），土坑５基である。これらのうち丘陵頂部すぐ下の南向きの緩斜面上から検出された２号住居跡，３・５号土坑は，調査区内において出土遺物が主体を占める縄文時代中期末葉頃のものである。丘陵頂部とその付近から検出した土坑３基は詳細な時期は不明である。

２号住居跡は，複式炉を敷設する小型の住居跡で，炉跡には新旧の造り替えが認められる。複式炉は住居跡同様に小型の簡素なもので，土器埋設部には大木10式期の縄文土器一個体が埋められていた。複式炉の形状は，土器埋設部と石組部の接合部分が明瞭に括れるダルマ形のもので，前庭部が短く張り出し，その両側には大振りの板状の礫が垂直に立てられている。

当地域で発掘調査が行われた複式炉の事例としては，新地町川窪遺跡，山海道遺跡，相馬市馬見塚遺跡などが知られるが，それらの遺跡からも同時期で同様の特徴をもつ複式炉が確認されている。本遺跡から検出した複式炉は，旧炉から新炉への造り替えによって推定値で長軸が40㎝ほど小型化しているが，馬見塚遺跡などの他の遺跡でも造り替えによって小型化ないし簡素化することが指摘されている。

さらに，この２号住居跡の複式炉は５号土坑上に構築されており，新旧の複式炉の下からは廃絶時に埋められたフラスコ状土坑が確認できた。５号土坑内からも複式炉の埋設土器と同時期の大木10式期の資料が出土しており，短期間のうちに貯蔵穴として使用していたものを埋めて，その上方部分に複式炉を伴う住居を築き，その後しばらくして炉を小型のものへと造り替えた様子がうかがえる。また，住居跡の南西側にある３号土坑からは，不定形なくぼみの中から同時期とみられる多数の土器片がまとまって出土した。３号土坑がちょうど２号住居跡の南西斜面下に位置することもあり，不用となった土器類の廃棄のため，くぼ地状の地形が利用されていたとも推察され，相互に関連した遺構と考えられる。

以上のように，調査区内からは縄文時代中期末葉の小規模な集落跡を確認することができた。しかし，当該期になると一般に大規模な集落が形成されることから，調査区外の東側斜面や丘陵頂部

には複数の住居跡で構成される集落が広がる可能性も考えられる。丘陵頂部からの関連遺構は確認できなかったが，付近からは複数の石皿や凹石が出土しており，検出した近世以前の祭祀遺構とみられる１号性格不明遺構にも礫材として再利用されていた。丘陵の斜面下には多数の土器片が出土していることから，当該期の集落の一部は丘陵頂部まで広がっており，１号性格不明遺構によって破壊されたとも考えられる。

平安時代

検出した平安時代の遺構は，竪穴住居跡１軒（ＳＩ１）である。１号住居跡は，丘陵南側の斜面裾と東西方向に流れる旧河川とに挟まれた平坦な地形に築かれている。

１号住居跡は４ｍ四方の小型のもので，床面の一部が熱で硬化し炭化物が拡散することから，一般的な居住用のものとは異なるものとみられる。また，住居に付設されたカマド部分がほとんど残っておらず，廃絶時に意図的に壊されていた様子が認められた。そのようなことから，本遺跡内に営まれた平安時代の集落は，山間の水辺を利用した鍛冶場などの小規模な作業小屋のようなものと推察され，短期間のうちに場所を変えながら移り住んだものと考える。

近世以前

近世以前の遺構としては，丘陵頂部から性格不明遺構１基（ＳＸ１），溝跡１条，小穴１基を検出した。丘陵頂部には常磐自動車道の建設予定地となる前まで３体の祠が置かれており，検出した遺構も何らかの信仰に関わるものの可能性が考えられる。また，３体の祠のうち，最も古い様相を示す土製のものには「明治四十年」との刻字が認められ，少なくとも検出した遺構はそれ以前の構築であったものとみられる。

当地域の地籍長・図である「明治十七年十月　地籍　磐城国宇多郡杉目村」の図中には「村社大槻社」の記載が認められ，周囲は「耕地」あるいは「畑」「荒畑」として示されている。地籍図は正確な測量図ではないものの，現況でも本遺跡や大槻神社の周囲は耕地として利用されており，大槻地内で東西に走る道を現在の県道273号線として照合できるものとみられる。現在の大槻神社の敷地はこの県道273号線に面しており，地籍図では「荒畑」として示されたＹ字路となる道の交錯地点付近に比定でき，地籍図に図示された大槻神社はむしろ今回調査が行われた大槻遺跡の立地する丘陵地が想定される。

現在の大槻神社の社殿に副えられた由緒によれば，現社殿は大正14年の暴風雨によって社殿裏の槻木が倒れて全壊し，昭和２年に造営されたとのことである。１号性格不明遺構を，この由緒に従って現社殿の前身とすることは祠に刻字された年代との齟齬が生じてしまうが，明治時代に作成された地籍図からは，今回の調査区が大槻神社の敷地内にあった可能性は十分に肯定できるものと思われる。そして，調査前に大槻遺跡の丘陵頂部に置かれた祠の以前には，何らかの祭祀遺構があり，今回確認した性格不明遺構が当時の大槻神社の関連施設であった可能性が考えられる。さらに，性

格不明遺構の東側に隣接する溝跡を小穴は鳥居を設置した掘形とも考えられ，その東側には参道状の窪みも確認できる。

地形的にも，今回調査が行われた大槻遺跡は周囲よりも小高い小丘陵地帯となっており，西方には当地域を象徴する鹿狼山が位置する。鹿狼山は現在でも年初めの「元朝参り」が行われるなど，広く地域の人々の信仰の対象となっており，鹿狼山の眺望に優れた本遺跡の丘陵地も同様の場のひとつであったものとみられる。調査区内からは複数の古銭も出土しており，近世以前から継続的に信仰の対象として親しまれた場所であったようである。（大　波）

引用・参考文献

福島県教育委員会　1884『福島県地籍帳・図　磐城国宇多郡杉目村　第三号』
新地町教育委員会　1975『山海道遺跡』
目黒吉明ほか　1982「馬見塚遺跡」相馬市教育委員会
玉川一郎ほか　1987「川窪遺跡発掘調査報告」
佐藤祐太ほか　2000「山海道遺跡」『町道新地高校線関連遺跡』新地町教育委員会

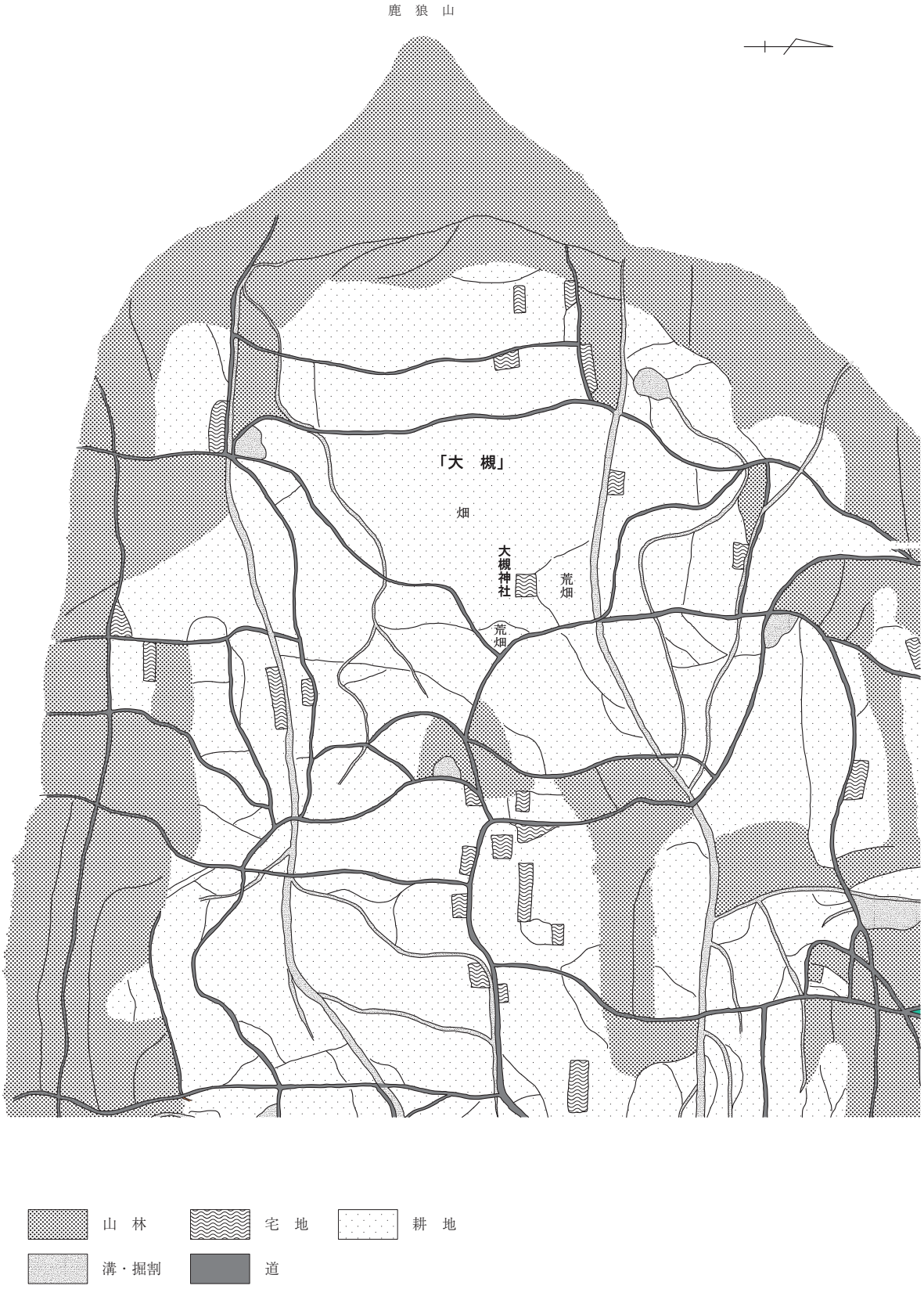


図21　磐城国宇多郡杉目村地籍復元図　（福島県文化振興事業団作成）

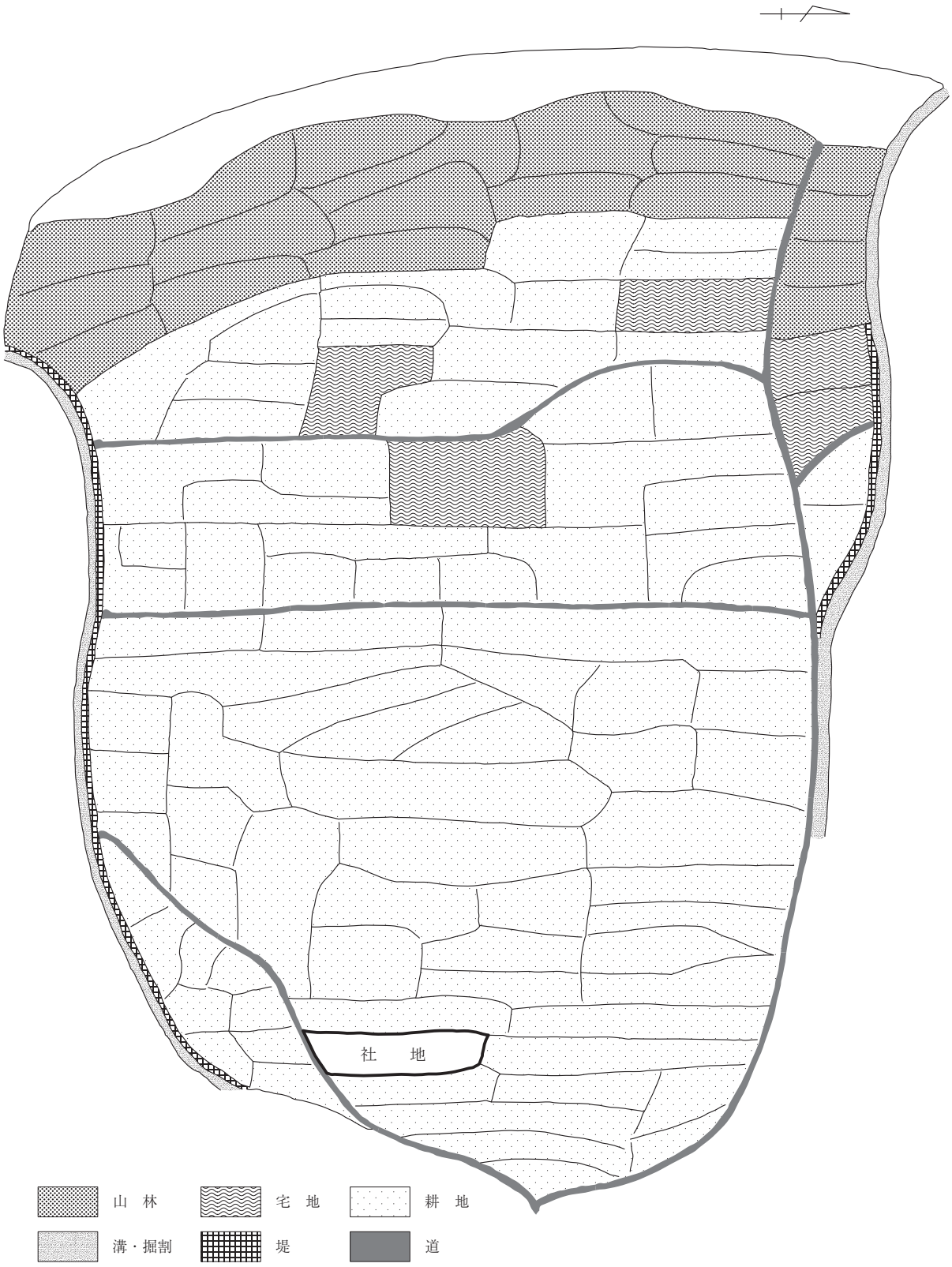


図22　磐城国宇多郡杉目村「大槻」地籍復元図　（福島県文化振興事業団作成）

写　真　図　版

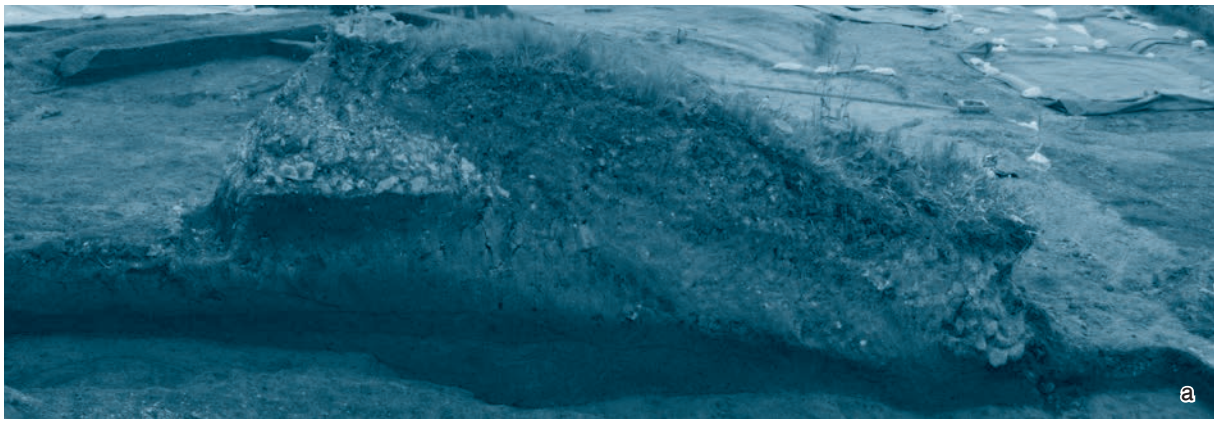
第１編　南萱倉（みなみかやくら）遺跡

1　調査区全景（南東から）

２　調査区遠景（南東から）

３　調査区遠景（南西から）

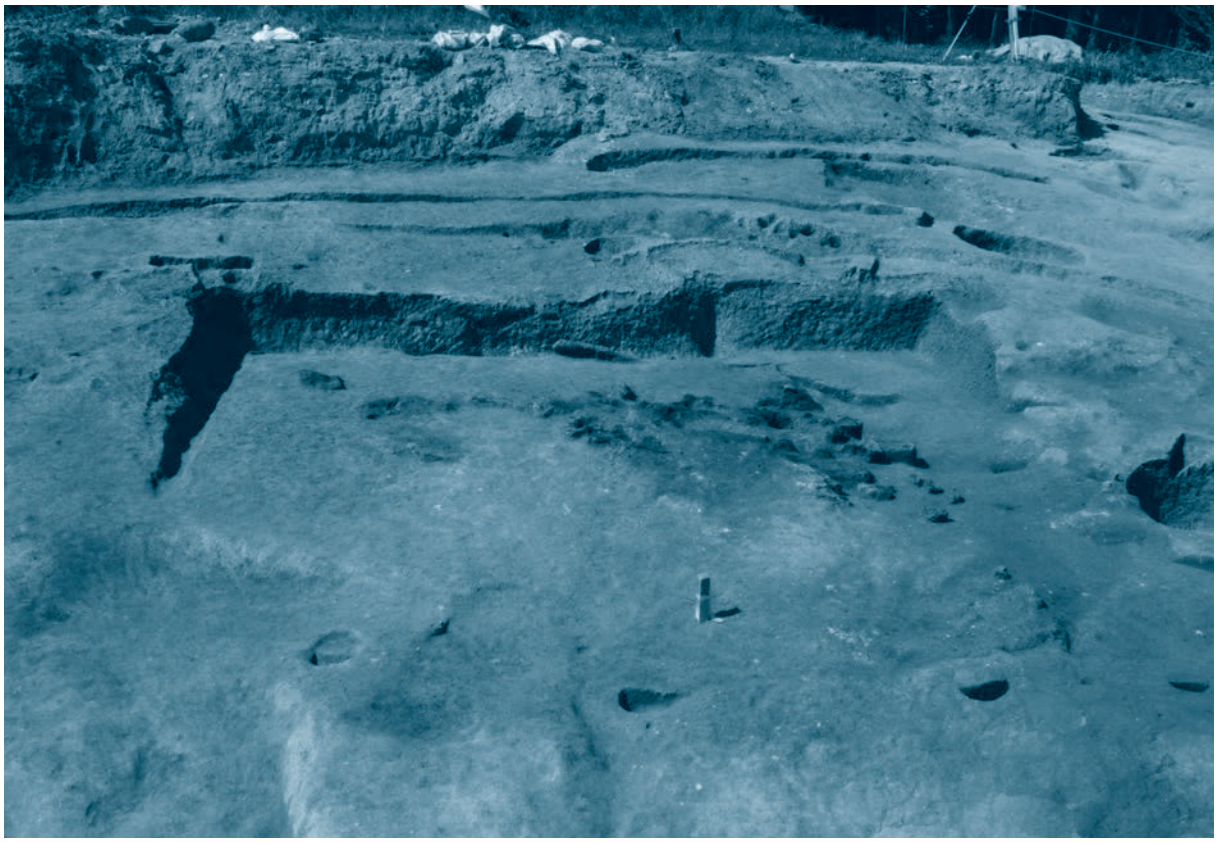
4　調査区遠景（北から）



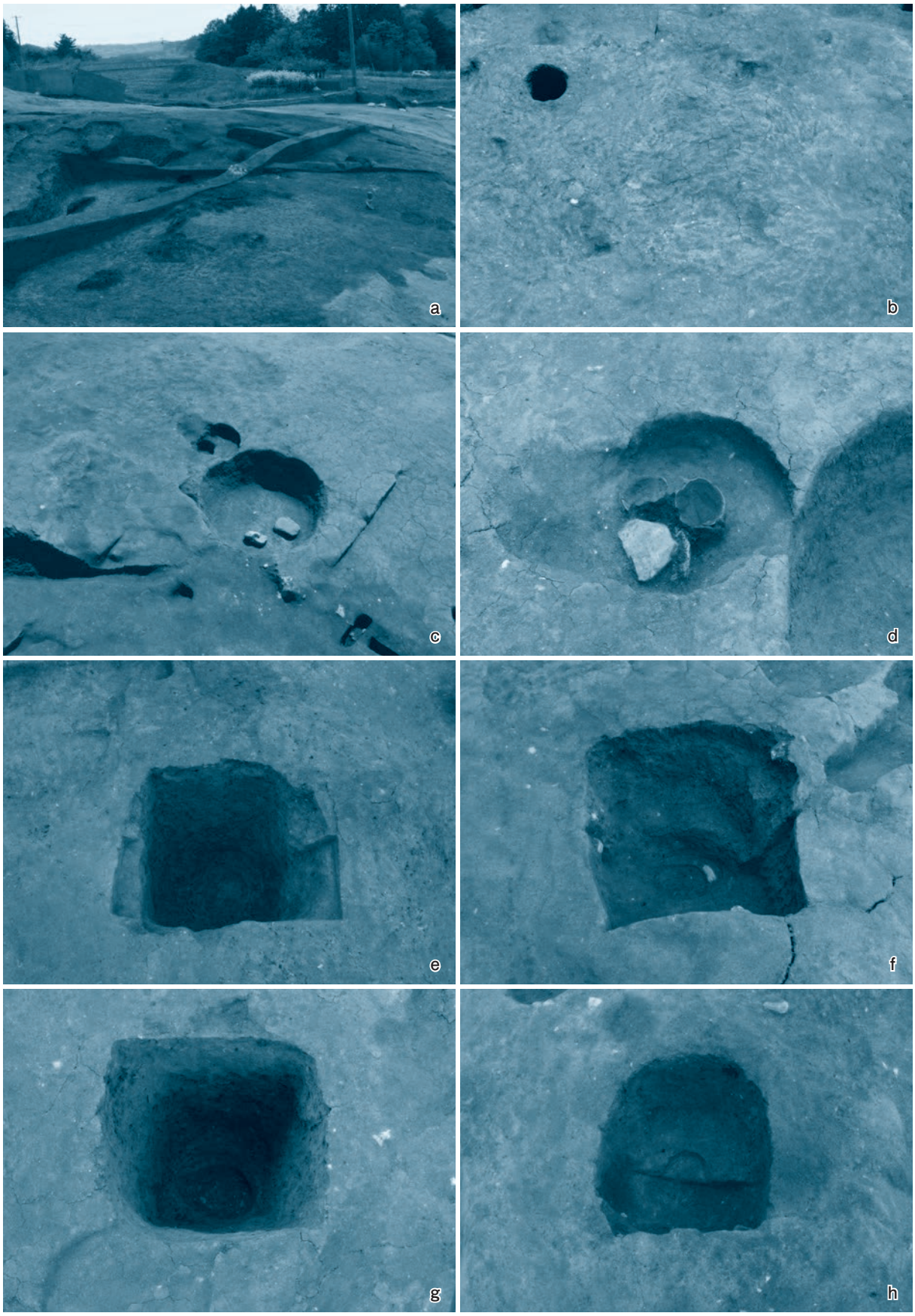
5　基本土層

a　調査区東部断面Ｂ－Ｂ′（西から）
b　調査区西部断面Ａ－Ａ′（東から）

6　１号住居跡全景（西から）



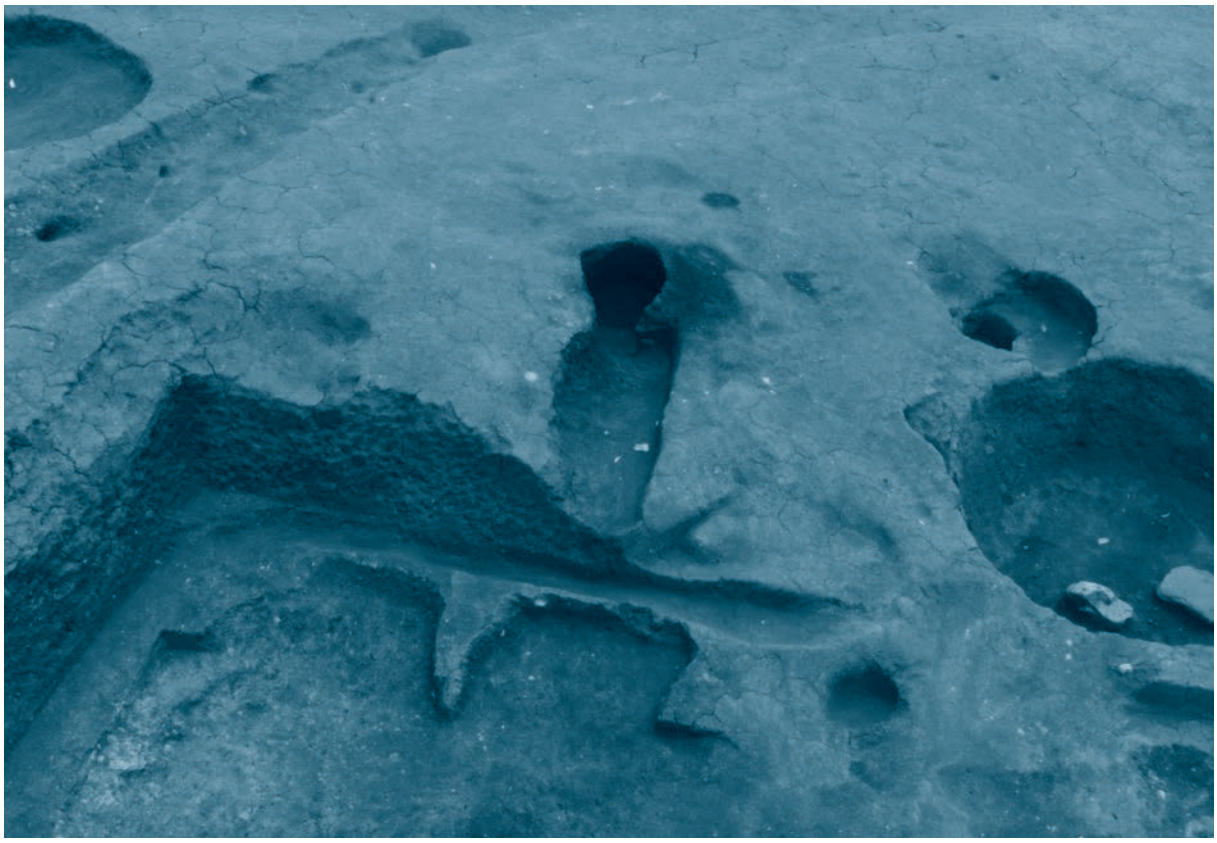
7　１号住居跡炭化材出土状況（南から）



8　１号住居跡細部

a　土層断面（西から）
b　焼土化範囲（西から）
c　カマド全景（西から）
d　遺物出土状況（北西から）
e　Ｐ１掘形全景（南から）
g　Ｐ４掘形全景（南から）
h　Ｐ３掘形全景（南から）
f　Ｐ２掘形全景（南から）

9　２号住居跡全景（南西から）

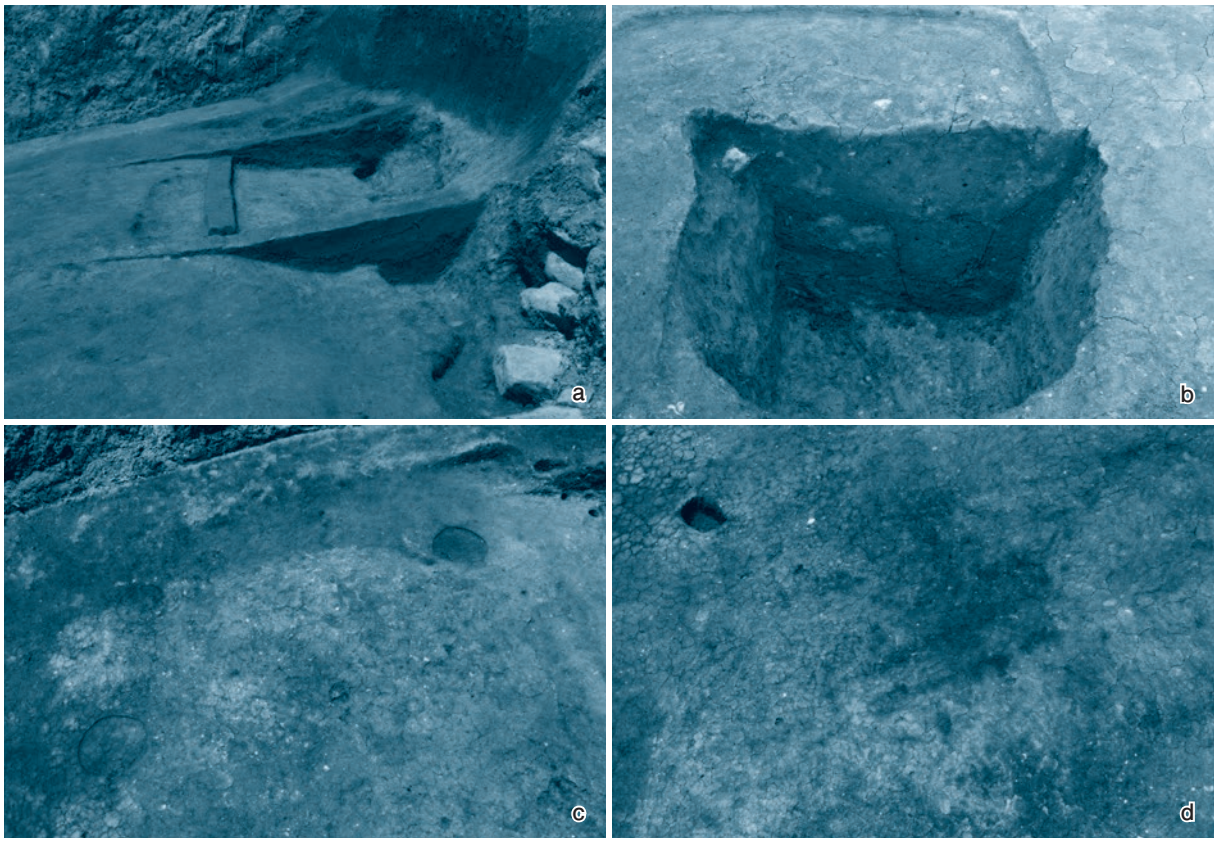


10　２号住居跡カマド全景（南西から）

11　１号建物跡全景（南西から）

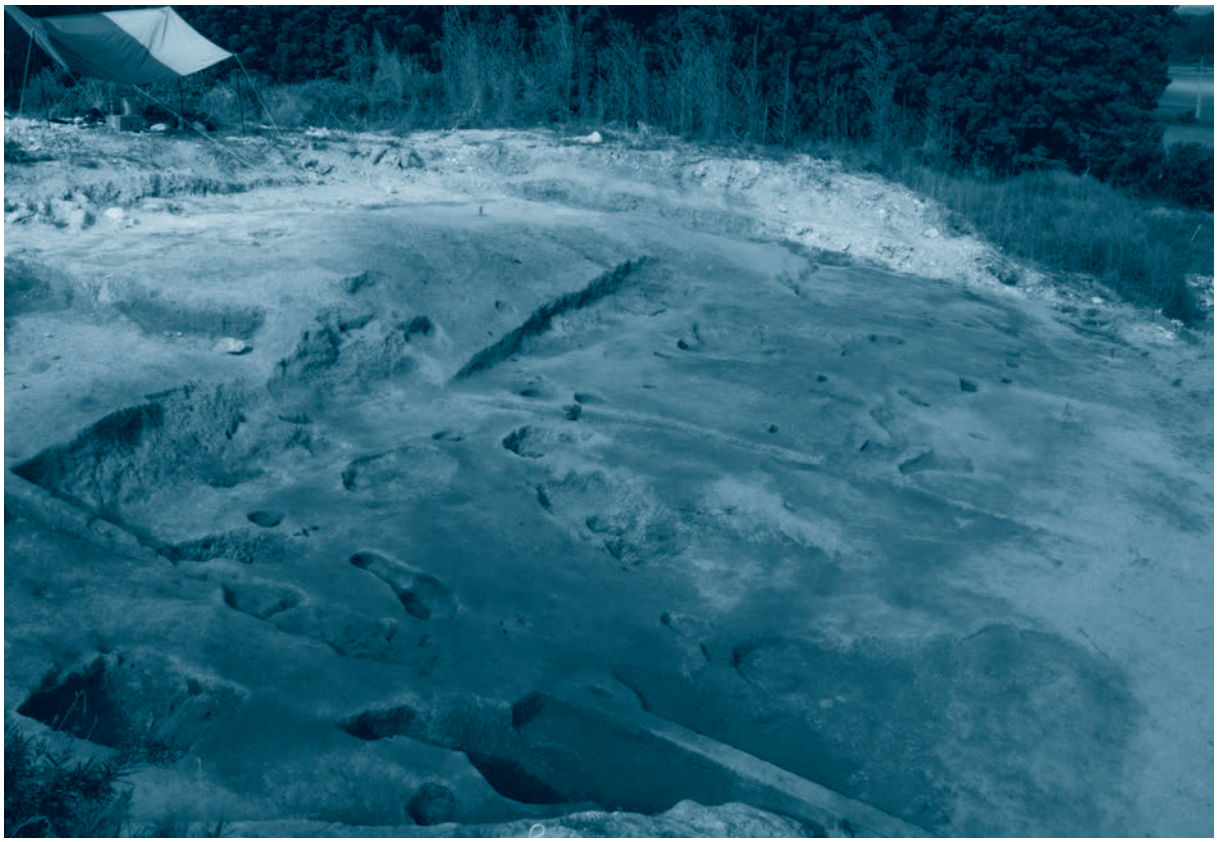
12　１号建物跡全景（南から）

13　１号建物跡貼床面全景（南から）

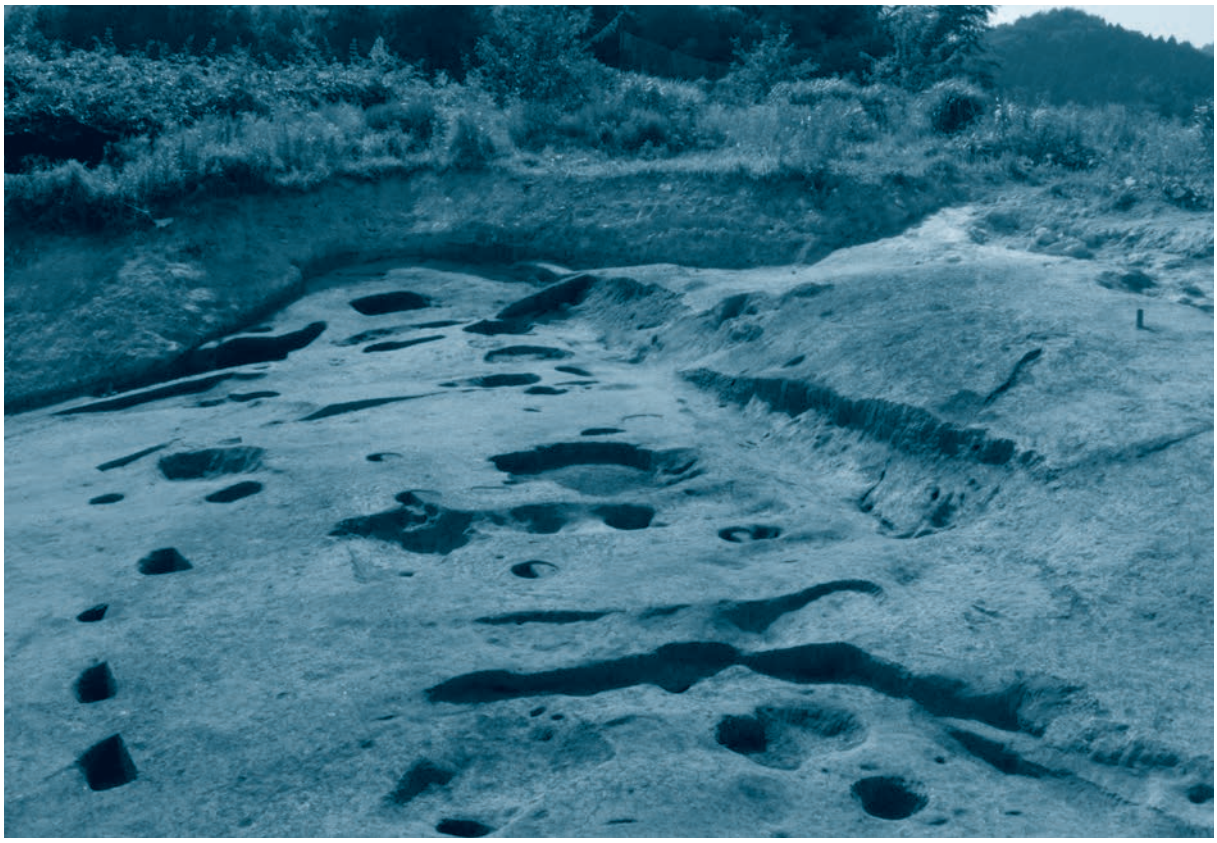


14　１号建物跡細部

a　堆積土断面（東から）　**b**　Ｐ５断面（南から）
c　炉１検出（東から）　**d**　炉２検出（東から）

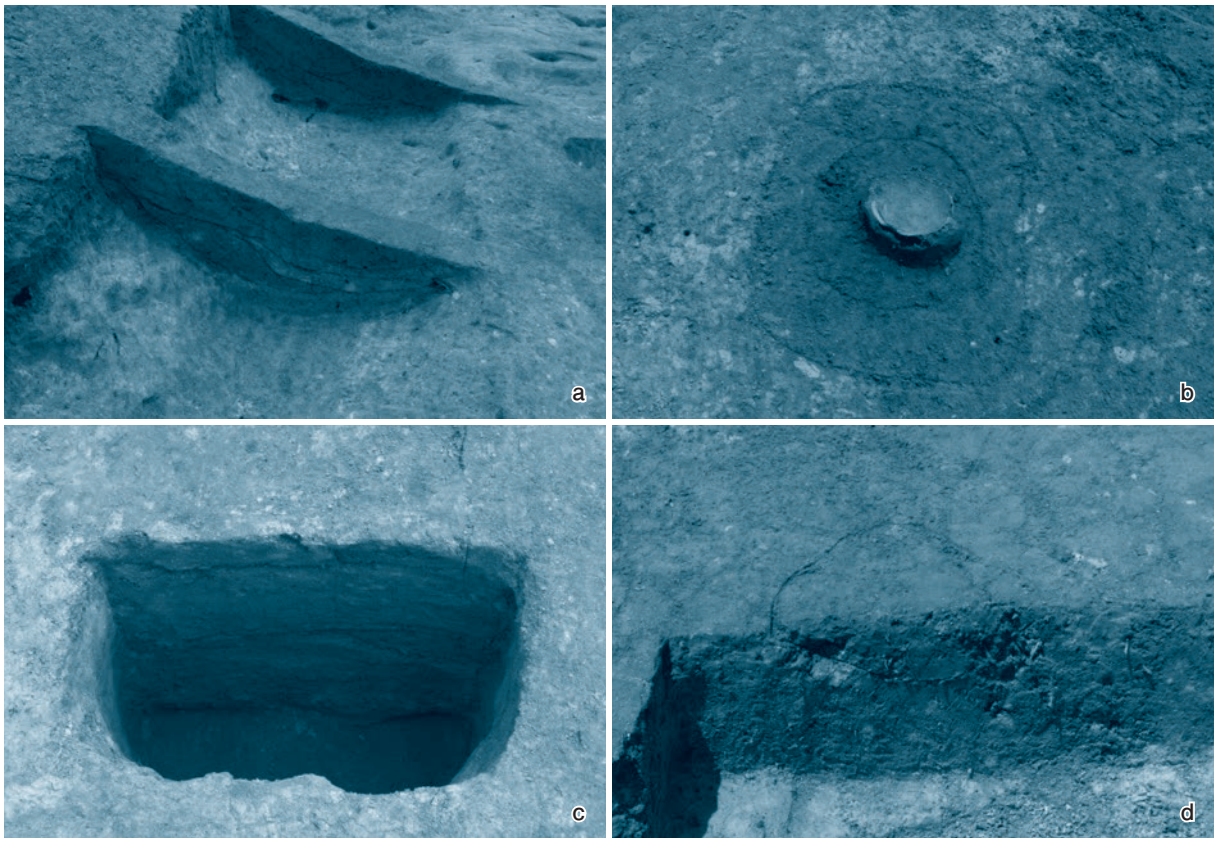


15　２・３号建物跡全景（西から）



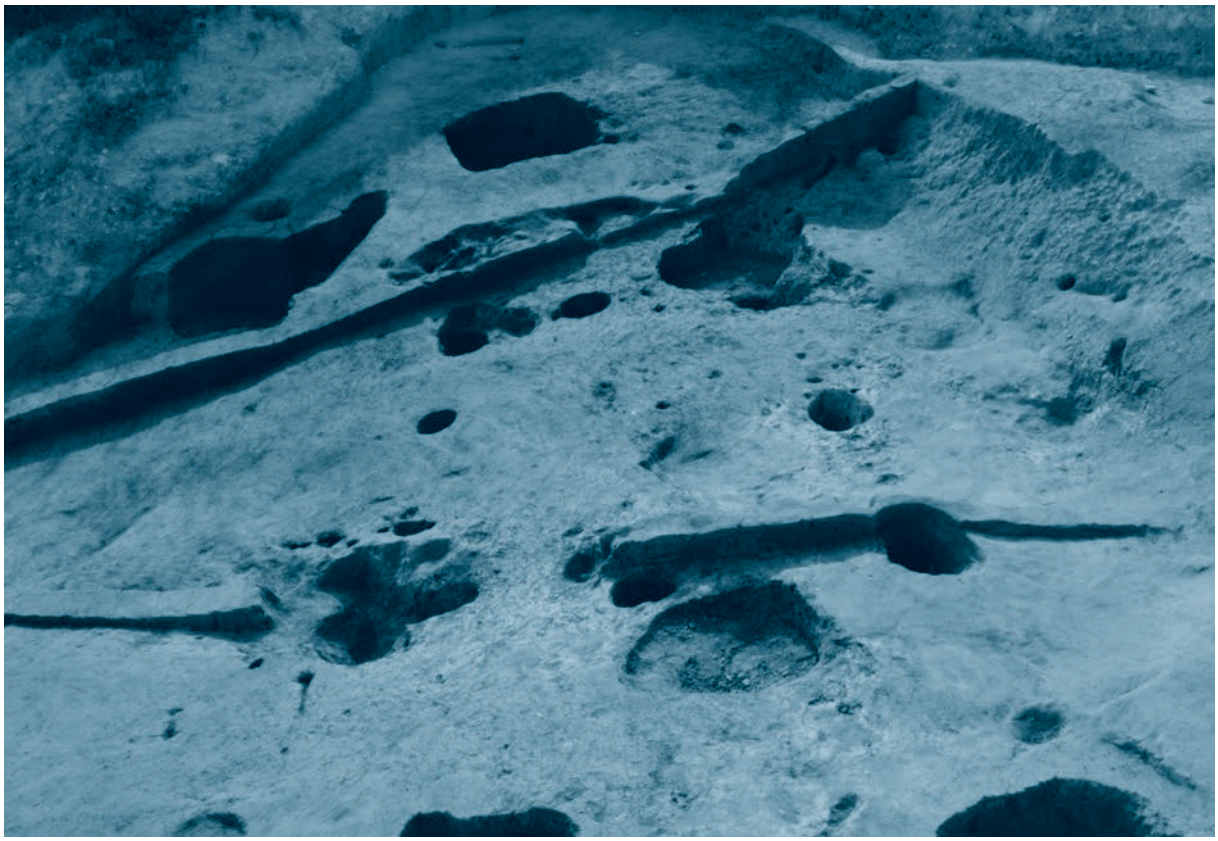
16　２・３号建物跡全景（東から）

17　２号建物跡全景（西から）

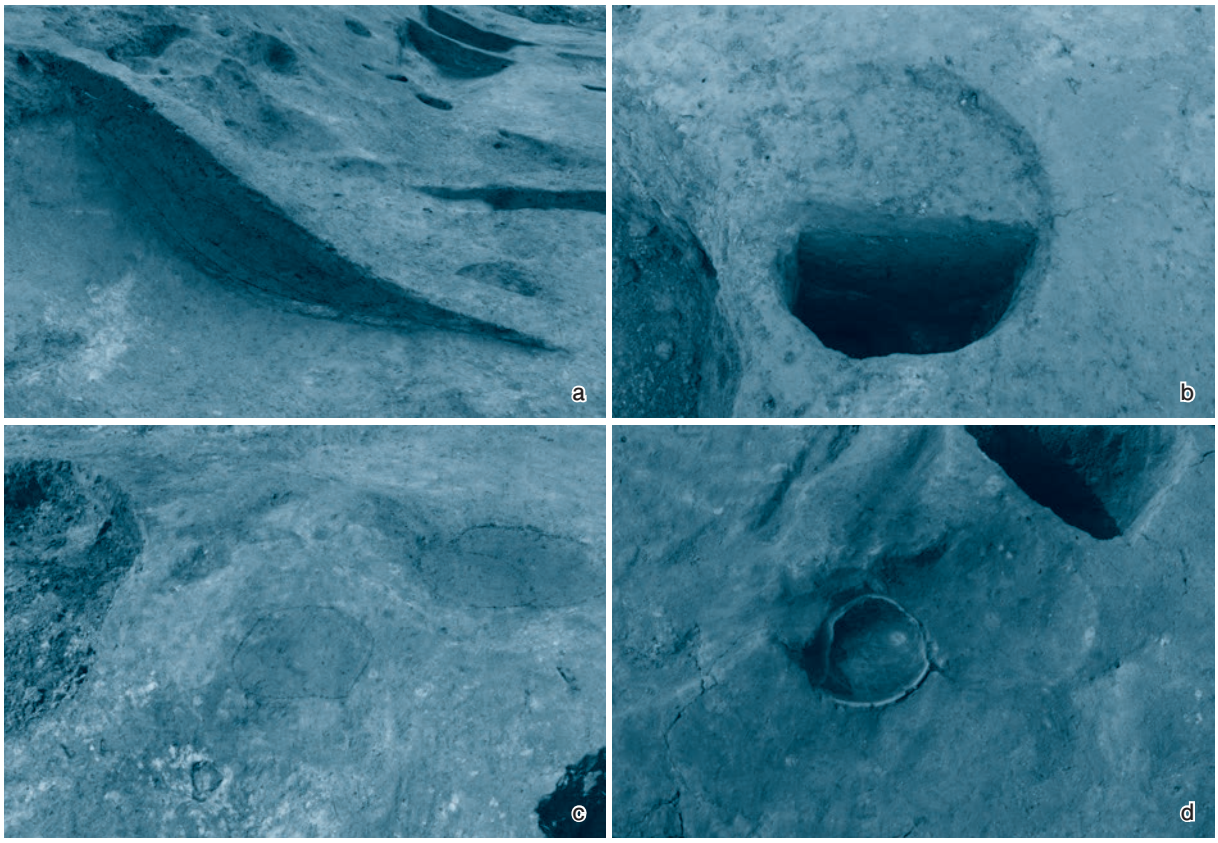


18　２号建物跡細部

a　堆積土断面（西から）　**b**　Ｐ２遺物出土状況（南から）
c　Ｐ２断面（北から）　**d**　炉断面（東から）

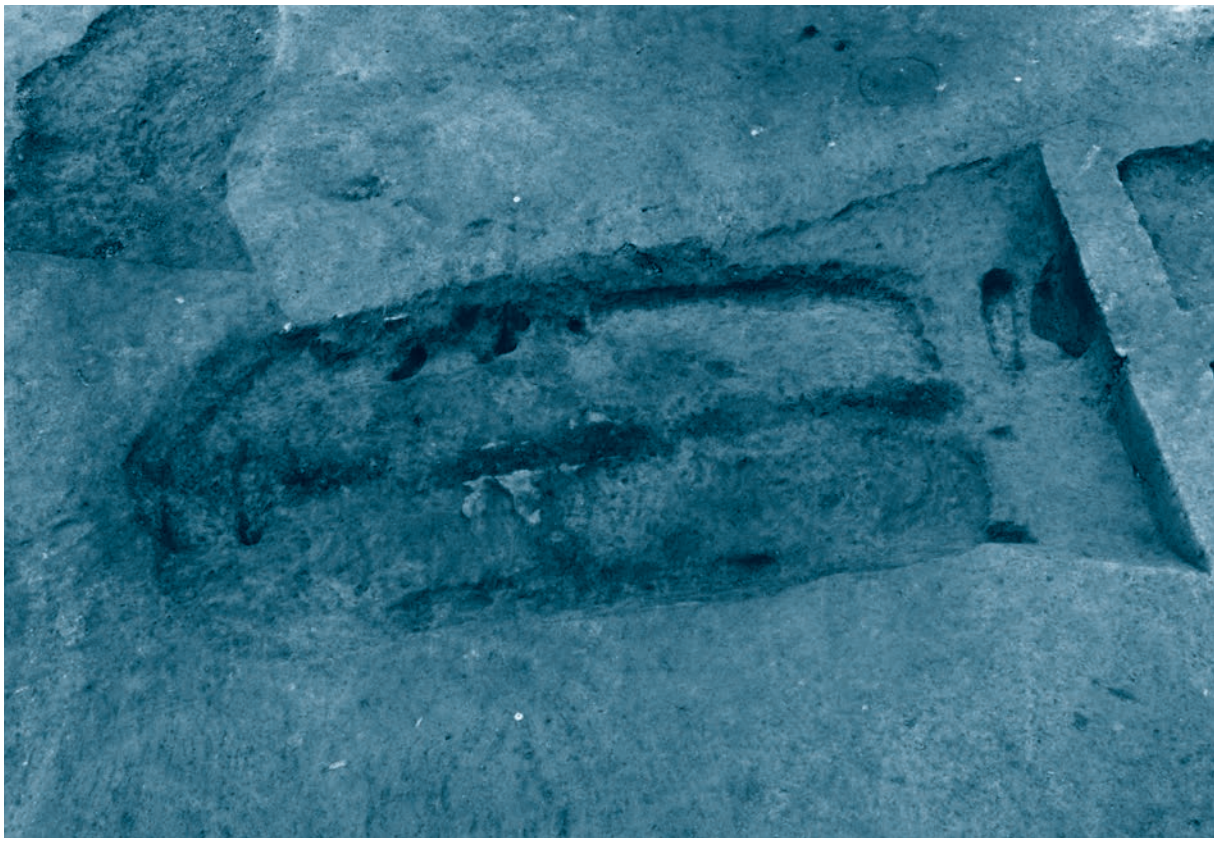


19　３号建物跡全景（南東から）

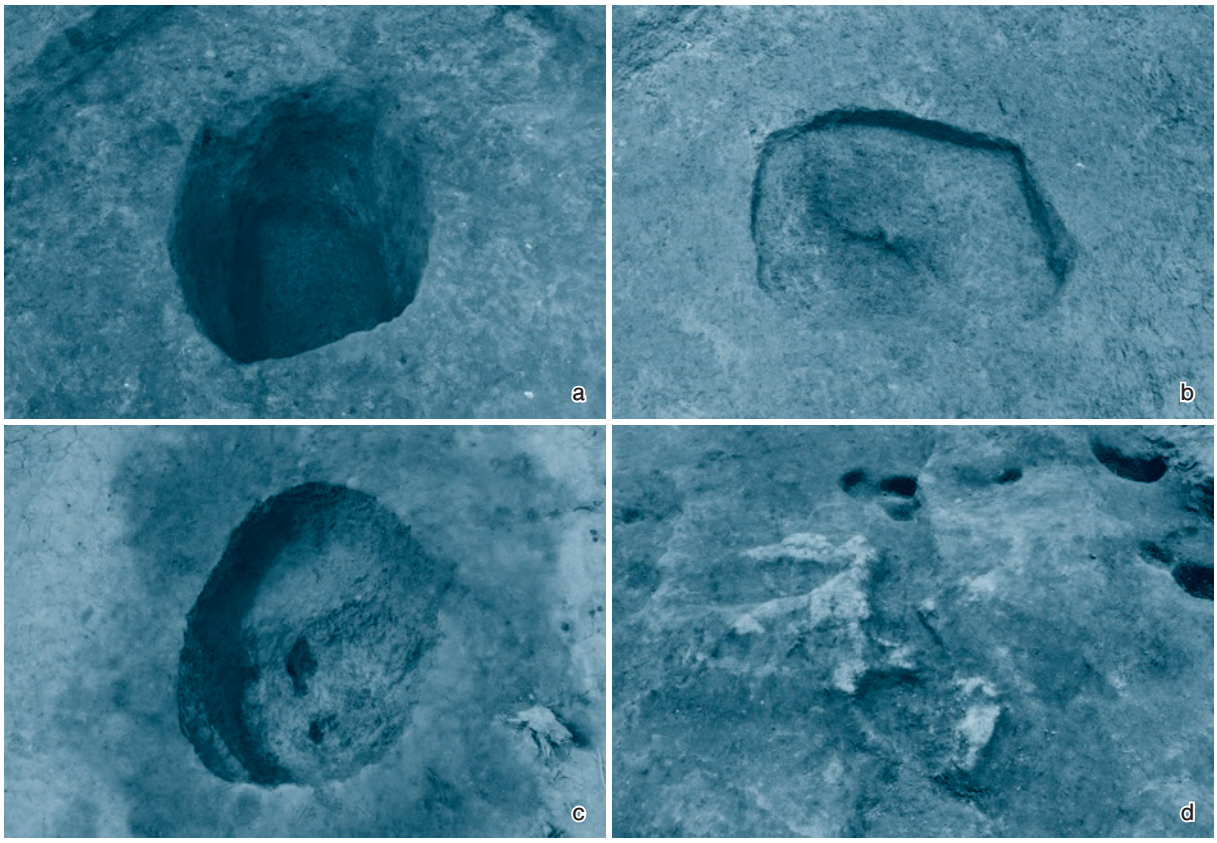


20　３号建物跡細部

a　堆積土断面（西から）　**b**　Ｐ１断面（南から）
c　Ｐ６検出（南から）　**d**　Ｐ６遺物出土状況（南から）



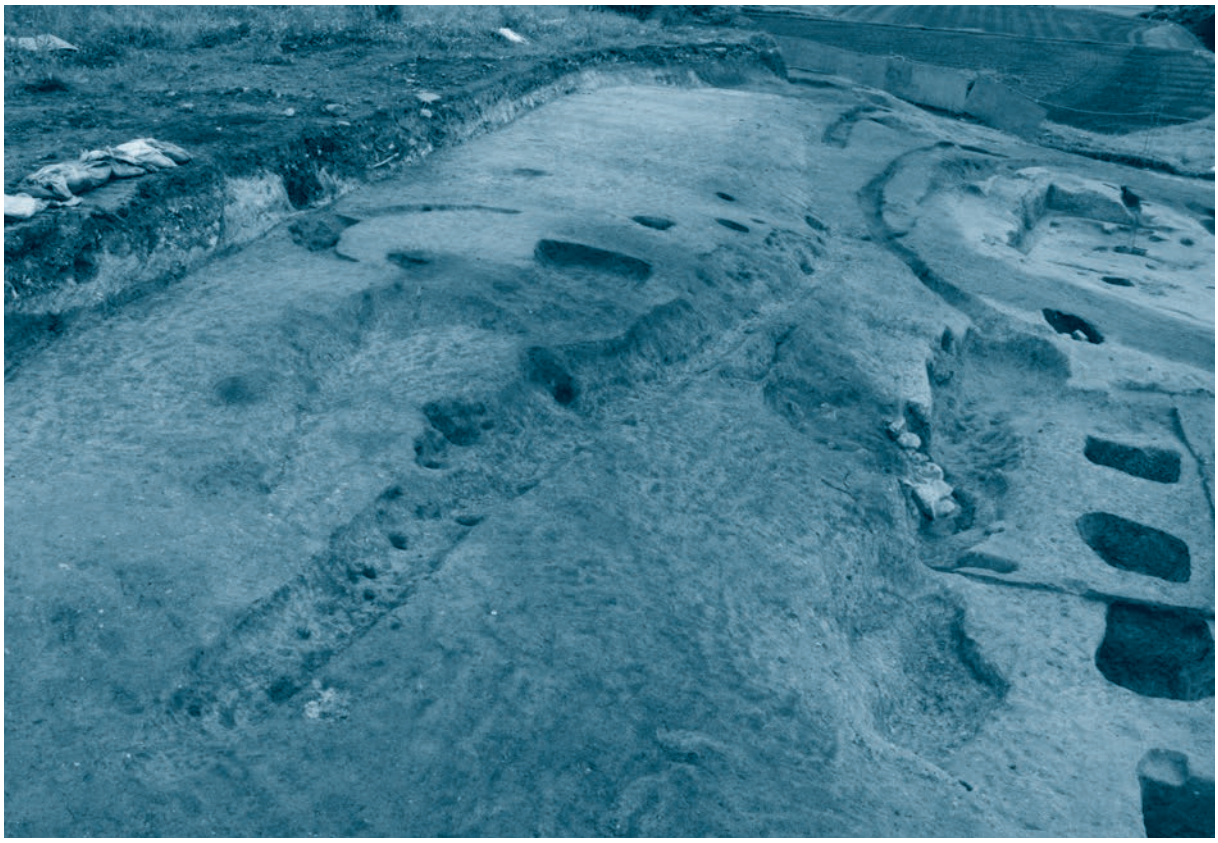
21　４号土坑全景（東から）



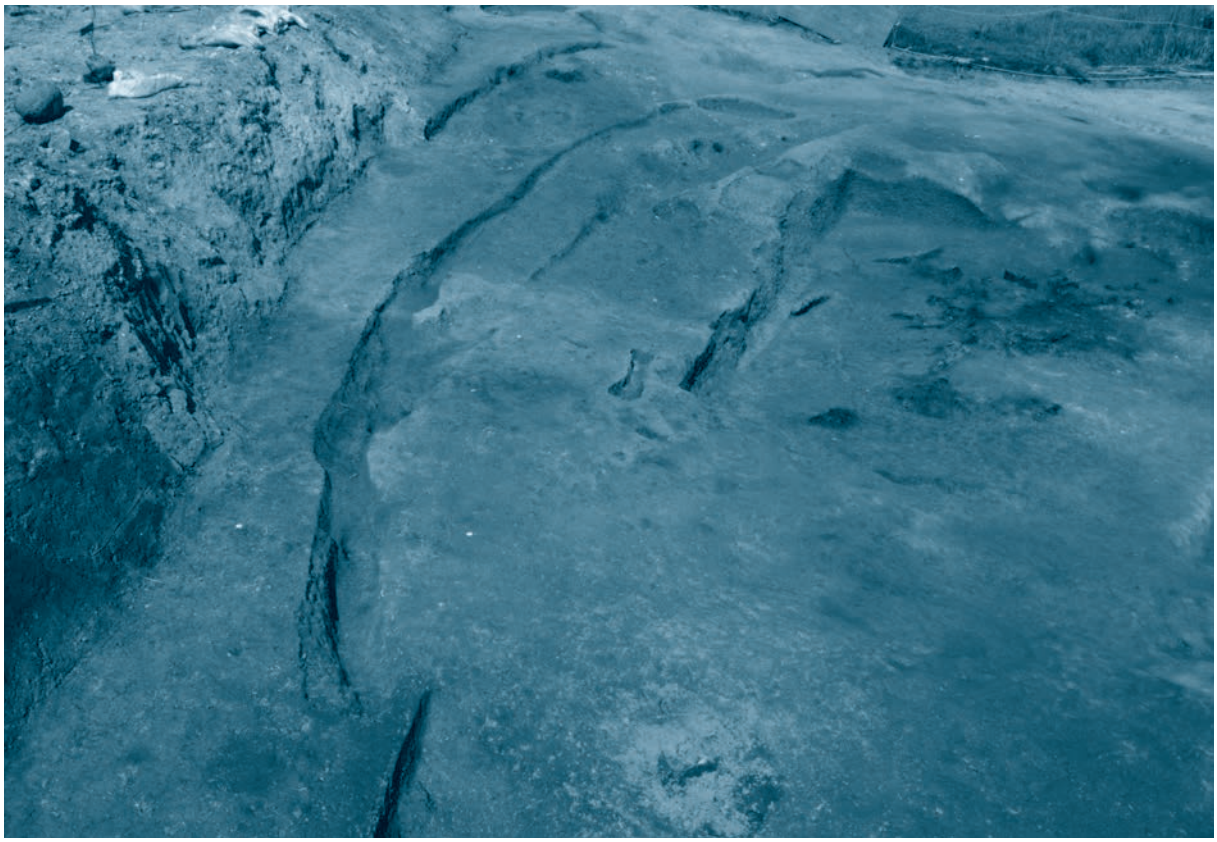
22　１～４号土坑

a　１号土坑全景（南西から）　**b**　２号土坑全景（南西から）
c　３号土坑全景（南から）　**d**　４号土坑焼成粘土塊（東から）

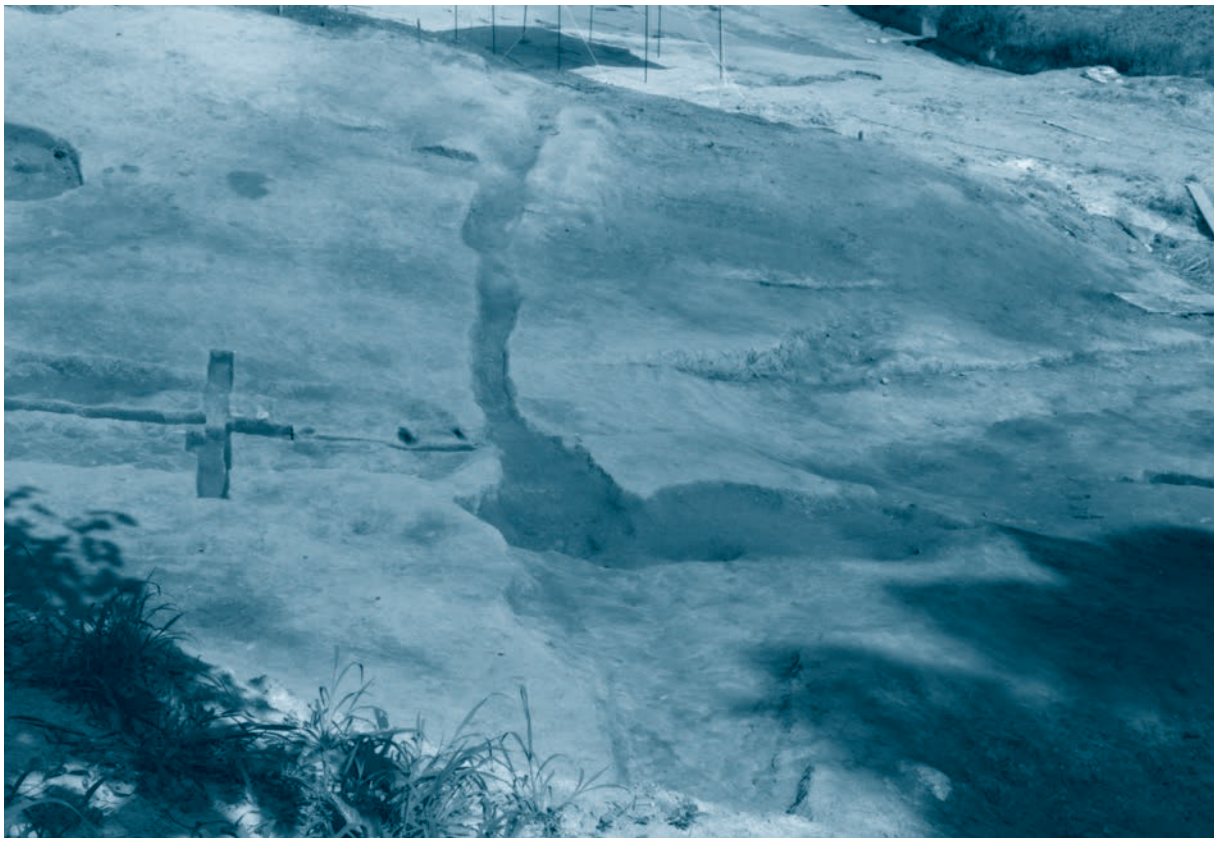
23　１号溝跡全景（東から）



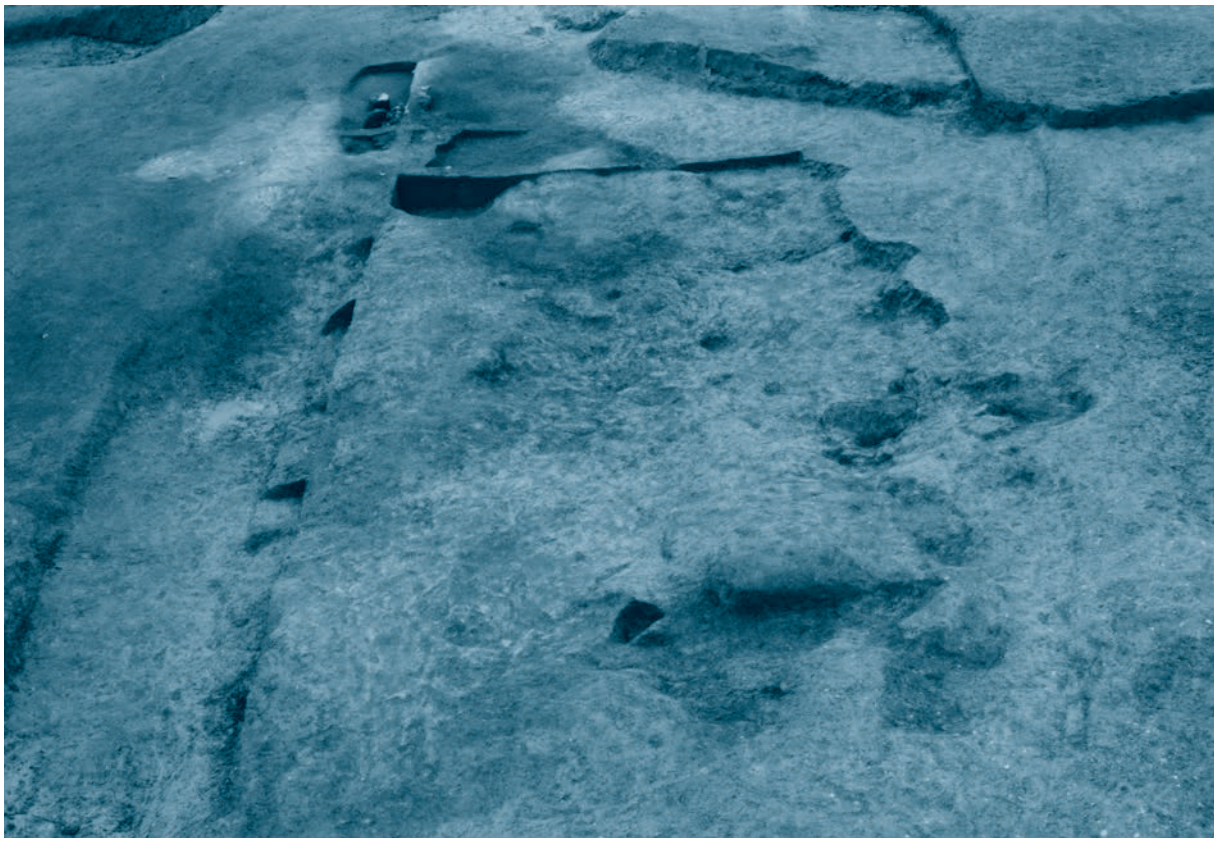
24　２号溝跡全景（西から）



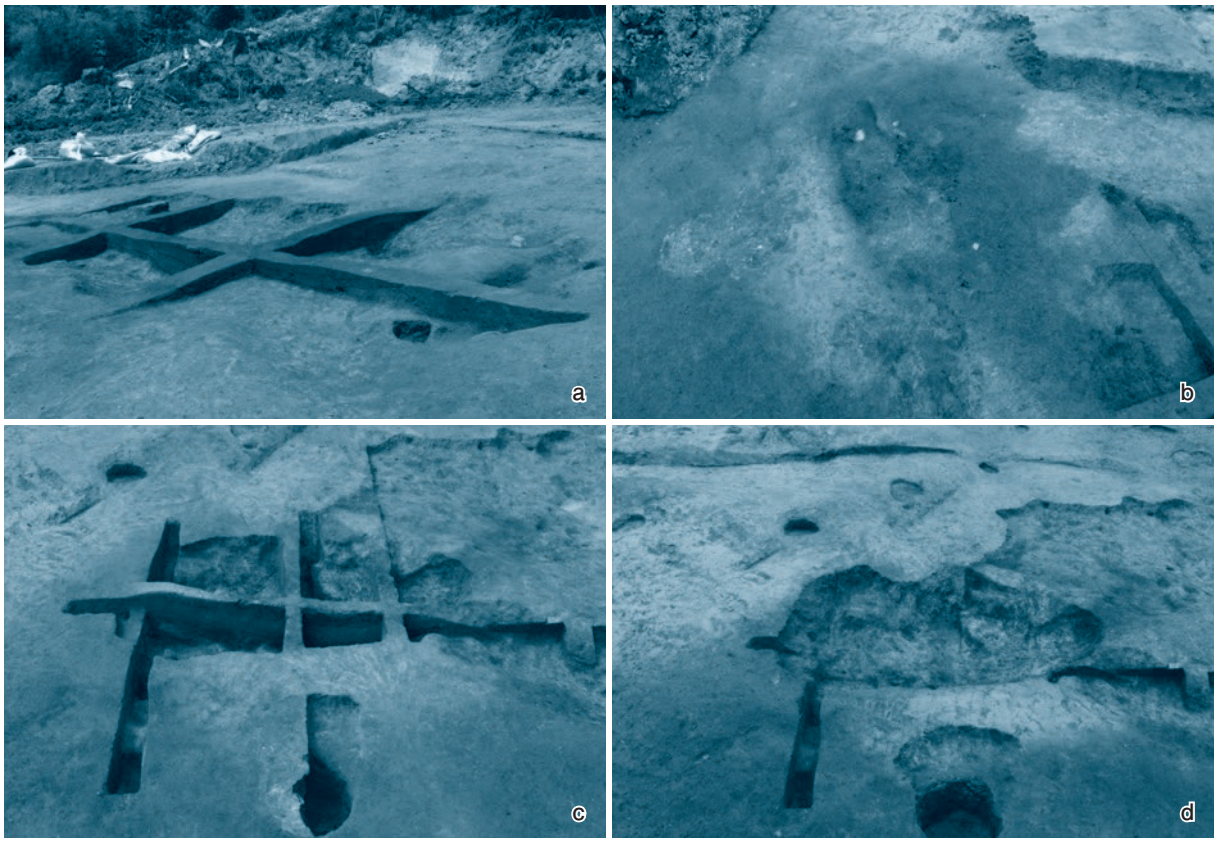
25　３・４号溝跡全景（南西から）



26　５号溝跡全景（西から）

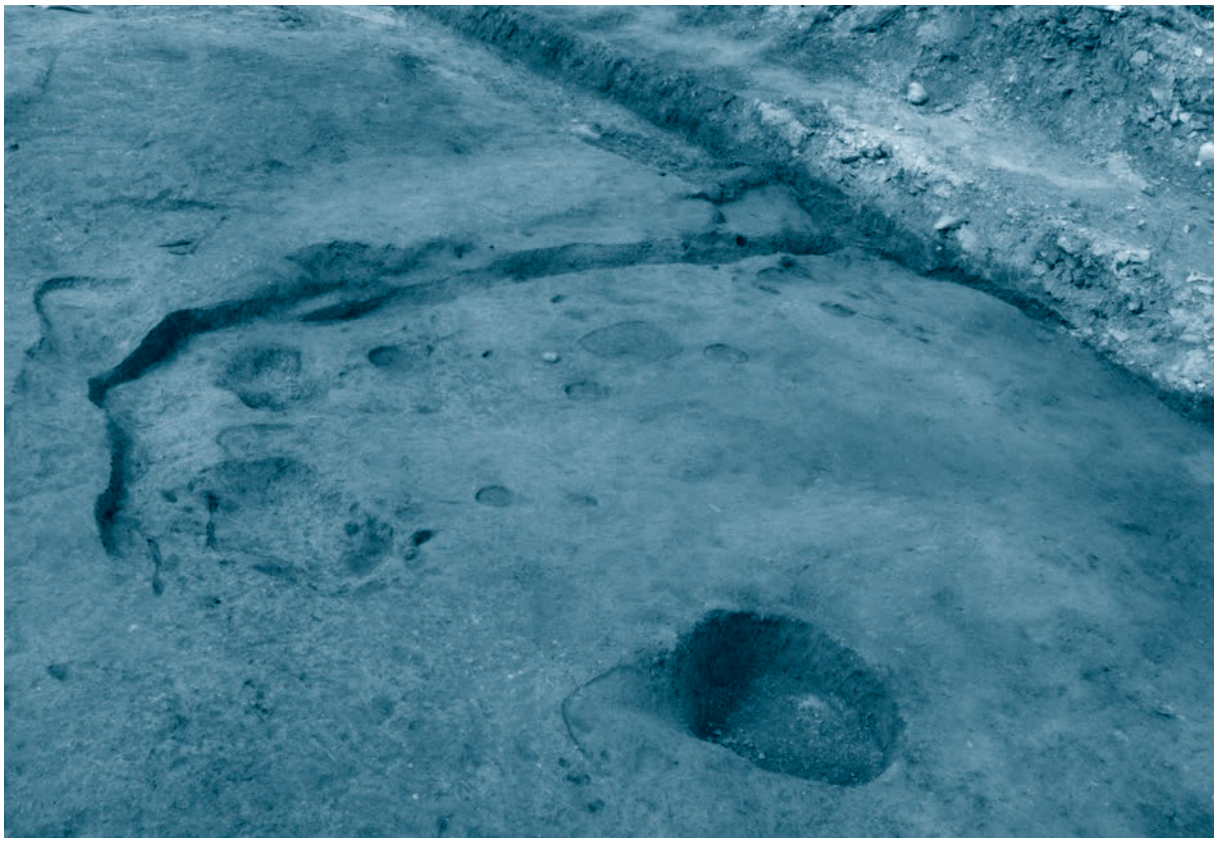


27　１・２号特殊遺構全景（北東から）

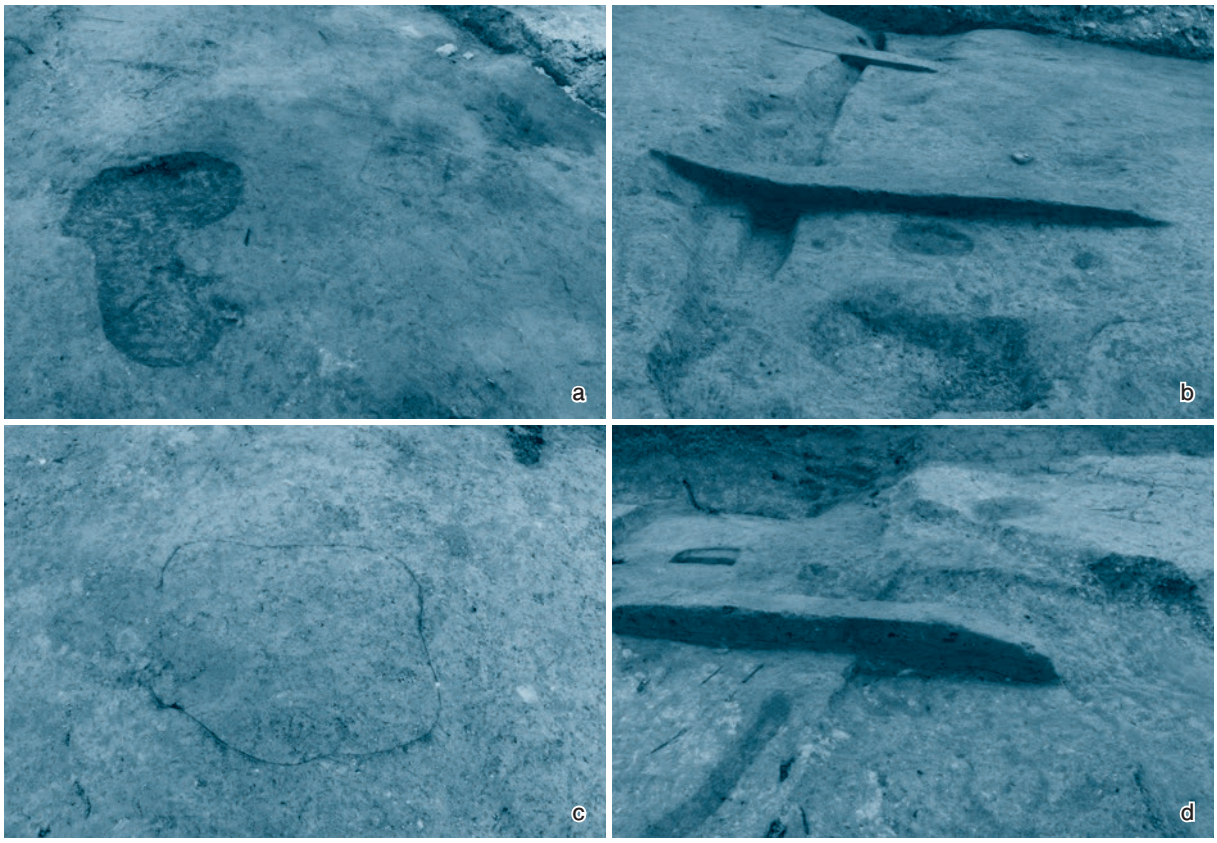


28　１・２号特殊遺構細部

a　１号特殊遺構断面（南東から）　**b**　２号特殊遺構検出（北東から）
c　２号特殊遺構断面（南東から）　**d**　２号特殊遺構全景（南東から）

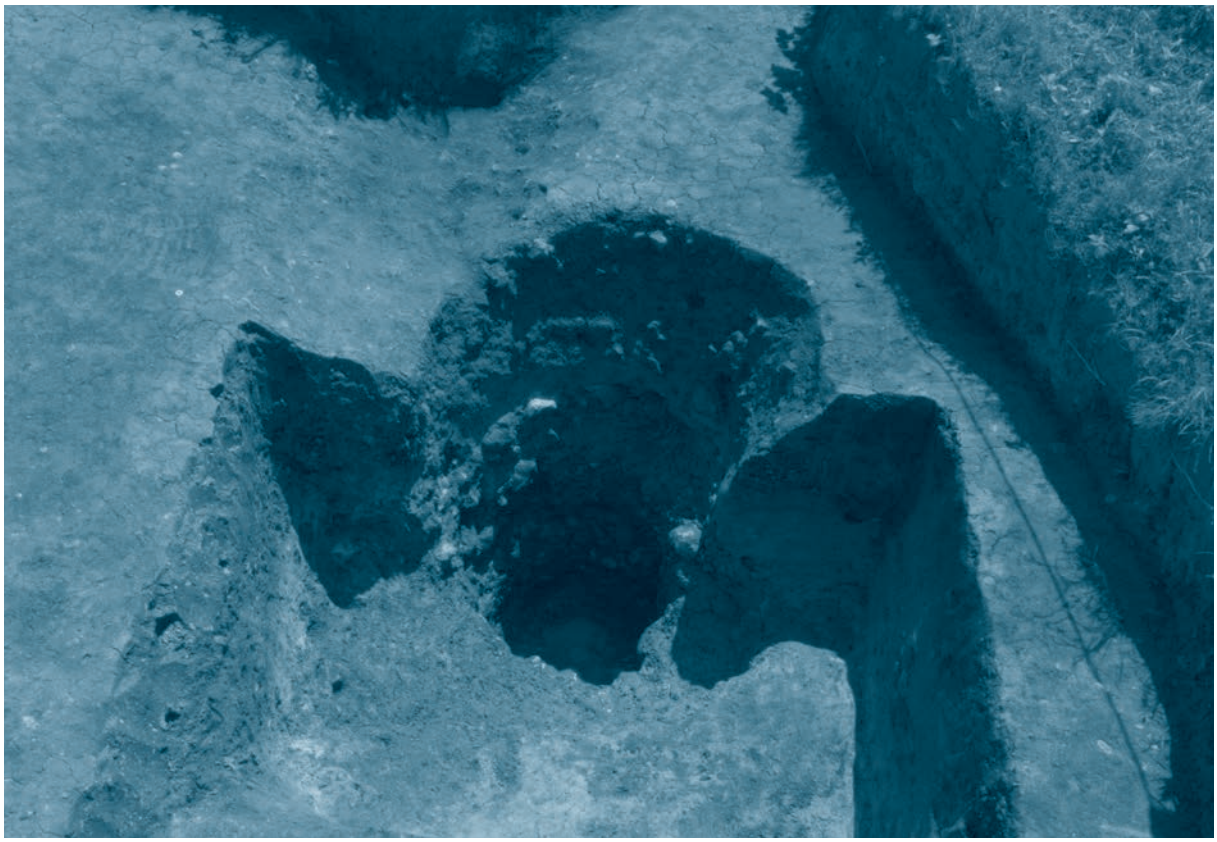


29　３号特殊遺構全景（南から）

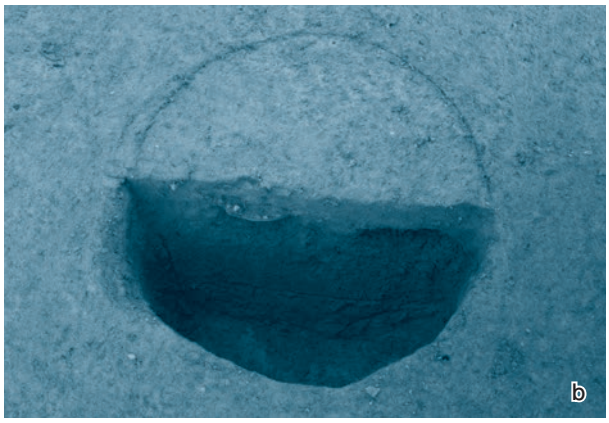


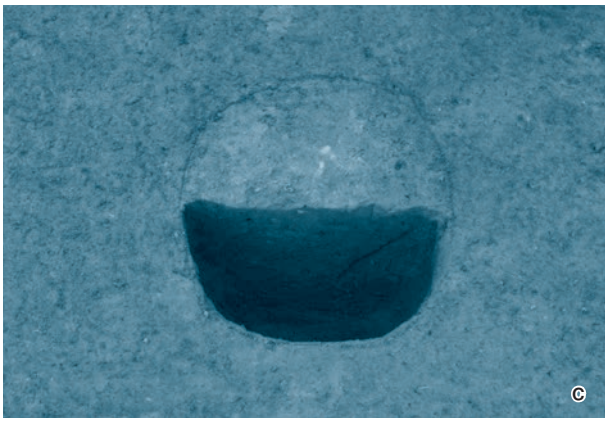
30　３号特殊遺構細部

a　検出（南から）　**b**　断面（西から）
c　炉検出（南から）　**d**　ＳＢ２との重複状況（南から）



31　１号井戸跡全景（西から）

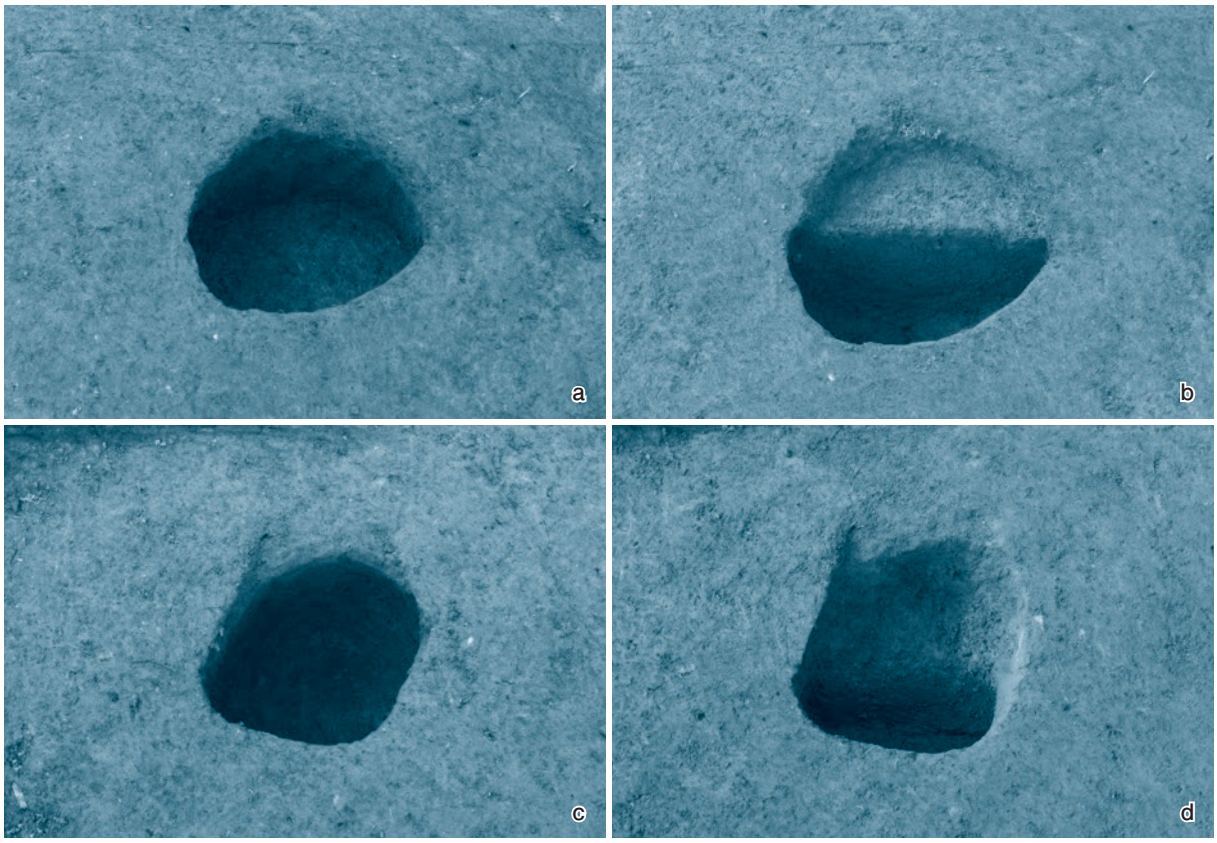




32　１号柱列跡

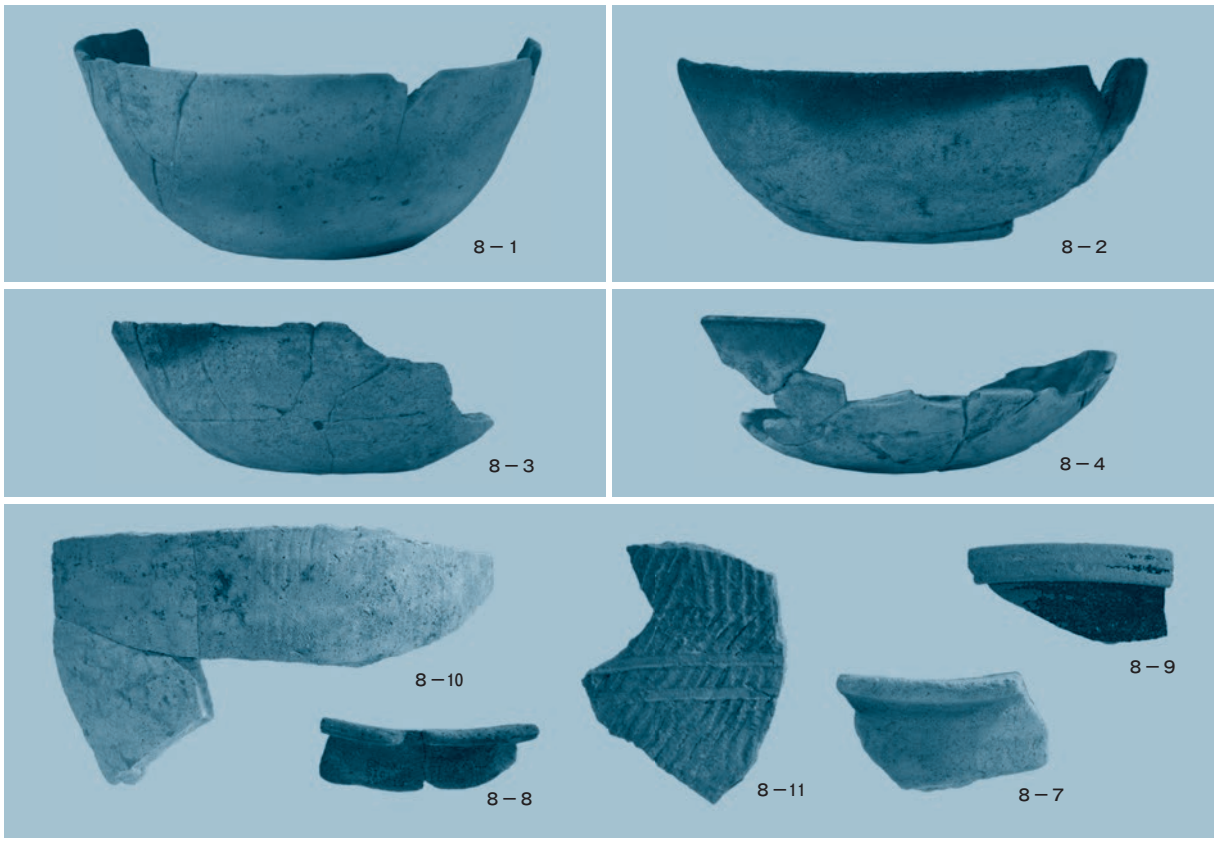
a　全景（南西から）
b　Ｐ１断面（南から）　**c**　Ｐ２断面（南から）

33　１号遺物包含層全景（南から）

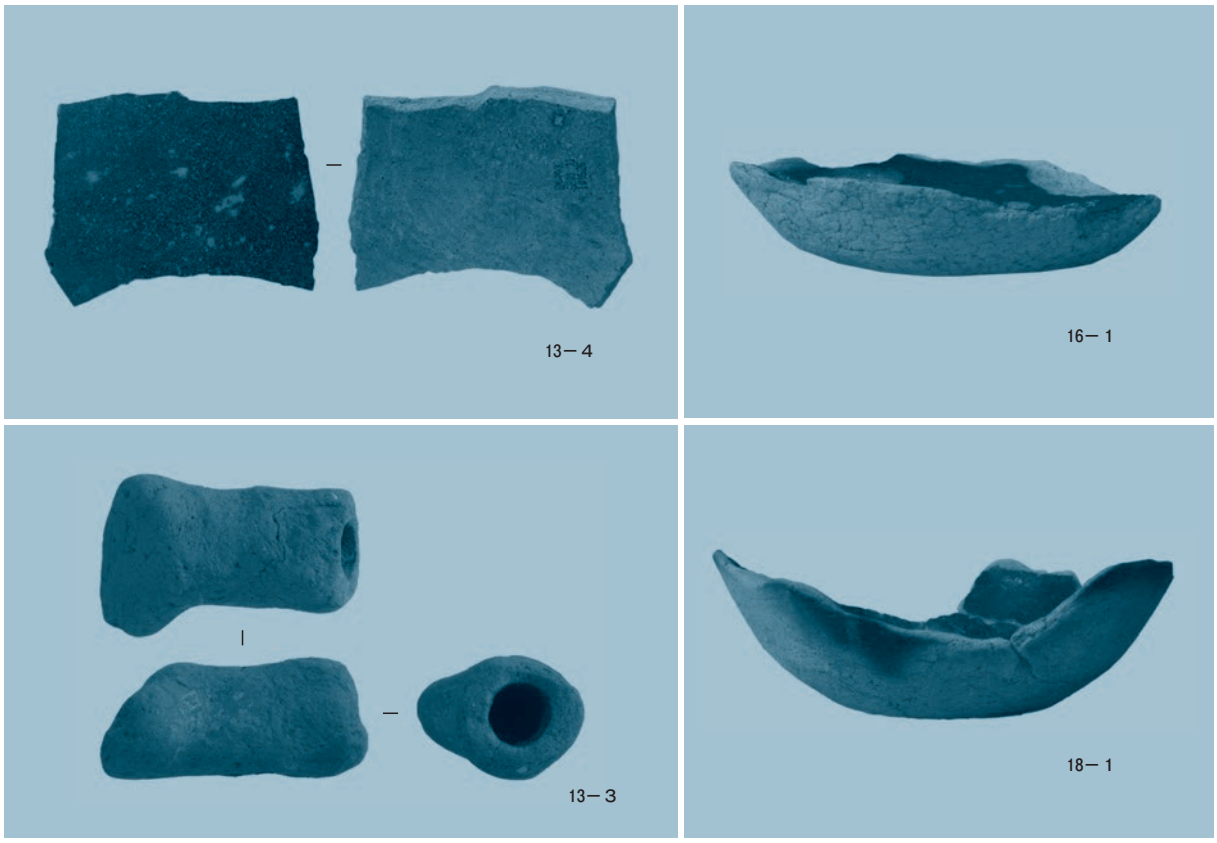


34　グリッドピット

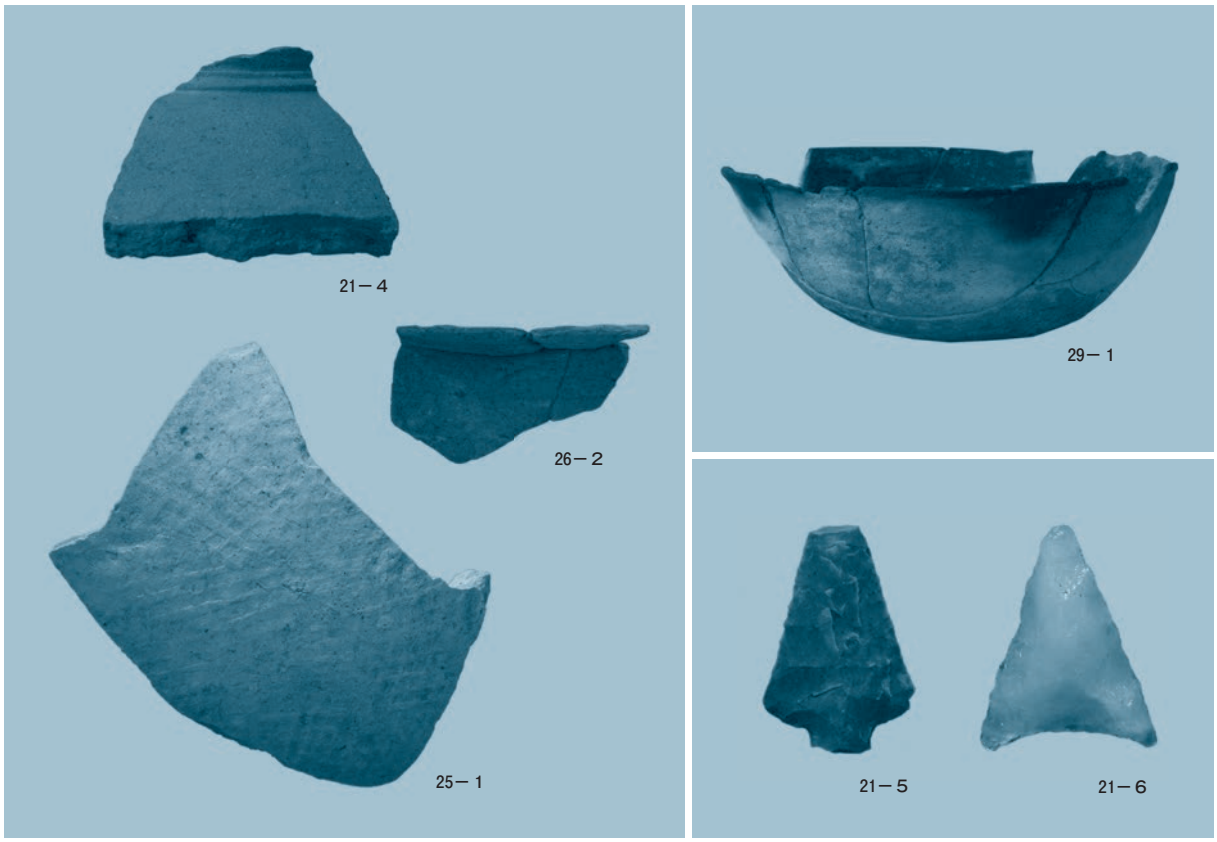
a　Ｆ６ＧＰ１全景（南から）　**b**　Ｆ６ＧＰ１断面（南から）
c　Ｇ６ＧＰ１全景（南から）　**d**　Ｇ６ＧＰ１断面（南から）



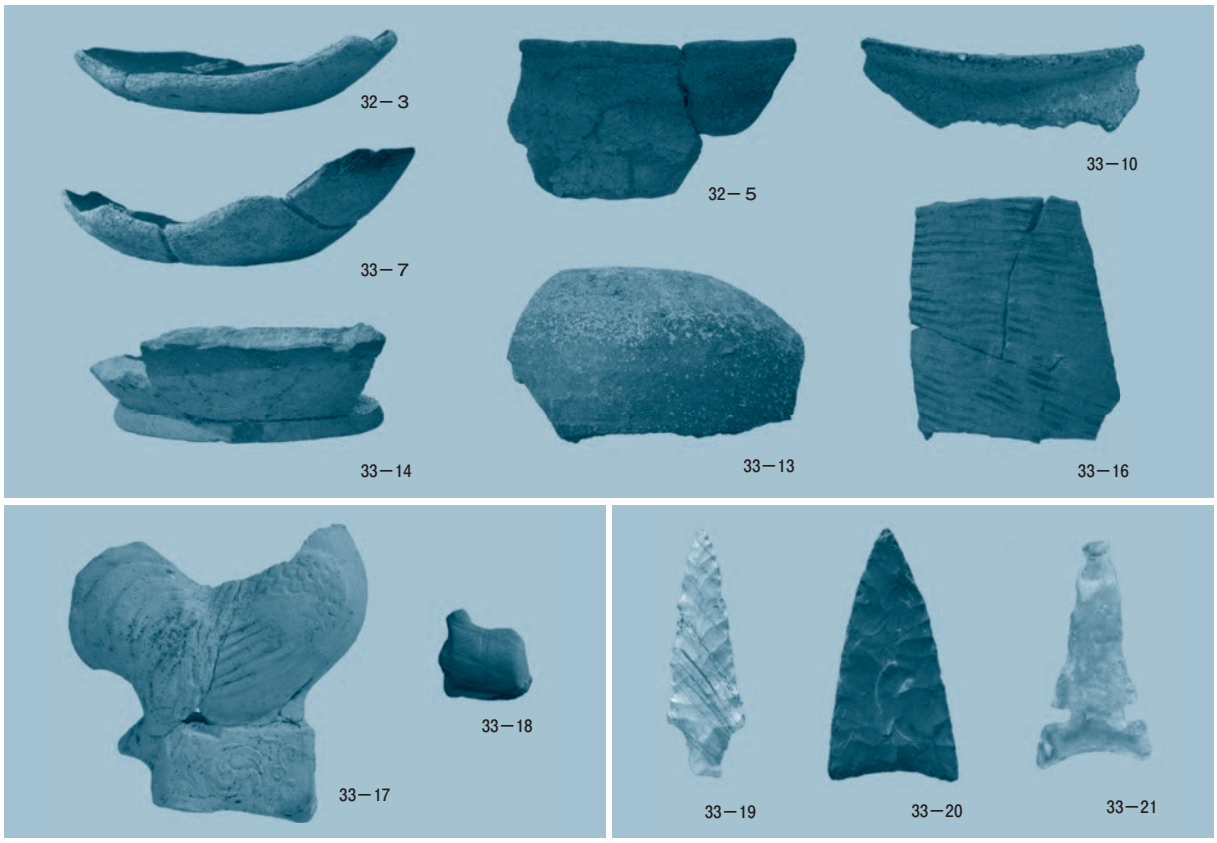
35　１号住居跡出土遺物



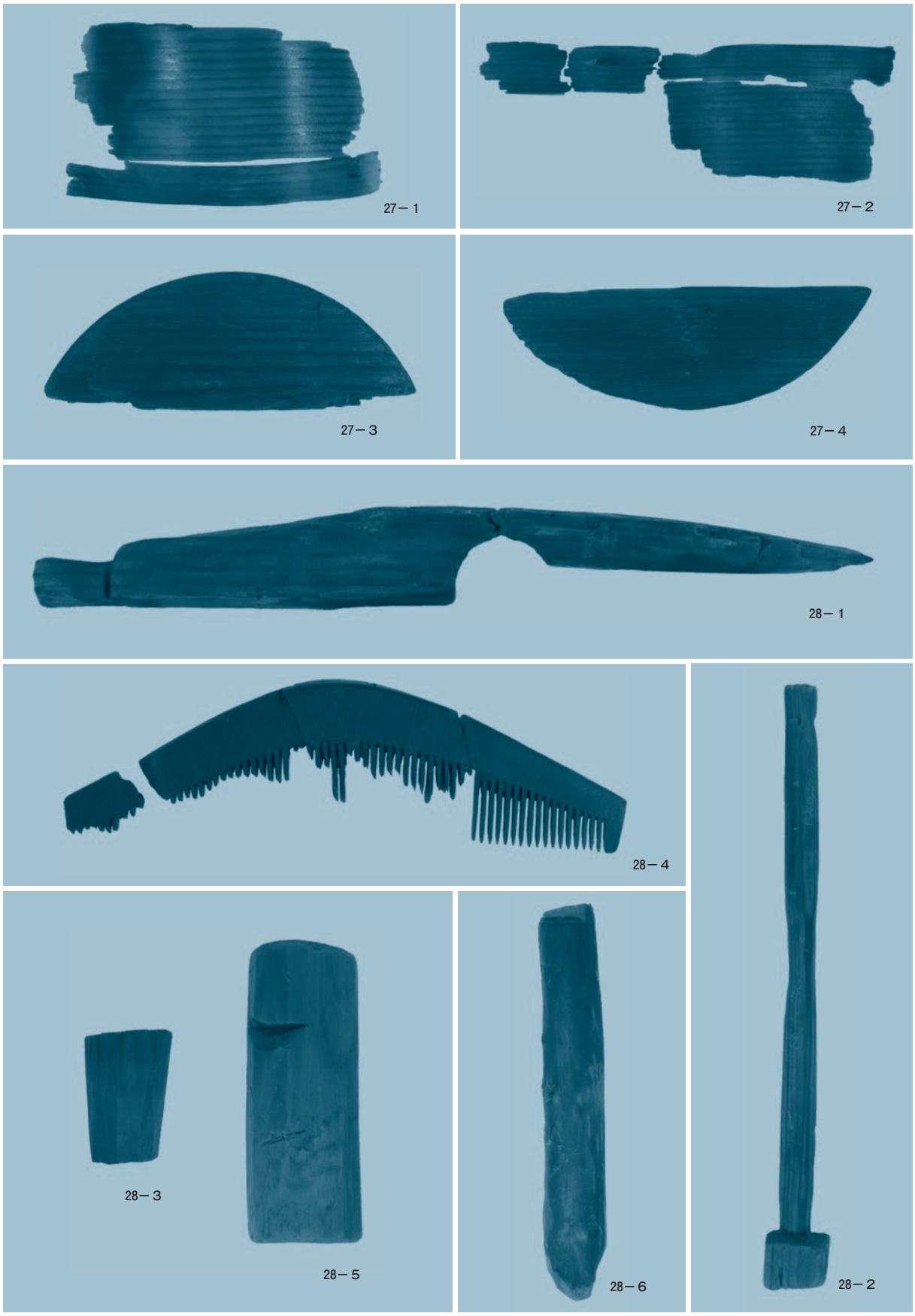
36　１～３号建物跡出土遺物



37　溝跡・特殊遺構・グリッドピット出土遺物



38　１号遺物包含層・遺構外出土遺物



39　1号井戸跡出土木製品

40　作業風景

a　表土掘削　　b～g　作業風景
h　１号建物跡完掘

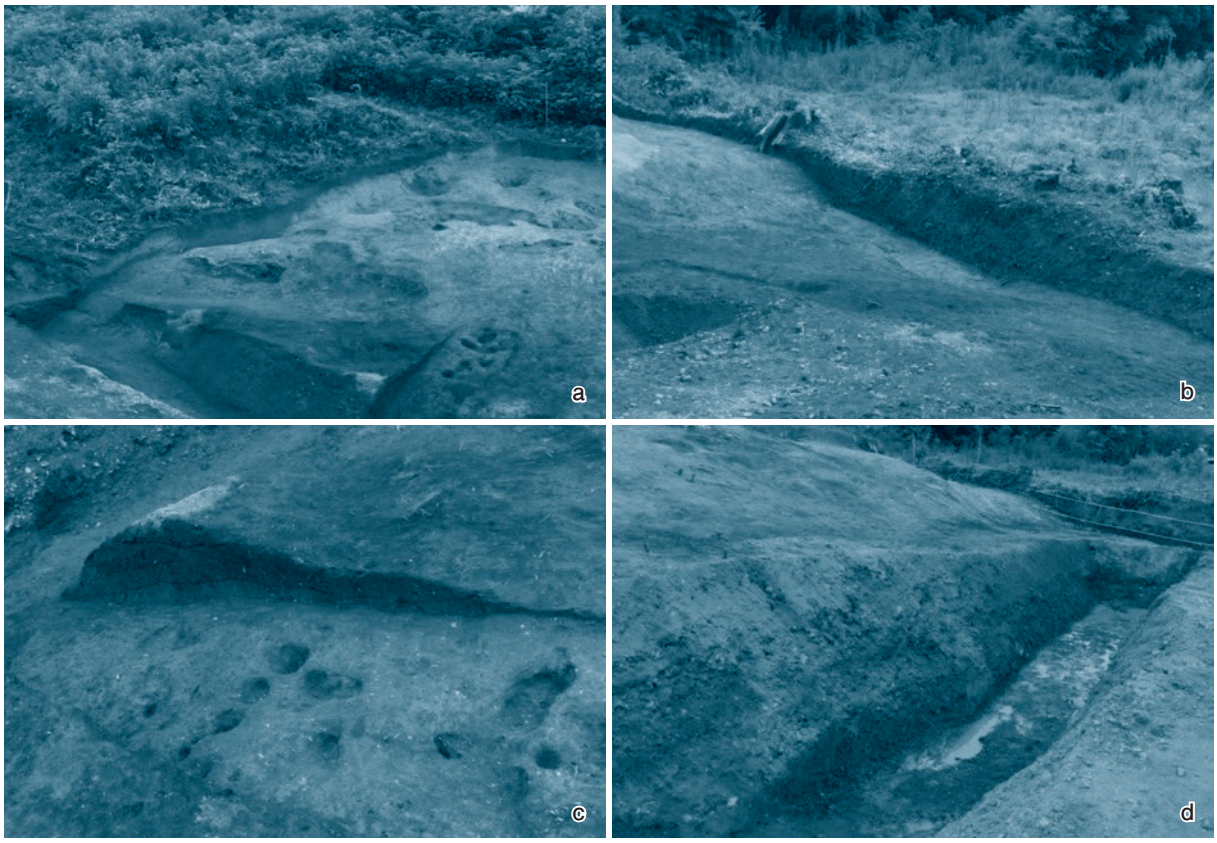
写　真　図　版

第２編　払川（はらいがわ）遺跡

1　調査区全景（西から）

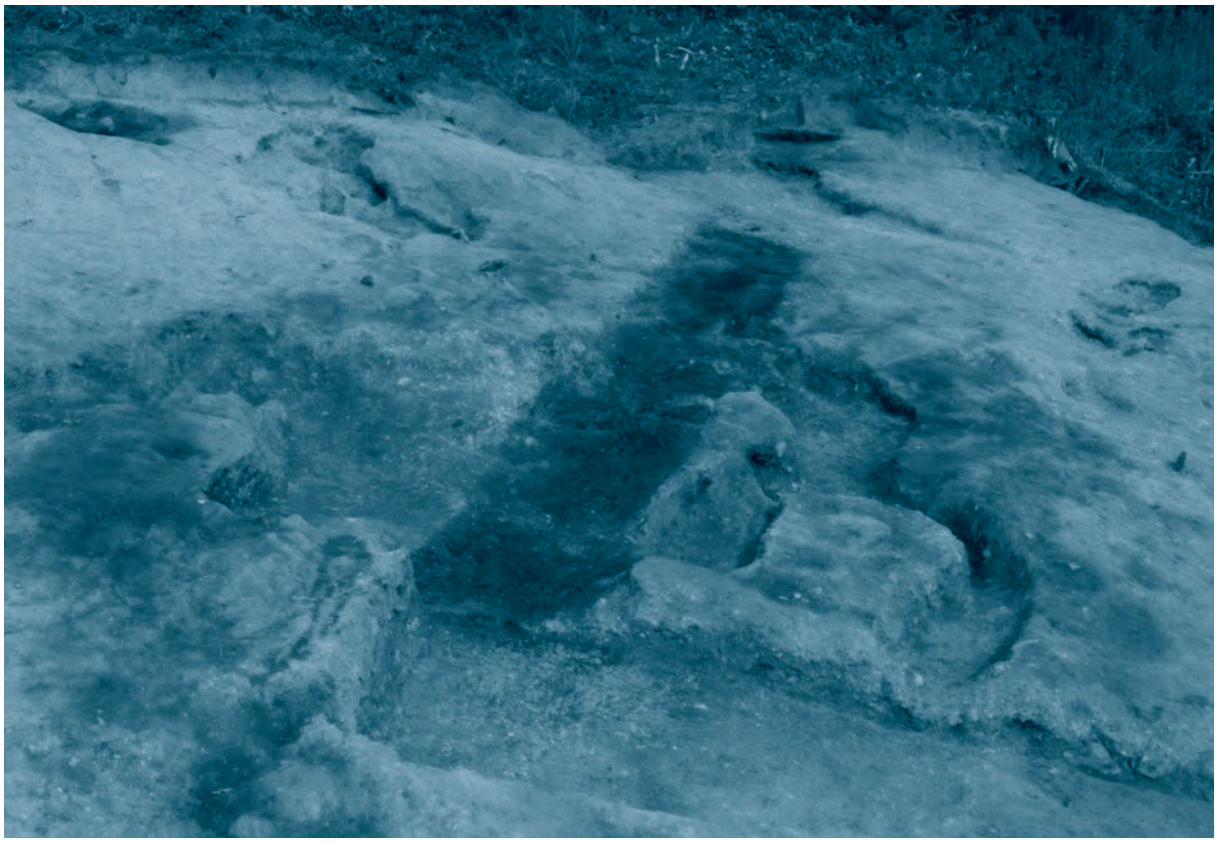
2　調査区遠景（南東から）

３　調査区全景（南西から）

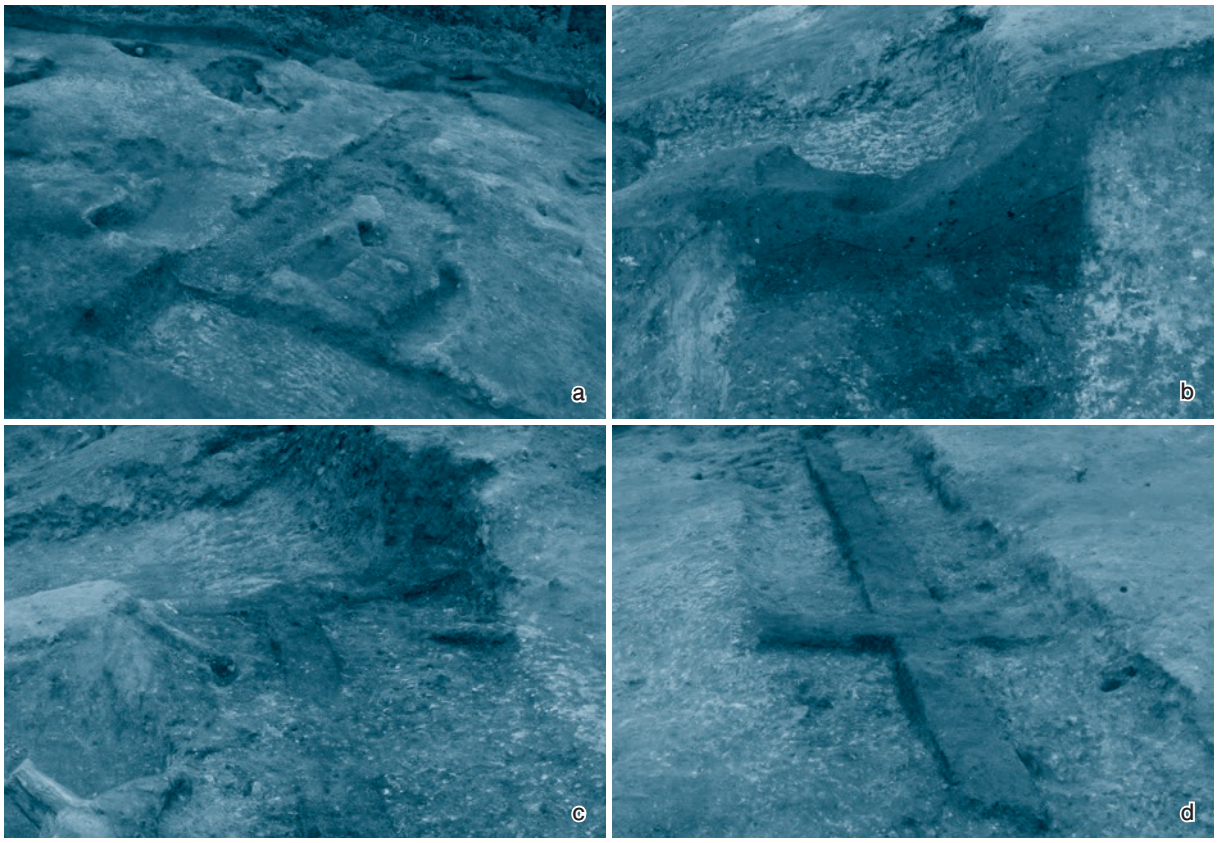


４　基本土層，谷地堆積

a　北側基本土層（南西から）　b　南側基本土層（北西から）
c　谷地堆積（南から）　d　谷地堆積状況（北西から）

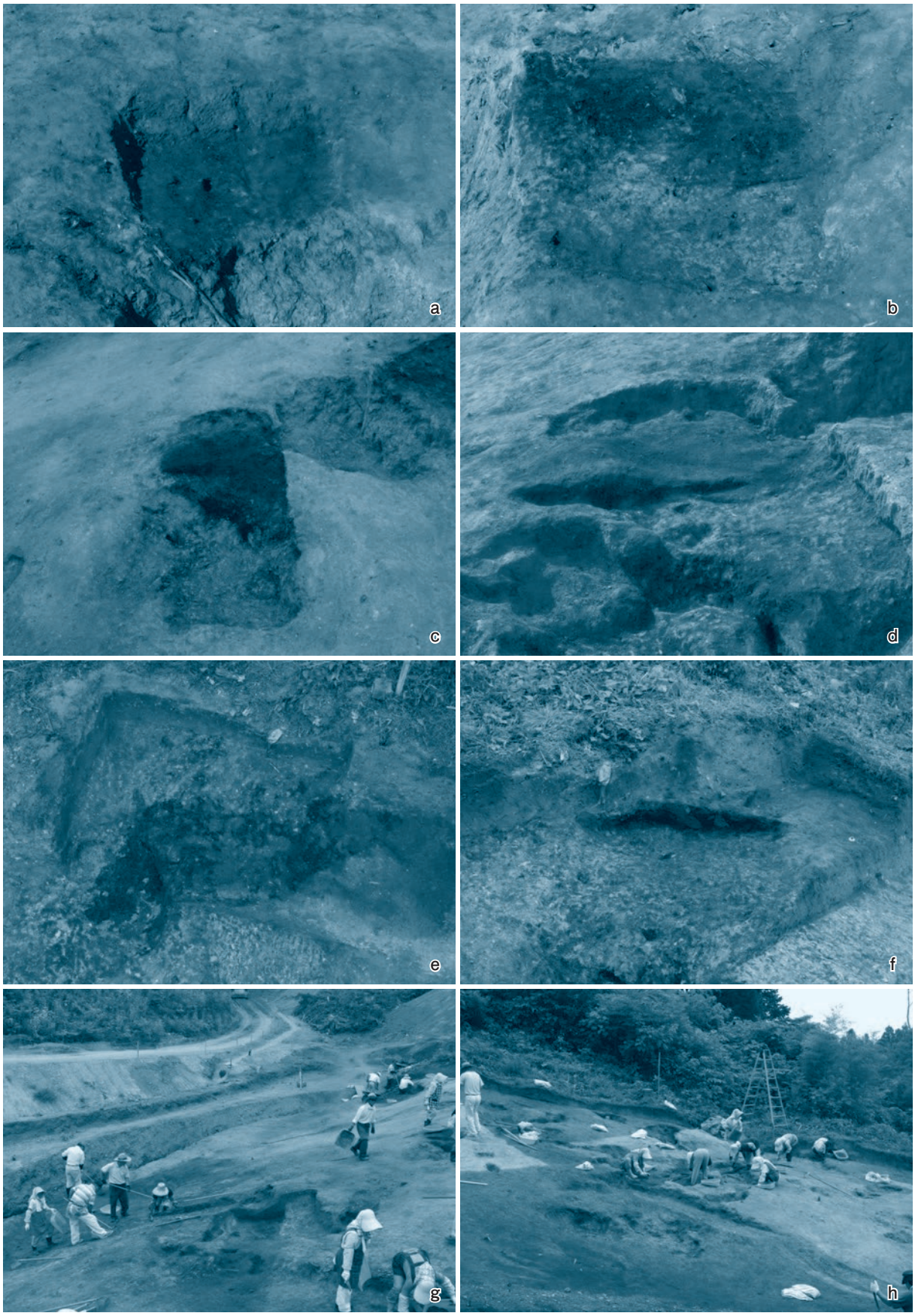


5　３号土坑木炭層検出（北西から）



6　３号土坑

a　３号土坑完掘（北西から）
b　３号土坑堆積状況Ｂ－Ｂ′（南東から）
c　３号土坑木炭層断面Ｂ－Ｂ′（南東から）
d　３号土坑木炭層断面Ｄ－Ｄ′（南西から）



7　１・２・４号土坑，作業風景

a　１号土坑木炭層検出（西から）
b　１号土坑木炭層断面（南から）
c　２号土坑木炭層検出（南から）
d　２号土坑木炭層断面（南から）
e　４号土坑木炭層検出（西から）
f　４号土坑木炭層断面（北西から）
g　作業風景
h　作業風景

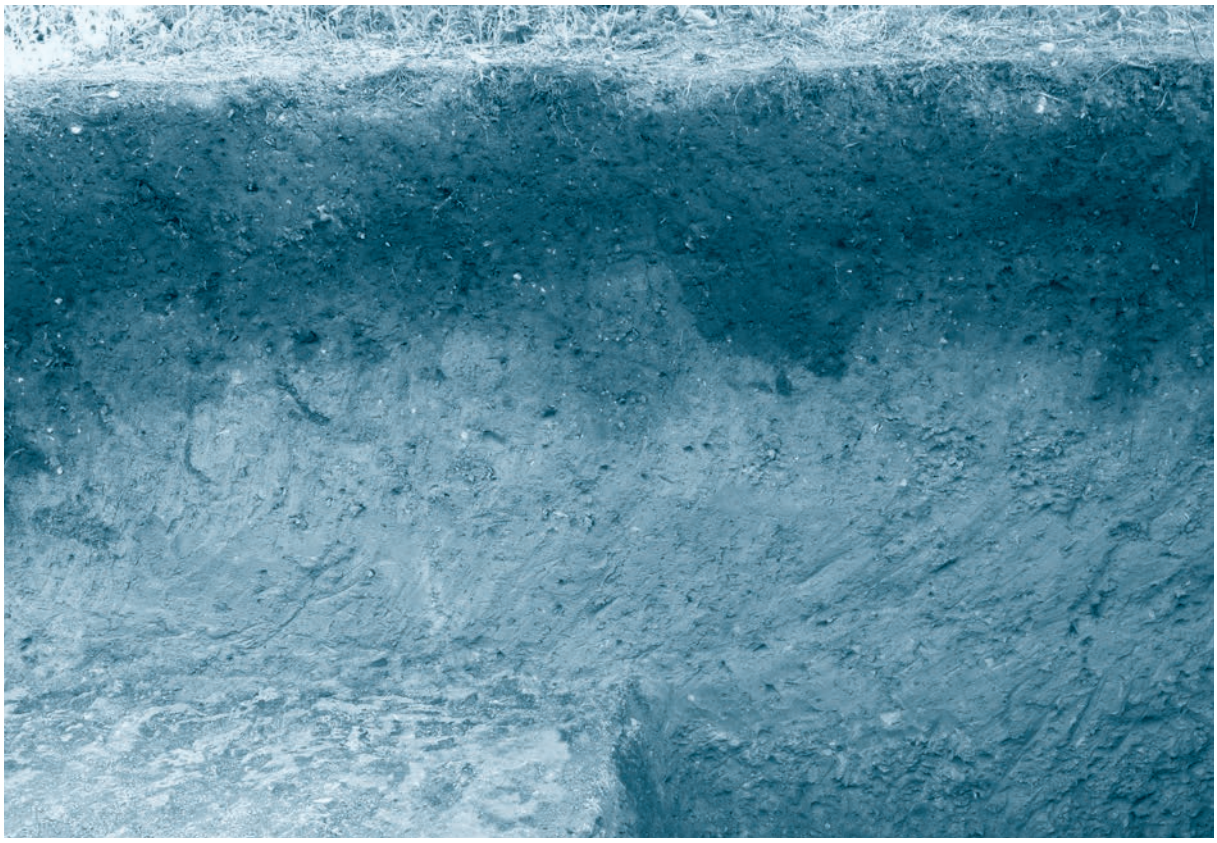
写　真　図　版

第３編　赤柴前遺跡（あかしばまえ）（２次調査）

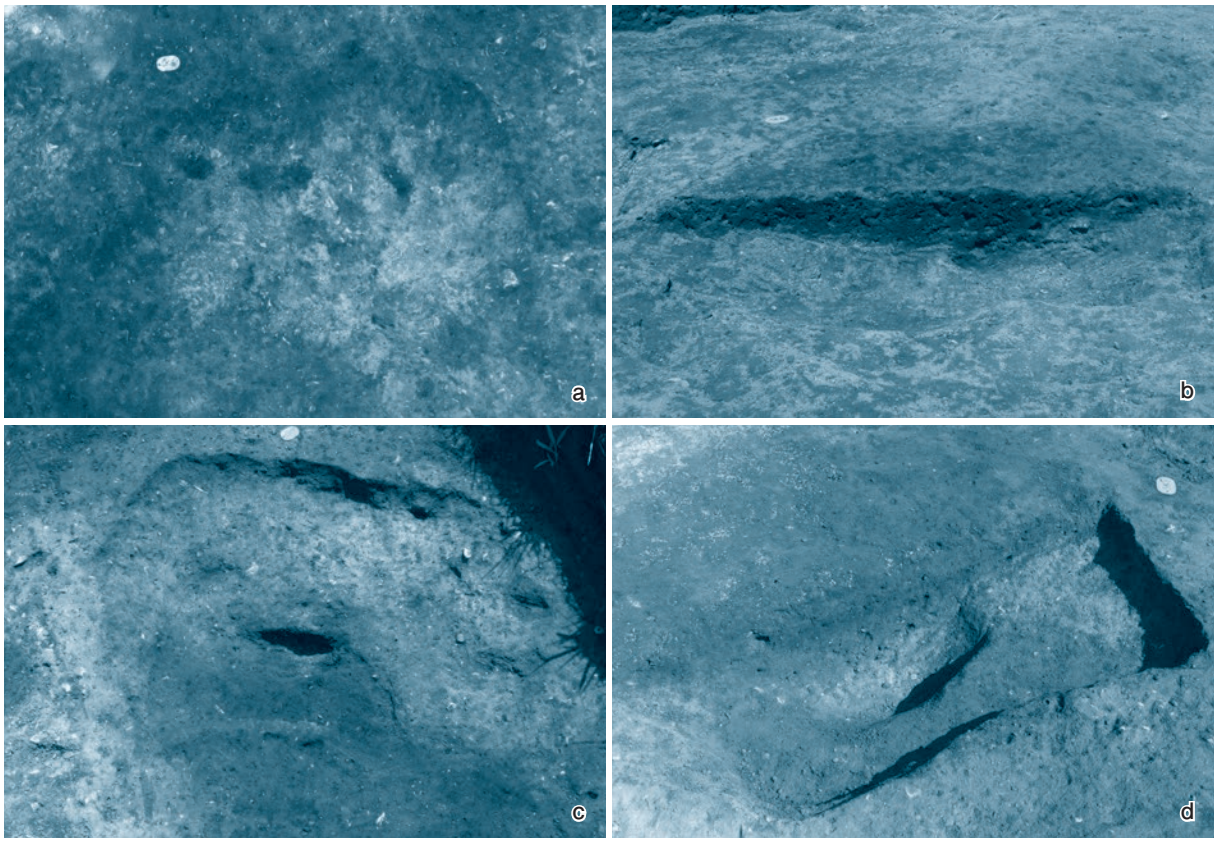
1　調査区遠景（北西から）

2　調査区遠景（北から）

３　調査区全景（南東から）

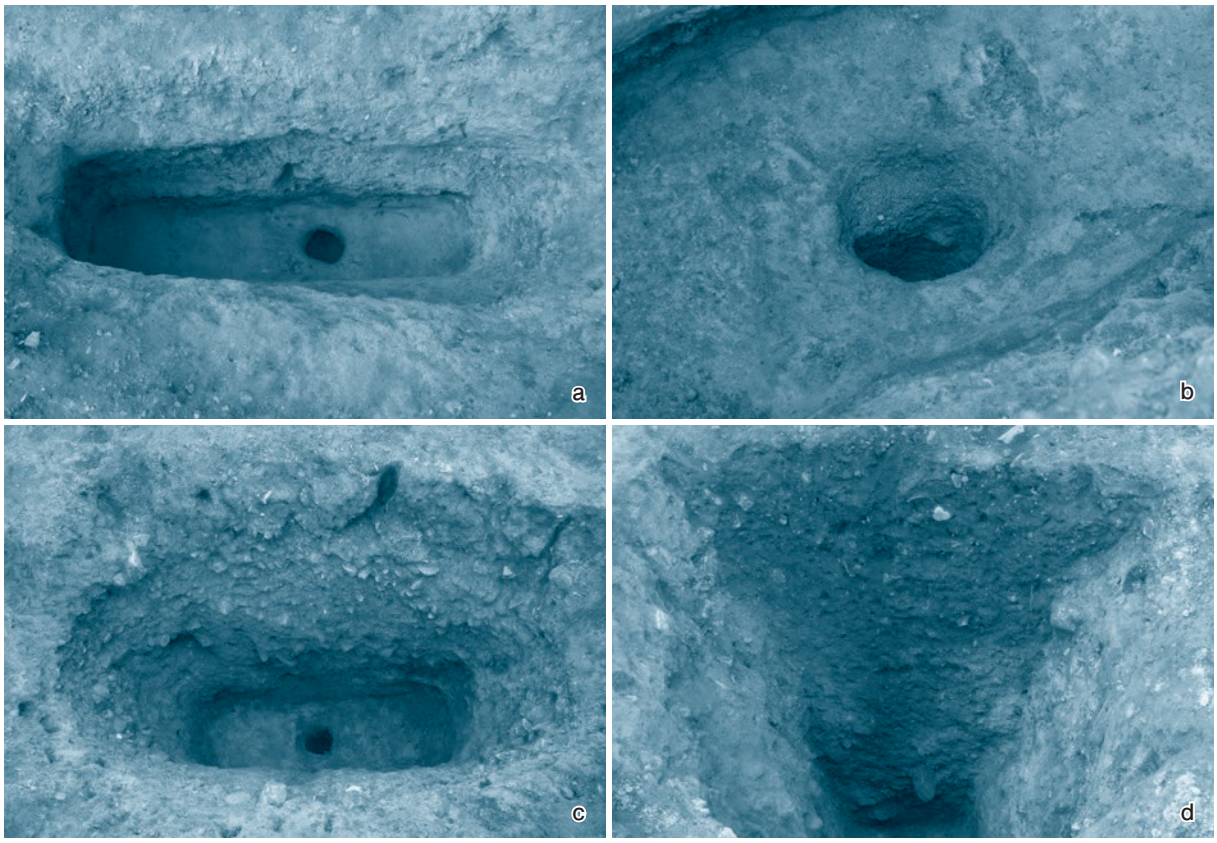


４　ＡＬ16，ＡＫ17グリッド周辺基本土層（北西から）



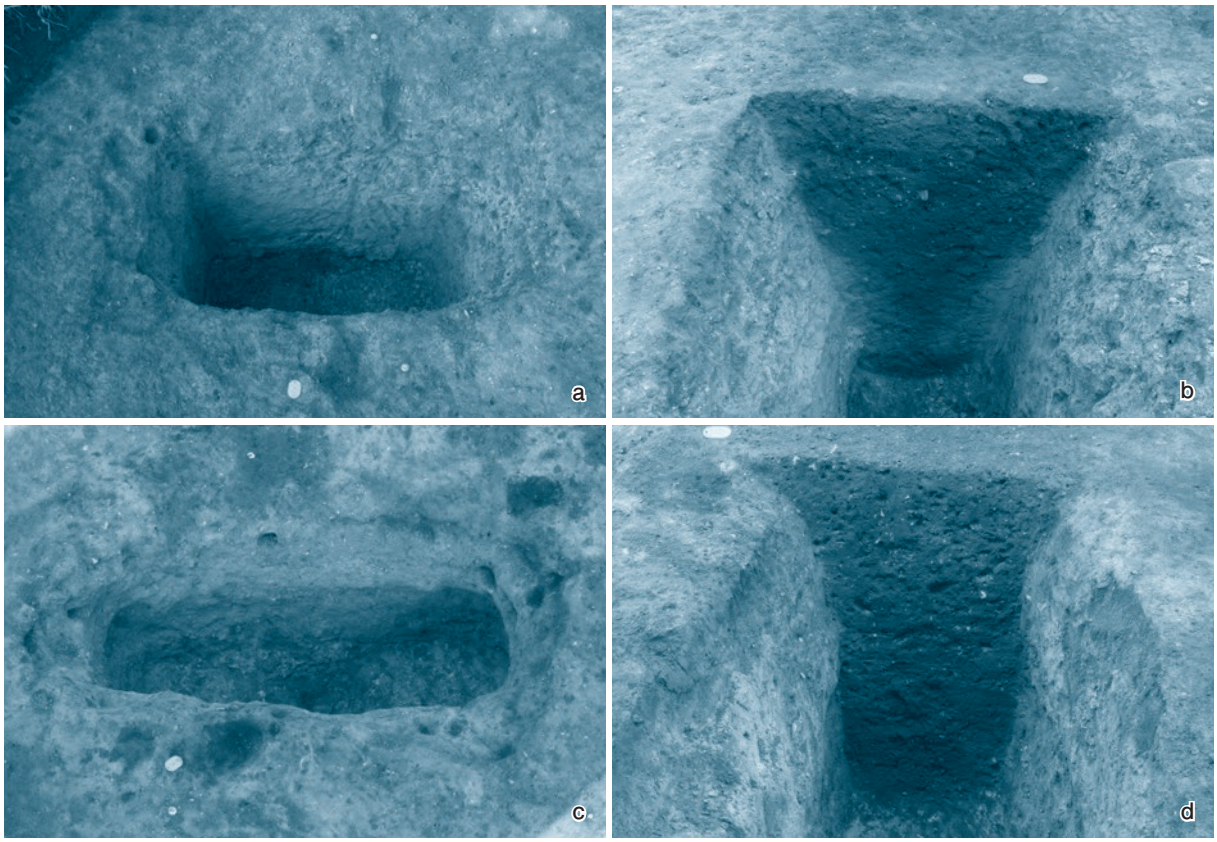
5　6・7号土坑

a　6号土坑全景（南東から）　b　6号土坑断面（南東から）
c　7号土坑全景（西から）　d　7号土坑断面（北西から）



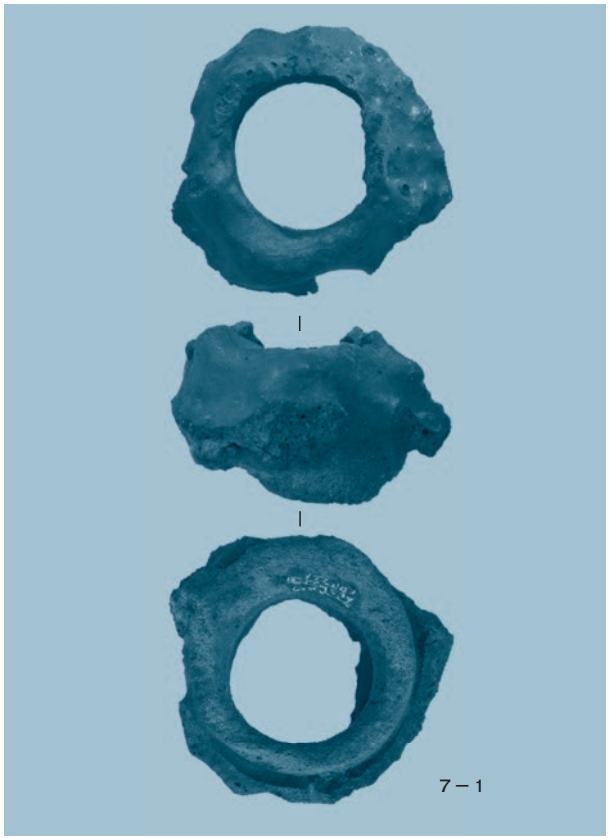
6　8・9号土坑

a　8号土坑全景（南から）　b　8号土坑ピット断面（北東から）
c　9号土坑全景（南から）　d　9号土坑断面（東から）



7　10・11号土坑

a　10号土坑全景（南から）　b　10号土坑断面（東から）
c　11号土坑全景（南から）　d　11号土坑断面（東から）



8　遺構外出土遺物

9　作業風景

a　９号土坑調査風景
b　７号土坑調査風景

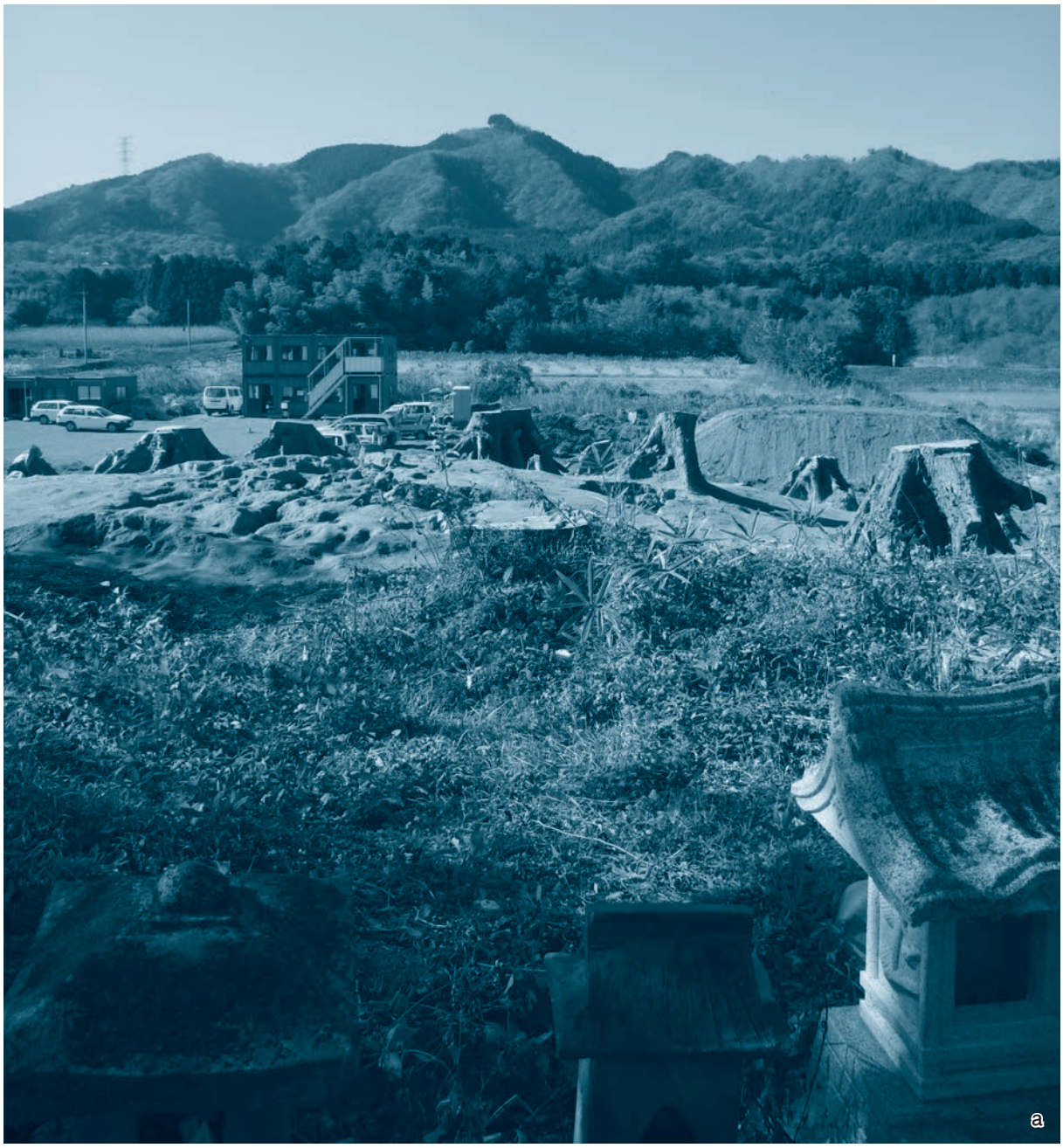
写　真　図　版

第４編　大槻（おおつき）遺跡

1　遺跡遠景（西から）

2　調査区遠景（西から）

3　遺跡遠景（北から）



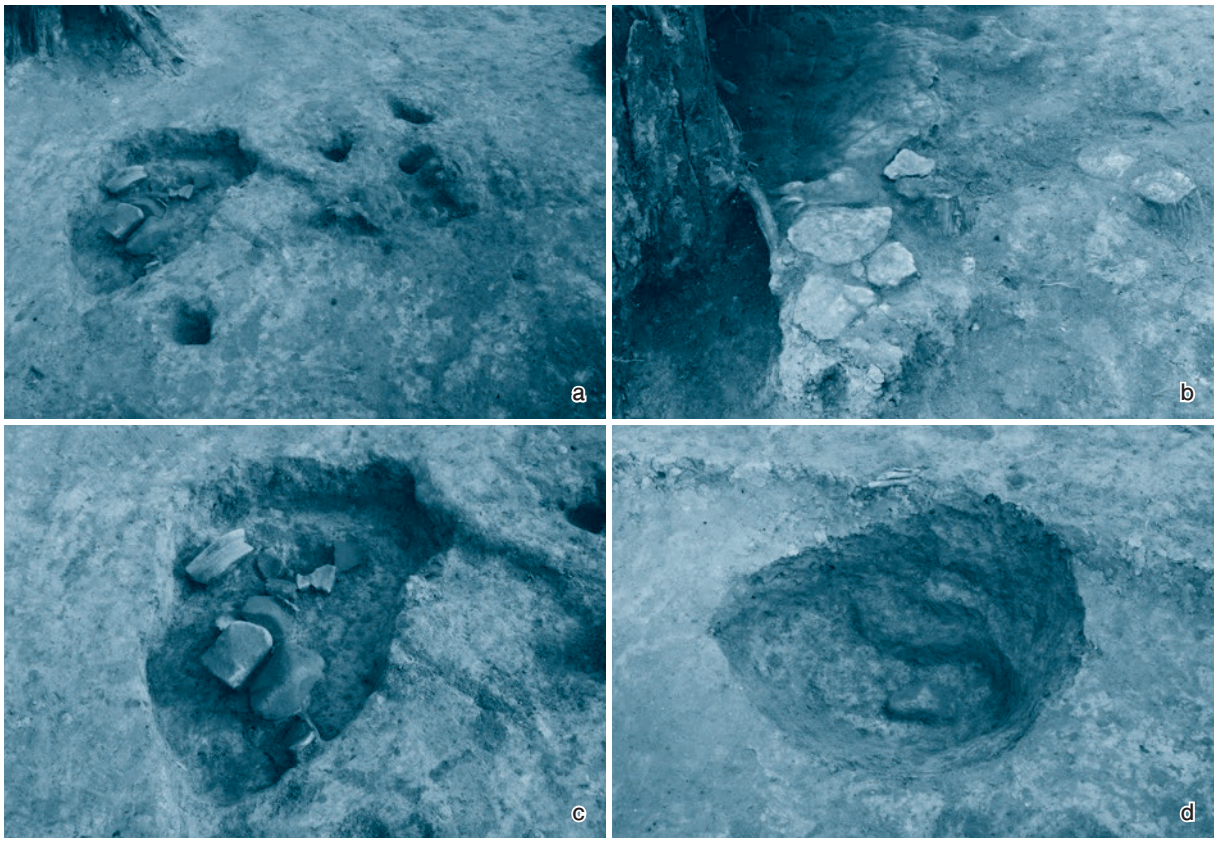
4　遺跡周辺

a　遺跡から見た鹿狼山（東から）
b　大槻神社（東から）　　c　大槻遺跡の祠（北東から）

5　丘陵北側基本土層（西から）

6　丘陵南側基本土層（西から）

7　１号住居跡全景（北西から）



8　１号住居跡細部

a　カマド周辺（西から）　**b**　焼土範囲（北東から）
c　Ｐ１（西から）　**d**　Ｐ２（南から）

9　２号住居跡全景（南から）

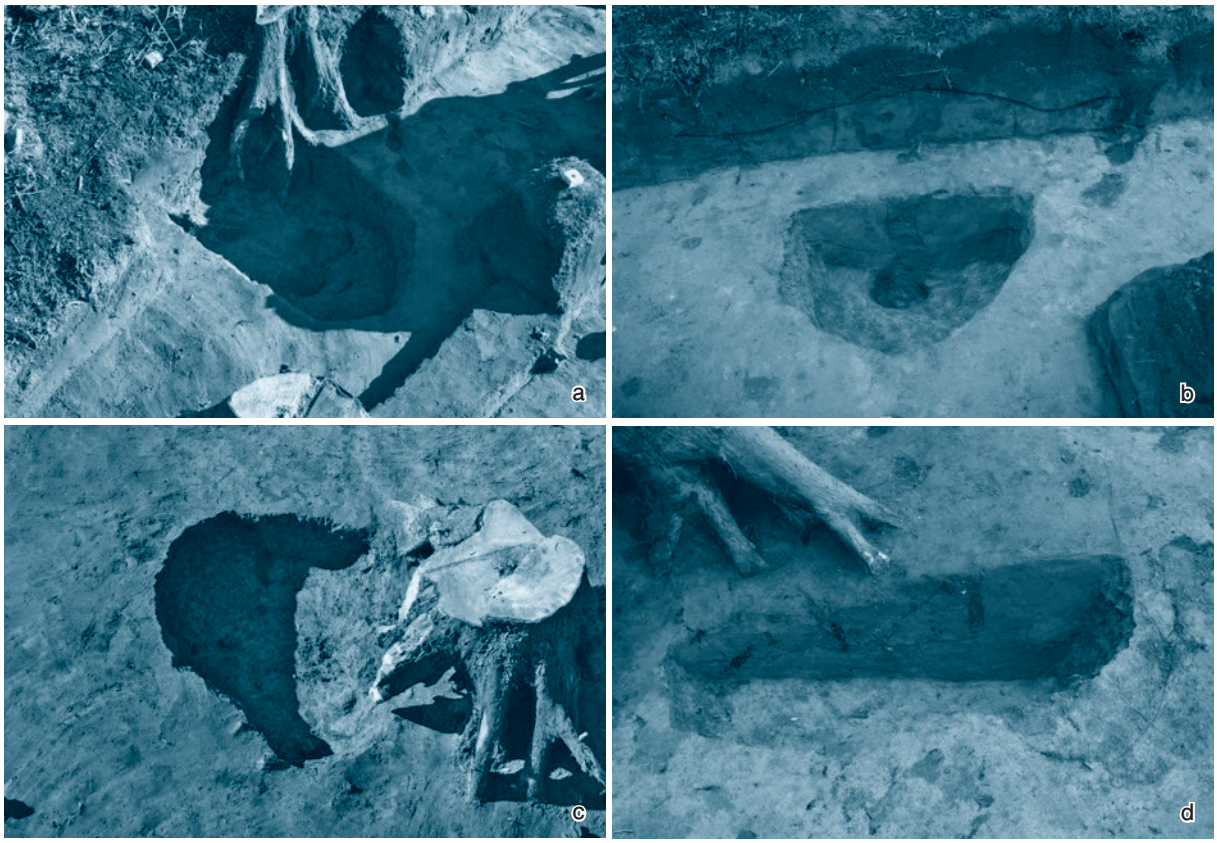
10　２号住居跡細部

a　検出（南から）　**b**　Ｐ３断面（南から）
c　断面（西から）

11　２号住居跡複式炉（東から）

12　２号住居跡複式炉細部

a　全景（南から）　**b**　断面（東から）
c　旧複式炉検出（南西から）

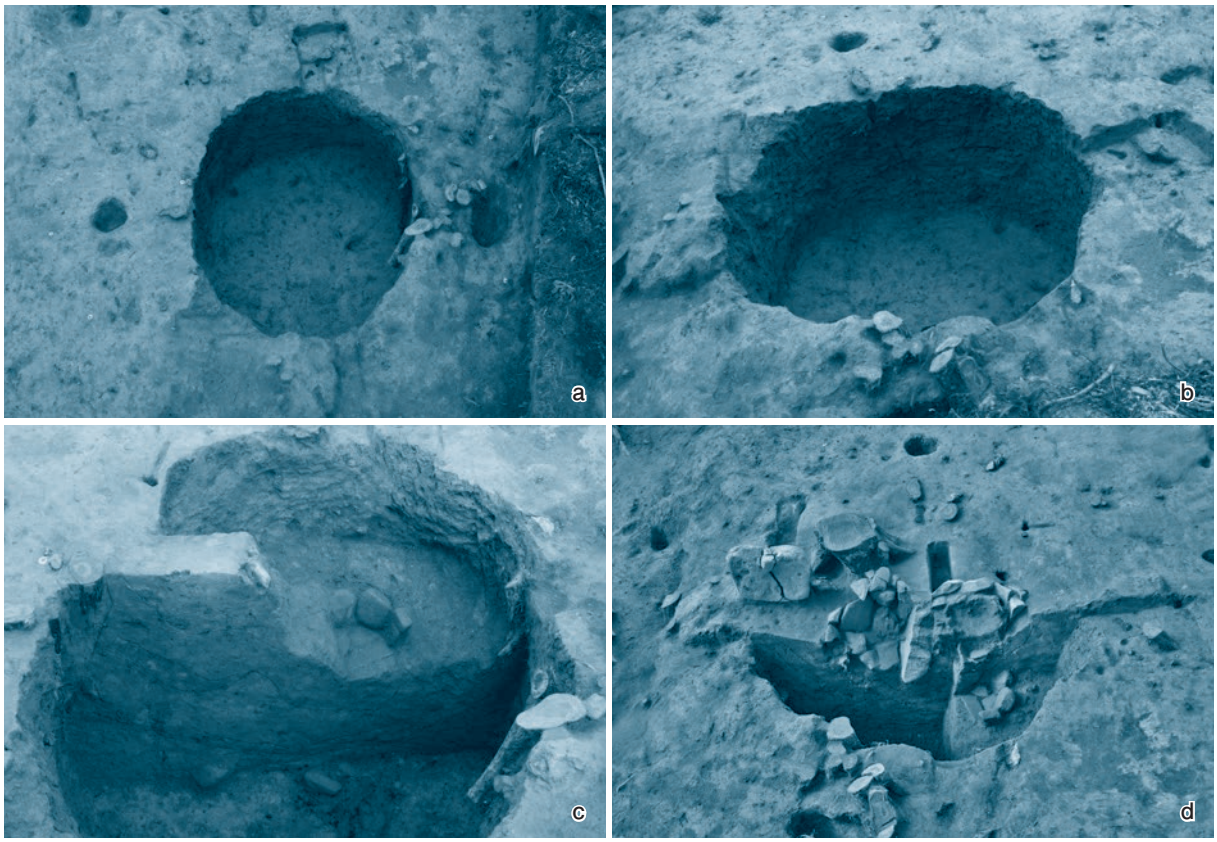


13　１・２号土坑

a　１号土坑全景（北から）　b　１号土坑断面（西から）
c　２号土坑全景（東から）　d　２号土坑断面（西から）

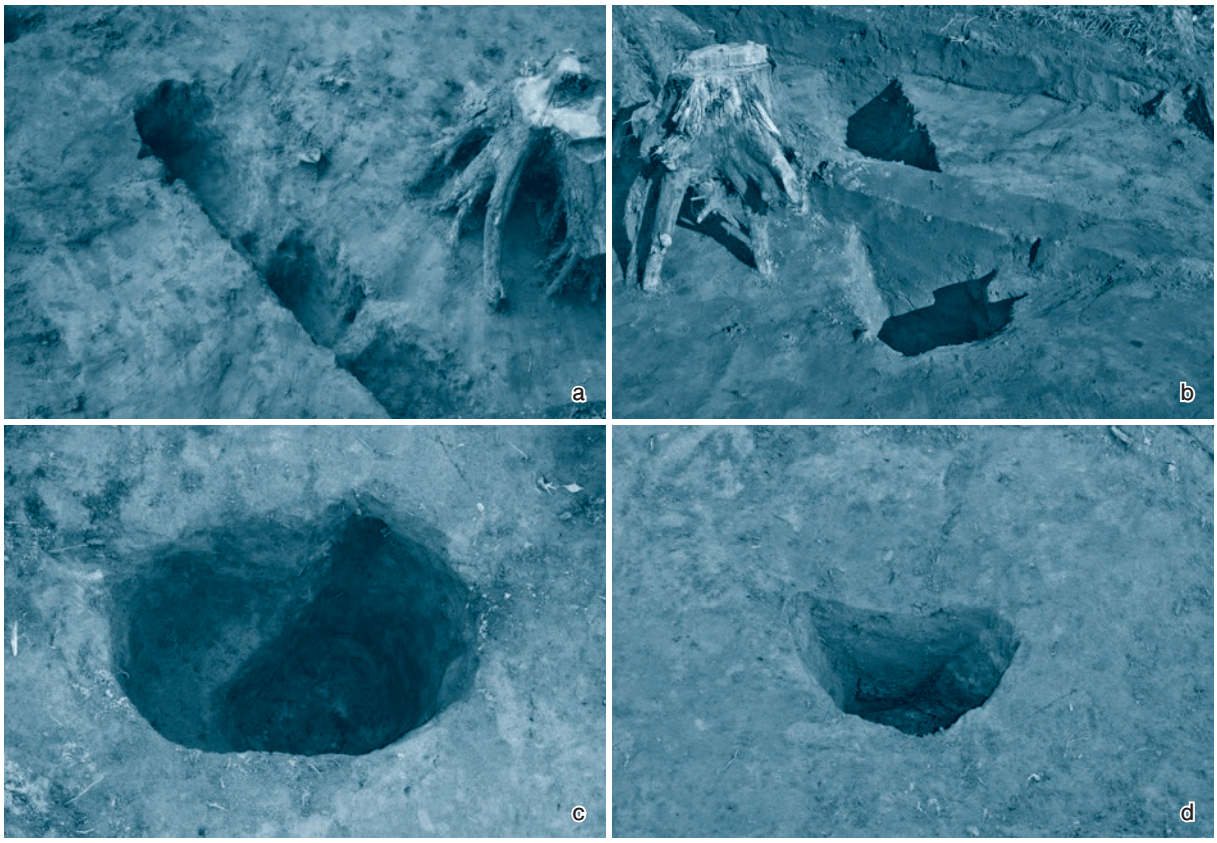
14　３・４号土坑

a　３号土坑全景（西から）　b　作業風景
c　４号土坑全景（南から）　d　４号土坑断面（東から）



15　５号土坑

a　全景（南から）　**b**　全景（東から）
c　断面（南から）　**d**　断面（東から）



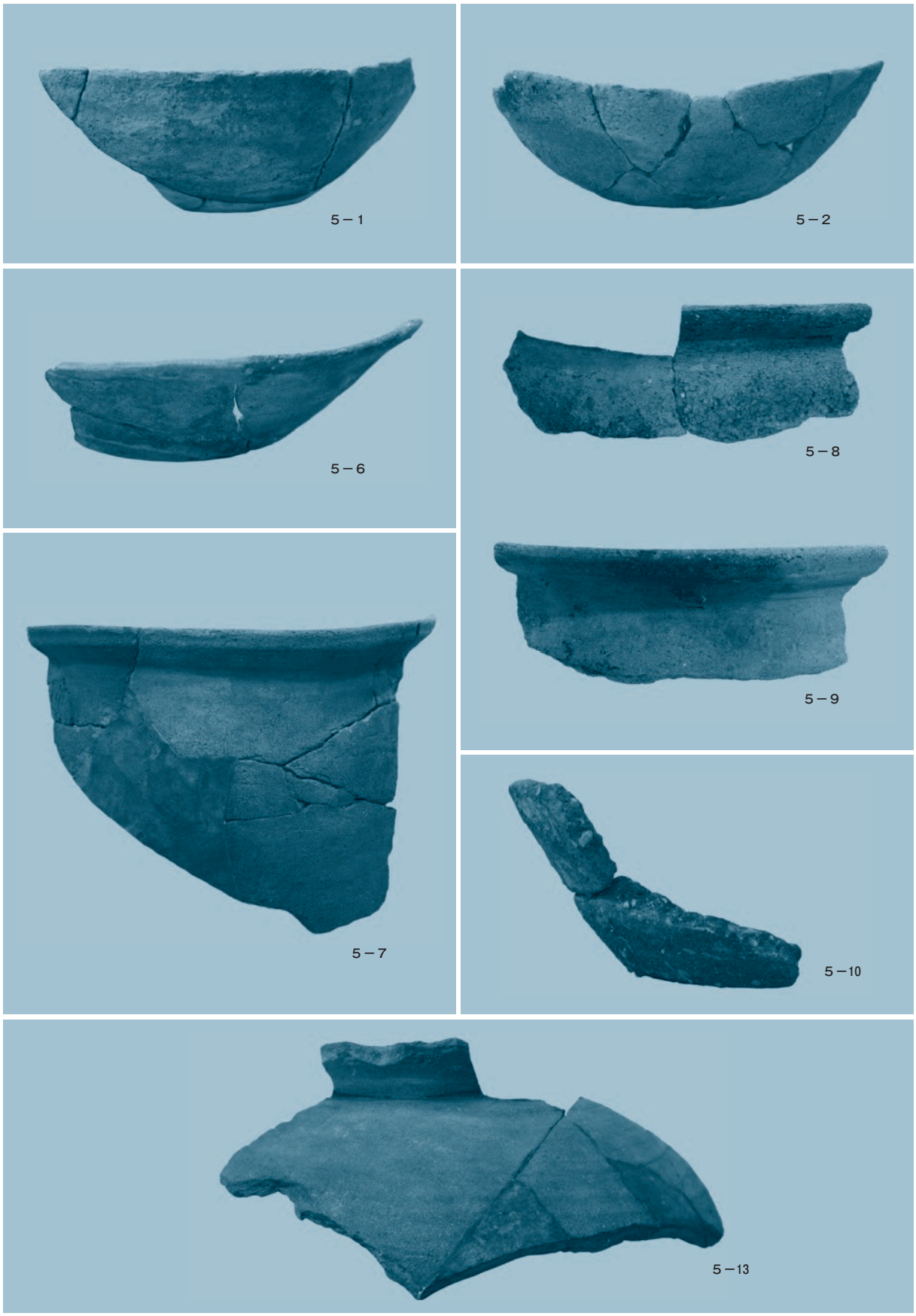
16　１号溝跡，１号グリッドピット

a　１号溝跡全景（南東から）　**b**　１号溝跡断面（西から）
c　１号グリッドピット全景（北から）　**d**　１号グリッドピット断面（西から）

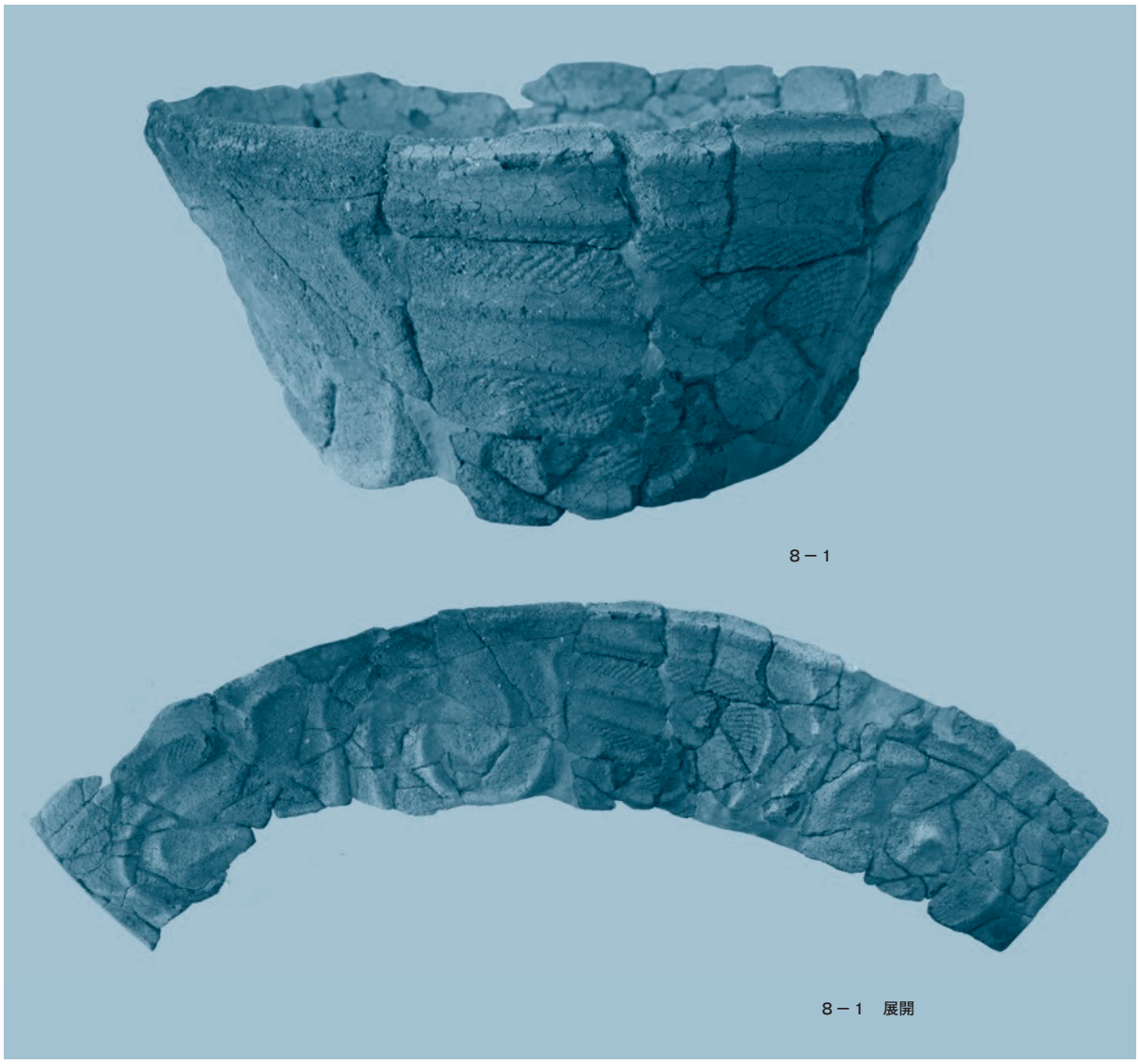
17　１号性格不明遺構全景（西から）

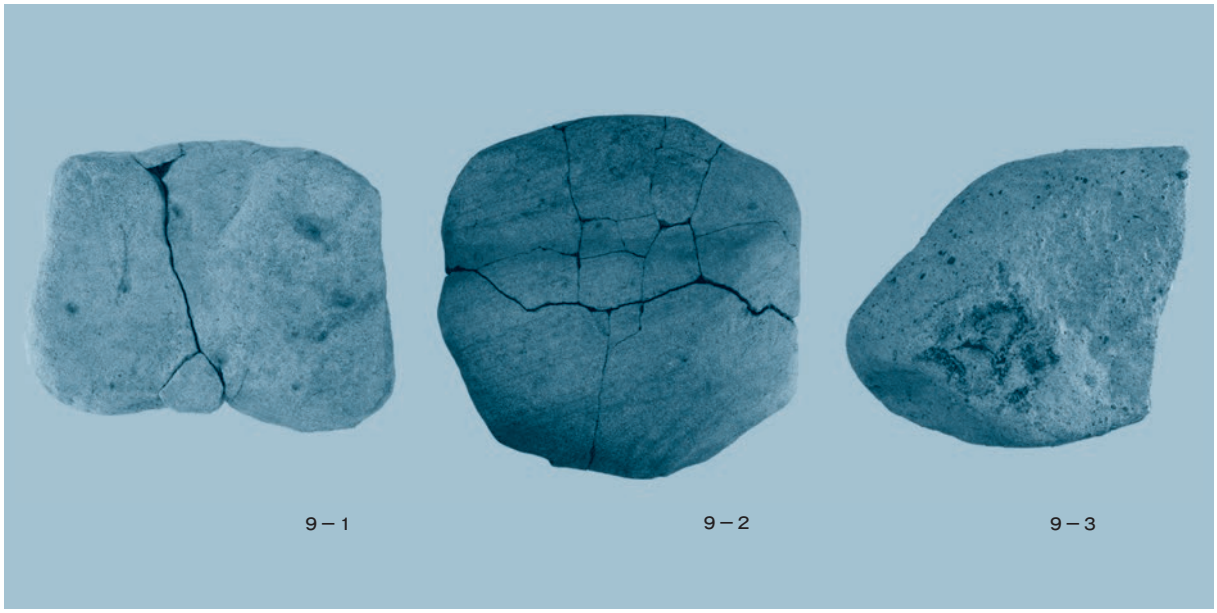
18　１号性格不明遺構細部

a　全景（南から）　**b**　集石下（南から）
c　断面（北東から）　**d**　断面細部（南西から）

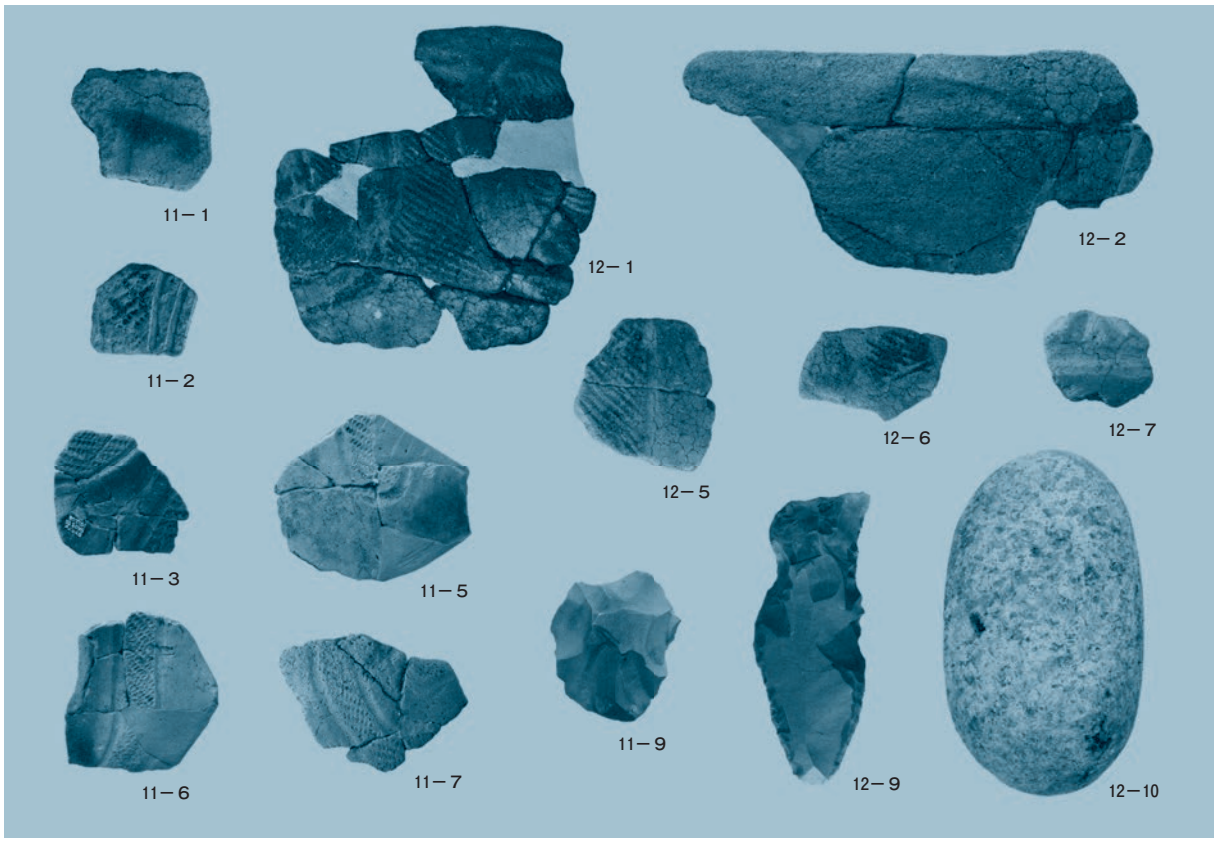


19　1号住居跡出土遺物

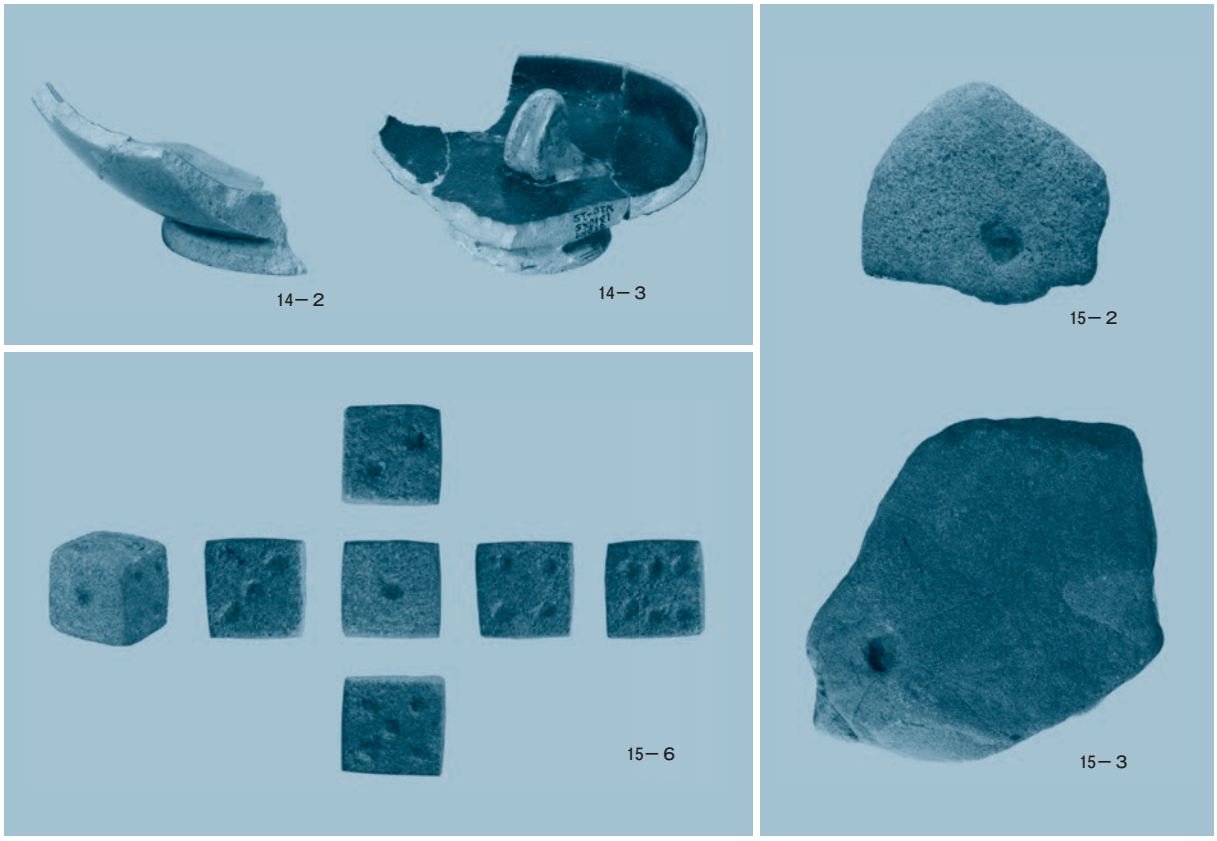




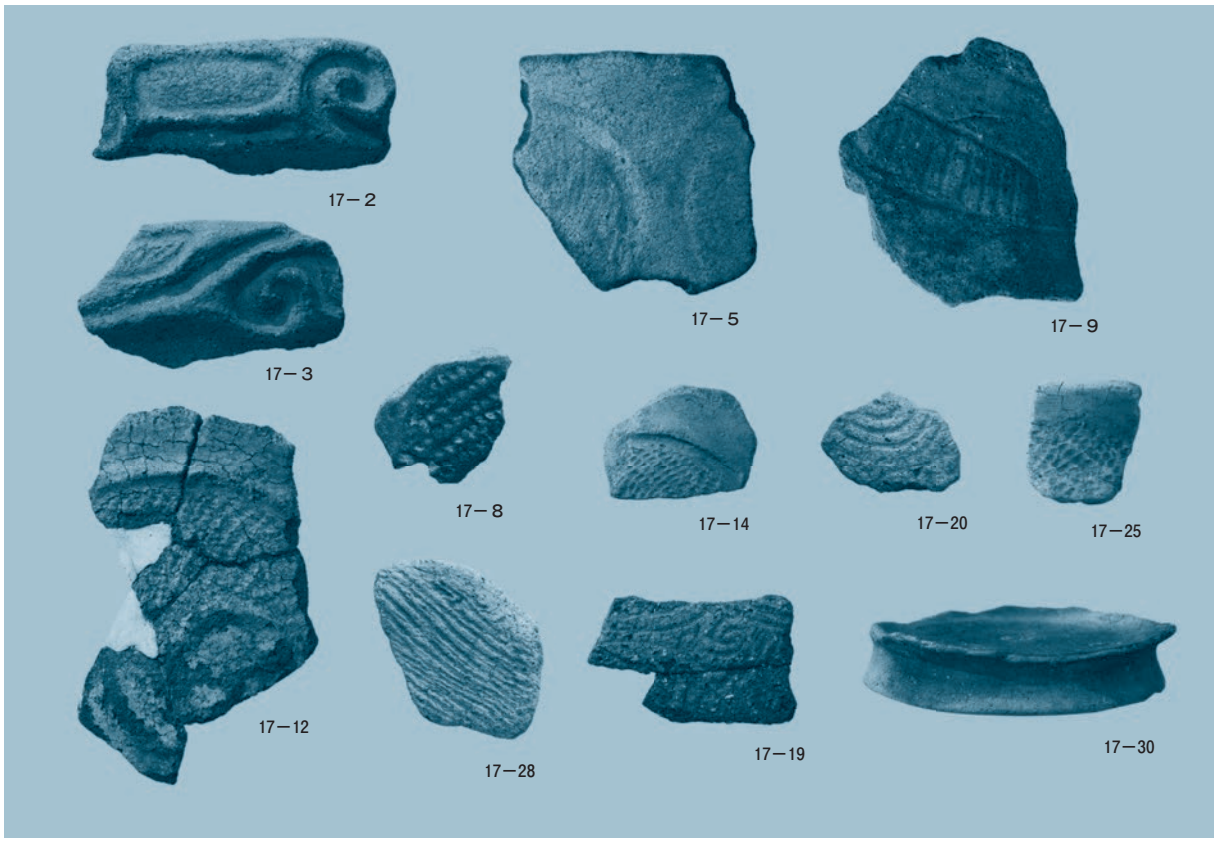
20　２号住居跡出土遺物



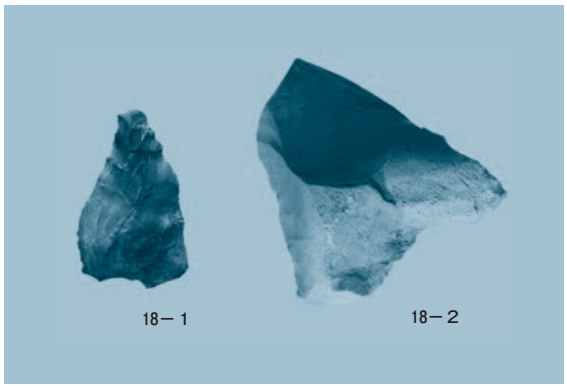
21　土坑出土遺物

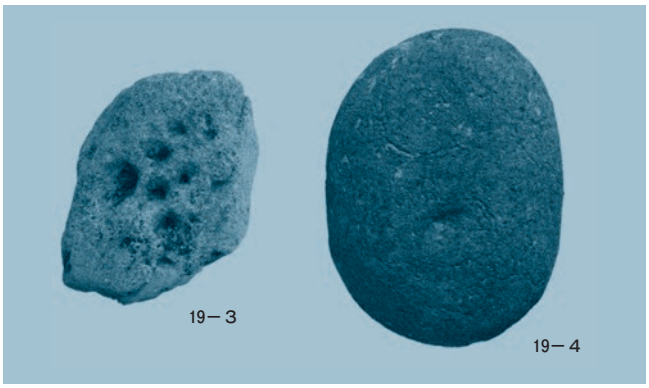


22　1号性格不明遺構出土遺物

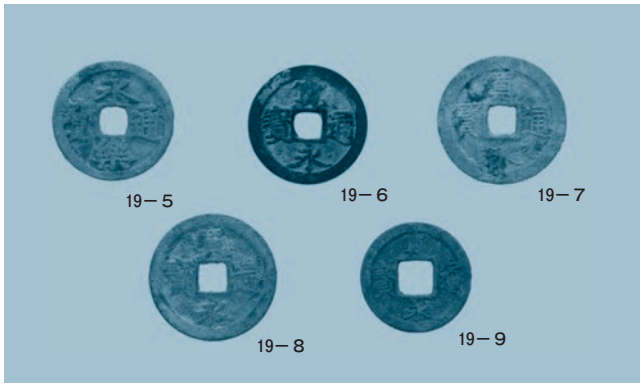


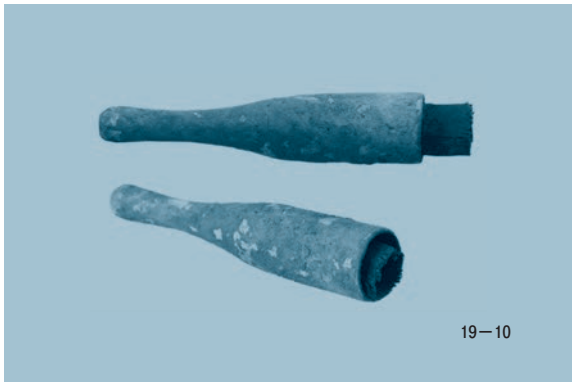
23　遺構外出土土器





24　遺構外出土石器





25　遺構外出土近世遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	じょうばんじどうしゃどういせきちょうさほうこく67
書 名	常磐自動車道遺跡調査報告67
シ リ ー ズ 名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第480集
編 著 者 名	吉田秀享　大波紀子　笠井崇吉　西澤正和
編 集 機 関	財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部　遺跡調査課 〒960－8115 福島県福島市山下町1－25　TEL 024－534－2733
発 行 機 関	福島県教育委員会 〒960－8688 福島県福島市杉妻町2－16　TEL 024－521－1111
発 行 年 月 日	2011年12月16日

所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
南萱倉（みなみかやくら）	福島県相馬市初野字南萱倉（そうましはつの みなみかやくら）	209	00200	37° 48′ 45″	140° 52′ 49″	20100413 ～ 20100820	2,000㎡	道路（常磐自動車道専建設に伴う事前調査
払川（はらいがわ）	福島県相馬市初野字払川・羽黒（そうましはつの はらいがわ はぐろ）	209	00120	37° 85′ 14″	140° 87′ 97″	20100802 ～ 20100917	800㎡	
赤柴前（あかしばまえ）（２次調査）	福島県相馬郡新地町駒ヶ嶺字赤柴前（そうまぐんしんちまち こまがみね あかしばまえ）	561	00096	37° 85′ 14″	140° 87′ 97″	20100707 ～ 20100909	2,500㎡	
大槻（おおつき）	福島県相馬郡新地町杉目字大槻（そうまぐんしんちまち すぎのめ おおつき）	561	00118	37° 85′ 14″	140° 87′ 97″	20100907 ～ 20101210	1,000㎡	

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
南萱倉（みなみかやくら）	狩場 集落跡	弥生時代 古代 近世	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝跡 特殊遺構 井戸跡 柱列跡 グリッドピット 遺物包含層	2 軒 3 棟 4 基 5 条 3 基 1 基 1 列 11 基 1カ所	石器 土師器 須恵器 木製品 土製品	弥生時代の狩場。斜面地に営まれた平安時代の集落跡。竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡等で構成される。貼床と炉跡をもつ掘立柱建物跡が確認された。近世の井戸跡からは木製品が出土した。
払川（はらいがわ）	集落跡 製炭跡	縄文時代 平安時代 中世	土坑	4 基	縄文土器	明確な時代は不明だが，平安時代から鎌倉時代の木炭焼成土坑を４基確認した。
赤柴前（あかしばまえ）（２次調査）	集落跡	縄文時代 平安時代	土坑	6 基	羽口 石器	縄文時代の落し穴４基，平安時代の木炭焼成土坑２基を検出した。落し穴４基は直線的に配置され，規模や形態に規格性が認められることから，一連の落し穴群として調査区外に延びることが推察される。
大槻（おおつき）	散布地	縄文時代 平安時代 近世	竪穴住居跡 土坑 溝跡 性格不明遺構 小穴	2 軒 5 基 1 条 1 基 1 基	縄文土器 土師器 石器 古銭	検出した縄文時代の竪穴住居跡は，埋め戻されたフラスコ状土坑の上に複式炉が構築されており，複式炉には新旧の造り替えが認められた。また，丘陵頂部には不整形に角礫が集積する祭祀関連が考えられる性格不明遺構を確認した。

要 約	・南萱倉遺跡は平安時代の小規模な集落を中心とする遺跡である。南向き斜面に竪穴住居跡と掘立柱建物跡が並んで建てられていた。 ・払川遺跡は古代末～中世初頭にかけての製炭遺跡である。山間の急斜面に木炭焼成土坑が造られていた。 ・赤柴前遺跡は縄文時代の狩場と平安時代の製炭場である。 ・大槻遺跡は縄文時代と平安時代の集落跡，近世以前の祭祀関連遺構を検出した。

＊経緯度数値は世界測地系（平成14年４月１日から適用）による。

福島県文化財調査報告書第480集

常磐自動車道遺跡発掘調査報告67

南萱倉遺跡（みなみかやくら）
払川遺跡（はらいがわ）
赤柴前遺跡（２次調査）（あかしばまえ）
大槻遺跡（おおつき）

平成23年12月16日発行

編　集　財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部　遺跡調査課
発　行　福島県教育委員会　（〒960－8688）福島市杉妻町２－16
財団法人福島県文化振興事業団　（〒960－8116）福島市春日町５－54
東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所　（〒976－0042）相馬市中村字塚ノ町65－16
印　刷　北斗印刷株式会社　（〒965－0052）会津若松市町北町大字始字深町67－２